

プリヤ世界にエミヤ参戦

yamabiko

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

プリヤの衛宮士郎がアーチャーのカードで原作介入します。いや、どっちかっていうと英霊エミヤがクラスカードで介入になるのか？士郎とエミヤが半融合している感じです。

一応、完結を目指します。pixivにも投稿しています。

目次

〔2 2〕	〔2 1〕	〔番外編〕 2	〔番外編〕 1	〔2 0〕	〔1 9〕	〔1 8〕	〔1 7〕	〔1 6〕	〔1 5〕	〔1 4〕	〔1 3〕	〔1 2〕	〔1 1〕	〔1 0〕	〔9〕	〔8〕	〔7〕	〔6〕	〔5〕	〔4〕	〔3〕	〔2〕	〔1〕
238	227	220	214	203	192	182	170	159	144	128	113	96	83	69	54	39	34	29	23	18	11	6	1

$\begin{matrix} \overline{3} & \overline{3} & \overline{2} & \overline{2} & \overline{2} & \overline{2} & \overline{2} & \overline{2} & \overline{2} \\ \underline{1} & \underline{0} & \underline{9} & \underline{8} & \underline{7} & \underline{6} & \underline{5} & \underline{4} & \underline{3} \end{matrix}$

347 332 324 310 300 292 276 263 248

【1】

衛宮士郎がソレを拾ったのは、ちょうど玄関先でのことだった。

弓道部を終えて、帰宅したばかり。居間ではセラが夕食の準備をしていて、早く手伝わねばと、急いでいたのだから、自分の部屋へ鞆と一緒に放り込んだ。

夕飯時に訊けばいいやと思い、そのままにしてしまったのである。義妹であるイリヤがDVDのアニメに夢中になってついつい自分も見てしまったのも、訊きそびれた原因であるが。

ともかく、夕飯の片付けも風呂も済ませ、自室で一人になって初めて、ソレをじっくり調べてみた。

ソレはタロットカードのような感じの物だった。絵柄は弓を引く女兵士。ただ、タロットにしては聞き覚えのないカード名が書かれている。

「Archer——アーチャー、矢を射る者、か」

大方、イリヤあたりが学校の友達にでも誘われて、カード占いでこぼれたのだろう。いや、もしかしたら家政婦として一緒に住んでいるセラかりズの物かもしれない。

衛宮家の大黒柱である切嗣は年中海外を飛び回っているし、義母であるアイリスフィールも切嗣について家を空けている。

アイリスフィールの本名はアイリスフィール・フォン・アインツベルンといい、ドイツのとある貴族なのだそうだ。

切嗣とは大恋愛の末に結婚したが、アインツベルン家の本家とは折り合いが悪く、絶縁状態なのだという。唯一アイリスフィール付きのメイドであったセラとリズが日本までついてきて、今は両親のいない家の家政婦として働いている。

カードはよく見れば上質な紙でできており、装飾も凝っていて高価なものようだ。セラかりズがドイツから持ち込んだものかもしれない、と思い、朝一番で渡そうと決める。

「けど、占ってよりは魔法使いの道具みたいだな」

魔法、とくれば昔切嗣が口にした冗談が、今も鮮やかに思い出せる。

〔僕は魔法使いなんだ〕

あまりにも真面目に言うものだから、本当に信じそうになった。
「つうっ」

どうやら油断してカードの端で指を切ってしまったようだ。血がかすかに滲んでいる。

「舐めておけば大丈夫だろ」

ついでにカードに付着していないかも調べる。

そうしているうちに、先ほどの回想から、魔法のカードを分析する自分という空想がふと湧き上がった。子供っぽいと思いつつ、無意識に選んだ言葉をまるで魔法の呪文のように口にしていた。

「トレース・オン解析、開始。……なんてな」

何事もなかったかのように机に戻そうとする。

しかし、キンつと何か繋がったような気がした。

「……なんだ？」

カードに視線を落とす土郎。

途端、カードから光が溢れる。

土郎はその圧倒的な光の奔流の先に、赤い背中を見た気がした。

赤い世界の中心で男はかすかに顔を上げた。

己の『座』に干渉してくるものがあつたのだ。

また、聖杯戦争か、と思った。人類の無意識の集合体——『アラヤ』に属する守護者の仕事以外での干渉はそれしか思いつかない。

しかし、どうやら今回は違うようだ。

詳しく見てみようと思ひ、手を伸ばした瞬間。

ソレに、

まるまる一本、持っていていかれた。

ここはどこだ。

殺伐とした赤い世界ではない。いつの間には呼ばれた？

いや、ここは俺の部屋だ。ずっと暮らしている。

このカードは何だ？ 魔術的礼装のようだ。

セラカリズの物かもしれない。もしくはイリヤのかな。
イリヤ？ 彼女は……。

イリヤは俺の妹だ。アニメ好きのどこにでもいる小学生だ。
ああそうだ。イリヤは私の家族だ。ならば守らねばならない。
イリヤはどこにいるのだろう。あの雪のような儂い姉は……。

イリヤはひまわりのような元気いっぱいの子だ。
でも最近少し元気がないようだったな。寝る前に顔を見とくか。
部屋を出て、イリヤの部屋をノックする。

「イリヤ？ いるか？」

返事がない。

トレース・オン
「解析、開始」

魔術回路を瞬時に作り、解析の魔術を行使する。

中には誰も人がいないようだ。窓の鍵は開いている。
嫌な予感がする。

セラヤリズに気付かれないように外に出る。

そして、一直線に未遠川にかかる大橋へ向かって駆け出した。
どうして俺は大橋に向かっていているんだ？

大規模な歪みが生じている。あれは正すべきものだ。

イリヤを探さなきゃ。どこをほっつき歩いているんだろう。こんな夜中に抜け出したらセラに大目玉を食らうぞ。

イリヤスフィールは聖杯だ。ことに冬木においては魔術関係の事件に巻き込まれた可能性が高い。

イリヤは普通の女の子だし、変な奴に絡まれてなければいいけど。
息が切れてきた。なんて懦弱な身体だ。

自転車で来ればよかったな。思いつかなかった。

仕方あるまい、強化開始。トレース・オン

魔術回路を2本追加。身体強化を施す。

大橋が見えてきた。歪みはやはりあそこから発生している。

何だろう。たまに来る場所ってだけなのに、すごく大事な思い出があるように思える。

誰かと一緒にいた……？

カードが反応している。やはりこれに関係した異常か。
トレース・オン
解析開始。更に3本の魔術回路を追加。なに、これでへばるような体ではないだろうか？

カードの構造を解析。やはり『剣』ではないからか、あまり読み取れないが——あつた。鏡面界へ干渉する術式。

イリヤは大丈夫なんだろうか？

カードの術式に魔力を流す。無理矢理の起動になるが構うまい。私は抑止の力の一部。世界は私に味方する。

「——ジャンプ接界」

鏡面界に反転した先では、ピンク色の祝砲が上がっていた。それもイリヤの顔の形の火花でだ。

「……なんでさ」

思わずいつもの／懐かしい口癖が出てしまったのは、仕方がないことだろう。

大量の魔力残滓が宙に漂っているところを見ると、大規模の戦闘があつたらしい。

あれは遠坂とルヴィアか？ こんなところで何やってんだ。

イリヤスフィールは……あれは魔法少女というやつなのか？ あのステッキも、よくわからないが見覚えがあるような気がする。

ピンク色のカラフルな衣装を着てステッキを片手立つイリヤはどう見ても、魔法少女だ。

さらにもう一人、高度な魔法とされる飛行魔術を駆使し、宙に浮かぶ紫を基調とした魔法少女もいる。

「あれは……だれだ？」

と、そこで急激な魔力の高まりを感じた。

この感じ……キヤスターか。空間ごと焼き払うつもりだな。

イリヤ、みんなが危ない！

紫の少女が迎撃に出たか。……あれでは間に合わん。少々負担になるが、私が撃つか。

俺はどうなってもいい。みんなを助けなきや。

覚悟はあるな。行くぞ。

トレリス・オン
投影、開始。

全魔術回路27本形成。私の世界うちからあれを討つに足る武器を引き上げる。

「————I am the bone of my sword.

(我が骨子は捻じれ狂う)」

八節に及ぶ工程をできる限り省き、最短で作り上げるは、

ケルト神話の英雄フェグルスの魔剣を改造した矢。

弓も共に投影し真名と共に放つ。

カラドボルグII
「偽・螺旋剣」

真名を解放された神秘の塊は、紫の魔法少女をやすやすと追い越

し、キャスターの防御を食い千切り、そのまま

フロークン・ファンタズム
「壊れた幻想」

大爆発を起こした。

宝具の自壊に伴う爆発に、キャスターは成す術など無く吹き飛んだ。

【2】

「ちよつと!? 今の狙撃は一体何なのよ!」

「あの神秘の大きさからいって『宝具』クラスでしてよ!」

「『宝具』って美遊が使ってた『刺し穿つ死棘の槍』みたいなやつだよね! でもなんか爆発してたよ?!」

順に凜・ルヴィア・イリヤの発言である。ちなみにルビーは魔力砲が不発に終わったため、拗ねモードで無言であった。

「あの大橋から発射されたってことは、私たち以外に誰かがこの空間に入り込んでいるってことよね」

凜が大橋を睨みながら言う。悔しいことに、狙撃者は地上から見えないところに引っ込んだようだ。

この空間に転移できるのは、カレイドステッキかこのカードの制作者または関係者のみ。そしてカレイドステッキ二機はこちらにある。つまり、大橋にいる奴はこのカードに関する事件の鍵を握っているかもしれない。

「イリヤ、ひとつ飛びしてあれを撃った奴を連れてきなさい!」

「ええっ!」

凜に指示され、ビビるイリヤ。

「またあの矢が飛んできたら、ルビーじゃ防げないよ!」

「すみませんねー。でもあれはさすがにルビーちゃんでも無理ですー」

まだ拗ねているのか、ツンツンしているルビー。

とそこへサファイアを連れた美遊が合流する。あの狙撃によってキャスターは撃墜され、ランサーのカードを使用せずに回収できたため、あまり疲労はしていないようだ。

「あの矢……自分から爆発しているように見えた」

「おそらく『宝具』を自壊させて、内包した神秘と魔力を爆発的に放出したようです」

上空であの爆発を間近に目撃している美遊の見解に、サファイアが補足と推測をたす。

「そ、それじゃあ、あの『宝具』はもう使えないってことだよな？」
イリヤが恐る恐る言う。何せその狙撃手を連れてくるのは、自分の役目なのだ。文字通り死活問題である。

「まあそうだけど。……英霊の半身でもある『宝具』を使い捨ての爆弾にするなんて、頭がおかしいとしか思えないわ」

凜が強い口調で言う。本来『宝具』とは唯一無二の物であり、それを自爆させてまで攻撃に使用するなど、正気の沙汰ではない。

「そんなに大事なものなんだ……」

普通の世界で育ったイリヤには理解しがたい話である。

「神秘の塊である『宝具』を研究しない魔術師なんていないわよ」

「ええ、全くその通りですわ。自爆させるなんて罰当たりな。それを知った英霊の報復が恐ろしいですわね」

「自爆はだめでも研究はいいんだ……」

どちらでも英霊さんは怒る気がするけどなく、というツツコミは我慢するイリヤであった。

「まあ、これでクラスカードはしばらく使えなくなっているはずですよ」
わ

「えっカード？」

きよとんとするイリヤにルヴィアがやれやれ、と首を振って言う。

「カードで『宝具』をインクカード限定展開する以外に、『宝具』を用意する術がどこにありませんか？ 神秘が薄れたこの現代で、『宝具』はそこら中に転がってはいなくなってますよ」

「はあ……」

あまりピンときていない顔で頷くイリヤ。実はこのとき、イリヤの中では嫌な予感が急速に膨らんでいた。

（カード、『宝具』、矢……狙撃。つまりアーチャー。そして私が今日失くしたカードは……！）

関連性に思い至ったイリヤは、顔から血の気が引くのをリアルに感じた。

「あの、凜さん。いえ凜様。実は言っていないことがあって……」

「ん？ 何よ、こんな時に」

「えーと、その、実は、……えーっと」

目を泳がせるイリヤ。

更に挙動も怪しくなってきたイリヤに、しびれを切らしたのは、
「もー、じれったいですねー。早く言っちゃった方がいいですよー。

『アーチャーのカードを失くした』って」

拗ねモードを解除し、いじめっ子モードに入ったルビーだった。

「ちよっと、ルビー、ばらしちゃ——」

イリヤの口封じは尻窄みに終わった。何故って？ 背後で「ごごご」という噴火音が聞こえてきたからである。

「な、なんですとー——」

「あなた、なにしてくれてやがりますの!!」

凜が吼えた。ルヴィアが猛った。

「イリヤ！ あんたそれ、どういふことか分かってる!! 悪用されれば町ひとつアボンできるシロモノなのよ！ それを失くすって！」

「まったくその通りですわ！ この責任は私たちがとらされるのですのよ。私の栄光への架け橋が根本からぶっ壊れますわ！」

「……いや、ルヴィア。それはあるけど今の問題はそこじゃあないし」
さすがる凜も、少々ずれたルヴィアの発言にツツコミを入れる。

イリヤは時計塔から派遣された魔術師二人に対し、頭を下げて精一杯の謝罪をした。

「ごめんなさい！」

イリヤも事の重大さを今さらながらに理解したのである。

夕方に失くしたことに気が付いたときは慌てたが、後で探せばいいと軽く考えていた。誰かに拾われて使用されるなど思いもよらなかった。

しかし現実には何者かの手に渡り使用され、そのカードの効力を目撃したのである。もし、現実世界で使用されれば被害はどれほどになるか。

「でも、カードは見つかった」

美遊がイリヤをフォローするように事実を指摘する。しかし、イリヤを見る目は厳しい。

「先ほどの狙撃に使用された『宝具』、形状は『矢』。よってアーチャーのものと思われます」

サファアエアが分析を告げる。

「でも、昼間に限定展開インクールドしたときは黒い弓だったよ？」

イリヤの疑問に、ルビーが答えを返す。

「二人の英霊が複数の『宝具』を持つことはよくあるんですよ。アーチャーの『宝具』は弓とあの矢で対になっていて、対で限定展開インクールドできなかったのはイリヤさんの実力不足だったんじゃないですか？」

「それは私も実力不足だと言いたいのかしら？ ルビー？」

間髪入れず、凜がぎりぎりどルビーを握りつぶすように圧をかけていく。

顔が怖い。

「ま、それはさておき。つまり犯したミスはまだやり直しができるってことよ。

さあイリヤ！ 死ぬ気で取り返してきなさい！」

「はいー」

凜の発破を受けて飛び出すイリヤ。もちろん急いでだが、確実に期すためには慎重に向かうようだ。

「イリヤスフィールだけでは心配ですので、あなたも行ってくれますか？ 美遊」

「はい。そのつもりです」

ルヴィアの言葉に、美遊も魔力を固めた足場を展開しイリヤの後を追っていく。

キヤスターのカードを回収した今、この鏡面界はいつ崩れてもおかしくない。

慎重に行動すべきではあるが、協力して早く狙撃手を捕えるのに越したことはないのである。

「大橋の狙撃手はあれから全く動きませんわね」

ルヴィアがイリヤと美遊を見守りつつ、声をかける。

「こちらの様子を伺っているのかも。さっきまでの魔術大戦の中ならまだしも、今のこの状況で転移した気配を見逃すはずが無い。もしか

したら動きたくても動けないのかもね」

「それはどういう意味ですか？　遠坂凜」

「あら、こんなことも分からないのかしら？」

ルヴィアと凜の間でバチバチと火花が散るが、こんなことをやっている場合ではないと凜の方が譲歩した。

「まあ、真面目な話、あのカードは魔術協会でも解析はうまくいってなくて、私たちはカレイドステッキの膨大な魔力任せに使用しているのね。それをステッキ無しで限定展開^{インクカード}？　相応の負担があつてしかるべきではない？　仮に製作者だとしても、高度な魔術礼装の使用は魔力の消耗を招くわ」

「つまり、弱体化している敵なら、あの子たちでも余裕で捕えられると？」

「ぶつちやけ、カード無しなら、無限の魔力が供給されるカレイドステッキの前に、大抵の魔術師は撃退できるわよ。

……それより、やっぱりこの空間の崩落が遅すぎる気がしない？」

「ええ、何か他に原因が——後ろ!!」

ルヴィアの注意も間に合わず地に倒れ伏す、凜。

凜を襲った黒い影は、瞬く間に距離を詰めルヴィアも一閃の元、切り伏せる。

新たな強敵は次なる標的を見定め、行動を開始した。

【3】

「美遊様はイリヤ様が信頼できませんか？」

大橋の狙撃手の様子を窺いながら、サファイアが先ほどから雰囲気
の固い美遊に問いかける。

「……私はイリヤスフィールのように空を飛ぶイメージが、どうして
も掴めなかった。できたのは魔力を空中で固めて足場にするこ
とだけ」

「魔力の総合運用で考えれば、とても効率的ですが」

自虐的に言う美遊をフォローするように、サファイアは長所をあげ
る。

しかし美遊は表情を硬くしたまま会話を続ける。

「キヤスターの最期の一撃、私は判断を間違えた。私が跳んでも間に
合わなかった。

けど……イリヤスフィールは魔力砲を私に向かって撃とうとして
いた」

「まさか、魔力を固めて足場になっていることを見抜いて、加速させよう
と？」

「たぶん、そう。あの『宝具』の矢の狙撃でそれは実行されなかったけ
ど、イリヤスフィールはあの状況で最善の答えを出してた。私じゃ思
いつきもしなかったのに」

普通は味方に向かって魔力砲を撃つなど考えない。砲撃は敵を落
とす物という常識が邪魔をする。柔軟な空想ができるイリヤス
フィールだからこそその発想だった。

「……先日、美遊様は『カードの回収は全部私がやる』と仰いました。
しかしお二人の連携が無ければ、今回のカードの回収は厳しいもの
となっていたはずです」

サファイアの言うことは分かる。しかし、イリヤスフィールは巻き
込まれただけの普通の女の子だ。美遊とは違う。発想も、戦いに対す
る覚悟も、そして危機感も。

「イリヤスフィールと一緒に戦う方が効率的なのは分かる。けど、

……回収したカードを失くして報告もせず、後回しにしていたことは許せない」

「美遊様……」

イリヤスフィールはあのカードのせいでどれだけの犠牲が出るのか、想像つかないのだ。

だからこそ、カードの紛失も笑ってごまかしてしまう。

美遊はいま、イリヤスフィールに明確な怒りを覚えていた。

ひとときわ鋭い痛みを感じ、衛宮士郎は目を開けた。

どうやら意識がとんでいたようだ。

仰向けの状態で大橋の柱の陰に倒れこんでどれくらい時間が経ったか。

痛い。痛い。痛い。痛い。

体中の神経に対して、剣を突き付けられたような痛みが駆け巡っている。

こんな痛みは今まで経験したことがなかった。痛みで体を動かす気力すらわかない。いつそまた気絶してしまえるなら、どんなにいいか。

一瞬にして平和な日常が遠ざかってしまった気がする。

俺は一体なぜこんなところで、こんなことになっているのだろうか？

カードを拾って、調べて、イリヤがいないことに気付いて、家を飛び出して。

走って大橋まで来て。それから……？

そう、カードを使ったんだ。魔術で。

そしてこの鏡面界に来た。

なぜか魔法少女の格好をしたイリヤや、学友である凜とルヴィアがいて。それからもう一人、イリヤと同じくらいの女の子がいた。

そしてアレが現れた。ボロボロになっていたけど、圧倒的な存在感で、すべてを滅せんと攻撃を展開していた。人間がかなう相手じゃなかった。俺はどうすることもできないはずだった。けど、俺はイリヤたちを助けたかった。

だから、俺はアイツに頼った。

(やつと私を認識したか、衛宮士郎)

自分のうちから響く声。

コイツが俺の体に魔術回路を作り、あの矢を造り、そしてアレを撃った。

(ろくに鍛錬もしていない魔術回路で『宝具』を投影したのだ、相応の負担がかかる。その痛みが魔術の行使の対価だ)

(魔法使いっていうのは思っていたよりかなりハードなんだな)

軽口で返して痛みを紛らわそうとするが、余計、頭への痛みが増していくようだった。

(正確に言うならば魔法使いではなく魔術師だ)

(そんなの、どっちもファンタジーってことで同じだろ)

まったく、コイツと平然と話をしているのが不思議に思えてくる。

体を勝手に使われて、こうして痛みに苦しんでいるのは、コイツのせいだ。でも結果的にイリヤたちを助けることが出来たのは、コイツのおかげでもある。

(お前は一体何なんだよ。イリヤたちを助けてくれたのには感謝するけど)

(私は……そうだな。そのカードに引き寄せられた格の低い英霊といったところか)

——英霊。偉業を成し、英雄と世界に認められ、死後に『英霊の座』と呼ばれる高次の場所に迎えられた存在。信仰の少ない格の低い者や、世界への契約によって召し上げられたものはアラヤの『守護者』となる。

……何だろう、これは。俺が知らないはずの知識を俺は『識っている』？

そういえば魔術や魔術回路のことも、俺は当たり前に受け入れている。なんでだ？

(何せ乱暴な『座』への干渉であったから、私自身、あまり把握はできていない。それに衛宮士郎、お前にも原因がある)

(俺が何をしたっていうんだよ)

(触媒としての血と言霊。そしてお前が衛宮士郎であったからこそ、カードは誤作動を起こした)

唐突に、イメージが浮かぶ。

曇天に浮かぶ鋼鉄の歯車。赤茶けた大地に突き刺さる無数の剣。たたずむはこの世界に相応しい赤い外套を身に纏う男だ。肌は玄く焼かれ、髪は灰のような白。体はボロボロなはずなのに、それでも鷹のような鋭い鋼の瞳は、ただ前だけを見つめている。

そしてその世界は、赤い荒れた大地は、足元から地続きで俺の背後まで広がっていた。

(共振とでもいうのか。同じものを抱えているからこそ私はお前に繋がったのだ)

——いや、同じじゃない。俺の大地も赤茶けた土をみせているが、俺の家族を象徴するような銀の小さな花が所々に咲いていた。空は快晴とまでも行かないが歯車は無い。

あの日、一度俺の心は死んで、何にもない赤い荒野になった。そこは同じだ。でも、一緒に暮らす家族がいた。彼らが希望と理想の種をまき、根気強く愛情という水を注ぎ、わずかながらでも花を咲かせたのだ。

(……そうだな。お前は私とは違うようだ。だが、同じ素地ではある。いずれこうなる可能性は否定できない)

可憐な花はたやすく踏みじられ、昏い感情に焼き尽くされてしまうこともある。

それでも。

俺は花を傷つけないように、「剣」を大地に突き立てる。

(俺はそうはならない。この花を散らさず守り抜いて見せる)

(それは容易い道ではないぞ。衛宮士郎)

(分かっている。お前を見れば分かる)

あの背中が、お前の世界が、教えてくれた。

誰もが無理だと諦めた道をひたすら追っていった。ボロボロになっても、心があんな世界になろうとも。その先に何があったかは分からないが、それでも何かをやり遂げたいだろう。

その姿勢に。その信念に。俺は尊敬の念を覚えた。いつかコイツみたいな男になれば、と憧れさえ抱いた。

(未熟者が大した口の利きようだ。……だが、その大切さを知っているだけ、私よりましか)

……なんとなくコイツから寂しさを感じたのは気のせいかな？ あと羨望と苛立ち、そして少しの安堵？

心の中があんな剣ばかりの殺風景なものになるまで、実際にコイツは何をしてきたんだろう？ 何のために、何を追いかけて？

疑問ばかり膨れ上がるけど、大事なことをまだ聞いてなかったな。

(お前、名前なんて言うんだよ。いつまでもオマエとかじゃ味気ないだろ)

(……私は無銘の英霊だ。呼びたければアーチャーとでも呼べ)

それって、カードの名前じゃないか、と思っただけど、存外に「アーチャー」と言った声音が優しかったからコイツにとっては大事な呼び名かもしれない。

(お前はもう知っているかもだけど、俺は衛宮士郎だ。よろしくな、アーチャー)

(ふん、その死に体な様で何がよろしくだ、小僧)

あ、俺ちよつとコイツ気に入らないかも。

そんな和やかな休憩時間は唐突に破られる。

突然現れた暴力的な魔力の塊。

先ほど討ったアレと似ているが、コレはもつと何倍にも圧縮したかのような密度だ。

誰かと交戦しているのか、魔力が衝突する衝撃と音がこちらに響く。

(誰が戦っているんだ？ イリヤたちは無事なのか？)

(この気配、剣気。——セイバーか)

アーチャーには心当たりがあるようだ。ならば。

(うあつ、痛つ)

身を起こして姿を確認しようとするが、激痛で忽ち動けなくなつて

しまう。

(脆弱な精神だな、小僧。さつきまでの決意はどうした?)

(うるさい、痛いもんは痛いんだよ。お前は痛くないのか)

アーチャーもこの剣で身を刻まれているような感覚を共有しているはず、という確信があった。

(私は慣れている。——このような痛みでいちいち立ち止まっては、守りたいものも守れん)

(……アーチャー)

痛みは体からのサインだ。これ以上動いたら命に関わるという危険信号だ。

それを無視する。無視をしてまで守りたいものがある。

自身が傷付いても、命を削つても、立ち上がり続ける。

それがこの男の歩んできた道なのか。

一際鋭い剣気が走った気がした。そしてかすかにイリヤの悲鳴も。

「う、うあつ」

身を起こす。痛みは、今だけ忘れよう。目の前が白くなりかけるが気にしない。痛みは相変わらずひどいが、身体は動く。

(やはり、衛宮士郎はエミヤシロウか)

イリヤは俺の大事な家族だ。

身体が痛いのが何だ。アーチャーは立ち上がり続けた。

俺にだってできる。

守るためには命だって——。

(「お兄ちゃん」)

イリヤの顔が出てきた。

元気いっぱいの妹。くるくる表情が変わる女の子。

その中でもやっぱり、笑顔が一番よくて。

(俺が死んだら、あの笑顔は守れないのかな)

欄干を掴み、眼下に目を凝らす。

大橋の下、舗装された川岸に見えるは5人の人影。

一つは黒い霧を纏った黒い小柄な騎士。顔はヴァイザーのようなもので遮られ見えない。だが、アレが先ほどから感じる魔力の正体

だ。

少し離れたところにはイリヤともう一人の女の子が。今は二人とも魔法少女の格好ではない。

あのステッキはどこへ行った？と見渡すと、

(……あれはさすがにイタイよな？　アーチャー)

(……私に聞くな)

黒猫耳に赤い衣装の遠坂。

キツネ耳に青い衣装を着たルヴィア。

二人そろって魔法少女をしていた。

【4】

魔法少女が黒い騎士と対峙している。

言葉にするととてもつもなくシニールな気もするが、あえて突っ込むまい。

赤いカレイドステッキを操る猫耳を生やした遠坂凜は、黒く染まったセイバーと接近戦を仕掛けている。いくら体術の心得とステッキの支援があるからといって、最優のサーヴァントで召喚される英霊と鏢競り合いなど、無茶をするものだ。

そんな凜を囿……いや前衛に出し、キツネ耳をピンと立てたルヴィアは大掛かりな術式でも用意しているのだろう、徐々に魔力が集束されていくのが分かった。

(遠坂のやつ、すごいな。あんな奴と互角に渡り合ってる)

小僧の関心はセイバーと刃を交し合う凜にあるようだ。

元々彼女はあの無限に魔力が供給される礼装のステッキが無くとも、自分の実力のみで英霊に立ち向かったこともあるのだ。あのくらい出来て当たり前だろう。例えばそれが平行世界の遠坂凜だとしても、あの鮮やかな赤の輝きは変わらない。

対して、セイバーはやはり私が生前サーヴァントとして召喚した彼女だったが、この度は正常に召喚されたわけでは無いようだ。

精霊の加護であった『風王結界』インレジナル・エアを纏うことは無く、黄金と青で装飾されていた名高き伝説の剣は、見る影もなく黒に染まっている。白銀の鎧も、鮮烈な青のドレスも同様だ。月光のごとき柔らかな金の髪は色褪せ、新緑の瞳はバイザーによって見ることは叶わない。魔力放出スキルの代わりか、高密度な魔力の霧が取り囲み、斬撃の軌跡に沿って剣圧と共に魔力も飛ばされている。

その剣筋に彼女の清廉さや騎士然とした理性や意志は感じられず、ただ機械か獣の如く敵に反応して剣を振るっているだけだ。

(あれはサーヴァントでは無い。あえて言うのならば英霊の現象というべきか)

(英霊の現象？ あそこで戦っているのは確かに人だろうか?)

(人の形をしているが、意志や魂があるわけでは無い。写し取られた『英霊の力』が形をとり存在しているに過ぎん)

でなければ、凜といえども、真つ当に打ち合うことすらできないだろう。

凜が空いた胴に入れられた一閃をギリギリ防ぐ。セイバーが硬直したその一瞬に、ゼロ距離射撃を見舞って距離を置いた。

今のは危なかったな。両手で振り抜かれていたら障壁が持たず、胴から真つ二つだったぞ。

そして、大規模の砲撃術式を用意していたルヴィアと合流し、魔方阵を展開する。そこに充填された魔力は先ほどの『偽・螺旋剣』に迫るほどだ。

(あれなら、アレもひとたまりも無いだろう)

(……いや、その読みは甘いな、小僧)

「斉射!!」
フオイア

凜とルヴィアの掛け声。今期の時計塔の首席候補の二人が紡ぐ、全力の魔術がセイバーに向けて叩き付けられる。

轟音と衝撃。

川床は盛大にえぐれ、熱量によって大量の蒸気が上がる。

着弾地点には露出した土面以外、何も無いだろう。

そう、通常ならば。

(あれは現象であっても、)

凜たちは勝利の余韻に浸っているが、相對していたのは最優と呼ばれるセイバー。

その中でも彼女は二度の聖杯戦争でも最後まで勝ち残った、とりわけ優秀なサーヴァントだったのだ。——簡単に倒しきれるものか。

水面が割れ、黒き極光が現れる。

鎧さえ魔力に変換し、その一撃は放たれる。

それは星が編んだ最も貴き幻想。堕ちたとしても力はそのままだ。

彼女が振り下ろす、その真名は。

「エックスされた勝利の剣!」

(最強の騎士、アーサー王だ)

美遊は、ただ茫然と見ているだけしかできなかった。

カレイドステッキを投げ渡し、選手交代として凜とルヴィアが、あの黒騎士を相手にして一歩も引かぬ戦いしているのを見せつけられた時も。

黒騎士が放った黒い極光が、鏡面界を切り裂き、凜とルヴィアを呑み込んだ時も。

そして今、イリヤスフィールから膨大な魔力が噴出しているも。

(彼女は魔術師ではなかったはず……。そもそも一人の人間が許容できる魔力量じゃない！)

一体何が彼女に起こっているのか。

ザツという音に反応して振り向けば、あの黒い騎士が剣を携えてこちらに向かってくるのが見えた。

美遊は構えをとりはしたが、カレイドステッキのサファイアが手元に無い中どうすることもできない。

……いや、対抗する手段はあるが、今の美遊の魔力量で術式を展開できるかどうか。

「——倒さなきゃ」

背後からのイリヤスフィールの声。

美遊はぎよつとしてイリヤスフィールの様子を窺う。その声は先ほどとは全く違う、平坦な調子だ。そして魔力の噴出は止まらないが、無作為に放たれていた魔力に方向性が与えられたように思える。

「……どうやって？ 手段？ 方法？ ——力？」

イリヤスフィールの瞳が美遊にまっすぐ向けられる。

感情がこそげ落ちた色。ただ事態に対処するために機能している機械のような。

「……力なら、そこにある」

美遊に向けて手が差し伸べられる。——正確にはクラスカードを収めたポケットへ、だ。

「イリヤスフィール、あなた、何を——？」

カレイドステツキが無い今、クラスカードから宝具を『インクルード限定展開』することはできない。なのに、なぜカードを催促するのか？

美遊の胸の内は緊張と困惑がほとんどを占めていたが、イリヤスフィールへの怒りもまだ燻っている。カードを渡すことには抵抗があった。

だが。

ぞくりと背後から突き刺さる威圧感。英霊という人を超えた上位の存在から放たれるプレツシャーは、魔法少女に転身もせずステツキの加護の無い生身の少女には、到底堪え切れるものではなかった。

黒い騎士はこちらを獲物と捕捉した。あの騎士が行動に移したら——何もできず切り伏せられる。待ち受けるのは死のみ。

その結末を幻視した美遊に湧き上がったのは、恐怖と「まだ、死ぬない」という義務感と悔しさだった。

私はまだ、何も成せていない。やり遂げていない。カードのことも、そして兄との約束も——。

けれど自分には、立ち向かうだけの力は無く。

美遊は手を差し伸べるイリヤスフィールを見つめた。膨大な魔力を纏う姿はこの絶望的な状況の中の一筋の光のように思えた。そう、まるでなんでも願いを叶える伝説の『聖杯』のような……。

知らず口から言葉がこぼれた。こぼしてしまった。

「……お願い、助けて」

言つて後悔する。私は、自分の意志を無視して縋りつかれる辛さを誰よりも知っているはずなのに。だから、誰にも頼らず弱音も吐くまいとしていたのに。

しかし美遊のその言葉に、イリヤスフィールは、人形のような無表情から一転、ふわりつと花が咲きほころぶ聖女のような笑みを浮かべた。それこそ、『願いを叶える存在』であることが嬉しいように。

「任せて、ミュさん。私はあなたを助ける」

美遊は意を決して、手持ちのカードを全てイリヤスフィールに託した。彼女ならこの窮地を救ってくれると、どこか確信する自分がい

た。

イリヤスフィールはカードを確認し、

「クラスカード『ランサー』を選択」

と三枚のうち一枚を残して他のカードはポケットにしまい込んだ。もう失くさないようにと気を付けたのかもしれない。美遊はこんな状況にも関わらず、つい口元を緩めてしまった。

だが、次の瞬間顔を引き攣らせることとなる。

『インストリアル夢幻召喚』

イリヤスフィールの足元に美遊にとっては見覚えのある魔方陣が展開される。イリヤスフィールから噴出していた魔力は目的地が定まったというようにその魔方陣へと次々に吸い込まれていく。

そして、魔力が収束されたあと。

そこにいたのは。

青い軽鎧を纏い、真紅の槍を携えて『英霊化』したイリヤスフィールだった。

青い影が赤き閃光と共に、黒騎士へ迫る。

赤い魔槍の精緻な槍さばきを、機械じみた反射で黒き剣が迎撃。剣戟の音が鳴り響き、交点からは衝撃の余波で火花のような魔力光が飛び散る。

青の小柄な槍兵——青のケルティックスーツを纏ったイリヤは、自身の背丈を大きく超える槍を自在に操り、圧倒的だった黒い騎士と対等に刃を交えていた。

（いったい、どうなってるんだよ。イリヤは普通の女の子のはずだろ。なんで——あんな戦いができるんだ）

衛宮士郎は一步踏み出すごとに体中に走る痛みに堪えながら、己の『うち』にいるアーチャーへ問いかける。

（おそらくはカードの術式を発動させたのだろう。英霊の『座』に干渉する術式だったが、まさか英霊の力を写し取り、己に『置換』させる物だったとは）

（よくわからないけど、つまりイリヤは今、『英霊』の力を使っているってことか？）

イリヤは普段からは信じられないほど俊敏に動いていた。その身体能力だけでも人間の範疇では無い。槍さばきも戦いの運びかたも、熟練の戦士を思わせる。

目に霞むほどの速さで繰り出される赤き魔槍。それは遠くからでも理解できるほどの神秘の塊であり、『宝具』と呼ばれる伝説に記された英雄の武具だった。

士郎は無意識のうちにその正体を読み取っていた。

（あの赤い槍は……『ゲイ・ボルグ』だ。因果を逆転させる必中不可避の魔槍）

（正解だ。その担い手はケルト神話の太陽神の息子、アイルランドの大英雄、『クー・フリーン』だ）

その大英雄なら、かの有名なアーサー王である黒騎士と対等に渡り合えるだろう。

(彼の力をもつてしてなら、彼女を倒すことが出来るかもしれない。貴様の行動は無意味に終わるかもしれない。なのに、なぜ向かう?)
アーチャーの皮肉気な声。

士郎は今、大橋から河原へと向かう道をよたよたと歩いていた。体中を走る痛みは変わらず、士郎の意識を苛み続ける。

(確かに、ずたぼろな俺があそこに行く意味なんか無いかもしれない。イリヤがああ黒騎士を何とかしてくれるかもしれない)

士郎の体は先ほどの投影でボロボロだ。行くだけ足手まといになる可能性は大いにある。

(けどな、俺はそうやって言い訳して、さつき遠坂とルヴィアを見殺しにしたんだ)

黒騎士を倒したと思った。遠坂とルヴィアの砲撃はそれだけの威力があった。

しかし、現実の黒騎士は想像以上で。

『宝具』の真名解放によって放たれた黒の極光に呑み込まれた二人は、おそらく生きてはいまい。

士郎の幼少期に刻まれた光景が蘇る。どうしようもない力の前に自分だけがまた生き残ってしまった、と。

胸の内には、まさに後悔と罪悪感が重くのしかかっていた。

あの時何か自分にもできることはあったのではないか。

何か行動に移せていたら、二人は生きていたのではないか。

そんなIFを延々と繰り返しているような気がする。

(だから貴様は行くというのか。己の命を度外視して)

アーチャーの声は厳しい。それはそうだ。さつきまで威勢のいいことを言っていたのに、それを翻してる。銀の花が根を張る大地ごと消えてしまったら、守るといふことにはならないかもしれない。

(俺だって命は惜しいさ。痛いのだって嫌だ。だけど——もう後悔するのも自分だけ生き残るのも、ごめん)

(……お前は他人を信じないのか。こんな傷付いた体だ。力ある誰かに託し、ただ蹲っていても誰も文句は言うまい)

アーチャーは痛いところを突いてくる。

魔術に関して自分は門外漢で、専門家や実力を伴った奴が解決してくれるのを待っていた方がいいのかもしれない。——まさか今、黒騎士と闘っているイリヤを見守る女の子のように。

しかし、士郎は何もせず傍観することはできなかった。

心に巢食うあの日に見殺しにした人々の声がこんな時に限って、鳴り止まないのだ。

オマエはまた見殺しにするのか、と。

遠坂とルヴィアは助けられなかった。でも、まだイリヤは生きてる。

心の片隅で、幼い自分を救ってくれた男——養父の切嗣が浮かべていた表情を思い出す。

その笑顔に憧れていた。いつか自分もそんな風に笑えたらと思った。

後悔と罪悪感、そして自らの手で助けたいという思いが、士郎を動かしていた。

(俺は何もできないとあきらめて、ここで転がっているなんてできない。クー・フリーンになったイリヤが絶対に勝つなんて保証はないんだろう？ なら俺のこの行動が無駄になるなんて最初から決めつけるな！)

それに士郎の胸には嫌な予感があった。既視感と言ってもいい。

クー・フリーン（ランサー）とアーサー王（セイバー）の戦いを以前も見たことがある——気がする。それは唐突に浮かび上がったイメージの断片にすぎないが、起こり得る可能性の一つとしては確率が高い。

その時の結末は確か——。

士郎は青の槍兵となったイリヤと黒騎士の戦いに目を向ける。ちやうど黒騎士が赤い魔槍を力強く弾き、距離を置いたところだった。双方ともに息が切れ始め、イリヤは距離が空いたことをチャンスというように、槍の投擲体勢に入る。

(あれは……ヤバイ！)

赤い魔槍が周囲の魔力を暴力的に収束させていく。それは真名解

放の予兆。

イリヤはこれで決着をつけるつもりか己の全魔力も槍に注ぎ込んでゆく。

士郎は焦り、遅々としか進まない歩みを速めようとするが、逆に足を縛れさせて倒れこんでしまった。

(イリヤ、その展開はダメだ。それじゃ——)

痛みを無視してもなお、思い通りに動かぬ体に士郎の焦燥感は募るばかりだ。

そこに声をかけたのは沈黙していたアーチャーだ。

(衛宮士郎、お前に命をかける覚悟があるなら、この状況を打破できる方法を教えてやる)

(打破、だと。そんな方法があるならすぐに教えてくれ！ このままじゃイリヤが危ない)

今頃その方法を提示するなど、と怒りも沸いたが、身を刺す痛みは共有しており、わざわざ理由もなく苦痛を味わう時間を長くするわけではない。

(もちろん、私はマゾヒストではない。しかしこの方法は失敗すればお前の命は無い。成功したとしても何らかの後遺症は残るだろう。だからこそ、ギリギリまで様子見させてもらったがな。そうも言っていられん状況になった。それでもやるか?)

(ああ、ここで尻込みしてイリヤを助けられなかったら、俺は一生後悔する。だからとつとと教えろ!)

何しろ時間が無い。イリヤの槍はいつ放たれてもおかしくはない状態なのだ。

(ならば今一度、魔術回路を開け。スイッチは銃の撃鉄を起こすイメージだ)

士郎はその通りに思い浮かべる。
(トレース・オン
同調、開始)

言葉は不思議と自然に出てきた。これもどこからかやってきたものなのか。さつきから知っていることと『識っている』ことの区別が曖昧になっている気がする。

しかし、回路が開けた瞬間、今まで以上の痛みが襲いその疑問は吹っ飛んだ。まるで火傷の上を溶けた鉄が流れ込んだような絶対的な痛みが駆け巡る。

(意識を手放すな。ポンコツの回路を無理矢理動かしているのだ。制御出来なかつたら死ぬぞ)

(そ、そこまで、言うなら、お前がやれ、ばいいのにな。最初に、魔術を使ったの、はお前、だろ)

痛み気絶しないよう、思考を回して何とか意識を保つが、言葉は途切れ途切れにしか形を成さない。

(あれは一種の混乱状態であつたからこそできたことだ。今は痛覚がお前の体の主導権は衛宮士郎にあるのだと、境界線を明確にさせてしまっている。ゆえに私ができるのは魔力の誘導くらいなものだ)

士郎の魔術回路に流れている熱い何か——魔力が神経をやすり削るように一点に向けて流れていく。行き先はずっと手放さずに持っていた「Archer」と銘打たれたカード。

(イリヤスフィールが手本を見せてくれたおかげで、大体の構造は把握できた。そして私の意志があり、私になる可能性を含んだ身体(器)がある。不完全でも起動するはずだ)

カードに込められた術式の大半は、『英霊の座』に干渉するものと写し取った力を制御するものだ。

平行世界の同一人物というイレギュラーによって『座』への干渉を果たした。だが力を写し取るだけのはずが、霊格の低い守護者ゆえか、意志の欠片まで持ってきてしまった。

アーチャー——守護者エミヤの意志はいま、衛宮士郎へと協力するつもりでいる。ならば力の制御は己がすればいい。

必要なのはこのボロボロな身体を英霊の力に『置換』させる術式だけである。

幸いなことに衛宮士郎は守護者エミヤの同位体であり、身体の齟齬は少ないはずだ。

アーチャーは本来の手順を素っ飛ばし、必要な術式にだけ魔力を注ぎ込む。

(後は術式の起句を告げるだけでいい。小僧、今更だがこの後どうなるかは保証できんぞ)

(はは。無理は、承知、の上だ。教えろ、よ)

士郎の身体は酷使しすぎてオーバーヒート寸前だった。

それでもこの絶望的な展開からイリヤを救うための意志だけで、発狂しそうなほどの痛みをねじふせる。

そして、アーチャーに告げられた言葉を口にした。

『インストリアル夢幻召喚』』

それは奇しくも、赤い魔槍の真名解放と同時であった。

伝説の赤い魔槍の本領が発揮される。

周囲の魔力を吸いつくし、更に現在の担い手であるイリヤからの魔力も注ぎ込まれ、もはや相手の心臓を喰らうだけの凶器となった槍を止められるものなど無い。

そう思わせるほど強烈な気配を槍は湛えていた。

その魔槍をイリヤはこれで決着、というように全身全霊をかけ、黒騎士めがけて投擲する。

『突^ゲき穿^イつ死^ボ翔^ルの槍^グ』

真名を解放され、赤き閃光と化した槍は、黒騎士が展開した魔力の霧の障壁を簡単に食い千切り、轟音を立てて獲物へと到達する。広範囲への攻撃だったか周囲の地面はえぐれ、舞い上がった土煙は視界を遮る。確認はできないが敵は倒せたはずだ。

『宝具』ゲイ・ボルグは「敵の心臓を必ず貫く」という結果へ向かって因果を組み上げる。いかなる防御も回避も不可能だ。

だからこそ、イリヤはこの一撃にかけた。

元々、英霊クー・フリーンの力を纏ったイリヤは黒騎士に対して優勢を保っていた。

しかし現象とはいえアーサー王の英霊は簡単には討ち取らせてくれない。黒騎士の防御をかいくぐり、その身に刃を届かせるも、異常なまでの察しの良さで致命傷には至らない。

焦ったのはイリヤの方だ。こちらには魔力切れという時間制限がある。ならば、その前に必殺の一撃で終わらせてしまおうと、『宝具』の真名解放に踏み切ったのだ。

パキンっという音と共に変身が解け、クラスカードが排出される。魔力切れによる強制送還である。

イリヤは今にも気を失いそうになりながらも、己が成した惨事を見る。やる。

クラスカードという礼装がもたらした結果を。

整備されていた川辺は見るも無残に地形を変え、戦闘の余波で周囲

には砲弾や斬撃の跡が目立つ。さながらテレビの中の戦場のようだった。

ここは鏡面界であるから現実世界には影響はないが、——もし現実世界だったら修繕費は冬木市の税金から出るんだよね——と、イリヤは少し気が抜けたせいで、少々ずれた感想を抱いてしまう。もし、人が沢山いる街中で起こっていたらという想像は頭の隅に追いやって。そして背後の少女——美遊の無事な姿を視界に収めて、思わず笑みが浮かんだ。

(私は、友達を守ることが出来た。——私は『願い』を叶えることが出来た)

もう失わないで済んだ、という安堵と達成感がイリヤの胸を満たした。

(……………?)

何か忘れているような気がするが、今は倒した黒騎士のクラスカードを回収しようと、未だ土煙を上げる場所へ向かう。また誰かの手に渡ったり、悪用でもされたら、たまったものではない。

だが、その行動は急停止を余儀なくされる。

土煙の奥にゆらりと立つ影を認めただからだ。

アリエナイ。何デマダ居ルノ？

そう、黒騎士は消えていなかった。

心臓のすぐそば、脇腹部分には食い千切られたような大穴が空いていた。血はどぼどぼと流れ出している。それは明らかに致命傷であり、黒騎士が消滅するのも時間の問題かと思われた。

しかし。

それでもなお、黒騎士は言葉にならない声をあげ、こちらへと向かってきた。

脇腹の大穴の他にも、全身のいたるところにある刺し傷や切り傷から出血は続き、総じて血塗れだったが、剣だけは手放さない。

いったい何が彼女を駆り立てるのか。

イリヤは執念さえ感じるその姿に、先に戦ったライダーやキャスターとの違いを感じていた。

クラスカードで己も英霊の力に触れたからこそ分かる。

あの黒騎士は、他の実体化したクラスカードとは存在の強度が段違いに高いのだ。ただカードに『写し取られた』のではなく、まるで自ら望んでこの世界に実体化したような……。

黒騎士は、ふらふらで立っているのもやつとという態であるイリヤでは無く、まだ余力のありそうな美遊を標的と定めたようで、残った魔力を推進力として美遊へと迫っていく。

他のクラスカードを展開しようにもイリヤの魔力は空っぽであり、もはや黒騎士に対抗できる手段など無い。

それでも。

イリヤは力を振り絞り、美遊と黒騎士の直線上に入り込む。

(せっかくの『願い』だもの。やり遂げないとね)

「ミユさん、逃げてー！」

黒騎士はすぐそばまで来ている。少しでも時間稼ぎになればいい。

黒い剣が振り上げられる。

イリヤはその様子をスローモーションで見っていた。

騎士の傷口から滴る血が跳ねたが、気も留まらなかった。

ただ、バイザーが外れ露わになったアーサー王の素顔が、とても綺麗な、と脈絡もなく思っただけ。

黒騎士の剣が振り下ろされる。

ギンツ！

鳴り響く鉄の音。視界に広がる鮮やかな赤色。・

頼もしい背中はまだで絶体絶命のピンチに現れる正義の味方ヒーローのようロウで。

(ヒーローって本当にいたんだ)

イリヤは呆然と、目の前に飛び込んできた長身を見上げた。

肩から腕と、腰に纏うような変わった形の外套の色は赤。

イリヤの眼から見ても、よく鍛えられていると分かる筋肉を覆うは、黒の軽鎧。

髪は雪のように真っ白で、僅かに露出した部分から、灼け付いたような褐色の肌が見えた。

そんな男が握るは白と黒の中華風の一对の剣。その双剣でもって、黒騎士の一撃を防いでいたのだ。

黒騎士とイリヤの間に割り込んだ男は、そのまま一步前に踏み込み、黒騎士を力任せに押し退けると、いきなりすることに動けないイリヤを抱えて距離をとる。

黒騎士は、新たに登場した男を警戒してか、すぐには襲ってこないようだ。

「イリヤスフィール！」

美遊が泣きそうな顔で近づいてくる。普段のクールで近寄りがない感じからは一転、友達を心配する普通の女の子のようだ。

男は比較的きれいな地面にイリヤを座らせ、そして唐突にその銀の頭をくしやりと優しく撫でた。

目をぱちくりさせるイリヤに、男は初めて声を発した。

「よく頑張ったな、イリヤ。あとは任せろ」

温かい手の感触と低く優しい声音に、涙がこぼれそうになった。気を張って、抑え込んでいた気持ちが男の声につられて溢れ出てくる。

そう、イリヤは頑張ったのだ。

後ろで見守っていてくれた頼りになるあの人たちと、ハチャメチャだけでも自分に戦う力をくれたルビーを失くして、悲しくて、『私』が出てきても、黒騎士との戦いは厳しかった。怖かった。でも美遊「願い」を叶えるを守るためには退くわけにはいかなくて。

イリヤにとって、その行動はとて存も勇気が意いること義だったのだ。

それを褒めてくれた。よく頑張ったと認めてくれた。

心の中であたたかいものがじんわりと湧き上がる。ただそれだけのことが、とても嬉しかった。

そして、後は任せろと言ってくれた。私はもう休んでいいんだと、身を案じてくれた。

正直言って、心身ともにクタクタだったイリヤは、大きな安堵と共に力が抜けていくのを感じた。

まだ黒騎士という脅威が残っていて、この状況が危険なことには変

わりない。それでもイリヤは男の頼もしい姿に安心感を抱いていた。

(大丈夫。この人は絶対、私たちを助けてくれる)

それは確信だった。今日初めて出会ったはずだが、赤い外套の男の背中は、家族と同じくらい信頼できるものだと思ったのだ。

そうして、いっぱいっぱいだったイリヤの意識は、急速にフェードアウトしていったのだった。

気が緩んだか、倒れこんできたイリヤをそっと抱きかかえる。

目を閉じ、気を失ったイリヤは親の懷で眠るような、そんな安心しきった表情を浮かべていた。

(よくここまで見知らぬ男に気を許せるものだ。他の男でもそうなら将来が心配だが)

世の中、お人好しの善人だけで構成されているわけでは無いのだ。いくら窮地から救ったとはいえ、無防備過ぎやしないか？

軽く解析の魔術をかけるが、疲労以外の変調は見当たらない。精神的負担が大きかったのだろうと判断し、気絶したイリヤを黒髪の少女にそつと預けた。

少女はイリヤの親しい友達なのだろう。凜やルヴィアと共にこの空間にいたこと、そして先ほど駆けつけてきた様子から、そう推察する。

今も少女はこの場に乱入した男に対して、警戒の目を向けていた。少なくとも、簡単に信用しないだけの賢さはあるようだ。

自然と口元が緩む。このイリヤは良い友達に巡り会えている——

「イリヤを頼む」

一言だけ言い残して、アーチャーは疾走を開始した。ぐるりと弧を描くようにセイバーとの距離を詰める。

セイバーは満身創痍であるが、僅かでも魔力が残っているのならばまた斬撃を飛ばしてくるかもしれない。背後の守るべき少女たちを巻き込まないためにも、近接戦に持ち込む必要があった。

ギンツ！

干将莫耶——白と黒の夫婦剣が、セイバーの黒に染まった聖剣と火花を散らす。

アーチャーの渾身の一撃を、ボロボロで碌に力の残っていないであろうセイバーが受け止める。

セイバーは魔力の霧を展開せず、全て剣を振り回す推進力としてい

るようだ。

真名解放された『突き穿つ死翔の槍（ゲイ・ボルグ）』の呪いを回避したとはいえ、もはや実体化さえ危ういのか、身体の端もぶれ始め、粒子となって解けかかっている。

だが、それほど消耗しているにもかかわらず、英国の誇る円卓の騎士王はアーチャーと打ちあつて見せた。

理性など無い。あの洗練な意志を宿す翡翠の瞳は、混濁した金へと変貌し、ただ本能のままアーチャーの振るう剣に反応しているに過ぎない。しかし、そんな状態だからこそ、セイバーの直感スキルは最大まで跳ね上がっているようだ。

どれほど速く剣を振るっても彼女は反応し、受け止める。無理矢理に体を動かすせいで、傷口は広がり血飛沫が飛ぶが、それを無視して剣を振るい続ける。

傷だらけでも決して退かないその姿は、アーチャーに一つの光景を思い出させた。

（君はそんな姿になってまで、何を望むというのだ）

アーチャーは剣を交わしながら、セイバーの言葉を成していない声を上げる口元を注視した。彼女の唇から言わんとすることを読み解く。

「セ—— イ—— ハ—— イ——」

—— 聖杯。

それはアーサー王が探し続けた物。持ち主の願いを叶える願望器。彼女が世界と契約をしてまで望んだもの。

（セイバー……いや、アルトリア。この君はまだ聖杯を諦めてはいないのか）

摩耗した記憶にわずかに残る黄金の離別が頭をかすめる。

アーチャーは、この冬木の地に眠るものが彼女の求めるものではないことを知っていた。

そして、彼女の願いも。

「……いいだろう、ならば私が引導を渡してやる」

アーチャーは手にした二刀を続けざまに投擲する。意図してセイ

バーが避けやすいように調整し、更に新たに投影した全く同じ姿の夫婦剣も同様に投げつける。

直感によって全て攻撃を受け止められてしまうのであれば、来ると分かってもお避けられない状況を作り出せばいい。

アーチャーは三対目の干将莫耶を投影し、セイバーへ斬りかかる。干将莫耶は陰陽一对の夫婦剣。ゆえに互いに引かれあう性質を持つ。

投擲された二対の双剣は、地に落ちることなく引き戻される。

そう——ちょうどセイバーの元で交わるように。

セイバーの眼が大きく開かれる。

「鶴翼三連」

セイバーの姿が影のように霞んだ。

重なる金属音。

アーチャーの振り下ろした双剣は、黒の聖剣によって阻まれる。

だが次の瞬間——トンツ、とセイバーの胸の中央から白の切っ先が突き出した。

それは夫婦剣の片割れである陰剣・莫耶。

回転する刃が交わる刹那、セイバーは直感のおもむくままに、飛来する干将莫耶を薙ぎ払い、アーチャーの握る一对も防いだ。しかし、それさえ計算に入れ、僅かタイミングを遅らせた莫耶を防ぐことはできなかったのだ。

「あ、あ——、うあああああああああ」

セイバーの絶叫が上がる。

聖杯を手に入れることが出来ない悟った、絶望に満ちた声音。

アーチャーはその悲痛で痛々しい様子に、投影を破棄し、血で汚れるのもかまわずセイバーを抱きしめた。

このセイバーはサーヴァントとして召喚された彼女ではない。あくまで彼女の力を写し取ったカードの仮初の姿でしかない。そう、英霊の『現象』として存在しているに過ぎない。

けれど、このカードが干渉を及ぼした英霊が『アルトリア・ペンドラゴン』ならば……聖杯を得る機会があれば馳せ参じる彼女ならば、

『現象』として現れるのであっても全力で応えるだろう。

だからこそ、黒く墮ちたとしても『突き穿つ死翔の槍（ゲイ・ボルグ）』を回避できるほどのスペックを備えていたのだ。コレは正にアルトリアの願う『聖杯を求める現象』なのだ。

「もう、いいんだ。アルトリア」

アーチャーは未だ絶叫を上げるセイバーの耳元で囁く。

「君は間違っていないかった。——もう聖杯を求める必要はないんだ」

そう言つて、彼女のほどけてしまった髪を優しく梳いた。

何度も何度も。ただ、彼女が自分を認められるように。ただ、頑張ってきた自分を受け入れてくれるように。

そんな願いを込めて、彼女を抱きしめる。

壊れたオレだつて、間違っていないかつたと、受け入れることが出来たのだ。彼女にだつてできるはずだ。

腕の中の彼女はただの『現象』かもしれない。だけど、『記録』としてでも本体の君に届くかもしれない。ならば伝える価値はあるだろう？

いつの間にか、あの悲しい声は止んでいた。

セイバーが顔を上げてこちらを見つめる。

道を見失った迷子のような表情だつた。

既に足元は粒子となつて、消滅が近いことを告げている。

「アルトリア……」

抱きしめた身体の存在感が、どんどん失われていくのが分かる。

ますます抱く腕に力を込めたとき、彼女は何か気付いたように目を見開いた。

「……あなたが私の鞘だつたのですね」

意味を成さない音だけを発していた唇が、初めて明確な言葉を紡いだ。

柔らかく清水のような声は、彼方へ追いやってしまった記憶とどこまでも同じで。

再びアーチャーを見上げた彼女の眼は、深く澄んだ碧をしていた。

アーチャーはその瞳に目を奪われる。

彼女の碧に吸い込まれるようだ。いや、その瞳はだんだん近づいて来て……。

唇に軽い感触。

彼女は最後に笑みをたたえて、粒子となり消えていった。

赤い外套の男が、自ら突き刺した黒騎士を抱きしめる。

先ほどの戦っていた厳しい雰囲気とは違い、とても優しく壊れ物を扱うような感じだった。まるでやっと巡り会えた恋人のようにも見えた。

抱かれた黒騎士の様子もおかしい。

全てに絶望したような叫び声は止まり、どこか戸惑った様子で男を見ている。

そして次の瞬間、目を疑うようなことが起きた。

黒のドレスは澄んだ水面のような青に、くすんだ髪は月光のような輝く金に。

これが本来の英霊としての姿だというように変わったのだ。

金と青の少女が男に何事かを告げる。男がとても驚いたのが気配で分かった。

少女の身体が光の粒子となって、融けていく。

最後に少女は固まっている男に口づけてこの世界から姿を消した。

赤い外套の男は静かにそれを見送っていた。

「いっやー、ラブラブですね！ あのお二人！ ルビーちゃんのラブ嗅覚がピンピン反応しますよ！」

「ル、ルビー!? いっからそこに!」

美遊は今までのシリアスな雰囲気をぶち壊すルビーの登場に、ドキドキと先ほどまでとは別の意味で心臓が飛び出しそうになった。「ルビーちゃんはあるの赤い王子様が、イリヤさんを間一髪助けに入ったときからいますよー。頭をなでなでされて顔の緩むイリヤさんもばっちり記録に取りましたからね！ 今からそれを見たイリヤさんの悶絶する姿が楽しみですよ！」

いつもの調子と変わらない様子に脱力する美遊。

あれ？ でもルビーはあるの黒の聖剣の真名解放に、呑み込まれていなかったっけ？

そんな美遊の心の内を読んだかのように、ルビーは胸？を張って答

える。

「ふっふっふ。私が前マスターとはいえ、か弱い女性を簡単に見捨てると思えますか!」

「……前に凜さんたちを見限ってマスター変更していたような」

「というか凜さんレベルが「か弱い」としたら一般の女性は病弱レベルになってしまっているのでは。」

美遊のツツコミはキレイに無視された。

「あの大斬撃は地中に潜り込んで回避したんです。泥だらけは趣味に合いませんけど、緊急事態ということでしょう!」

びしっと羽を伸ばし、無闇にキメポーズをとるルビー。

(……出番が少なかったの、気にしてるのかな?)

「サファイアちゃんはあのお守りをしてもらってますよ。なんせ英霊がまだまだいる危険地帯に可愛い妹をやるわけにはいかなかったんですか。まあ、美遊さんラブなサファイアちゃんの説得に、ちよつと時間がかかっちゃいましたけど」

美遊はルビーの台詞の中で凜とルヴィアの生存を確認し、ほつと息をついた。

「凜さんとルヴィアさんも無事だった。……よかった」

イリヤの豹変やら赤い男の登場やらルビーのボケやらで、二人のことを一時的に忘れていたが、自分を拾ってくれたルヴィアやなんやかんや気にかけてくれた凜が生きていることは喜ばしいことだ。思わず、鼻の奥がツンとなった。

だが、今は喜びに浸っている場合では無い。早急に赤い外套の男への対応を考えなければ。

さっきのルビーの言葉の中で引っかけた単語を思い浮かべる。

(妹。——そう、『妹』だ)

男がイリヤスフィールに対してとった行動は、正に妹にするような仕草だったのだ。

まるで、美遊の兄がよく自分にしてくれていたような……。

美遊は首を振って、浮上しかけた幼い記憶を抑え込む。今は関係のないことだ。

ただ、白髪頭と褐色肌の男が、妙に自分の兄の印象とダブって見え
たことが不思議だった。

「せめてあの男と黒騎士の交わっていた会話が、聞き取れればよかつ
ただけだ」

美遊は無意識につぶやいていた。

赤い外套の男の戦闘能力はすさまじく、白と黒の双剣を自在に操る
様は、英雄クー・フリーンとなったイリヤに比肩するほどだ。

その白と黒の双剣も一度は三対にまで分裂し、騎士王に止めを刺し
てからは、光の粒子となって消えてしまった。あの双剣も何らかの魔
術礼装なのか。

そして最後のあの様子。男はあのアーサー王と思われる英霊とた
だならぬ関係があるに違いない。

「会話ならルビーちゃんがかかりますよ」

「えっ!？」

ルビーのおしゃべりをスルーして思索に耽っていた美遊に、ちゃん
と構つてとルビーは声を上げる。

「何を隠そう、ラブ臭を嗅ぎ付けたら自動で起動しちゃう『24の秘密
機能（シークレットデバイス）』のひとつ、『盗聴モード』はどんなに
距離が離れていても聞き取れる高機能マイクが付いているのです！

こちららもばつちり録音済み！ 今すぐ再生します？」

「……秘密機能って隠すものでは？ ……っていうかラブ臭って」
いろいろルビーにツツコミが追いつかない。

「伝説のアーサー王が実はあーんな可憐な女の子だったとか、それに
止めを刺したうえで抱きしめる男とか、もうラブしかないじゃないで
すか！ それに最後はキッスですよ！ マウス・トゥー・マウス！
萌えるつきやないですよ」

「ならばすぐにでも燃やしてやろうか、カレイドステッキ？」

冷えた低いバリトンの響きが、すぐそばからした。

美遊は冷や水を浴びせられたかのように、ぎよつとして身を固くす
る。いつの間に接近したのか、赤い外套の男が背後に立ち、こちらを
イイ笑顔で見下ろしていた。正確には——ルビーのみを極寒に

生きる鷹のような目で射ぬいていた。全身からは何故かゴゴゴと形容できそうな威圧感を醸し出していて、美遊は眠るイリヤを抱きしめて震えていることしか出来ない。

「きゃー。暴力はんたーい。でも障壁だけはAAクラスの魔術を施されているルビーちゃんを簡単には燃やせませんよー。焦げたりはしますけど!」

「ほう?」

男はさらに目を細め絶対零度の視線を送る。

美遊はマイペースを崩さないルビーにハラハラしつつ、さらに圧力が増す空間でスピスピと熟睡しているイリヤと切実に替わりたいと本気で願った。

マンガで言うのなら、男とルビーの背景には雷がゴロゴロと落ちていくことだろう。

そんな冷たい戦争に終わりを告げたのは——ボコツと地面から這い出した二人の雄叫びだった。いや、この場合は雌叫びか?

「ぶっは! 死ぬかと思っただわ!」

「おのれ、この屈辱は百倍にして返してやりますわ!」

未だ魔法少女姿の凛とルヴィアである。泥にまみれて優雅とは無縁の姿だが、大きな傷は無いようだ。元気に吼え立てているのがその証拠である。

「美遊様! 無事でしたか!」

二人に続いて出てきたのは美遊の相方であるカレイドステッキ・サファイアだ。

「あ、うん。私は大丈夫。でもルビーとあの人が……」

美遊は唯一この場で味方になってくれそうなサファイアに何とか笑みを向ける。ひどくぎこちなくなってしまうが。

ますます混沌と化す場で、突然笑い声上がる。

発生源は赤い外套の男。

男は地面から登場したいいい年した魔法少女たちを見て、毒気を抜かれたように声をあげて笑っていた。先ほどまでの威圧感は影も形もない。

「ほかんとなったのは、周りの女性陣だ。」

「あいつ、何なの？」

凜の質問に答えられそうなのは美遊とルビーしかない。

美遊はルビーが余計なことを言って、先ほどの焼き直しになるのを防ぐべく、率先して口を開いた。

「あの人はイリヤスフィールを危機から救い、更に黒騎士を倒しました。双剣の使い手でかなり強いです」

「あの騎士王を倒した?! 単独で?!」

「油断ならない相手ですわね!」

凜とルヴィアも男の脅威を認識したようで、臨戦態勢に移行する。

赤い外套の男はその様子にやっと笑いを収めて、皮肉気に両手を上げた。

「やれやれ、武器を持たない相手に二人がかりとは情けない。昨今の魔法少女は弱い者いじめをする側なのかね。まったく、淑女としても優雅を掲げる貴族としても、品が無いとはこのことだな」

男の毒舌は、凜とルヴィアの怒りの導火線に火をつけたようだ。こめかみがピクピクと動いている。

美遊はイリヤに対する男の印象も相まってか、全く違う皮肉気な様子に言葉も出ない。

だが、二人の爆弾が爆ぜる前に動いたのは、またもや無視されるのが嫌なルビーだった。

「あらー、凜さんルヴィアさん、まだ魔法少女やってたんですかー。危機は去ったんですから変身は解きますねー。ついでにマスター登録も削除☆しちゃいます!」

ルビーちゃんのマスターはイリヤさんだけですーと、空気をまったく読まないルビーは凜だけでは無くルヴィアの変身まで解いてしまふ。

先に爆発したのは凜だ。

「何やってんのよルビー! 相手は騎士王を倒した相手なのよ! 変

身を解くなんて紙装甲で挑むのと同じじゃない!」

「そんなに魔法少女が恋しいんですか」

「んなわけあるか！ 時と場合を考えろって言ってるの！」

続いてルヴィアもサファイアに向かって声を上げる。

「今すぐ変身させなさい、サファイア！ 真の淑女がどんなものか思い知らせてやりますのよ！」

「いえ、姉さんがプロテクトをかけてしまったので、再登録できません。それに私のマスターは美遊様なので」

「そんなこと言っている場合ではありませんわ！ あの男が攻撃してきたらどうしますの！」

そんなルヴィアの言葉尻を捉えてルビーがドヤ顔？で言う。

「攻撃してこないじゃないですかー。大丈夫ですよ。そんな悪い感じはしませんからー」

「根拠は？」

「ラブ直感です！」

ベシツとルビーが地面にめり込んだ。更にその上からゲシゲシと足で踏みつぶされる。

一通りの暴力の嵐が吹き荒れた後、凜とルヴィアは改めて男と向かいあった。

悔しいことだが、ルビーの言う通り、男が攻撃してくる様子はない。さっきのやり取りの間にも付け入る隙はたくさんあったはずだが、男はただニヤニヤと笑って静観しているだけであった。

「で、あんたの目的は何なのかしら？ イリヤを助けてくれたのには感謝するけど」

凜がまず男に尋ねる。警戒心は解かず、いつでも魔術が起動できるように宝石の準備はしておくが、表向きは平素を装う。怒りはルビーのおかげで多少は収まっていた。

「目的、か。何、私はただの通りすがりの者だがね、この大きな歪みを感知してこれは捨て置けない、と介入したままだ。冬木の地の管理人と言えども、これは手に余るだろうと思っただけ」

男はおどけたように言う。男が言う通りなら、わざわざ厄介ごとこに首を突っ込むお人好しということになるが、この空間にいるということとは、男は魔術師であるはず。自分にメリツトが無ければ関わり合う

はずが無い。

「お節介は結構よ。私たちだけで歪みの原因たるカードの回収はできているわ。部外者はお断りよ」

「魔術協会からの正式な任務を華麗にこなしてこそ、エーデルフェルト家の品格が上がるといふものでしてよ。本来ならば私一人で十分ですわ」

ルヴィアの台詞にまた怒りメーターが上昇する凜だが、ここは男が優先と自分に言いきかす。

「ふむ。ではその小学生二人はどう説明するのかね？ まあ、先ほどのやり取りから、大方の原因はそのカレイドステッキにあるとみて間違いないだろうが」

うぐつ、と息を詰まらせる。まあさっきの様子を一部始終見られているのだ。言い訳しても仕様がなない。

「業腹だけど、その通りよ。そのバカステッキのせいで、不本意だけでその二人にも手伝わってもらっているわ」

「もともとは、私たちに愛想つかされるような行いをした凜さんたちが悪いんですよ。任務のために大師父が貸し与えた私たちを喧嘩ばかりに使って。マスター変更もしたくなるってもんです」

凜の言葉に、ルビーが諸悪の根源では無いことをアピールする。

「だからって、まったく普通の一般人を巻き込むって話よ」

「まったく普通の一般人……？」

「何か？」

「いや、何でもない。それにしても共同任務ということなのだろうか？

なぜ仲良くそろってことに当たれないんだ」

凜とルヴィアが喧嘩もせず任務に集中していれば、イリヤたちを巻き込むことはなかったのに。

男の嘆息に気炎を上げたのはルヴィアだ。

「宝石翁が珍しく弟子をとる気なんですよ！ 条件は今期の学生の中で最も優秀な者。ライバルは早いうちから蹴落とすのが定石ですわ」

「とはいえ、時計塔の一角を半壊に追い込むほどのガンドの撃ち合い

をしたり、私たちのような高位の礼装を使用してまですることでは無いと思います」

ルヴィアの持論に突っ込むはサファイア。

男は今の会話から大体の背景を察したようだ。

「なるほど、この任務は魔術協会を通しての、寶石翁からの仕置きを兼ねた試験のようだな。しかし、英霊が関わる事件に将来有望とはいえず学生二人を送り込むとは……。さて、これを簡単に渡していいものなのか判断に迷ってしまうな」

男が取り出したのは『Saber』と書かれたクラスカード。

おそらく打倒した黒騎士のカードだろう。凜とルヴィアは食い入るように注視する。先日回収した『ライダー』のカードと同じような気配がすることから、本物とみて間違いない。

「さて、このカードに関して分かっていることを話してもらおうか？

英霊の『座』まで干渉をしてくる魔術礼装だ。下手をすれば抑止力が働く。ならばここで破壊してしまった方が世界のためかもしれない」

男にカードに対する未練など一片もなかった。根源を目指す魔術師二人には信じられないことだが、男は本気のようにだ。カードを研究すれば根源へ近づくための道筋が見えるかもしれない。それをあつさり切り捨てる。魔術師にとってあるまじきことだ。

「あなた、本当に魔術師ですか？」

ルヴィアが真偽を確かめるための問いを放つ。

男は自嘲するように答えた。

「私は一言も自身のことを魔術師だとは言っていないのだがね。確かに魔術をしいはするが根源を目指しているわけではない。そもそも私は魔術師として三流もいい所なんだがな」

「その自称三流のあんたが黒騎士を倒したんでしょう？ 対魔力が高いアレをどうやって倒したっていうのよ」

カレイドステッキによって無限の魔力供給を受けていた一流の魔術師である凜やルヴィアの二人がかりでも打倒しきれなかったのだ。双剣の使い手と美遊から聞いたが、下手な剣で騎士王の聖剣と打ち合える筈が無い。

「それは企業秘密だ。それよりこちらの質問に答えてくれないだろうか？ 無限に時間があるわけでは無いのでね」

男はそう言つて話を本筋に戻す。

(さすがに手の内を明かしてくれる訳がないか)

凜は心の中でつぶやくと、しぶしぶカードについて話し始めた。

「そのカードは魔術協会が分析したけど、制作者不明、用途不明で、構造解析もうまくいってないのよ。分かったことはあんたが言つていたみたいに英霊の『座』に干渉して、英霊の持つ宝具を、ステッキを媒介に具現化することができるとのこと」

「宝具を具現化だと……？」

男は怪訝そうに顔を顰める。信じられないのも無理はない。神秘が薄れたこの現代で、宝具のような神秘の塊をホイホイ召喚できるなど、常識外もいい所なのだ。

「約2週間前にこの冬木市に前触れもなくカードは出現したの。異常な魔力の歪みを観測した協会が調査を開始して、対魔力が低かった『アーチャー』と『ランサー』のカードを回収に成功。」

あんたも戦つたなら分かるでしょうけど、カードを通じて英霊の力が『現象』として実体化していたのよ。本来の姿から変質して理性も吹っ飛んだ状態だったけど」

「それにしてもあの騎士王さんの最期はおかしかったですけどね」
「は？」

真面目な解説の途中で口を挟んだのは、男と黒騎士の戦いを観戦していたルビーだ。

「だってこの人に抱きしめられた途端、黒化が解けて言葉まで発したんですよ。そのあとは去り際に——」

ルビーの言葉はぶつ切りに止まった。

一振りの剣がルビーの目の前に突き付けられていたのである。

「それは後回しだ、ルビー」

男がいつの間に出したのか、白い剣を構えていた。剣に込められた神秘はランサーの赤い魔槍に劣るが、十分宝具とよべる代物である。凜とルヴィアは悟った。この男は魔術師としてではなく剣士とし

て、黒い騎士と相対したのだと。相応の剣と剣術の実力を持ち合わせているのであれば、魔術の腕など関係ない。

「他に、この異常な空間について分かっていることは？」

男はルビーに突き付けた剣をおろし、続きを催促した。

凜は警戒を最大級に引き上げて慎重に言葉を紡ぐ。いきなり斬り付けられたら、凜といえども反応することは難しそうだ。

「この世界は無限に連なる合わせ鏡の像の一つ。鏡面界と呼んでいるわ。単なる世界の境界で、もともとは存在しない空間。カードが生み出していると言っても過言ではないわね。カードを回収することに歪みは減り、この空間も狭くなってきているわ」

「カードを回収してしまえば崩落するはずですが……なぜ崩落が始まりませんか？」

凜の説明に続き、ルヴィアが疑問を呈す。

セイバーが倒されてから今まで時間はかなり経ったはずだ。しかし崩落する気配は微塵もない。そんな中、

「ああ、そういうわけか」

男は何故か納得したように頷く。ジロリと睨み付けるが、解説する気はなさそうだ。

「さて、君たちの事情はおおよそ把握した。……その上で言う。とつとと家に帰りましたまえ。カードの回収は私がしておこう。何、理性のとなんだ英霊如き、私だけで十分だ。君たちは大人しくしているがいい」

男の突然の宣言に啞然となる他の面々。

当然のごとく反発したのは任務で来ている凜とルヴィアだ。

「ふざけんじやないわよ！　なんで得体のしれない奴の手なんか借りなきゃいけないわけ?!　こっちはそんなこと一言も頼んでないわ!」

「冗談は程々にしておくことですわ!　このルヴィアゼリツタ・エーデルフェルト、一度請け負った任務を放り出すことは無くってよ!」

そんな様子を、男は鼻で笑って一蹴する。

「任務遂行のためには、幼い子供たちを巻き込むのを辞さないか?　とんだ悪党だな。」

なに、上には君たちが回収したと報告すればいいだろう。私は名声

などに興味は無いからな。好きだけ使うといい」

凜とルヴィアはあまりの言いように、ギリギリと歯を噛みしめる。確かにイリヤや美遊にカード回収させていることはあまり褒められたことでは無い。しかし、完全に人任せにしているわけでは無いのだ。共に鏡面界に降り立ち、指示を出し、隙あらば自身の宝石魔術で仕留める気である。一緒に戦っているのだ。

それに男の言う通りに虚偽の報告をしたところで、それは本当の実力を示したことはない。他人の手柄を横取りして自分の実力だと言い張ることは、魔術師としての誇りが許さない。

そこに今まで黙っていた美遊が進み出て、男の鋼のような冷たい瞳と正対して告げた。

「私は、自分の意志でカードを回収したいと思っています。あなたに何と言われようと、やめることはできません」

大人しくしていることはできないと強い意志を固める。

「——君の名前は？」

男が唐突に尋ねる。

「……美遊」

男は真つ直ぐな瞳で正面から向き合う美遊に、ふつと息をつき、やれやれと肩をすくめて『セイバー』のカードを差し出した。

美遊は目をパチクリさせながら受け取る。

「イリヤスフィールと美遊、君に免じてこのカードは渡していこう。必ずや状況をひっくり返す光となるはずだ」

最後に髪を撫でられて美遊は顔を赤くした。そして思う。何故こんなにも、この人は兄と似ているのだろう、と。

一方で凜とルヴィアは、自分たちと美遊の扱いの差に慥然となる。

「なんなのよ、アイツ。ロリコンなのかしら？」

「ちよつと美遊。簡単に気を許してはいけませんわよ」

ルヴィアは美遊を引き寄せ、男に向かってシツシツと悪い虫を払うように手を振った。

凜はジト目になってロリコン疑惑を男に向けていたが、もう一方の方の疑惑もこの機に晴らさんと、口を開く。

「あんた、あの大橋から狙撃した奴でしょう。なら『アーチャー』のカードを持つているはずよね。それは渡してもらえないのかしら？」

男は眉間にしわを寄せ、目をそらしながら言った。

「……あのカードはしばらく必要なのな。カードの回収が全て済み次第、返却しよう」

「やっぱり！ 怪しいと思ったのよ。なんの見返りもなく手を貸してくれるなんて話がうますぎるわ。さあ、白状しなさい！ 『アーチャー』のカードを使って何を企んでいるのか！ 私たちを体よく追い払ってここで何をする気なのか！ 一切合財、吐いてもらうまで帰さないわよ！」

凜の氣勢に、男は額に手を当ててしばらく天を仰いでいたが、やがて観念したかのように大きくため息をついた。

「……『アーチャー』の他に回収されているのは『ランサー』、『キャスター』、『セイバー』。残るクラスは『ライダー』に『アサシン』、『バーサーカー』か」

おもむろにカードに記されたクラス名をつぶやく。だが、聞き捨てならないのは、未だ回収されずクラス名も分かっていないカードも挙げたことだ。

「あ、『ライダー』はもう先日回収済みですよ。厳つい眼帯をしているくせにすばしっこい相手でしたが、美遊さんが『ゲイ・ボルグ』で心臓を一刺しにしましたから。楽勝でしたねー」

ルビーは男の間違いを、どうでもいい解説と共に指摘する。

「そうか、彼女を仕留めるとは……。いや、それでも危険なことには変わりはない。厄介なクラスが残ってしまったな」

「……ちよつと、なんで『ライダー』が女性体だつて分かるのよ」

そう、ルビーの解説の中には、女性を形容する言葉など入っていなかった。それなのに男は「彼女」と言ったのだ。しかも声音からして知己のようでもある。

男は凜の言葉を見無視して話し続ける。

「私はただ、この地の歪みが正せればそれでいい。そうしたら私は用済みで、ここから疾く去るだけだ。英霊と闘うためには『アーチャー』

のカードが不可欠であつて、それ以外に使うことはしない」

男が嘘をついている感じはしないが、すべてを語っているわけでもない。恐らくこれが男にとつての最低ラインなのだろう。

「君たちはもうこの件から手を引くことは無いのだろうか？」

男は確認するように問いかける。

「ええ、もちろんよ」

「当たり前ですわ！」

「最後まで、やり通します」

凜、ルヴィア、美遊がそれぞれ頷き返す。サファイアは、美遊様についていくだけです！と美遊の肩に乗る。もっともルビーだけは眠ったままのイリヤの上で、イリヤさん次第ですー、とのたまっていたが。

「ならば、忠告しておこう。私の知るものとは些か趣が違うが、『ランサー』がクー・フリーン、『セイバー』がアーサー王。そして私がここにいる、ということは、『なぞり』が起こっている可能性が高い。イレギュラーだった『アサシン』はともかく、『バーサーカー』はおそらくアレが出てくるだろう」

……なぜ男はこんなにも詳しいのだろうか。『なぞり』とは何に對してのものなのか。通りすがりと言っていたが絶対に嘘だ。

男の得体のしれなさに、つい後ずさりしてしまう。

『アサシン』のクラスには『気配遮断』のスキルが付加されている。死角からの攻撃に気を付けることだ。それに接近は許さない方がいいだろう。万が一、アレであつたら首が飛ぶのはこちらの方だ。

『バーサーカー』は狂化することによって能力値を上げるクラスだが…もともと理性が無いならば意味は為さないかもしれない。アレは12通りの必殺の一撃を備えていかなければ反撃虚しく叩き潰されるだけだ」

首が飛ぶだの、叩き潰されるなど物騒な言葉がどんどん出てくる。何より恐ろしいのは、まるで経験したかのように語る男の方だ。英霊はどんな優秀な降霊科の魔術師とはいえ、一生に一度拝めるかどうかも分からない、高位の存在なのだ。なのに、なぜ男は面識があるよう

に語るのだろう。しかも複数の英霊に対して——戦ったことのあるような口振りで。

「あんた……いったい何なの?」

嫌な汗が背筋を滑り落ちる。

未知であったカードの情報を提供してくれるのはありがたいが——わけが分からな過ぎる。もしやこのカードの制作者か、とも思ってしまうが、先ほどまでの会話と矛盾が生じてしまう。それにカードの情報を無闇にさらす意味も無い。

男は凜たちからの畏怖の視線を慣れたように受け止めて、自嘲気味に言う。

「なに、私は偶々この世界に紛れ込んでしまった、ただの掃除屋さ」
それを合図に、今まで何事もなかった鏡面界が崩れ始めた。

地面や空に亀裂が走り、断面から何も無い空間が顔出す。

「サファイア!」

「はい、美遊様!」

美遊はサファイアを握り、すぐに脱出のための魔方陣を形成する。
男も自力で脱出するようで、半径1メートルにも満たない魔方陣が足元で光っていた。

「待って、最後に名前くらい教えなさいよ! 白髪男とも呼ばれたいの!」

凜の要請に、男は今までのしかめっ面のしわを緩め、少しだけ笑った。ただ、そこに少しばかりの寂寥感が混じっていた気がする。

「そうだな——私のことは『贗作者』^{フェイカー}とも呼んでくれ」

次の瞬間、ぐるんつと視界が反転する。

接地^{ジャンプ}して通常世界に戻ったとき、男は影も形も見当たらなかった。

「まったく、得体のしれない相手でしたわね」

ルヴィアがハンカチで冷や汗を拭いながら言う。

「でもあの男——フェイカーだっけ。カードを回収する気なら、すぐに鉢合わせるわね。何せ残ったカードはあと2枚。確率は二分の一ね」

凜も気の抜けたように座り込む。

美遊はただ一人、無言で高すぎる空を見上げていた。

空気を切り裂き唸りをあげて、人を殺せる刃がすぐそばを通過する。

斬り返して袈裟懸けに戻ってくる刃を、左の白剣——莫耶で防ぎ、同時に右の黒剣——干将で敵の首を狙う。

だが相手は強引に莫耶を弾き上げ、干将の斬撃さえ跳ね飛ばし、こちらの身を断たんと剣を振り上げる。

一瞬でも気をそらせば、すぐさま死神が命を刈り取る戦場。

その緊迫の空気を感じながら、衛宮士郎はどこか決闘のリングの外側から観戦しているような、そんな場違いな雰囲気さえ漂わせて、この光景を内側から見ていた。

いつもよりやや高め視点から相手の剣の軌道を見切り、長い手足を駆使して躲し、鍛えられた筋肉で鉄の塊である二刀の夫婦剣を振り回す。

(これは俺の意志でしていることじゃあない)

閃光のような斬撃も、刃が切り裂く風切り音も、鉄錆のような血の匂いも感じているが、身体を動かしているのは士郎ではない。

士郎は熱に浮かされたようにぼんやりとする意識を必死でつなぎとめて、思考する。

(……アーチャーだ。これがあいつの力なんだ)

死を纏う刃に相對して臆せず立ち向かっていく意志も、あの黒騎士と打ち合える剣を創り出す魔術も、相手を観察し瞬時に戦術を組み立てる判断力も、その判断に答えられる肉体も、全てアーチャーのものだ。……俺のものじゃあない。

ブツツと二刀が両の掌から放たれる。続いて投影したのは、もう一組の干将莫耶。

これもすぐ投擲し三対目の干将莫耶で敵に斬りかかる。

これこそアーチャーが編みだした必殺の技。剣の特性を利用したアーチャーにしかできない複数の同一宝具の投影による一撃。

「鶴翼三連」

黒騎士の絶叫が上がる。何かを失ってしまった叫び。希望を断たれた絶望の慟哭だ。

その様子が痛々しすぎて、士郎は敵であるにも関わらず、抱いてやりたくなかった。

10年前のあの日、何もかも失ってしまった士郎を抱きしめた養父のように。

衛宮家に引き取られ、悪夢にうなされていた士郎を優しく抱きしめてくれた養母のように。

——今度は自分が抱きしめてやる番だと。

彼女を貫いた剣の投影が破棄され、赤い外套に包まれた二本の腕が、彼女の背に回される。

それは士郎の意志では無い。士郎の意志は今の身体に反映されない。

だから、これはアーチャーの意志なのだ。

命がけで戦っていた敵を抱くなんて、変なやつだ、と自分を柵に置いて思ってしまう。

しかし、アーチャーが彼女にかけてた言葉で、士郎の思い違いを知らされることになった。

「もう、いいんだ。アルトリア。君は間違っていないかった。——

もう聖杯を求める必要はないんだ」

それは優しさと労りに満ちた言葉。大切な者への万感の想いが詰まった言葉。アーチャーだからこそ、かけることができる言葉。

部外者の俺にはそれがどういう意味か理解はできないが、彼女へ送るに相応しい言葉だったのだろう。

慟哭は止み、彼女は顔を上げた。弱々しく儂い風情の顔は、先ほどの鬼神の如き戦闘者とは思えないほどだ。

急に、腕の中にすっぽり収まってしまった彼女の身体を意識してしまう。アーチャーが梳いた髪感触がまだ手に残っている。

(……これは、本当は俺が感じちゃいけないものだ)

士郎は慌ててその感触を忘れようと、意識の中で手を振り回す。だって、これはアーチャーのものなんだ。

アーチャーが彼女と出会い、何の因果かこの世界でまた巡り会えた。

彼女と交わした剣戟も、アーチャーが自身を鍛え、伸ばし、気の遠くなるような努力の果てに手に入れたもの。

彼女にかけた言葉も、アーチャーの運命の出会いが、紡いだ想いが、奇跡の果てに手にした願いが生んだ宝石みたいなもの。

だから、まったく関係の無い俺が、アーチャーの物語に立ち入りししたらダメなんだ。

だって、こんなもの見せられたら、気まぐしい無粋だし、覗き見てしまった罪悪感が湧くし、何より思ってしまうじゃないか——羨ましいって。

平凡な普通の生活を送っている俺なんかが、一生立つことのできな舞台にアーチャーは立っている。誰もが一度は夢に見る英雄の物語の主人公として、こんな綺麗なお姫様を救うんだ。憧れるだろう？ たぶん、俺が想像もつかないくらい辛いことや苦難があったんだ。でも、それら乗り越えて彼女と再び出会えたことは、本当に羨ましいくらい素敵なことなんだ。

例え、それがたった一夜の邂逅でも、その思い出は人生を変える。自分の道を走り続けるための標として、生涯、胸に抱き続ける宝物となり得るんだ。

彼女に回された赤い腕にいつそう力が入る。

彼女の血がさらに染み込んできて——俺はようやく気付いた。

俺の中で何かが反応していることに。この懐かしい感じは昔——？ あの黄金の光はどこから？

「……あなたが私の鞘だったのですね」

彼女の声が響く。彼女は真っ直ぐにアーチャーを見つめている。

俺のことはたぶん見てない。彼女の湖面のような碧の瞳に、俺は映ってはいない。

当たり前だ。俺は偶々居合わせただけの端役なのだから。

そう、ただ偶然に巻き込まれてしまった普通の高校生に過ぎないんだ。

なのに。

どうして胸が痛いんだろう。彼女に認められたいと、その碧の視界に入りたいと、思ってしまうのは何故だろう。ただの物語へ対する憧れだけなのか。それとも……。

そう思っているうちに、彼女の顔が近づいてくる。

(おっい、ちよつと待て、そのまま来ると——！)
ちゅ。

唇に柔らかい感触。

初めての感覚に絶句する士郎。しかし悲しきことかな、この身は感覚を共有しているだけで、士郎の身体とは言い難い。

(これってファーストキスになるのか?)

悶々とする士郎だが、すぐに何も考えられなくなった。

彼女のキスを基点に繋がったつながりから、岩清水の如く、清冽な魔力が染み込んできたからである。それらは熱に侵された士郎の傷付いた魔術回路へと流れ込み、士郎の中にあつたあるものを起動させた。

黄金の光が視界を染める。それは伝説に名高きアーサー王のそばにあつたもの。彼の騎士王だけを真の主と戴くもの。現代まで残存せしその宝具は十年前にも士郎の命を救い、今再び真なる主の魔力を受け、その真価を見せる。

優しく荘厳なる光の中に、士郎は引き込まれるように意識を融かす。

意識が途切れる最後の一瞬、彼女が微笑みかけてくれた気がした。

(あなたにも感謝を。あなたがいたからこそ私はアーチャーに、シロウにまた出会うことができたのだから)

夢を見た。

少女が王になる夢を。

王として駆け抜けた生涯を。

最後に血に染まった丘で慟哭を上げた騎士王を。

それは断片。こま切れのイメージ。

それでも士郎には分かった。これはあの金の少女の物語だと。

もはや確定された過去の出来事を、ただ傍観しているしかできない。
い。

だが、その中で惹かれたものがある。

黄金の光を放つもの。彼女を王たらしめたもの。

それは黄金の剣であり——アーチャーのあの赤い世界の中心にもあるもの。

それに、自分も手が届くと、思ってしまった。

どんなに無茶なことであっても、手を伸ばせば届くと、知ってしまったから。

アイツは、アーチャーは届いたんだ。彼女の隣に肩を並べられる存在へと。ならば己だって夢物語の世界へ踏み入ることができないなんて、無いはずだ——。

ハッと目を覚ました。穏やかな陽射しの中、伸ばした右手に掴むものは無く。

夢の余韻は手のひらをすり抜けて霧散してしまった。

腕を下して、天井を眺める。見慣れない天井だった。

——つて。

勢いよく身を起こし、辺りを見渡す。白いシーツのベッド。仕切りのカーテン。そして独特の消毒液の匂い。

ここは——俺の通う穂群原学園の保健室だ。

「……なんでや〜」

壁に掛けてある時計を見る。午後の授業も終わり、部活が始まったくらいか。

おかしい。明らかにおかしい。

俺は一体いつの間に学校に来ていたのだろうか？ というかあの変な世界からどうやって戻ったんだ？ ……つて、セラに夜に出歩いたことがバレたら、どんな目に合されるか分かったもんじやないな。というかアイツは一体どうしたんだ？

(アーチャー、いるか?)

恐らく内にいるであろう同居人に問いかけるが返事は無い。

なんとなく存在は感じるから、寝ているのだろうか?

とりあえず、制服を整えて、ベッドの仕切りカーテンを開ける。

当たり前だが養護教諭の折手死亜オルテシア・カレン 華憐先生がいた。

「……起きたの。残念、そのまま永眠してもらってもよかったのに」

「開口一番でその台詞、ひどくないですか」

保健室の先生が言っちゃいけない台詞な気もする。

気を取り直して、どのくらいここで眠っていたのかを聞く。

「1時間くらいかしら? 生徒会長の柳洞一成が、突然倒れたと言っ

てここまで運んで来たらしいわ。瀕死の重病人以外は来なくていい

のに……。ただの疲労だそうよ」

「……そうですか」

若干逃げ腰になりながら、士郎は相槌を打つ。台詞と表情が一致し

過ぎて、どこまでが冗談なのか判断できない。

士郎は一言だけお礼を言つて、さつさと保健室から退出した。あの

先生は士郎が苦手とするタイプであり、あんまり関わりたくない人物

である。すごく美人ではあるけれど。

ひとまず、生徒会室へと足を運ぶ。記憶がない以上、己が何をして

いたか確認しなければ。

今日の朝は部活の当番であつたし、昼には一成から生徒会の備品の

修理を頼まれていたのだ。約束をすっぽかしていたのなら、申し訳な

い。

「一成、いるか?」

士郎の予想通り、生徒会室には会長である柳洞一成が居残つて書類

整理をしていた。

「衛宮か。体調はもう大丈夫か?」

「ああ、問題無いよ。保健室まで運んでくれたんだつてな。ありがと

う」

最初に礼を告げる。人間、礼儀つてものが大事だからな。何かして

もらったら、感謝の言葉を返す。基本中の基本だ。

「なにこれしきの事、日頃から手伝ってもらっていることへの恩返しの一つだ」

「そうか。んで、頼まれていた備品のことなんだけど……」

「備品？ あれはお前が直してくれただろう？ 思っていたよりも随分と早く終わったからな。次はまとめて頼むぞ」

「はっ」

士郎は慌てて目の前に置いてあった件の備品を手に取り、修復箇所を確認した。

破損個所に適切な処置が施され、文句がつけようがないくらい完璧である。見た目も士郎がするより断然、綺麗に仕上がっている。

「なんだ、またやり直しが見つかったか？」

いきなり点検を شدした士郎に首を傾げる一成。

「えっと、やり直しって言うのは……？」

士郎は何のことかわからず聞き返した。

「ん？ 時間が余ったと言って、以前に直したものにも手を付けていたじゃないか」

(なんだと——！)

適当な理由をつけて、そちらもすぐ確認する。どうやら以前いじった際に見落とした部分を処置し、なおかつ粗めだった元々の修復箇所もやり直してあった。

「あの速さでできるなら、明日はこれだけ頼む。何せ古いものが多いんだ。よろしくな、衛宮」

示された先には修復待ちの備品の山が。

(あれ、一日で終わるか……？)

士郎は内心で冷や汗をかきながらも、つい引き受けてしまうのであった。

そのあと部活に参加すれば、後輩たちから

「今日の朝練、先輩すごくかっこよかったです！ ファンになっちゃいました」

とキラキラした目で迫られ、間桐桜からは

「あ、あの、朝はすみませんでした。でも、意外と先輩って大胆だった

んですね」

と顔を赤くしながら言われた。男子部員からの視線がやけに痛かった。

もつとも、部長である美綴からは

「あ、いつもの衛宮だ」

と普通に返されたが。

他にも廊下を歩いていけば、見知らぬ女子生徒から「プリント持ってきてありがとう」やら、顔見知りの整美委員から「草むしりを手伝ってもらって、ありがとう。すごく助かったよ」やら、用務のおじさんから「ドアの立てつけを直したんだって？ やるなーお前さん」と声をかけられまくったが、まったくもって身に覚えが無い。

いや、心当たりはあるのだ。士郎の内にか居ついていて、この体を動かせる可能性のあるやつ——アーチャー。だが、アイツの皮肉な態度と、この親切な行いが結びつかないから、困っているのだ。

また自分の行いではないのに、礼を言われるのは中々に居心地が悪い。何で今になってお礼を言われるんだ？と疑問に思っていると、「ああ、やっと見つけた。お礼を言う間も無くないなくなるんだから。しつかり言わせなさいよね」

遠坂凜が前に立ちふさがった。

ついこの間、帰国子女として戻ってきたこの学校のアイドル的存在で、何故か士郎はもう一人の方と共によく絡まれるのだが……。

その遠坂がすぐ近くまで寄って来るので、少し胸がドキドキしてしまふ。

既に陽は傾き、廊下に他の人影は無い。彼女と士郎の二人つきりである。

この状況はいったいどうしたこと？

「さつきは助けてくれてありがとう。……それと、桜は心配いらないうってどういう意味かしら？」

俺だって知りたい。

何でだったって、こんな綺麗な美少女の笑顔にプレッシャーを感じる

のか。

全身から冷や汗が噴き出す。まさに蛇に睨まれた蛙。

(ていうかアーチャーのやつ、何言ってるんだよ！)

まさか桜に惚れて自分が幸せにするから、心配するなってことか？

いや、無い無い無い無い。絶対ありえない。

「ちよつと衛宮君、ちゃんと聞いてる？」

あたふたするばかりで一向に返事がない士郎に、遠坂がしびれを切らしそうだ。

「いや決して、桜は俺が幸せにするから心配するなって意味じゃあ無いからな！ ただ部活とかうまくやってるからそんなに心配しなくてもいいぞってだけで」

士郎は咄嗟に浮かんだ言葉で必死に弁解する。

「……なんで私が桜のことを心配してるって思ったわけ？」

遠坂がさっきの笑顔が嘘だったように顔を引き締めて尋ねてくる。こっちの方がよっぽどプレッシャーを感じるのはなぜだろう。

そんな遠坂の雰囲気刺激されるものがあつた——それは直前の記憶に残る彼女の姿。そう、髪と同色の猫耳と尻尾を生やし、赤い衣装に身を包んだ魔法少女姿の彼女を思い出してしまったのだ。

「ぶっ！」

思わず吹き出しそうになるのを手で必死に抑える。いま決壊してしまつたら、デッドエンドしか思い浮かばないぞ。

士郎は顔をそらしながら、なんとか言葉をひねり出す。

「部活、とか偶に見に来てただろ？ いつも桜ばかり見てたからさ、可愛がってた後輩のひとりかと思ってたんだ。遠坂は留学していて最近のことは分かんないだろうってことで、桜は心配いらないうって言ったんだ」

「……そういうこと。あー、深読みして損したわ」

遠坂が大きくため息をつく。

同時にいつの間にか張りつめていた空気も弛んだ。もっとも、士郎が吹き出しかけた時点で弛みかけていたが。

「引き止めて悪かったわね。ではまた明日。ごきげんよう」

遠坂が颯爽と制服を翻し、廊下を去っていく。

その姿は優美にして優雅。とても魔法少女のコスプレをしていたとは思えない、まさに深窓のお嬢様というような立ち振る舞いだっただ。

あんな英霊やら魔術やらの不思議空間で、ステッキ片手にバトルしていたのが夢のようだ。

(でもたぶん、素の遠坂ってあっちの方なんだよな)

普段の楚々とした雰囲気よりも生き生きしていたし。学校では厚い猫の皮を被ってたってことか。

でも、まさか魔法使いだったとは。士郎は昨夜の記憶を思い返す。

あの黒騎士との戦いを見る限り、かなり危険なことに首を突っ込んでいるようだ。イリヤも巻き込んで何をしているんだか。

遠坂とルヴィアは魔法少女の恰好で黒騎士との戦いに挑んで、すごい威力の魔法をぶっ放したけど、黒騎士には効かなくて、そして黒の聖剣の真名解放の一撃で……一撃で？

「あれ？」

二人は黒騎士が放った極光に吞まれて、死んだはず……？

でも、遠坂は、さつき普通に、会話をしていた、よな？

つまり、

「……生きてた。遠坂は無事だったんだ。——つてことはルヴィアも生きてるのか……？」

きつとそうだ。遠坂がいつも通りだったのが証拠だ。

あの二人はいつも衝突ばかりしているが、それだけ対等な仲なのだ。だから、どちらか一方がいなくなるようなことがあれば、僅かでも態度に出ると士郎は確信していた。

「——よかった。生きていてくれて、本当によかった……」

視界が滲んだ。瞼が震え、鼻の奥がツンとなる。

こぼれそうになる涙を、手の平で抑える。今が誰もいない放課後でよかった。

……あの時、二人がああ黒の極光に吞み込まれたとき、すごく後悔した。

でも、まだイリヤとあともう一人の女の子がいたから、悲しむ間もなく俺は、もう後悔しないよう、俺にできる最大限の無茶をやらかった。結果的に、アーチャーが表にでて遺憾なく力を発揮し、イリヤを救って黒騎士との再会に繋がったのだから、無茶をしてよかったのだが。

しかし、二人の命はその前に士郎の手から零れてしまっていた。今更思い出したのだって、その事実を認めたくなかったただけかもしれない。

だから、余計に嬉しさがこみ上げた。

士郎が与り知らぬところで、彼女たちは助かっていた。——士郎が零したわけでは無かった。士郎のせいで命を落としてはいなかったのだ。

この溢れる涙が、ただ純粹に彼女たちの生存を祝福しているわけではないと、自覚はしている。自分のトラウマを、背負う罪悪感を増やすことにならなくてよかったという、自分勝手な想いだって含んでいるのは分かっている。

それでも、結果的に二人は生きていたのだ。その事実をもって、それでいいと前向きに思えるのは、こんな己でもいいと肯定してくれる家族がいたからである。

だからこそ。

衛宮士郎は、噛みしめる。遠坂とルヴィアを失わずに済んだ幸運を。こんな自分を好きと言ってくれる家族がいる幸せを。

(……恰好悪いな)

制服の袖で、視界に溜まった水分を吸い取る。

目が赤くなっている気がするが、窓から差し込む赤い夕日をごまかしてくれるだろう。

荷物を取りに教室へ向かう。

なんだかすごく疲れた。泣くなんていつぶりだろう。

バシバシする目をこすりながら、鞆をロッカーから取り出し、持ち帰る参考書などを入れ替える。

こうしていつもの日課をこなしていると、昨夜の非現実的な出来事

が、遠い夢のように感じられてしまう。しよせん、衛宮士郎が生きているのはこの普通の日常なのだ。

だが、この日常もアーチャーのせいで引つ掻き回されてしまったが。

さつき遠坂の言っていた言葉で、何故次々とお礼を言われる訳が分かった。

(アーチャーめ、他人の手助けをしておいて、感謝の言葉を受け取らなかったな。受け取る前にいなくなるとは。礼儀としてなつとらんで。まったく、どういう人付き合いをしてきたんだ。お前のせいで俺は居心地悪い気分になったんだからな、責任取りやがれ)

心の中で悪態をついていると、背後から近づくと人影が。

「しろー！ー！ー！ いつまで学校に残ってるの！」

「ふ、藤ねえ!」

いきなり声をかけられて心底びっくりした士郎は、思わず最近では滅多に口にする事の無かった呼び方が出てしまった。

声の正体は冬木の虎こと、初等科教員の藤村大河だ。昔は家も近く、よく遊んでもらったものである。

「あら本日2回目ね。ダメじゃない、学校内では藤村先生でしょ」

「ん？ 2回目？」

まさか、アーチャーも？ なんでアイツがこの呼び方知ってたんだ？

「ほーら、早く帰ってあげなさいね。イリヤちゃん、今日は熱出して学校を休んでたでしょ」

「え？」

身体が硬直する。

イリヤが熱？ 学校を休んだだと？

脳裏に黒騎士と戦っていた赤い槍を振り回すイリヤの姿がよぎった。

まさか、アレのせいになんかの後遺症がでたとか？

「あら、知らなかったの？ おかしいわね、家の人からの連絡だったんだけど」

士郎は居ても立ってもいられなくなり、すぐさま駐輪場の方へ駆け

出した。

「サンキューー！ 藤ねえ！ また明日！」

「こら、藤村先生だつて言ってるでしょ！ そして廊下は走るなー！」
自転車を最大の速度で漕ぎ、家に帰宅する。

「ただいまー！」

ガチャッと勢いよく玄関ドアを開けて中へ入る。

早くイリヤの様子を確認したいと焦る中、視界に飛び込んで来たのは、この家に不似合いな白いかちつとしたメイド服。

「む、帰りましたか。不本意ですが、お帰りなさいませ。シロウ様」

帰宅した士郎に正式な挨拶をするのは、昔のメイド服を着こなしたセラ。

「うお、セラが懐かしい格好してる！ ……っていうか俺の帰宅は不本意なのか」

士郎のツツコミは拾われることは無かった。何故なら、セラは腰に手を当て、何故かやる気に満ちた気迫でまくしたてて来たからだ。

「今まで自由にさせてきましたが、シロウ様は当家の長男！ これからは毎晩それに相応しい教育を受けてもらいます！」

「なんでさー！」

今まで普通に家族の一員としてやってきたのに、何がセラのメイド魂に火をつけたのか。

士郎はセラのいきなり変わり身に目を白黒させつつ、急いで帰ってきた目的を達成せんと、セラを躲して居間の扉をくぐる。

ちようど、階段の陰にピンクのパジャマがそろそろと上っていくのが見えた。

「イリヤ！ 無事か！」

すぐ階段の元へたどり着き、大事な妹を視界に収める。

見たところ怪我もなく、顔色もいたって正常。元気そうだ。

血相を変えて駆けつけた士郎に、目を丸くしたのはイリヤの方だ。

「無事かって、大げさな。今日は一日中寝てたから、もう全然元気だよ。お兄ちゃん」

「そっか、それならいいんだけどな」

安堵のため息をもらし、取り繕うように、制服の乱れを直す。

「お兄ちゃん、どうかしたの?」

階段を下りて近づいてきた妹のプラチナ色の頭をじっと見やる。

(アーチャーのやつ、昨日はイリヤの髪も撫でてたんだよな)

思い返すは昨夜の記憶。颯爽とイリヤの危機に駆けつけて、ヒー

ローみたいに救い出したアーチャー。

そこまではいいんだが、問題はその後。

よく頑張ったな、とイリヤの頭をわしゃつと一撫で。

……イリヤは俺の妹なのに、なに人の特権を奪ってるんだよ。

面白くないので、士郎はイリヤを抱き寄せて、頭をわしゃわしゃと撫でまわした。

(うん、上書き完了!)

いきなりのスキンシップに呆然とするイリヤに対し、ホクホク顔の士郎。

しかし、じろーつとこちらを見つめていたセラとぼっちり目が合っ
てしまい、すぐに離脱の体勢を整えることになった。

「待ちなさいシロウ! 今晚はみっちり仕込みますからね!」

「勘弁してくれ!」

ドタドタと自分の部屋に逃げ帰り、鍵を掛けたところでやつと、士郎はやれやれと息を吐きだす。ドアからガンガン響く音はこの際、無視だ。

(なんだか濃い一日だったな……)

カードという非日常のものを拾ってから、一日の内になんと多くの出来事があったか。

しかし、まだまだトラブルに巻き込まれそうな予感が止まない士郎であった。

おまけ

「今日のこのお浸しとか煮物とか、すごく美味しいな」

「何を言っているんですか。両方、今日の朝に士郎が作った残りですよ」

(アーチャー！　ここでもか！)

(……さて、どうしたものか)

アーチャーは鏡に映った己の姿を見て、立ち尽くしてしまった。早朝の薄暗い光の中、額に手を当て、反転した同じポーズをとるのは、赤毛に黄褐色の瞳の平均的な日本人の肌色をした高校生男子だ。言うまでもなく、この世界の衛宮士郎である。

「なんびゃ」

思わずいつもの口癖が漏れてしまうのも仕方がないことだろう。

カードによる転身は解けていたので、てつきりまた衛宮士郎の意識が表に出るか、意識のないまま寝ているしかないと思っていたのだが……。

昨夜は鏡面界からこちらへ戻ったあと、その場をすぐに離れ、できる限りの速さでこの家を目指した。

この体はこの世界の衛宮士郎のものであり、カードによる転身がいつまでも続くか分からない状況にあつたからである。魔力切れで転身が解けてしまったら、一体だれが小僧の身体を家まで送り届けるだろうか。小僧の意識は、セイバーの魔力によって起動した『全て遠き理想郷(アヴァロン)』の癒しの繭の中であり、ズタボロになった魔術回路の修復には時間がかかるだろう。

アーチャーとしたら別に道端に士郎の身体が転がっても構わないが、さすがに小僧の家族に迷惑をかけることは好ましくもなく。

また、イリヤたちに鉢合わせる危険性を考え、イリヤたちよりも早く到着する必要があつた。

この家まで来た頃には魔力切れもいいところで、半ばこの体の帰巢本能に従って、この部屋までたどり着いたようなものだ。

ベッドに倒れこみ、泥に埋もれるように意識を手放した。

目を覚ましたのは、数時間しか経っていない朝の陽が顔をのぞかせたところ。

『全て遠き理想郷(アヴァロン)』の恩恵が流れ込んだのか、身体の損傷は綺麗に治っており、体調も整っている。

問題なのは、なぜ異物であるアーチャーの意識が表層に現れ、身体
の支配権を有しているかだ。元凶であるカードをジロリと睨むが、う
んともすんとも言わずに沈黙を返すのみである。

とりあえず、この問題は柵にあげてアーチャーはこれからどうする
かを考えた。

アーチャーの目的は目下のところ、危険なクラスカードを回収し、
冬木から歪みを取り除くことである。長引けばあの歪みは冬木の霊
脈に悪影響を及ぼしかねない。更に、クラスカードによって実体化し
た英霊の力を目当てに、ろくでもない魔術師がこの地へ足を運ぶ恐れ
もある。

また、遠坂凜とルヴィアゼリッタ・エーデルフェルトが魔術協会か
ら回収の任を受けており、何故かイリヤも巻き込まれている以上、彼
女たちが英霊たちと相対することは避けたい。

よって早急に行動を移すことが最善ののだが……。

ちらりと部屋のカレンダーを見る。

今日は平日であり当然、学校の授業がある。

更に今日のメモ欄には「部活、朝、鍵当番」やら「昼休み、生徒会
の備品修理」などの書き込みがある。

己の身体を鑑みるに、魔術回路で使えそうなものは二、三本しか無
く、魔力の量も十分回復したとは言えない。カードによる歪みも、こ
の街の人々が活動を始めたせいも、感知が難しくなっている。

このまま街を徘徊したとて、上がる成果はたかが知れているだろ
う。

また、この世界の衛宮士郎の日常を壊すことに抵抗があった。

アーチャーはこの世界に呼ばれただけの異邦人であり、異物なの
だ。例え平行世界の己であっても、己の二の舞になりそうにもない衛
宮士郎に、これ以上の負担をかけるのは気が咎めた。何より、コイツ
の周囲にはコイツの身を案じる家族がいて、コイツがこなすべき用事
や仕事がある。

昼間はできる限り、大人しくするべき、とアーチャーは結論を出し
た。

(では、手始めに朝食でもごちそうするか)

軽く目を通させてもらったスケジュール帳やメモによると、切嗣や母親のアイリスフィールは仕事で海外に行っており、この家にはイリヤと衛宮士郎、それにセラとリズムというハウスメイドが暮らしているらしい。

今後、多少なり迷惑が掛かってしまうかもしれないので、今のうちに礼は尽しておこうと、アーチャーは思ったのだ。

トントントンと、リズムよく長ネギを刻む。

既に豆腐まで入れた味噌汁は温まっており、後は香り付けに長ネギを盛る直前で載せるだけでいい。

大根と豚肉の煮物も程よく味が染み込み、お浸しには特製のたれがかかっている。

アジの開きもよい感じで焼け、大根おろしを添えれば完璧だ。

アーチャーは一人台所で満足げに頷く。

そこに、二階から降りてくる足音が。

「なにやらしい匂いがしますが……ってシロウ！ 今日の食事当番は私のはずでしたよね！」

まくしたてるはこの家のハウスメイドのセラ。

「なぜか目が冴えてな。いつも世話になっているし、偶にはいいだろう？」

アーチャーは気色ばむセラに向かって言う。おっと、少し衛宮士郎らしくなかったか。

「む、いい匂い。また腕を上げた？」

もう一人のハウスメイドのリズが顔を出す。残るはイリヤのみだが……。

「二人は顔を洗ったりだとか、身支度をしてくれ。俺はイリヤを起こしにいくから」

アーチャーは衛宮士郎の口調を意識して二人に声をかけ、イリヤを起こすべく二階へ上がった。

残ったメイドの一人は不服の文字を顔に貼り付け、もう一人は美味

しいご飯への期待を胸に、行動を開始する。

アーチャーはイリヤの部屋の前に来ると、声を上げた。

「イリヤ、起きてるか？」

ドアを叩き、耳を澄ます。返事は聞こえず、身じろぎする気配もない。やはり、昨夜の戦いが響いているのか。

カチャツと扉を開け、中に入る。

イリヤの部屋は小学生らしい物で溢れていた。マンガや雑誌、アニメのDVDに、女の子らしく可愛い置物やぬいぐるみもある。

アーチャーはそれらを見て、イリヤが極々普通の生活を送っているのだと、実感する。

このような世界線があることを単純に喜ばしく思う。己の摩耗した記憶の欠片や『記録』には、イリヤは常に魔術世界の住人として生きてきたものしかない。

聖杯戦争の『小聖杯』として調整され、人間とホムンクルスの間に生まれ落ちたイリヤスフィール・フォン・アインツベルン。『願望器』としての機能を持ち、膨大な魔力を受け止める器である彼女は、人並みの寿命も持たず、その大半はただ聖杯戦争で勝ち抜くための準備に費やされた。そして迎えた第五次聖杯戦争で、彼女は――。

アーチャーはそこで思考を止めた。

既に起きてしまったことを思い返しても、仕方がない。

今はただ、目の前のイリヤの幸せを壊さないようにするのが、アーチャーにできる最善のことである。

アーチャーはベッドに眠るイリヤの様子を窺った。きちんとパジャマで寝ているが、昨日の状況では誰が着替えさせたのだろうか？あの三人の内誰かがこの部屋に侵入したのなら、気付かなかったアーチャーも迂闊であったが。

よく見ると顔が赤い。額に手を置いて測ってみると、熱が出ているようだ。

「解析、開始（トレース・オン）」

小声でつぶやき、念のため解析をかける。

セイバーから救った直後にもかけたせいかわ、前よりも深く読み取れ

る。

その結果、

(ああ、このイリヤも聖杯なのか)

アーチャーは軽い失望と共に手をどけた。

そう、この世界のイリヤも『小聖杯』としての機能と容量を備えていたのだ。

幸いなことに日常生活に支障が出ないようにと封印措置がかけられていたが、昨夜の様子を見る限り、その封印が一時的でも解けてしまった可能性が高い。この発熱はその際に膨大な魔力を開放した反動だろう。

魔術師にとって、願望器である聖杯は、十分にそえられる獲物である。イリヤがそうであると勘付かれれば、この日常が脆くも儂く崩れ去るのは確実だ。

だが、恐らく封印を施したであろうアイリスフィールと切嗣がそれを許すはずもない。この家に魔術的処置が一切敷かれていないのも、魔術師から目を眩ます切嗣の策の一手なのだろう。

朝食の準備の前に軽くパソコンで調べたが、この世界では第四次聖杯戦争は行われていないらしい。10年前に起きた事件は一つだけだ。

衛宮士郎が聖杯戦争に巻き込まれるのは、もはや世界に組み込まれた運命の一つなのかもしれない。

しかし、この世界では切嗣は生きている。よって「正義の味方になる」という呪いのような願いは、この衛宮士郎は持っていないだろう。

(あの月夜の爺さんとの別離は、オレだけが抱いていればいい)

アーチャーは薄く笑って、イリヤの部屋を退出した。

本来なら、魔術関係はアイリスフィールと切嗣に任せておけば問題は無い。

だがなんの因果か、イリヤはカレイドステッキ・ルビーと遠坂凜によって、魔術世界に足を踏み入れてしまった。

しかも相對するのは、英霊という並の魔術師では到底かなわない相手。更にクラスカードという名の魔術礼装は、聖杯戦争と明らかに関

係がありそうである。

唯一の救いは、封印が解けた状態のイリヤを、凜やルヴィア、カレイドステッキたちが目撃していないことだろうか。ただ巻き込まれた一般人という認識であれば、クラスカードを回収し終えた暁には、イリヤは何事もなく普通の日常に戻るだろう。

そのためにはもう一人の小学生——美遊に口止めをしなければならぬ。

アーチャーが見る限り、彼女は善良で優しいまっすぐな心の持ち主だ。どこぞの誰かのように捻じれひん曲がっているわけでは無い。

多少、真面目で胸の内に溜め込む傾向がありそうだが、それはそれで都合だ。そういった相手は口が固い。さらに彼女はイリヤのことを大切に思ってくれている。事情を話せば、十分秘密を守ってくれるだろう。

ただ、気になるのは、頑ななまでに自らクラスカードを回収したがつていることか。

小学生にありがちな、見栄や矜持のためではない。そのためであったら、セイバーに刃を向けられた時点でとっくに心を折られている。あくまで彼女自身の目的があつて、クラスカードを回収しているのだ。

また、昨夜はイリヤが『英霊化』したことについて、凜やルヴィアに告げることは無かった。凜がクラスカードについて説明しているときも、口をはさむこと無く、沈黙するのみであった。

恐らく彼女は、クラスカードが『宝具を具現化』だけでなく『英霊になる』機能を有していることを知っていたのではないか？ そして『英霊化』について凜やルヴィアに知られたくはないらしい——ならば、イリヤのこともすぐには話すまい。

私も『英霊化』について黙しているのであれば、取引条件は対等だ。次に会うときには隙をみて二人で話すとしよう。

それにしても、美遊は何者なのだろうか？

私の摩耗した記憶にも膨大な『記録』にも引つかかることの無い少女。ここ冬木の地では魔術世界のつながりは極めて狭く、ほとんど全

てが聖杯戦争の関係者で占められていると言つてもよい。

もしかしたら、彼女も聖杯戦争と何か関係が――？

そこでアーチャーは首を振った。

私が干渉するのはクラスカードの回収のみだ。あまり深く首を突っ込んでしまえば、すぐに退散することも叶わなくなる。

本来、私はこの世界にはいけない存在なのだ。

居間に下りれば、身支度をしたセラがアーチャーの作った料理を盛り付けていた。

「ああ、盛り付けなら俺がするのに」

「いいえ、シロウだけに任せてしまつてはメイドの立つ瀬がありません！」

セラは若干ぷりぷりしながら言い、反論は許さない構えだ。

しかし、アーチャーにも言えることはある。

「リズはもう机で食べるだけの体勢になっているけどな」

「もう！ あなたは！ 自分の本分を忘れているんじゃないやありません！？」

セラの菜箸を握る手からギシギシと音が鳴る。……調理器具は壊すなよ。

リズはそんな様子にお構いなしに、アーチャーの方にも席に着けと促してくる。

「で、イリヤは？ 下りてくる感じがしないけど」

「少し熱があるみたいだ。今は良く寝てるから起こさずに来たけど、後で様子を見に行つてくれないか」

「ん。了解」

イリヤの不調の報をリズは簡単に受け取る。

過剰に反応したのはセラだ。

「えっ、イリヤさんが熱！ 一大事じゃないですか！ あなたも軽く流すんじゃないやしません！」

「ん。シロウがそんなに慌ててないし。大丈夫でしょ？ 寝てれば治るんじゃない？」

「……基準はオレか。まあ、そんな高熱でもないし、うなされている感

じでも無かったからな。慌てるほどでもないさ」

セラは数秒、口をパクパクさせていたが、大きく息を吐いた後、盛り付けを終わらせて皿を机へ運んできた。

「分かりました。後で私がちゃんと診ておくことにします。今はシロウの作ってくれた食事を頂くことにしましょう」

そして三人そろって手を合わせ、食事を始める。

ちなみに本気を出したアーチャーの料理に、メイド二人が言葉も忘れて夢中になったのは言うまでもない。

「うむ、美味であった」

「うぐぐ……いつの間にこんなに料理が上手くなったのですか」

満足げなりズと悔しげに顔を俯かせるセラを尻目に、アーチャーはすまし顔で片付けを開始する。

もつとも、唇の端はわずかに上がってしまったていたが。

セラがイリヤの様子を見に二階に上がっている間に、手早く台所を片付け、家を出る。

挨拶もせず出てきたのは、そうでもしないとまたセラからの小言攻撃を喰らいかねないからだ。

ちなみにリズはあっさりしたもので、歯ブラシを片手に、もう一方の手をひらひらと返して見送ってくれた。……歯磨きはやはり洗面所でやるべきだと思ふぞ。

アーチャーは快晴の空の下、学校への道を心無しか早歩きで進む。

道順は既に地図で確認しており、迷うこともない——のだが、通路の風景をアーチャーは『知って』いるような気がする。摩耗した生前の記憶からくる知識でもない。そもそも、家も場所も違う為、生前の通学路ではないのだが。

(なんだ？ これは衛宮士郎の『知識』か?)

学校に到着してからも、弓道部専用となっている弓道場の鍵の場所は当たり前のように浮かび上がり、特に苦労もなく、弓道場を開けることができた。

(小僧の『知識』が私のものと混じってきているのか？ だとしたら、私の『知識』も小僧に読み取られる可能性があるか……)

アーチャーの知識など、知らない方がよいものばかりだ。

そう、血の匂いの消し方も、効率よく人体を破壊できるやり方も、戦場で銃弾が飛び交う中を走破する方法も、この衛宮士郎には必要ない。

（英霊である私が、同一人物とは言え一介の人間の中にいる弊害かもしれないな）

低位とはいえ、アーチャーも英霊に至った存在であり、高次の存在だ。元の魂を圧迫し、癒着するように浸食しているかもしれない。

（やはり、私は早めに出ていくべきだ）

並べられた弓を手に取り、しみじみとアーチャーは思った。

人気がない弓道場の中、更衣室で弓道着に着替えたアーチャーは、無意識のうちに弓の具合を確かめる。

（少し手入れが必要か。この際、掃除も含めて点検もしてしまうか）

誰も来ていないことをいいことに、並べられた弓を順々に手に取って様子を確かめる。気になるものは、鞆の中にあつた道具で処置していった。

「おはようございます。……って、先輩!? 何をやってるんですか!」
朝の静寂の空気を破り、入ってきたのは弓道部の後輩、間桐桜である。

「おはよう、桜。何って弓の手入れだけだ」

「弓の手入れは後輩である私たちがやるからいいんです! 先輩にやってもらってしまつたら、すぐく申し訳ないです!」

そういうものか? と疑問に思いつつ、アーチャーは弓を棚に戻す。ちやうど今ので最後だった。

アーチャーは予め用意しておいた言い訳を口にする。

「早めに学校に来たからさ、偶には弓の具合を見てやるのもいいかなつて」

「そう言つて先輩は毎回、私たちの仕事をとっちゃうじゃないですか! 先輩はもっと後ろでどーんと構えているだけでいいんです!」

やはりここの衛宮士郎もこういう性分なのか。

アーチャーは嘆息しながら、尚も近づいて言い寄る桜に注意を発し

ようとする。桜はこちらを真つ直ぐに見つめて来るせいか、足元の整備道具は目に入っていないようなのだ。

「桜、足元に……」

「きやつ」

案の定、細かい道具に足を取られ体勢を崩す桜。

アーチャーは素早く彼女の倒れる方向に、身を滑らせる。

板張りの床とはいえ、下手に倒れたら打ち身や手首の捻挫もあり得るのだ。よって、より安全に支えらるとなると——腕の中にすっぽりと収めてしまうしかない。

「大丈夫か？　桜」

アーチャーは桜を抱きながら尋ねる。

桜は顔を真つ赤にしながらコクコクと頷く。

恐らく男子がこうまで密着していることなど慣れていないのだろう、身体が緊張しているのが分かる。早く離れようと思うアーチャーだが……思い直して更に力を込めた。

(解析、開始 (トレース・オン))

アーチャーの持つ様々な『記録』の中には、間桐桜が黒い聖杯となつて、冬木の街を飲み込み、世界を滅ぼしかけたものも存在している。原因は間桐臓硯によって体内に聖杯の欠片を埋め込まれていたせいだ。更に彼女は間桐家の蟲によって、虐待まがいの魔術鍛錬を強要されていた。

目の前の彼女が『間桐』を名乗っている以上、第四次聖杯戦争が起こっていないにしても、その可能性が無いとは言い切れない。

意図したわけでは無いが、接触している今がチャンスなのだ。

「えええつとととと——、せ、せせせ先輩!」

桜の混乱した声が聞こえるが、あえて無視し、解析に集中する。

使える魔術回路と魔力が少ないせいで低出力だが、それはそれで相手に気付かれにくい。

まだ軽く肉体面を走査しただけだが、体の中に蟲がいる様子はなく、心臓にも異物などがある感触もない。

更に深くまで探ろうと霊質——魂や魔術回路まで手を出した途

端、ピリつと流れるものがあつた。それは雷が落ちる予兆にも似て――アーチャーは瞬時に桜から意識を引き上げ、体を離した。

「あ、あの？ 先輩？」

桜が戸惑うような声を上げる。

アーチャーは乱れそうになる呼吸を抑えつつ、桜に尋ねた。

「桜、胸元に何かつけてないか？」

「えっ、ああこれですか？」

桜が服の下から取り出したのは、銀のメダルがついたペンダントだ。

「これは小さい頃に、先輩のお母さんのアイリさんからもらったんですよ。お守りにって」

「……アイリさんが？」

さすがに間桐家とアインツベルン家の間に交流があるとは予想もしていなかった。

銀のメダルに施された細かい装飾からアーチャーが読み取ったその効果は――魔力の隠蔽と、魔術的なものからの防御と排除だ。

アーチャーが退かずに、更に解析を続けていれば、その礼装によって多大なダメージを受けていただろう。

「あんまり人目に晒しちやいけないって言われましたけど、先輩には特別ですよ」

桜の小さないたずらを隠すような笑顔には、今のアーチャーの行動を勘付いた様子は見受けられない。

「……そうか。ありがとな。見せてくれて」

アーチャーは礼を言つて、桜が躓く原因となった道具類を片づけ始めた。

「でもどうしたんですか？ いきなり胸元のことなんか聞いたりして。もしかして……」

「いや、何か固いものが当たるなっと思ったただけだ。他意は無いぞ」「え、他意はあつてもよかつたのに……」

桜の最後のつぶやきは聞こえなかつた振りをした。

わざわざ地雷を踏む必要もあるまい。

「あつ、アイリさんと言えば。先輩、今度アイリさんと切嗣さんがいつ帰ってくるか分かります?」

桜の唐突な質問に、アーチャーは衛宮士郎のスケジュール帳を思い返す。

「いや、帰国の時期については分からないんだ。すぐには帰って来ないと思うけど。……どうかしたか?」

「昨日イギリスから帰ってきた雁夜おじさんが、二人に連絡を取りたいと言っていて。でも先輩の家には立ち入り禁止されてるからどうしよう、って」

「雁夜おじさん……?」

誰だそれは。アーチャーは思わず眉をよせてしまった。

「あれ、先輩は忘れちゃったんですか? 昔よく公園で一緒に遊んでくれた人ですよ」

ますます顔を顰めてしまうアーチャーだが、そこで脳裏に浮かび上がったのは恐らく衛宮士郎のものであろう『知識』。

『雁夜おじさん。若いけど髪が真っ白で顔がちよつと歪で怖いけど、話してみると優しい人。慎二の父親・間桐鶴野の弟さん。ルポライターを職業としていて、海外を飛び回っている』

「ああ、あの人か。髪が真っ白な」

「そうですよ。やつと思いましたが?」

思い出すも何も。アーチャーは直接会ったこともないが。

『知識』からくる人物像から判断するに、雁夜という人物は魔術師なのだろう。白い髪や引き攣ったままの顔面は魔術的負荷の後遺症に違いない。

またアイリスフィールや切嗣の知り合いで、衛宮家に入入り禁止となると、聖杯戦争の関係者の可能性が高い。間桐家にいるのは、第四次聖杯戦争が起こらなかつた影響なのか。

「あれ? 間桐のお爺さんってどうしてるんだっけ?」

アーチャーは一番重要な質問をした。

間桐家を裏で取り仕切っていた諸悪の根源、間桐臓硯。その正体は冬木の聖杯戦争を創った当事者の一人、マキリ・ゾオルケンだ。およ

そ五百年の時を、人の命を啜り、身を蟲に置き換え生き長らえた間桐家の初代当主である。不老不死の妄執に取りつかれ、聖杯を最も貪欲に追い求めていたのだが……。

桜の中に蟲の姿が無かったとはいえ、髪や瞳は間桐の色に染まっている。本来の遠坂の色を上塗りされるようなことがあったはずだ。

「お爺さまは十年前に亡くなりました。詳しいことは知りません」

感情の籠らない声で言う桜。表情は俯いて伺うことはできない。

「そっか。ごめんな、悪いこと聞いた」

アーチャーは努めて軽く流すように、この話題を終わらせた。

やはり桜の中で臓硯の影は大きいらしい。身体の中に蟲はいなくとも、幼少期に刻まれた傷は深いか。

アーチャーは桜の肩を抱くように手をかけ、この重い空気を切り替えるように言った。

「雁夜おじさんのことは、俺からじいさんやアイリさんに言ってみるよ。さ、そろそろ皆も来るころだ。桜も弓道着に着替えたりしないとな」

ぽんぽんつと軽く叩いて、更衣室へと促す。

桜はしばらく俯いていたが……——

バツと急に顔を上げ、宣言するように拳を突き出した。

「そうですね！ さあ、今日も張り切って、弓を握りましょう！ アレのことは矢に括り付けて飛ばしちゃいましょう！ 先輩、雁夜おじさんの言ってたこと、よろしくお願いしますね！」

ずんずんと大股で更衣室の扉をくぐっていく桜。

アーチャーはあまりの変わりように呆然と見送ることしか出来なかった。

（あの様子なら、幼少期のトラウマを早々に乗り越えていくのだろうな）

どうやら彼女は、アーチャーが知る間桐桜とはだいぶ違うようだ。それも、雁夜おじさんの存在と十年も前に臓硯がいなくなった影響か。

（……………これなら心配はいらんな）

この世界の間桐桜は、本当の意味で幸せをつかんでいるようだ。
その事実には、アーチャーは安堵の笑みをこぼした。

【11】

キーンコーン。

授業開始を知らせる予鈴が、廊下に鳴り響く。

急ぎ足で廊下を進んでいたアーチャーは、その鐘が鳴り終わる前になんとか教室へ滑り込んだ。

(やれやれ、どうにか間に合ったか)

席に着くと同時に、担当教諭が入室してくる。

鞆から教科書やノートを準備しつつ、アーチャーはこうもギリギリになってしまった原因を反芻してみた。

(……やはり、美綴綾子の一言が原因だろうか)

朝の部活動中、アーチャーは桜の助言に従って、後ろから大人しく見ていることに徹していた。もちろん後輩に指摘を飛ばしたりもしたが、射を行うことは考えていなかった。

しかし、部活動の終了の時間が迫ってきた頃になって、現弓道部長の美綴綾子がアーチャーに向かって、射を見せてくれと頼んできたのだ。……いや、あれは頼んだのではなく脅迫だったか。渋るアーチャーに対して、見せなければ朝の桜とのやり取りを学校中に言いふらすとイイ笑顔で宣告してきたのだ。

(いったい、いつから見ていたのやら)

アーチャーは美綴の気配に気づけなかった己を恨んだが、それ以上に美綴の真剣な眼差しを前に、断る理由を失くした。

「いつもと違う、あんたの射が見たいんだ」

アーチャーは仕方なしに一射だけ弓を引いた。

己にとっては戦闘の一戦法として弓術を用いてきたのだが、この時ばかりは、弓「術」ではなく「弓道」としてこの射に努めた。敵を討つためでは無く、在りし日の初めて弓を引いた頃と同じく、作法に則って精神の一点を引き絞り、的に当てることだけをイメージし、弦を放した。

矢はアーチャーの思い描いた軌跡を寸分違わずになぞって、的の中央の一点を貫いた。

ただ無心に「弓道」として射を行うことの手ごたえに、アーチャーは淡く感慨と郷愁を覚えてしまったが、大変だったのはその後だ。

片付けの最中だったにも関わらず、いつの間にかシンツと静まり返ってしまった弓道場に拳がった拍手と歓声。後輩たちから詰め寄せられ、同級生から肩や背中を叩かれる中、なんとか抜け出し制服に着替えられたのは、授業開始時間のギリギリになってからだ。

(まさか彼女に勘付かれるとは。さすが凜と対等に付き合うだけの人物だ)

アーチャーとて、衛宮士郎のフリをすることに手を抜いたつもりは無い。おまけに勝手に衛宮士郎の『知識』が浮かび上がるのだ。下手に誤魔化すこともなく、桜を含め他の弓道部員とは上手く接することができた。

その中で美綴綾子だけはアーチャーに気付いた。確証は無くとも、いつもの衛宮士郎ではないと判断したのだ。

僅かな違和感も見逃さない観察眼と、その結果を気のせいと流すことなく掴む心の在り様。それらをもつてすれば将来は一門の人物になるに違いない。

一限目の授業が終わり、次の授業への移動のため、廊下へと出る。

高校の授業はアーチャーからしてみれば、既知の事柄をなぞるようなものであったが、ノートは律儀に取っておいた。教師の口頭での説明に加え、アーチャーの見解も添えてある。

これは別に衛宮士郎のためではない。後で受講できなかつた授業についての文句を封じるためだ。

(あれだけ書けば、小学生でも理解できよう)

アーチャーは内心で頷き、足早に歩を進める。

階下へ向かう途中、前方に豊かな黒髪をリボンで二つに結わえた女子生徒が見えた。視線は手元に集中しており、こちらに気付いた様子はない。

アーチャーは軽く挨拶はしておくかと思ひ、声をかけるタイミングを見計らって近づいた。しかし、彼女の手の隙間からキラリと光を反

を聞いたたら、学園のアイドル像にピシッと亀裂が入ったことだろう。もつとも、そう仕向けたのはアーチャーだが。

「まあ、遠坂らしいけど。授業には遅れるなよ」

「ええー。そろそろ私も移動するわ！ ではご機嫌よう！」

凜は制服のポケットに石を乱暴に入れて、くるつとその場で身を翻す。そして、そのままの勢いで一步を踏み出し——空を踏み抜いた。

「あつ」

(姉妹そろって足元不注意とはな！)

背後は下りの階段。宙に投げ出されるは少女の肢体。

アーチャーは必死に腕を伸ばす。

——かつての聖杯戦争で同盟を組んだ少女。魔術師として半人前であったエミヤシロウを戦えるように手を貸してくれた。

——いつかの聖杯戦争で共に戦うパートナーとして傍らにいた少女。過去の己の抹殺というパラドクスによる消滅を願い、彼女を裏切った。

しかし彼女は最後には、アーチャーを笑顔で見送ってくれた。

理想を追い求め、理想とはかけ離れたものになった自身を憎むしか出来ず、己の過去と対峙し敗北したアーチャーへ、頑張つて、と言ってくれた。

自身を好きになれるように、あなたも、と。

目の前の彼女はその遠坂凜では無い。それは理解している。

それでも——遠坂凜という少女はアーチャーにとって特別な存在に入るのだ。

「凜っ！」

少女の青い瞳とアーチャーの視線が交差する。

大きく見開いた青に映るは赤毛の少年——衛宮士郎。

腕の長さは本来のものより短く、彼女には届かない。

だが、遠坂凜は掴み取った。

自ら腕を伸ばすことによって、アーチャーの僅か足りない距離を埋めた。

白い華奢な手から伝わる、確かな温もり。

アーチャーはその温もりを放さぬよう強く握りこみ、彼女を強引に引き上げる。

いつかの再現のように、アーチャーの腕の内に入る身体。

そこでしつかりと抱き止められたら良かったのだが——生憎この身体は衛宮士郎のもの。彼女を引き上げた反動で、尻餅をつく羽目になっってしまった。

あまりのかっこ悪さに若干顔を赤らめつつ、アーチャーは凜の様子を確かめる。

「大丈夫か、遠坂」

「ええ。おかげさまで。それより……さつき凜って」

……遠坂家のうっかりが移ったか。アーチャーは動揺する気持ちを抑え、何食わぬ顔で言った。

「——学園のアイドルの下の名前を、ただ呼んでみたかっただけだ。気を悪くしたんだったら、ごめんな」

「つそ、そんなこと無いわよ！」

凜は顔を赤くしながら、アーチャーの言い訳を否定する。

その彼女の態度に少しだけ胸が温かくなったのは……どうしたのとだろうな。

「さ、もうそろそろ予鈴が鳴るな。今度はちゃんと足元の心配をしておけよ」

そんな凜に、伝えるべきことがある。

間桐家に引き取られた血の分けた実の妹、桜のことだ。

凜が間桐家に関して不干渉を徹底しているなら、知りたくとも遠目に見るくらいしかできないだろう。

今朝の様子を見る限り、間桐桜は元気にしている。凜が心配するよ
うなことは無い。

このことは衛宮士郎の姿である今だからこそ、彼女に告げることができるのだ。

こればかりは、このおかしな現象を起こしているカードに感謝してもいい。

アーチャーは自然と浮かんだ笑みと共に言った。
「それと——桜についても心配いらないからな」

「ちよつと、それどういう……」

キーンコーン、カーンコーン

凜の言葉を遮ったのは、次の授業を告げる予鈴。

アーチャーは凜の言葉の続きを待たずに、その場からすぐに離脱した。幸い、次の教室は階段を下ったすぐの場所であり、予鈴が鳴り終わる前に教室に入る。

さすがに凜も授業中の教室まで追いかけては来ないだろう。それに凜自身の授業もある。

(あれで探査など頭からすっぽ抜けてくれればいいが)

アーチャーが桜のことを告げたのは、凜を安心させる以外にも狙いがあった。

凜がポケットに水晶をしまう直前。アーチャーの鷹の眼は水晶に灯っている星粒のような光を捉えたのだ。

昼間の陽光の下では紛れてしまうほど微かなものだから、凜も見逃したのだろう。

あれは確実に、アーチャーが鞆に忍ばせたクラスカードに反応していた。

凜が冷静に探査を続けるのなら、いずれアーチャーの下へ辿り着いてしまう。だからアーチャーが対策を講じるまで、凜には他のことで頭を悩ませてもらうことにしたのだ。

今頃、なぜ衛宮士郎があの日イミミングで桜のことを自分に告げたのか、と彼女の頭の中で疑問がグルグル駆け回っていることだろう。水晶には目もくれないはずだ。

アーチャーは授業が終了すると同時に教室を出て、人目の付かない場所を探した。

クラスカードへの対策を、授業の合間に済ませてしまおうと考えていたのだが——ついつい生前の悪い癖がでてしまった。

泣きそうな顔で必死に草むしりをしている整美委員を、見るに見か

ねて時間いっぱい手伝い、次の休み時間では、明らかに許容限度を超えたプリントを運ぼうとしている女子生徒の手助けをし、更に紙詰まりを起こしたコピー機の前でおろおろしている教師を目撃してやむえず必要な処理をしたり、また校舎裏ではカツアゲ場面に遭遇し、学園の平和のためと軽く捻ったりと、なかなか時間をとることができなかったのだ。

そして、とうとう柳洞一成との約束のある昼休みにまでなってしまった。

もつとも凜のことだから、アーチャーを直接問い詰める以外に悩みは解決しないだろうと予想が立っているからこそ、他人の手助けを優先させてしまったのだが。

「今日の弁当は、ことさら美味しそうに見えるな」

一成がアーチャーの弁当の中身を覗きこんで言う。

備品の修理を目的に生徒会室を訪ねた訳だが、先に昼食をとることにしたので。

「朝の残りを詰めただけなんだけどな。ついでだから一成の分も持ってきたぞ」

アーチャーは別の容器に入れてきた煮物を一成に渡す。

寺の息子である一成の食事は基本的に精進料理が多い。食べ盛りの男子高校生には物足りないだろうと、肉を多めに盛り付けておいた。

「かたじけない。ありがたく頂戴する。にしても今日の衛宮はやたら気が利くな」

「そうか？ いつもこんな感じだろ」

「いやいや、おかずの一品を別に用意してくれるのは今日が初めてだ。いつもは摘まんだりさせてもらうだけだったからな」

「……今日は特別、煮物を多く作り過ぎただけだからな。毎回こうだとは思わない方がいいぞ」

「うむ、承知した。——あー、これは美味しい！ 飯が進むな！」

満足そうに弁当をかきこむ一成に、アーチャーはほっと胸を撫で下

ろす。

あくまで衛宮士郎の日常を演じているのだ。あまり後を引くようなことはするまい。

その後アーチャーは余計な口を利かないようにし、一足早く昼食を済ませると、さつそく修理に取り掛かった。

未熟だったころとは違い、地味な解析魔術なら一般人に悟らせることなく行使できるアーチャーにとって、修理すべき箇所を見つけるなど造作もない。

ロッカーに入れられた道具箱からドライバーやらニツパーやらを取り出し、次々と処置をしていく。ついでとばかり他のものにも解析をかけてみると、見過ごされた箇所や粗い処置の部分が見つかった。(ふん、未熟者め。一度引き受けたものを完璧に仕上げなければ、二度手間になるだけだ)

やれやれと肩をすくめながら、それらにも処置を施していく。気が付けば昼休みの時間はもうすぐ終了するところであった。

午後の体育の授業が早めに終わり、アーチャーは一人、誰もいなくなった更衣室に残っていた。

やっと掴んだ一人になれるチャンスである。

アーチャーは体操着のポケットに入れていたクラスカードを取り出した。

アーチャーがいるせい、微かに励起しているカードは、少し探りを入れれば気配を悟られてしまいそうだ。

「投影、開始（トレース・オン）」

魔術回路を少しだけ開き、アーチャーは投影を開始する。

創り出すのは、己の概念武装の一部。外界からの守りの概念が織り込まれた聖骸布である。

宝具では無いが剣の枠から外れる代物に、消費される魔力は通常の倍以上になる。さらに使える魔術回路も少なく、凜に勘付かれないように出力も抑えている。

この現状で犠牲にすべきは、投影に要する時間だ。時間をかけて、

丁寧に八節をなぞれば、低出力といえども、それなりの物は投影できるのである。

また、外套すべてを完全に投影する必要はない。あくまでクラスカードを包むことができればいいのだ。それならばハンカチ程度の大きさを事足りる。

そして約十分後、アーチャーは出来上がった赤い布でカードを包み込み、仕上げに外套の一部である飾り紐で封をした。

これならば、探索の魔術に引つかかることも無くなるだろう。

そう、一息ついた時だ。

「しろー……！」

虎の咆哮が聞こえた。

摩耗した記憶にも残る、冬木名物の虎の雄叫びである。

「ふ、藤ねえ!」

神経を使った投影の直後で気が抜けていたせいか、はたまた懐かしい咆哮に釣られて思い出した記憶のせいか、思わず言い慣れた呼び方が出てしまった。

「駄目よー、学校では藤村先生って呼ばないと」

更衣室の入り口で手を振るのは、『初等科』の教員である藤村大河。

何故、高等科の校舎に來ているのか。そもそも

「ここは男子更衣室だ! 着替えの最中だったらどうするんだ!」

そう、男子更衣室である。仮にも嫁入り前の彼女がノックもせずに入ってきていい場所では無い。

「ん、別に士郎の裸を見たってどうってこともないし? 昔はよくお風呂に入れてあげたじゃない」

「いつの話だ! 少しは慎みを持って! そんなんだから貰い手が見つからないんだぞ!」

ついポロリと出た本音。

それは的確に虎の尾を踏んづけた。

「士郎、最近は運動をあんまりしてなかったじゃない?」

いつの間にか取り出したるは、トラのストラップの付いた藤村大河愛用の竹刀。

もはや嫌な予感しか湧いてこない。

ブンッ!

いきなり振り下ろされる竹刀を、アーチャーは最大限の反射を駆使して、間一髪で避けた。

「士郎のくせに避けるとは生意気な! 大人しく打たれなさい!」

「当たったら危ないだろ! そもそも防具を着けてない相手に打ち込むなよ!」

だがスイツチの入った虎は止まりそうにもない。

それから十数分もの間、アーチャーは狭い更衣室中で追い回される羽目になってしまった。唯一の救いは、更衣室が授業を行う教室から離れているため、他人に迷惑が掛からなかったことか。

「ゼエ、ゼエ。な、なかなか、やるようになったわね」

「さっきの言い過ぎた。すまん。取り消す。だから勘弁してくれ」

「じゃあ、明日のお昼になんか一品おかずを持ってくること。それで勘弁してあげるわ」

……なぜ食べ物から離れないのだろう。さすが冬木の虎。どここの平行世界でも藤村大河に変わりはないか。

「で、何の用だ。というか、なんで俺が男子更衣室に一人残ってるって気づいたんだよ」

更衣室から大河を押し出しながら、アーチャーは問いかけた。

男子更衣室は窓こそ設置されているが、中が見えないように曇りガラスとなっている。上部には換気用の小さな窓もあるが……

「えっと、なんとなく? 士郎のクラスの子たちが出てきてたし、士郎って最後に残って軽く掃除とかしてるって聞いたから。あと、上方の窓を跳んで覗いたら、士郎の髪が見えてね」

その説明に、アーチャーは某黄色の熊のアニメに登場するオレンジのトラを思い出してしまった。跳びはねて覗くとは……生徒の見本となるべき教師が何をしているのやら。

それと衛宮士郎。ここでもブラウニーか。

「用事はね……っってもうこんな時間! こっち来て!」

大河に腕を掴まれてやってきたのは、ある資料室の扉の前。

「このドアの調子が悪くって、上手く開かないの。中に次の授業の資料があるし、用務の人を呼びに行くより、士郎の方が早いって思っ
て」

アーチャーは藤村大河の衛宮士郎への頼りっぷりにため息を零したが、文句を言えば倍になって返って来ると思われたので、大人しく扉を調べにかかった。

どうやらスライドのための車輪を支える金具が緩んで、変な風にはまってしまったようだ。これならば、すぐに終わる。

アーチャーはまず軽く衝撃を与えて突っかかりを失くし、扉をレールから外した。それから制服に常備してあるドライバーで金具のねじを締め直す。そして扉を再度はめ込み、スムーズに動くか確かめた。

「わー！ ありがとう士郎！ じゃあ明日のおかず一品よろしくねー！」

大河はアーチャーが扉を外した時点で資料室の中に入り込んでおり、扉のたて付けの処置が済んだと同時に、元氣よく早歩きで去っていった。恐らく初等科の教室が遠いせいだろう。

既に休み時間に突入しており、あと7・8分で次の授業が始まってしまふ。

(台風のようにきて、台風のように去っていったな)

アーチャーは大河を見送った後、置いたままにしてしまった荷物を取りに、更衣室へ足を向けた。

実はクラスカードも鞆の中なのだ。藤村大河が乱入してきたことに動揺して、つい制服ではなく鞆のポケットに突っこんでしまったのである。

仮にも魔術礼装だ。誰かの手に渡る危険性はできるだけ低くしておきたい。

だが幾ばくかも行かないうちに、

「衛宮、ちよつといいか？」

ちよつど逆の方向から柳洞一成に声をかけられた。

次の授業の教室は比較的近く、時間の余裕も多少あったので、アー

チャーは返事をして、廊下の先にいる一成の方へ向かう。

「次の備品の修繕に関してなのだが——」

そして一成との距離が縮まり、話が始まった途端。

ブツン。

何かが切れた。

靴ひもやそういう類のものでなく、もっと霊的なもの。

そう——この身体とクラスカードとのつながりが切れたのだ。

(……距離か！)

ここから更衣室までは直線距離にして約五十メートルほど。

それが、クラスカードの術式が及ぶ範囲らしい。

アーチャーはふらつく体をどうにかして後退させる。たったの二メートルだが、ここまですら有効範囲内のはずだ。

まだアーチャーの意識とクラスカードのラインは生きている。あくまで衛宮士郎の身体とクラスカードのつながりが消えただけだ。アーチャーがラインを辿って、クラスカードの術式に働きかければ、また繋がるはず。

衛宮士郎の意識は未だ戻っておらず、このままアーチャーが離れてしまえば、身体は倒れるだけだ。学校内で倒れることはしたくないのだが……。

(——しまった。私もやきが回ったか)

アーチャーの干渉は弾かれた。原因はアーチャーが投影した聖骸布である。

外界からの守り——すなわち外からの干渉を遮断するということ。凜の探索への対策にうった策が仇となってしまった。

「おい、衛宮！　しっかりしろ！　大丈夫か!？」

柳洞一成がこちらに駆け付け、崩れ落ちそうな身体を支える。

アーチャーは遠ざかる意識の中、必死に言葉を紡いだ。

「……大丈夫だ。少し疲れが出ただけだ。放っていてくなくても、構わない。だけど、鞆が……更衣室にあって。財布とか……入ってるし、……そばに持って——」

「まずは衛宮を保健室まで運んでからな。荷物は後で俺が届けてお

く

一成は迷うことなくアーチャーを背負うと、保健室を目指して歩き始めた。

これでは一成は確実に授業に遅刻してしまう。

「……すまない。迷惑を、かける。」

「気にするな。衛宮にはいつも世話になっているからな」

そこまでが限界だった。

身体感覚は全て無くなり、アーチャーの意識はいつの間にか無数の剣が突き立つ荒野に戻っていた。

だがここは『座』では無い。

ここはクラスカードの内。写し取った英霊の力を一時的に保存する領域である。

「結局、一成には面倒をかせせてしまったな」

アーチャーはいつものように腕を組みながら、呟いた。

衛宮士郎が再びカードと接触して繋がった暁には、一成に何かお礼でもするように催促しよう。あと藤村大河におかず一品を進呈することになったことも伝えなければ。

思い返してみれば朝からの半日あまりに、なんと多くの知り合いと関わってしまったことか。

懐かしい場所や人々に刺激され、摩耗していた生前の記憶も、ぼんやりとだが確実に思い出してきている。

アーチャーは再び接触が起きるまでの間、その記憶を反芻してみるのであった。

おまけ

(……聖骸布に包んだクラスカードに、衛宮士郎はいつ気が付くのだろうか)

【12】

「じゃあ、行ってきまーす」

「ああ、くれぐれも相手方の迷惑にならないようにな。はしやぎ過ぎで夜更かしはするんじゃないぞ。一応、病み上がりなんだから」

「分かっているって。お兄ちゃん過保護！　ただお向かいさんにお泊りに行くだけなのに……」

「過保護でけっこう。大事な妹だからな。明日の学校には遅刻するなよ」

「はーい」

夜の日付が変わる三時間前。玄関先で兄と挨拶を済ませると、イリヤは気合を新たに、先日家の目の前に建ったばかりの豪邸の門をくぐった。

昼間、美遊がお見舞いに来てくれた際に（メイド姿を愛でるために呼びつけたとも言う）、昨夜の鏡面界に現れた男について作戦会議を行う、という伝達を受け取ったのだ。

集合は夕飯と入浴を済ませたあと。会場は集まりやすさを理由にエーデルフェルト邸となっており、会議の後は、そのままクラスカードの回収に現地へ向かう手筈である。

よって家族には友達のメイドさん（美遊）のところにお泊りさせてもらう、という話にしておいた。セラには病み上がりに何を、と眉を顰められたが、身体の方はまったく問題ないので、頑張つて説き伏せたのである。

またカード回収後は邸宅の一室で寝させてもらう予定なので、あながち嘘をついているわけでは無い。明日の朝はそのまま朝食も頂いて、美遊と一緒に登校するつもりだ。

イリヤは明日の用意もばっちりなランドセルを背負い、カレイドステッキのルビーと共に、一般的な住宅と比べ物にならない広さを持つ庭を進んでいく。

歩くのに不自由しない程度の灯りがともされた道の先。屋敷の重厚な扉の前には、メイド服姿の美遊が迎えに出てくれていた。

「こんばんは、……イリヤ。あとルビーも」

「うん、こんばんは。ミュ」

美遊が自分のことを「イリヤ」と呼んでくれることが嬉しくて、つい返事の声が弾んでしまう。

今日の昼間、美遊がイリヤの家に訪れた際に、改めて『友達』になったのだ。その証と言っては何だが、お互いの名前をそれぞれ「イリヤ」と「ミュ」と呼び合うようになった。

美遊はまだその呼び方に慣れておらず、また気恥ずかしいせいか、イリヤの呼びかけに顔を赤らめている。

その初々しい反応にいつそう笑みが深くなるイリヤと、赤くなりつつも荷物を受け持とうする美遊の間に広がるのは、なんともみずみずしいホンワカ空間。

こんな美味しい雰囲気やルビーが見逃すはずも無く、

「こんばんは。イリヤさんと一緒に可愛いメイドさんに夜這いに来ちゃいました！」

早速、いじりに掛かった。

「え？ イリヤ、それ本当？」

あくまでイリヤに関しては真面目に受け取ろうとしてしまう美遊に、イリヤは即座に否定のツツコミを入れる。

「うそうそうそ！ 夜這いのわけないよ！ もうっ、ルビーなに言ってるの!? なんか色々台無しにされた気分だよ！」

「あらー、冗談ですってば。冗談。あまりにもそれらしい雰囲気だったもので、つい」

「それらしい雰囲気って、なに!?!」

そんなイリヤとルビーの漫才のようなやり取りに、冷静な声が差し水のように入った。

「お戯れはそこまでにしてくださいね、姉さん。」

美遊様、イリヤ様、準備が整いましたので、こちらまでおいで下さい」

カレイドステッキの片割れ、ルビーの妹のサファイアである。

金のリングに六芒星、青の蝶の羽とりボンを組み合わせたような待

機状態のサファイアは、五芒星と白い翼がモチーフのルビーとはまさに正反対の性格であり、ルビーの暴走を抑えてくれる貴重な存在である。

「わっかりましたー。サファイアちゃんがのっつけてくれないのは寂しいですけどー、なんかピリピリしてる感じなのでー、大人しくしますねー」

「ルビーはぶざけ過ぎなの!」

不満たらたらルビーに、イリヤは「喝っ」と突っ込みつつ、大きな屋敷に足を踏み入れた。

美遊も突然のルビーの悪ノリに唾然としていたが、サファイアの一言で我に返ったようで、戸惑いながらもイリヤとルビーを屋敷の一角に案内する。

「すつごい……。大きい。カーペットもふかふか……。ほんとにルヴィアさんってお金持ちでお嬢様なんだね」

イリヤは初めて感じるセレブのお屋敷の豪華さに、目を輝かしてあちらこちらへと視線を移す。一般家庭に育ったイリヤにとって、ここは異次元の世界であった。

「飾ってあるものには手を触れないでね。中には数百万もするものもあるから」

美遊は手を伸ばしそうになっているイリヤに注意をする。

万が一破損させてしまったら、その賠償はイリヤかその家族が負わねばならない。

ルヴィアなら寛容に笑って許してくれるかもしれないが、やはり自分の行いの責任は取らなければいけないと美遊は思うのだ。

もつとも壊したのが遠坂凜であれば、ルヴィアは容赦なく請求を突き付けそうな気もするが。

「うっ。わ、分かった。あんまり触らないようにする! 壊したら弁償しなくちゃいけないもんね!」

イリヤもそこら辺の常識をわきまえて、さっと手を引つ込めた。ついでにこのお屋敷内では魔法禁止!と心の中で誓う。まだ制御に不安が残るうちでは、仮にこのお屋敷の中で戦闘が起こったとしても、

弁償が怖くて魔法なんてぶっ放すなんてできそうにもない。魔法は何を壊しても文句の出ない鏡面界でやるのが一番なのだ。

「数百万円となると、お小遣いがいくらあっても足りないし、うちの家計が破産しちゃうかもしれないしね」

と付け足すように言うものの、イリヤ自身はアインツベルン家の総資産がどのくらいあるのかは、実はよく分かっている。普通の一家に住んでいるので、一般的なサラリーマンと同じくらいの収入ではないかとは思っている。セラは節約節約と口うるさいし。

そうするうちに、机とホワイトボード、さらにスクリーンが用意された部屋に着いた。既にルヴィアや凜は席に着いており、イリヤとルビーの到着で参加メンバーがそろったことになる。

「こんばんは、イリヤスフィール・フォン・アインツベルン。それにカレイドステッキ・ルビー。ようこそエーデルフェルト邸へ。今日あなた方はお客様でしてよ。なにか至らないところがあれば、美遊やその執事に申し付けてくれればよろしいですわ」

まずは私服らしきドレス姿のルヴィアが席を立ち、この屋敷の女主人らしく艶やかに挨拶を告げる。

「えっと。お招き預かりましてありがとうございます……？　こちらこそよろしくお願いします」

イリヤは普段されることの無い丁寧な挨拶に、むず痒い思いを抱きつつ、何とか返答する。少し日本語が変になったのは、緊張と言い慣れない敬語を駆使したせいである。決して、正しい敬語が分からなかったからでは無い。

「よろしく」

ルビーはイリヤとは対照的に気の抜けた軽い感じで答える。どんな場所や相手であろうともルビーの調子が崩れることは無いようだ。

そのやり取りを、遠坂凜はむすつとした目で眺めていた。ちなみに服装は、この屋敷に似合わない動きやすさ重視のカジュアルなものである。

「なによ、私の時の対応とは随分違うじゃない。貴族様がそんな差別的な行いをしていいのかしら？」

「真の貴族は付き合う相手を選ぶものでしてよ。貧相な格好の貴女を屋敷に上げて差し上げただけでも光栄とお思いなさい」

凜の嫌味にルヴィアも劣らず毒舌で返す。二人の険悪な雰囲気、イリヤは胃がキリキリしてくる気がした。

「言ってくれるじゃないの。なら、今すぐこの屋敷も私と同じ貧相な様にしてあげましょうか」

凜が構える人差し指に、瞬間に黒い魔力の塊が装填される。

イリヤはそれを見て即、ルビーに手をかけるが、凜の凶悪な気配を湛えていた魔力は次の瞬間、プシュと情けない音を立てて霧散してしまった。

「え、あれ?」

「オーツホホホホホ！ 仮にも魔術師の工房ですわよ！ 敵の魔術師への対策はばっちりですわ！ 夏の火に飛んで入る虫とは、まさに貴女のことですわね！」

「……ルヴィアさん、その日本語の使い方は少し違っていると思います」

高笑いするルヴィアに小さくツツコミを入れる美遊。

「……そう。じゃあ、魔術に頼らず肉體言語で話し合いませんか！」

びきびきつと青筋を立てる凜は、既に席を立って臨戦態勢を整えている。

ルヴィアと凜のいつもの不毛な争いが勃発するかに見えたその時、

「ルビーデュアルチョップ!!」

二人の脳天に制裁を下したのは、羽を肥大化させたルビーであった。

「まったくもー。二人ともまだまだお子様ですな。それが原因で私たちも愛想を尽かしたというのに、いつになったら学習するんですか。早く收拾を付けて会議を始められるようにしないと、問題の映像も公開しませんよ」

ルビーのまったくの正論に、ルヴィアも凜も、ぐうの音も出ないようだ。

「ルヴィアさん、凜さん、紅茶が入りましたので、席をお願いします」
そこへタイミングよくお茶を用意する美遊に、イリヤも鞆からとっておきを取り出した。

「このクッキー、お世話になるから持っていきなさいってお兄ちゃんが焼いてくれたの。これを食べてまずは落ち着こうね」

小学生の二人にも促され、凜とルヴィアはしぶしぶ席に座った。ちなみに最初と同じ、四人掛けのテーブルで最も遠い対角線の席である。

イリヤは喧嘩が不発に終わったことにほっと胸をなでおろし、クッキーを皿に開けながらルビーに小声で話しかけた。

「にしても、ルビーがまともなことを言うなんて珍しいね」

「珍しいとは心外な！ でもー、そうでもないよとサファイアちゃんが、キレちゃうところでしたからねー。あのお二人と一緒に空間でイリヤさんを待っている間、だいぶストレスを溜めたようで。ルビーちゃんがチョコップをしていなかったら、今頃はサファイアちゃんが洗脳電波デバイスを繰り出していましたよ」

「えっ。洗脳電波って、こわっ！ さすがルビーの妹……」

口数が少ないと思ったら、静かに怒りを溜めてある一点で爆発するタイプらしい。先ほど玄関で、ルビーがサファイアのことをピリピリしていると言っていたのは正しかった訳である。

一方、美遊の入れた紅茶で一息ついた凜が、早速イリヤの持参したクッキーに手を伸ばした。

「クッキー、頂くわよ。イリヤ。あのバカ相手にむきになっちゃったからお腹が空いちやっかし」

……落ち着いたように見えて、凜の言葉には自然とルヴィアへの嫌味が滲んでしまっている。

案の定、ルヴィアも噛みついた。

「何を言いますの。それは私宛に持ってきて頂いたものですわ。それを差し置いて先に食べるなど、礼儀がなっておりますわね」

バチバチと再び二人の間で不可視の火花が散る。

しばらくはらみ合いが続いたが、唐突に二人の腕がクッキーに伸び

た。

どうやら先に食べた方が勝ち組らしい。

二人の口にクッキーが入ったのは、ほぼ同時だったのだが——次の瞬間、顔色が変わった。

「美味しい……!!」

「えっ、そんなに?」

二人して絶句している様子にびっくりするイリヤ。

兄が作るお菓子は確かに美味しいが、家庭的で素朴な感じだったはずだ。

「このサクサクとした食感に、まろやかに広がる甘味。ナッツもチョコも入っていない基本的な焼き菓子というのに、何故こんなに味わい深いのでしょうか!」

「おまけに紅茶との相性はとてもいいわ。一緒に口に含めば、香りが更なるエッセンスになって、舌の上で溶けるように無くなる。……脱帽だわ」

いかにも舌が肥えていそうなルヴィアと凜の唸るような感想に、イリヤも恐る恐るクッキーを口にする。

見た目は多少の不揃いがある、普通のクッキーだ。焼き色はいかにも美味しそうなキツネ色だが、果たして味の方は——

「うそ、こんなに美味しいなんて」

生まれて初めて食べたかも。

まるで高級菓子店で作られたかのような垢抜けた美味しさに、イリヤはひたすら感動してしまった。

いつの間に兄は、こんなに美味しいクッキーを作れるようになったのだろうか?

(次からもっと手作りお菓子をねだっちゃおうかな)

美遊の方を見てみると、美遊もクッキーを食べたようであまりの美味しさに、とても驚いているようだった。

「イリヤ、これ、本当にイリヤのお兄さんが作ったの?」

「うん、そうだよ。焼いているところを見たし。私もお兄ちゃんがこんなに美味しいものが作れるなんて、びっくりしちゃった」

「そう……。とても美味しかったです、とお兄さんに伝えて……」

美遊の声は少し涙声っぽかった。そんなに感動したのかな？

「私からもお礼を申し上げますわ。本国のパティシエにも劣らない物でした、とお兄様にお伝えくださいませ」

本物の貴族であるエーデルフェルト家の令嬢にここまで言わせるとは、兄、恐るべし！である。

「わたしからもお礼を言うわ。とても美味しかった——女子としては悔しい限りだけど。……イリヤのお兄さんってまだ学生よね？パティシエ志望なの？」

凜の正直な感想の後の質問に、イリヤは首をかしげながら答えた。

「うーん、どうだろう？ お兄ちゃんが将来、何になるかなんて、あんまり聞いたことないなあ。高校生だけど、そろそろ決まって来るころだろうし。……今度聞いてみようかな？」

イリヤの兄は、料理が上手くて、機械いじりが好きで、弓道の腕がすごくて——あと、正義感が強くて、お人好しで。学校で見かける姿は、いつも誰かのために頑張っている姿だ。

将来は警察官とか消防士さんとか、人を助ける職業に就きそうである。または人に料理を振る舞うコックさんや、人の世話をやく介護士などもありかもしれない。

「えっ、まだ高校生なの！？ ってことは穂群原学園に通ってるってことよね。今度探してみようかしら」

と、凜が呟けば、

「将来の就職は安心してよろしいですわよ。エーデルフェルト家が専属のパティシエとして生涯、面倒を見て差し上げますわ」

と、ルヴィアは兄がまだパティシエ志望だと分からないのに、気の早いことを言う。

そんなに兄のお菓子が気に入ったか。

「……お兄ちゃんはあげないんだから」

「あら〜イリヤさん、ジエラシーですか？ そうですよね〜。大好きなお兄さんを生涯、面倒見るといふことは、婿入りも同ぜブギヤ」
「ルビーは黙ってて」

想像もしたくなかったのに。

ルビーをはたき落したイリヤは、無言で凜の隣の席に腰をおろし、今度は美遊の淹れてくれた紅茶と一緒に、クッキーを頬張った。

(うっ、紅茶と一緒にだと、もって美味しい)

クッキーだけではなく、うまく旨みと香りのみを抽出された紅茶だからこそ、ここまで美味しくなれるのである。これを美遊が淹れてくれたという事実だけでも、ささくれたイリヤの心も癒えるというものだ。

「ミュ、紅茶淹れるのうまいね」

「ありがとう、イリヤ。ルヴィアさんに直々に教えてもらったの。上手く淹れられてよかった」

美遊の照れた笑顔によりいつそう癒されるイリヤであった。

そんな小学生二人の会話で場が和んだところで、凜が今日集まった本題を切り出した。

「——さて。色々前置きが長くなったけど、今後のクラスカード回収の事と、昨夜、鏡面界に現れた男、自称『フェイカー』についての作戦会議を始めるわ」

どこからか取り出した眼鏡をかけて、凜は顔を引き締める。

(なぜに眼鏡?)

イリヤはツツコミを我慢した。さすがにこの雰囲気ではできない。というか、凜が会議を仕切っているのだが、ルヴィアが突っかけてこないことを不思議に思い、イリヤはルヴィアの顔を盗み見た。

ルヴィアはイリヤの視線に気づいたようで、小声で答えてくれた。

「別に進行役はどなたでもよくってよ。遠坂凜がわざわざ買って出してくれるというのなら、口出しはしませんわ。真の貴族とは、寛容に物事を受け止め最善の判断を冷静に下す者であり、更に重要なのは本番でどう動くかですもの」

……さっきの様子とは随分と異なる言い分である。あれか、美味しいものを食べて心の余裕ができたということか。

そんな会話を横目に凜はサクサクと進めていく。

「まずはフェイカーについて情報を整理するわ。ルビー、あんたの

撮った記録を再生してもらえる?」

「お安い御用ですよ。いい感じにスクリーンもありますし」

ガチヨンツつと、ルビーの本体の下部からプロジエクターが出現する。さらにサービスのつもりか、ステレオまで脇に装備される。

いつも思うのだが、アレらはどこに収納されているのだろうか? 物理的に不可能な気がするのだが……。

しかし、イリヤの心の中の疑問はすぐさま吹っ飛んだ。

スクリーンにイリヤの顔が、どアップで映し出されたからである。

『よく頑張ったな、イリヤ。あとは任せろ』

赤い外套に包まれた大きな褐色の腕が、イリヤの頭をくしやりと撫でる。

画面上のイリヤは、それで安心したようにふにやりと表情を崩した。

「うなあああああああああー!」

イリヤは絶叫をあげた。

普段、自分の顔など客観的に見る機会など早々ない。そして大抵は自分が思っている物とは違う風に見えるものである。

(私ってそんな顔してたの!? ていうか、すごい酷い顔! それをアップって——いやあああー! 恥ずかしい! 穴があつたら入りたい!)

息も絶え絶えに悶絶するイリヤに、さらに追い打ちがかかった。

「おっとすいません。もうちよつと前からの記録もありました。巻き戻しますね」

ルビーはイリヤの様子など気にすることなく、飄々と巻き戻す。

あれは絶対わざとだ。断言できる。

「ちよつと待って! もう一回とか羞恥プレイ過ぎるよ! 待って待ってまでルビー!」

だが、無慈悲にもスクリーンの動画は再生を始める。

映し出されたのは、未だ土埃が立つ破壊痕から立ち上がるボロボロの黒騎士と、驚愕に身をすくませる美遊とイリヤだ。

上空から撮ったせい、見下ろすような構図である。

脇腹に大穴の空いた黒騎士が、美遊に向かっていく。そこにふらふらになりながらも立ちふさがるイリヤ。

そして、イリヤが切り捨てられそうになった瞬間、横から赤い影が割り込んだ。

「まるでどこぞのヒーローのような登場の仕方ね。タイミングでも計っていたのかしら？」

凜の辛口な評価が耳に痛い。間に合ったからいいと思うのはイリヤだけだろうか？

赤い影——フェイカーは黒騎士の剣を白と黒の双剣で弾き上げると、イリヤを抱きかかえ、美遊のところまで後退する。そこで何故か画面がズームアップしていく。

そして冒頭のイリヤの顔のアップに繋がるのだ。

「んなあああー！ やめてえええ！ 見ないでえええー！」

目を塞ぎ奇声を発して身悶えるイリヤ。

だが、それに構わず、魔術師二人は冷静に動画を分析していた。

「フェイカーのあの動き。身体に強化魔術をかけているのかしら。でなければ、移動速度といい、騎士王の剣を防いだことの説明がつかないわ」

『イリヤ』と随分親しげに声をかけていますわね。彼は最初からイリヤスフィールを知っていた、ということ。やはり通りすがりに立ち寄った、流れの魔術師というのは嘘ですわね」

「……イリヤ。フェイカーとは前から面識があった？」

美遊までもが冷静に聞いてくるので、一人で騒いでいたことが気まぐずくなり、イリヤは大人しく質問に答えた。

「全然知らない。見たことも無いよこんな人。……そもそも、この時のことだつてよく覚えてないし」

イリヤ自身は、黒騎士の真名解放した大斬撃からの記憶が何やら曖昧なのだ。昼間に美遊と話したが、思い出せるのは、大きな赤い背中とただ頭を優しく撫でてくれた感触だけ。それも兄の突然のなでなで攻撃によく分からなくなってしまった。

再生される記録の中で気絶した自分自身を恨めしく見つめる。何故そんなに安心しきった表情なのか、今のイリヤには見当もつかない。

そうする間にも、フェイカーはイリヤを美遊に預けて、黒騎士と戦闘を開始した。

既に傷だらけの黒騎士は、魔力の霧を展開することなく、推進力へと変えてフェイカーに斬りかかっていく。血飛沫を飛ばしながら、なお敵に向かっていく姿は、佳麗な容姿と相まって、凄惨の一言に尽きた。

もはや手負いの獣も同然だったが、相對するフェイカーは冷静にその攻撃を捌いていく。守りに特化した堅実な太刀筋だった。

「やっぱり、私のチャンバラとは全然違うわね。悔しいけど、劍士として数段上のレベルだわ」

転身をして騎士王と直に刃を交えた凜は、騎士王と対等に劍戟を交わし合うフェイカーの劍の実力を実感する。凜はハイスペックな礼装であるカレイドステッキが、身体強化や物理保護を展開してくれたおかげで、時間稼ぎ程度に打ち合うことができたのだ。更に魔力が無制限に供給されるので、魔力切れの心配をする必要もない。つまり、常に全力で相手することができたのだ。

フェイカーは違う。カレイドステッキの無い彼の魔力量は、一般の魔術師の域を出ることは無いだろう。術式に注ぎ込む魔力の分配にも気をつけなければならない。そして、よくよく観察してみると――

「馬鹿じゃない!? コイツ、身体強化だけで、物理保護も障壁も張っていないじゃないの!」

フェイカーは身体の所々に細かい傷を負っていた。その原因は騎士王の劍だけでは無い。劍が振るわれる際に飛び散る瓦礫の破片や衝撃波など、神秘を帯びないただの物理現象でも傷ついているのだ。

今の時代、一人前の魔術師となれば、戦闘の際には物理保護を含めた魔術障壁を展開しているのが当たり前だ。特に時計塔の名物講師の講義で扱われるものは、近代兵器である銃弾すら、容易に防ぐこと

ができる。もつとも、彼の講義を受けた者は何故か、非人道的な魔術実験などを禁止する誓約をさせられるのだが。

凜もルヴィアも、時計塔に編入した際にすぐ、その講義で物理保護を含めた防護の魔術を修めており、多少のことでは傷つくことは無い。

それでもなお、神秘の塊である英霊の前に立つのは自殺行為である。

彼らのもつ武器や魔術は簡単に障壁を乗り越えて来るものであるのに加えて、英霊自体は対魔力を備えているので生半可な魔術攻撃は通用しない。

よって凜もルヴィアも、特別念を入れた防護の魔術を展開しつつ、鏡面界に降り立っている。騎士王の不意打ちの一撃で命を落とさずに済んだのも、それなりの魔術障壁がクッションになったおかげだ。「守りの魔術も纏えないなんて、三流と自称していたのは事実のようですね」

「あー、したらコレ、ほんとに心臓に悪いわ。ぶった斬られたらすぐにお陀仏よ」

ただでさえ、大きな隙ができる時があるのだ。フェイカーはそこを突かれる度に、何とか防ぎ更に攻撃へとつなげているが、見ている側としては下手な映画よりもスリリングである。

それを数回繰り返した後、おもむろにフェイカーの声が混じった。

『……………いいだろう、ならば私が引導を渡してやる』

「引導？…何のこと？」

イリヤの疑問に美遊が答える。

「仏教用語で、死者が成仏できるようにお経を唱えたりすることだけど……………この場合は止めを刺すってことだと思う」

実際、ぼろぼろになってもなお剣を振るう黒騎士の様子は痛々しく、正視するのがつらいくらいだった。

フェイカーはその言葉の後、突然手にしていた双剣を投げつける。

「つな、なんてことするの！」

投擲した二刀は黒騎士に簡単に避けられ、無手となったフェイカー

に騎士王の剣を防ぐ術は無い。

あまりの所業にみな啞然とするが、またすぐに目を見開くことになった。

振り下ろされた剣を同じ白と黒の双剣が防いだのだ。

「分裂する宝具!?!」

フェイカーはそれも先ほどと同様に投げつけ、いつの間にか握っていたのか、三対目の白と黒の双剣をもって、黒騎士に斬りかかる。

『鶴翼三連』

俯瞰風景で見ていた凜たちは口が塞がらなかった。

画面の枠の外から飛来するは、先ほど投げつけた二対の白黒の剣。

まるで申し合せたように四つの刃が——いや、フェイカーに握られた二刀も含めると六つの刃がほぼ同時に黒騎士へ降りかかる。

さすがの騎士王でもこれは対処できないだろうと、思われたが——

——彼女は黒く墮ちようとも、伝説の騎士王だった。

ガキンツと高速で振るわれた聖剣が同時に着弾しようとする剣を弾き、防ぎきる。

その数は——五つ。

「あっ」

小さく上がった悲鳴は誰のものだったか。

騎士王の背後から残りの一刀である白い剣が突き立った。

「……騎士王が同時に飛来する剣を防ぎきることで、計算に入れた攻撃ね」

凜が浮かべるは苦々しい表情。

フェイカーの魔術師としての技量は恐らく凜たちよりも劣るだろう。

しかし、この騎士王を仕留めるのにそれらは関係が無かった。

フェイカーが用いたのは、才能やスペックに依らない——圧倒的な戦闘経験。

見た目は二十代半ばと見えるが、これまでにどれだけ戦いを積み重ねてきたのだろうか。

聖剣と打ち合えるだけの宝具級の武器を、遺憾なく使いこなし確實

に仕留めた。

あの白と黒の双剣が、分裂し投擲した後も惹かれあうように戻ってくる特性があるうとも、タイミングや体勢など諸々の要素が噛み合わなければ、こう奥の手にはなりはしない。

運任せで倒したわけでは無いのだ。全てのフェイカーの攻防が計算されたものであり、この結果を導いたのは必然と言える。

「敵に回したら厄介ですわね」

その場にいる全員に共通する想いを、ルヴィアは代弁するように言った。

フェイカーの戦いには付け入る隙が無い。先ほどまで見せていた大きな隙と呼べるものは、計算された罠かもしれない。事実、彼は一度もそれで危機的状況に陥っていないのだから。

『あ、あ——、うあああああああ』

黒騎士の絶望の叫び声に、イリヤはたまらず耳を塞いだ。

あんな悲しい——希望の全てが断たれた慟哭は、平和な日本に生きてきたイリヤにとつては重すぎるものであった。

そんな様子の黒騎士をフェイカーは——何を思ったか突然抱きしめた。

「——は？」

凜を含め、険しい顔で映像を凝視していたものはみな、目を点にする。

何故、本気で殺し合い、止めを刺した相手を抱きしめるのか。しかも映像から見ても、壊れ物を扱うような、ひどく優しい抱き方である。どういうこと？と一同、首を傾げる。もともとルビーだけは、ヒューヒュー！もう見せつけてくれちゃって、と場違いなヤジを飛ばしていたが。

映像がズームアップされ、フェイカーが黒騎士の耳元に口を寄せるのが鮮明に映し出される。生憎、上空からの撮影角度により顔は何うことはできないが、囁き声はしっかり響いた。

『もう、いいんだ。アルトリア。君は間違っていないかった。——もう聖杯を求める必要はないんだ』

本来なら当人以外に聞こえるはずの無い音量であったはずだが、無駄に高性能なルビーの盗聴機能は一言一句余さず拾い上げていた。

(こ、これは所謂、愛の告白なんじゃないかな)

聖杯という単語が気になるものの、フェイカーの声の調子や態度はまさに愛の囁きである。イリヤは先ほどとは別の意味で、顔を赤くしてしまった。なんだか大人の階段を覗いてしまったような、恥ずかしさと、いたたまれなさ？ フェイカー自身、こうも白日の下に晒されるとは思ってもなかっただろう。

黒騎士に止めを刺した白の剣や、フェイカーの握っていた剣もいつの間にか消え失せ、フェイカーは空いた腕で騎士王の髪を優しく梳く。その様子はまるで恋人をあやしているようにも見えた。

(あわわわわ！)

イリヤはバックに桃色の空間を幻視して(二人とも殺し合った直後で血塗れなのは無視して)ドキドキしてしまったが、他の人の様子を窺うとどうもイリヤと反応が違うようである。

凜とルヴィアの顔は険しく引き締まり、美遊に至っては真っ青な顔色であった。

(? そんなに変なこと言ってたかな?)

イリヤが首を傾げる間にも、スクリーンの映像に変化が現れる。

禍々しい黒は転じて、清廉な青へ。くすんだ金は月光のような輝かしい金へ。

獣の慟哭は止み、顔をあげた騎士の湖面の光を写し取ったかのような碧の瞳には人間らしい感情と理性が確かに宿っていた。

『……あなたが私の鞘だったのですね』

清水のような声が響く。

それは間違いなく、本来の姿へ戻ったであろう伝説の騎士王が発した言葉。

だがその響きは、円卓の騎士たちを率いた王では無く、ただ一人の少女のようで。

それがまた、映像を凝視している者たちを混乱に陥れる。

この少女は本当に伝説に謳われた騎士アーサー王なのか。

鞘とはいったい何のことなのか。

フェイカーと彼女の関係は。

(この感じって相思相愛だったってことかな?)

イリヤは言葉の意味が分からなくとも、青と金の少女の声音や表情からそう推察してみる。彼女の碧の瞳には、確かな喜びと——愛情が満ちているように見えたのだ。

だが逢瀬の時は短く、少女の身体は端から解ける様に光の粒子となっていく。

その中で。

彼女は顔をフェイカーに近づける。

フェイカーは固まったように動かない。

そして重なる二人の影。

位置的にも、角度的にも、それは明らかに——キスであった。

もはや理解のななめ上を行く事象に、凜たちは言葉を失うしかない。

身を離れた少女は最後に、儂くも一瞬の煌めきのような笑顔を浮かべると、その身を粒子に変え虚空へと消えていった。

——映像はそこで終わる。

耳に痛いほどの沈黙に包まれた会議室。

ぽつりとこぼれた凜の一言が、皆の気持ちを実によく表していた。

「いったい、何だったのよ……」

「だから。きつとフェイカーさんは騎士王さん——いえ、アルトリアさんに片思いしていたんですよ！　そして黒化して正気を失っていた想い人を元に戻すために戦って。正に愛に命を懸けた男！　正気に戻った彼女はようやく彼の想いに気が付き、男の愛の告白を受け入れた。しかし、彼女は既に消えゆく身。せめての証を、とキスを贈り彼女は笑顔と共に消えていった……。何と刹那的で儂い恋だったことか！　男はその想い出を一生胸に抱き続ける。いつかその身が朽ちるまで——それが真相ですよ！　そうに違いありません！」

「馬鹿な妄想はそこまでしなさい、ルビー」

完全に一人だけ周りから浮いて（雰囲気的にも物理的にも）熱弁を振るっていたルビーを、凜はバツサリ切り捨てた。それをきっかけに、他のメンバーもようやく先ほどの映像の衝撃から抜け出し、各々思考を回転させ始める。

美遊も別の意味で凍りついていた体を再稼働させた。

すっかり冷めてしまった紅茶を潤滑油のように流し込み、泣きたくなるほど懐かしい味のクッキーを燃料として頬張る。その甘味や風味は美遊の温かい記憶を呼び起こし、冷たく凍えた心もその暖気ではぐれ始めた。

イリヤの持ってきたクッキーは、不思議と『元の世界』に残してきた家族が振る舞ってくれた味とよく似ていた。美遊の知るものよりは洗練されていたが根底のベースとなるものがそっくりだったのだ。

フェイカーのイリヤへの態度といい、彼の手の温かさといい、何故こうも美遊の兄を思い出させるものと遭遇するのか……。

美遊は頭を振りかぶり、その疑問を頭の隅へ追いやった。今はあの時に聞くことができなかつたフェイカーの言葉の検証が先だ。

フェイカーと騎士王との戦闘や抱擁、キスなどは、その場において実際に目撃していた分、凜たちよりも驚きは少なかつた。しかしフェイカーの零した「聖杯」という言葉に、美遊は自身の心臓に氷の杭が打

たれたかのような衝撃を感じたのだ。

槍兵と化したイリヤの放った一撃の後、イリヤでは無く美遊に向かつてきた騎士王。

——あれは美遊という聖杯を求めてきたのではないか。

深読みかもしれないが、その可能性がゼロであるとは限らない。クラスカードは、『聖杯（美遊）』のために作られた礼装であるからだ。そしてフェイカーは、騎士王が聖杯を求めていることを知っていた。

（私が聖杯だと気付いている？）

美遊にとつての最大の懸念はその点にあった。

己の出自は特殊過ぎる。知れば誰もが利用しようと手を伸ばしてきた。

最初は交渉、次は恐喝に脅迫、最後は力尽くで、美遊を手に入れようと画策してきた。

美遊一人では対抗することも、逃げることさえできなかつただろう。

守ってくれたのは一緒に暮らしていた家族だ。彼らが敵と立ち向かい、戦ってくれたおかげで美遊は今、ここにいる。

だが美遊を狙う者たちの中には、時に卑劣極まりない手段と方法で無関係な人々を巻き込む輩もいた。

もしフェイカーが『聖杯（美遊）』を手に入れるために、イリヤたちを巻き込み利用しようとしたら……美遊は大人しく身を委ねるしかないだろう。

自分のせいで、せつかく友達になってくれたイリヤが傷付くなど、きつと耐えられようもないから。

兄の願いも反故にしてしまうが、それが美遊にとつての願いだから仕方ない。

美遊は家族も含め、他の人が自分のために傷つくたびに、自らの業の深さに慄いてきた。

なぜ聖杯などに生まれついて来てしまったのだろうか？　そもそも、他人に迷惑をかけるしかできない私が生きていいのか？

何度そんな問いを繰り返したか。

美遊の家族はそのたび、美遊は生きていていいのだと、美遊にも幸せになる権利はあるのだと、肯定してくれた。聖杯などにならなくてもいい、美遊という人間であればいいと抱きしめてくれた。

だからこそ、美遊はイリヤの友達として、自分の意志でイリヤを優先させる。居場所をくれたルヴィアや、気にかけてくれる凜も同様である。

……自分が身を差し出すことですべて丸く収まるならそれで構わない。

美遊はそう思い、再びクッキーに手を伸ばした。

(やっぱり美味しい)

口に広がる優しい味わいは家族との思い出も相まってか、悲観的な方向に目を向けていた美遊の心を上向きにさせる。

そうだ、まだフェイカーが『美遊Ⅱ聖杯』だと気付いたとは確定していない。

アーサー王が聖杯を求めるのは、聖杯探求のエピソードでもよく知られている事実だ。

フェイカーはその事実をもって、騎士王に言葉を投げかけたのかもしれない。

ならば、かまかけでも何でもして確認したらいいのだ。

(それにイリヤが英霊化したことについても、訊かなくちゃ)

昨夜、凜がクラスカードの仕様についてフェイカーに説明した時の反応。「英雄の宝具を具現化する」の部分で怪訝そうな顔をしていた。また「イリヤはまったくの一般人」の説明でも同様な反応であった。

つまり、フェイカーはイリヤが槍の英霊と化して、騎士王と一騎打ちしたのを目撃しているのである。もともと、その前のキャスターを討ったのもフェイカーの作業らしいので、当たり前かもしれないが。

幸いにしてルビーの記録は、イリヤの英霊化が解けた後から始まっている。またイリヤ自身の記憶も残っておらず、英霊化の事実を知るのは美遊とフェイカーのみ。

(クラスカードの本来の使い方は、この世界において強大過ぎる)

なにせ力の一端とはいえ、英霊自身の能力をその身に降ろし、自在に操ることができるのだ。生半可な魔術師では太刀打ちなどできない。最悪、このカードを巡って戦争が起きる可能性もある。

クラスカードは元々、美遊と共にこの世界へやってきてしまった物。原因は美遊にある。

これ以上この世界に災厄を振りまくわけにはいかない。

イリヤが何故、あのような大容量な魔力を備え、クラスカードの本来的使い方を知ったのかはいくら考えても謎のままだが、イリヤ自身が覚えていない以上、美遊が口を閉ざし、フェイカーの口を封じさえすれば、イリヤは一般人のままではいられる。

……強大な力は否応なく争いを惹きつけてしまう。そうなればこの温かい平和な日常は脆くも崩れ去ってしまうだろう。イリヤにはそんな状況に陥って欲しくないのだ。

この世界の皆が幸せであること。それが今の美遊にとっての戦う理由の一つとなっていた。

「フェイカーは現代の魔術師。アーサー王は中世の英霊。そうそう都合のいいロマンスなんて転がっていないわ」

凜の発言を皮切りに、凍り付いていた会議はようやく回りだした。

まずはイリヤが凜の言葉に反論の声を上げる。

「えっと、でもフェイカーさんの態度とかどう見ても、黒騎士——アルトリアさんとただならぬ関係がありそうな様子だったよ？」

イリヤからすれば、両親と同じくらいの親密さだったと断言できるレベルだ。

「そこが不可解なところですね。フェイカーは伝説のアーサー王の真名『アルトリア』という女性名を知っていた——伝承ではアーサー王は男性と伝わっていますのに——つまり、生前の騎士王を知っていたということですか？」

口元に手を当て、ルヴィアは疑問点を明確にする。

「アルトリアさんが伝説のアーサー王ってことは確定なんだ」

あんまり王様っぽくなかったけどなー、とイリヤはひとり呟く。確

かに品格というか、凜とした風格はあったが、最後に見せた表情はまるつきり年頃の女の子のようだった。

「あの少女が伝説の騎士王であることに疑う余地はありませんわ。英霊の象徴たる宝具、『約束された勝利の剣（エクスカリバー）』の真名解放ができるのは、使い手であるアーサー王だけですもの」

実はアーサー王が男性では無く少女だったことに、ルヴィアも内心では驚愕に打ち震えているのだが、あくまで淑女の体を崩さずに断言する。

伝承とはさまざまな思惑によつて様相を変えるものである。当時から男装などでして正体を隠していたのならば、女性だったという事実は完全に歴史の影に埋もれてしまうだろう。特にアーサー王ほどの英傑なれば、後世になればなるほど、尾ひれがついてしまうものだ。もつとも本筋たる妃グイネヴィアとの結婚のアレやソレは、少女の体でどうしたのか、と疑問は尽きない訳だが。

「騎士王に対して『聖杯を求める必要はない』と言っていたのは、やっぱり聖杯探求の伝説からの言葉でしょうか」

美遊がぼつりと言う。ルヴィアは頷いて、己の推論を重ねて言った。

「ええ、恐らくフェイカーの台詞の中の『聖杯』はアーサー王伝説に登場する『聖杯』で間違いないですわ。伝説では円卓の騎士の一員であるガラハッドやパーシヴァルが探求の旅に出ていますが、アーサー王も望みがあつて、騎士たちに探索を命じたのでしよう。あの慟哭といふ相当強い願いをかけていたようですね」

もつとも、伝説ではあまり騎士王の願いについては描写されておらず、騎士王の正体が少女であつたことと同様に、それも削り取られてしまった歴史の断片なのだろう。

「フェイカーさんはその願いを知っていて、『もう、いいんだ』って声をかけたんだよね？アルトリアさんの願いつてどんなものだったんだろう？」

たとえ優しい声だったとしても、フェイカーは騎士王の願いを否定したのだ。英霊となつてもなお求めた願いは、フェイカーが諦めさせ

なければならぬほど、間違った願いだったのだろうか？

「アーサー王の願い——それは映像の中の最期の台詞に出てきた『鞘』と関係があるかもしれないわね。『鞘』とは聖剣エクスカリバーと対をなす、失われた伝説の鞘のことだと思われますわ。もつとも何故アーサー王がフェイカーを『鞘』とみなしたのかは全くの謎ですが」

ルヴィアが黙考に突入する中、会議から離れ一人ブツブツ呟くのはもう一人の魔術師、凜である。

「時空を超越した？ いや、未来から過去への干渉は魔法の領域だし。フェイカーはアーサー王と同時代の人物？ 何百年も生きてきた魔術師ってこと？ ——つまさか！」

唐突に顔をあげた凜は凄惨な形相でルビーを呼びつけた。

「ルビー、フェイカーが死徒の可能性ってある？」

突然出てきた専門用語に、イリヤはちやうど近くにいたサファイアへ意味を尋ねてみる。

美遊も知らない単語だったので、そつと耳をそばだてた。

「シトって何のこと？」

「死徒は簡単に言うとお吸血鬼のことです。強大な力を持つ者は何百年と生き続けます」

サファイアの簡潔な解説に、イリヤは納得しかけ——吹き出した。

「え？ え?! 吸血鬼?! 本当にいるの?! フィクションじゃなくて?!」

美遊も驚きに目を見開く。きわめて近い世界だと思っていたが、まさか吸血鬼がいろいろとは。

「吸血鬼はもちろん、幻想種も希少ですがおりますわ。そもそも、私たちが師事しようとしている当代最高位の魔法使い宝石翁は、死徒二十七祖の一人ですわよ」

黙考から復帰したルヴィアの自慢げな説明にも、ピンと来ないイリヤ。

「よく分かんないけど、死徒って人の血を吸うんだよね？ その人は

大丈夫なの？」

「大丈夫ですよー。あのジジイくらいのクラスになると吸血衝動はほぼ完璧に制御できますからー。もつともその他の死徒は基本的に、人間を血袋としか見ていませんですけどー」

ルビーは平坦な調子で言う。なにか宝石翁という人物について嫌なことでもあったのか。というか、

「なんかすごく物騒な単語が聞こえたんだけど。……血袋って」

一般家庭で育ったイリヤにはまるで縁のない言葉だ。もつとも、ホラーゲームや小説などでは登場するため、意味だけは分かっています。だが。

「宝石翁はあくまで例外。一般的な死徒は人間を襲って血を啜り、ときには手下として知能の無い食屍人（グール）を生み出すわ。こいつらが街に発生したらとてつもなく厄介なのよ。しかも、年月を重ねた死徒は各々の性能を磨き上げて、人知を超えた能力を持つようになる。——それこそ、英霊とも渡り合えるくらいの」

凜が険しい顔で語る。

死徒が冬木に出没したのならば、早急に手を打たなければならぬのだ。冬木の地の管理人として、街が狩場となるような事態を見過ごすことなど出来ない。

「つまり、フェイカーが中世から生きている死徒だという可能性は高いと——」

「その可能性はありませんよー。まったくのゼロですー」

美遊がだした結論を、ルビーは最後まで言わせずぶった切り、凜の推測をぽつきり否定した。

「ちよつとルビー！ 何の根拠があつてそう断言できるのよー！」

「うーん、直感？」

「殺すわよ」

ルビーのふざけた回答に、凜がどこから出したか分からない刃物を突き付ける。

あれは本気（マジ）だ。

「嘘ですってー。ちよつとボケてみただけじゃあないですかー。もう

！ 根拠はこれです！」

シャキーン！

ルビーの金色の輪の内側に網目のようなラインが引かれ、魚群探知機のように中心から伸びた光の針がグルグルと回りだす。

「24の秘密機能のひとつ『死徒探知機（ジジイ・センサー）』！ これは常時稼働していて、死徒であれば大抵の偽装魔術も看破しちゃう優れものなのです！」

「なんでそんな機能が」

もはや何でもありなルビーの機能に、イリヤは疲労を感じつつ、ついツツコミを入れてしまう。

それを拾ったのは、もつともルビーに事情通な妹のサファイアだ。

「それは昔、大師父が趣味で用意していた美女の生血が入った輸血パックを、ルビー姉さんがマムシの血と入れ替えるイタズラを行いまして。それはそれは壮大な鬼ごっこが展開されました」

（月落としさえ止める化け物相手になんて恐ろしいことを）

宝石翁の逸話を思い出し、背筋が冷たくなるは魔術師二人。

（美女の血って……血を飲むことはあるんだ）

あくまで人血を摂取することに注目するは一般人代表のイリヤである。

「いや〜ジジイの鉄拳からの逃避行に、ルビーちゃんは死ぬ気でこれを開発しましたよ」

「最後には解体手前の制裁を食らっていましたが」

「その時くらいは姉さんを庇ってくれてもよかったじゃないですかー。ただ傍観してるだけなんてー、サファイアちゃんのいけずー」
「自業自得です」

サファイアの容赦ない態度に、ルビーはよよよ、とわざとらしく泣き崩れた。

しかし、誰もルビーを気にかけていないと分かると、次の瞬間には何事もなかったかのように宣言する。

「ともかく、フェイカーさんはセンサーにまったく反応しませんでした！ 彼は死徒ではありませんーん！」

「なら、どうすれば現代の魔術師が、中世の英雄とただならぬ関係になれるのよ」

頭を抱える凜に、イリヤは思いついた逆転の発想を投じてみることにした。

「んー、今の話だと、フェイカーさんが生前のアルトリアさんと一緒にいた、つて感じだったけど、逆の可能性は？ 英霊になったアルトリアさんが、現代に生きるフェイカーさんのところに現れたりしたとか」

素人の考えに、一流の魔術師を自負するルヴィアは鼻で笑って答える。

「ありえませんか。英霊とは招かれる存在。つまりは魔術師が召喚の儀を行わなければ、現れるはずの無い存在ですわ。」

フェイカーは守りの魔術も纏えないような三流魔術師でしてよ。英霊の召喚など、降霊を極めた一流の魔術師が周到な用意を重ねたとしても、成功する確率は相当に低いですわ。

例え成功したとしても、現界を維持するのは高々一個人の魔力量では精々一時間も持ちませんのよ。その中でどうやって親しくなれるというのです?」

「さーに言えば、召喚できるのなんて、英霊の端末のような分身に過ぎないわ。短時間でどれだけ親しくなろうとも、その記憶は『座』に還ってしまえばただの『記録』に過ぎなくなる。……この話は時計塔の講師の受け売りだけどね」

凜がルヴィアの論に重ねて言う。

「記憶と記録ってどう違うの?」

どちらも似たような意味だと思うんだけど。

イリヤの質問に、凜は眼鏡の端をくいつと上げて答えた。

「例えばあなたを主人公とした物語の本があるわ。内容は恋愛もの。あなたはひどくその話の主人公に共感する。さて——イリヤは物語の中の彼氏に本気で恋することができるかしら?」

「う、それは無理かも」

例え好きな漫画の主人公に置き換えてみたとしても、物語の中の人

物を現実の恋人に据えるなど、できそうにない。

「そういうこと。『記憶』なら実感を伴った経験だけれど、『記録』と違ってしまえば、ただの物語——知識に過ぎなくなる。

だから、英雄が英霊になった時点で現世の人間と恋仲になるなんて、有り得るはずが無いのよ」

その後も凜とルヴィアが、魔術的専門用語を交えつつフェイカーとアーサー王の関係を推測していくが一向に結論は出ず。途中から専門的すぎて話についていけなくなったイリヤと美遊が暇を持て余しだした頃、ルビーがやれやれと口を開いた。

「お二人とも。いい加減、フェイカーさんとアルトリアさんの関係を邪推するのをやめにしませんか。彼氏いない女子のひがみになつてますよー。」

「だいたい、フェイカーさんはこちらのクラスカード集めに協力してくれるわけなんですからー、フェイカーさん自身について、まずは考えるべきじゃあないんですかねー」

「最初に二人の関係について、妄想を膨らましたあんたに言われたくはないけど」

額に怒りのマークを浮かばせた凜へ、イリヤは冷却剤として残り僅かになったクツキーを差し出す。やつと会議に復帰できる流れを、切りたくはなかったのだ。

「それにフェイカーは、私たちの知らないカードの知識を持っていました。彼が語った情報はほとんど予備知識のない私たちにとつて有効だと思えます。それを踏まえた上での今後の行動を話し合うべきです」

美遊も残り少なくなった時間を気にして、ルビーを援護する。

「……そうすわね。美遊の言うとおり、解答が確定できない以上、より建設的な議論を重ねた方がよろしいですわ」

「二つのことをいつまでも追及する魔術師の悪い癖が出ちゃったわね。いいわ、この話は後にしましょう」

現実的な美遊の意見に、ルヴィアと凜は、既に机上の空論の域まで

推測を広げてしまったフェイカーとアーサー王の関係について、一時的に棚に上げておくことに決めた。

「なら、まずはフェイカーの目的よね。建前としては『冬木に発生した歪みを正す』と言っていたけど、本当の狙いは何なのかしら？」

「建前って……。カードの歪みって、放っておいたら大変なことになるんだから、それに駆けつけてくれたフェイカーさんって単純にいい人じゃないのかな」

凜の穿った意見に、イリヤは反論してみる。イリヤにとって、フェイカーは自身のピンチを救ってくれた恩人であるからだ。

「フェイカーが魔術師である以上、己にメリットが無ければ動く理由にならないわ。心の中ではこれを機に冬木の霊脈を乗っ取るとか、クラスカードを持ち逃げするとか考えているかもしれないし」

凜は、過去に侵入してきた在野の魔術師たちを思い出しながら言う。父から遠坂家を受け継いだときから、懇意している冬木の教会の手を借りつつ、冬木の霊地を狙う魔術師たちを今まで撃退してきたのだ。セカンドオーナーである『遠坂』に挨拶もなしに冬木に踏み入る輩に対して、凜は油断なく慎重に対処するようにしていた。

「それにしては魔術師にあるまじき思考をしておりますけれど」

ルヴィアがフェイカーの言動を思い出しながら言う。

根源を指摘しているわけでは無いと、魔術師を根底から否定するフェイカー。英霊の『座』に繋がるクラスカードを、抑止力が働かならば、ためらいもなく破壊すると言い切る彼は、魔術師の枠を外れた存在だ。

そこでふと、違和感を覚えてフェイカーの言葉を復唱してみる。

「英霊の『座』まで干渉して『くる』魔術礼装だ——？　なぜ、『干渉する』では無く『干渉してくる』という言い回しをしたのでしょうか？」

その呟きはあまりにも小さく、誰にも拾われることはなかった。

ルヴィアは首を軽く振り、今はフェイカーに対する対応について話し合うことが優先と、先ほどの二の舞を避けるべく、その疑問を胸にしまいこんだ。

「またフェイカーは『アーチャー』のカードを利用し、キャスターを撃破していますわ。魔術協会でもあまり解析は進んでおりませんが……。カレイドステッキに頼らず『限定展開（インクルード）』するなど、カードの正しい使い方を知っていたということですよ」

「イリヤがカードを失くしたのも、実はフェイカーが隙をみて盗んだのかも」

ルヴィアの意見に付け足すように、美遊も述べる。

「あはははは」

イリヤとしたら、フェイカーのような特徴ある男とすれ違った覚えもないので、盗んだ云々に関しては、乾いた笑みを返しておいた。……下校前にはきちんとポケットに入っていたはずなので、帰宅途中で落とした可能性が一番高く、イリヤが失くした事実には変わりないのである。

「フェイカーは鏡面界についても何か勘付いたようだったわ。セイバーのカードが回収されても空間の崩落が始まらないことに関して、意味深げに一人で納得していたし」

凜が続けて考察に入った。口元に手を当て眼鏡姿で考え込む姿勢は、まさに研究者らしい恰好である。

「それに、まだ判明していない残りのカードのクラス名をフェイカーは知っていた。つまりクラスカードをよく熟知しているってことだわ。その証拠に、『ライダー』の英霊が女性体と知っていたし、残りの『アサシン』や『バーサーカー』についてもわざわざ忠告してきた」

「それにしても、わざわざクラスカードや鏡面界のことを尋ねてきましたけど」

凜の断定に茶々を入れるルビー。さっきのやり取りの意趣返しか。「あれはこちら側がクラスカードについて、どれくらい把握しているかを探っていただけよ。わざとらしく惚けたりして……ああ、思い出したら腹が立って来た。何が『とっとと家に帰りましたまえ』よ！ 子供のおつかいじゃあるまいし、恰好つけてんじゃあないわよ！」

突然の凜の爆発に、唯一フェイカーとのやり取りを聞いていないイリヤは戸惑うしかない。あ、しまった。もう鎮火用のクツキーはない

んだっけ。

「フェイカーさんって、しゃべったらどんな感じの人なの？」

こそつとイリヤは小声で聞いてみるが、美遊は困った顔をして目線を逸らしてしまう。

代わりに耳ざとく聞きつけた凜が、勢いよく見解を吐き出した。

「フェイカーは皮肉と嫌味たっぷりの食えない男よ。常に上から目線で、偉そうで。こっちの臨界点の限界をわざわざ試してくるようなやつね。ついでにロリコンの気がある」

「えっ、そんな感じなの？ あとロリコンって……」

イリヤは確かめるように再度、美遊に視線を送る。

映像で見た感じでは、それほど嫌な性格の人物には見えなかったのだが――。

「……だいたいは合ってる。さすがにロリコンは違うと思うけど、私に対する態度は、凜さんやルヴィアさんたちよりも柔らかかった。たぶん、そんなに悪い人ではないと思う」

「そ、そうなんだ」

美遊の肯定にショックを受けるイリヤ。凜の語った人物像なら、なるべく相手になりたくないと思ってしまうのであった。

「それでも美遊、あんな得体のしれない男にほだされてはなりませんわ。フェイカーの食えないところは他にもありましたよ」

ルヴィアは美遊に注意を促しつつ、フェイカーに対する意見を述べる。

「なぜカードに対応した英霊たちを知己のように語るのか、『なぞり』とは一体何に対してのものか。説明を放棄して、こちらを混乱させる目的を含んだ情報提供でしたわ。

信用できないが、その情報に縋るしかない。そんな状況を作り出すフェイカーの駆け引きの強さ――正直に言ってやりづらいですわ」「こちら側に信用してもらいたかったら、もっと言葉を尽くして理解を得られるようにしないとダメよね。強引な行動の上、結果から意図を察しろと言われているようなものだもの。

――いったい誰が、そんなヤツを信頼できるって言うのよ。

説明する暇がない？ 私たちが信じられないような理由があるから？

甘えてんじゃないわよ！ そんなの、他者とのコミュニケーションを放棄している言い訳だわ！ もっと誠意を示しなさいよ、誠意を！」

感情のままに口走る凜に対し、ルビーはニヤリと羽をくねらせる。「あら、そんなにフェイカーさんを気に掛けるなんて。実は気になつたりとかしちやってます？」

「なつ、何を馬鹿なこと言ってるのよ！」

顔を真っ赤にしつつ、ルビーに怒鳴り散らす凜。

ああ、あの感じはルビーの恰好の餌食だよね、と遠い目をしつつ、イリヤは時間が残り少ないことから、まとめのつもりで口を開いた。

「じゃあ今度フェイカーさんに会ったら、もっと詳しく問い詰める方向でいいのかな？」

クラスカードの回収は手伝ってくれるみたいだし、まずは力を合わせてカードの確保ってことで」

「そうですね。フェイカーはあの騎士王とも渡り合える技量をお持ちですもの。せいぜい使い潰して差し上げますわ」

「カードを手に入れたらすぐフェイカーを確保。この前にみたいに逃走はさせないわ」

ルヴィアが凄絶な笑みを浮かべ、凜はルビーを撃墜させつつ応える。

「……フェイカーには訊きたいことがたくさんある。油断はしない」

美遊は別の意味も含ませ、決意を固めた。

全員一致でフェイカーに対する方針が定まり、凜が会議を締めくくる。

「じゃあ、これでフェイカー対策会議は一旦お開きにするわ。」

少し遅くなったけどいい時間だし、残りのカードへの対抗策は車の中で話し合いましたよう」

エーデルフェルト家のリムジンに揺られ、残り二か所となった歪み

の内、郊外の森へと四人とステツキ二本は向かう。

なぜ比較的近い新都にある歪みでは無く、こちらを選んだかと問えば、あちらの歪みが特に酷いからだそうだ。

恐らく『バーサーカー』のクラスが関係しているのではないかと、という推測と、フェイカーの忠告にあった、12の必殺技の用意が間に合わなかったことから、今夜は森に潜む『アサシン』のカードを回収することにしたようである。

フェイカーと遭遇する確率は二分の一であるけれど、残り一枚となれば確実に会える。

イリヤは期待と不安で胸を膨らませつつ、車に揺られていた。

命の恩人には直接お礼を言いたいけれど、凜の言う通りの性格ならば、話すのはちよつと怖い。

実体化した英霊と戦うことに関しては、そんなに不安は感じていなかった。こちらにはルビーも美遊もいるし、バックとして凜もルヴィアもついて来てくれている。

さらに騎士王と渡り合ったフェイカーも加われば、負けるイメージなど思い描けそうにない。

だから、イリヤは軽い気持ちで鏡面界へ跳んだのだ。

作戦通りなら、負けるはずが無いと樂觀して。

だが、それはただの慢心だった。

反転した世界の先、予想外の光景を目の当たりにして。

イリヤは甘くはない現実を思い知る。

「えっ、フェイカーさん……？」

暗い陰のある森の中。

数十人もの黒い影に囲まれ、傷だらけで片膝をつく男の姿があった。

（間に合わなかったか）

アーチャーは内心で舌打ちをした。イリヤたちが到着する前に、決着を付けられなかった自責の念が胸中を駆け巡る。

相手は『気配遮断』のスキルを持つアサシンであり、しかもアーチャーの記憶にはない宝具を使用しているのか、恐らくあと数十人はこの森に潜んでいる。

魔力が潤沢にある訳でも無いアーチャーが、長期戦に持ち込まざるを得ない事態になったのは甚だ本意であった。本来ならばさっさと仕留めて、カードを置いて去ろうという予定だったのだが。

まさか理性が無いはずの『英霊の現象』が、連携をとりつつ集団で向かってくるなど誰が予想できただろうか。

（巻き込みたくはなかったが、仕方がない）

アーチャーが片膝をつき動きを止めたことで、敵は好機とばかりにその包囲を狭めているはずだ。

そこでアーチャーが今まで打ってきた布石が生きる。

正直に言えば、まだ敵を全滅させるには不十分だ。しかし、戦闘経験の少ないイリヤたちがこの『気配遮断』スキルを有するアサシン数十人を相手にするのは、カレイドステッキがあれども、厳しいと言わざるを得ない。

ならば、少しでも多く削ってしまうのがよからう。

「全方位防御結界を張れ！ 今すぐだ！」

現実世界へ接界（ジャンプ）させるよりも、防御させた方が早い。

二機のカレイドステッキは、持ち主たちが指示を出すよりも先に魔術障壁をドーム状に出現させる。

見たところランクAはあるだろう。あれならば問題ない。

アーチャーは投影していた剣を地に突き立て、トリガーとなる一節を呟く。

「壊れた幻想（ブローケン・ファンタズム）」

神秘を伴う閃光と爆発が、暗い森を白く染め上げた。

(——それで、貴様はいつまでそう拗ねているつもりか)

「別に拗ねているわけじゃない」

イリヤを見送った途端、眉間にしわが寄ってしまうのを抑えられない士郎に、アーチャーは呆れたように声をかけて来る。

(顔と口に出してしまっている時点で、心情がただ漏れだな。そのようでは先が思いやられる)

「うるさい！　これはただ、クツキーの形が不揃いになったことが不満なだけだ。あの話に関して納得はしてるんだ！」

玄関から二階に通じる廊下で、声を荒げる士郎に送られるのは、嘲笑交じりの皮肉だ。

(イリヤスフィールがいなくなった途端、普段の態度が崩れるのは未熟な証拠だ。どこに目と耳があるか分からない状況でこの醜態をさらすなど、鍛錬が足りん)

士郎は足早に階段を上りきり、自室のドアをやや乱暴に開ける。

そして、そのままの感情の勢いでベッドの端に腰を落とした。

士郎の不機嫌の理由など、アーチャーにはとっくに見透かされている。

先ほどの言い訳じみた言葉で紛らわした本心も分かっているのだから。

アーチャーの嫌味には耳を塞ぎたいが、生憎こいつがいるのは己の内だ。まだ言い返すことに頭を使った方が建設的には違いない。

「……俺は今まで家族に対して隠し事はしてこなかったし、する必要もなかった。だから鍛錬が足りないなんて当たり前だ」

士郎がひねり出した返しの刃は、アーチャーには少しも届かなかったよう。

(泣き言だな。もっとまじな返しを考えてこい。迂闊な発言は付け込まれる隙になる。)

ちなみに私への返答は口にする必要はないのだが、周りから独り言

の多い変人と思われたのか?)

バツサリと切り捨てられた。

士郎は再沸騰する苛立ちを言語変換するよりも先に、拳を振り上げる。

やり場のない感情の発散先に選んだのは——ぼふつとマヌケな音を立てる枕である。

自室に戻ったとはいえ、大きな物音をたてるのはまずい。そのくらの分別はさすがに士郎も持っていた。

内にいる皮肉屋が浮かべているであろう、憎たらしい表情を枕に投影しつつ、ぼこぼこになるまで殴る。

アーチャーの指摘は正しい。

確かに知らない振りをしていくことは、この日常を壊さないためにも必要だろう。

だが。

(イリヤが危険な場所に飛び込んでいくのを、俺はみすみす見送るところしか出来ないのか)

アーチャーから聞いた、イリヤの生まれ。

イリヤの無事を確かめる際にかけた、アーチャーの解析魔術で判明した事実。

『ある大魔術の儀式の一装置として製造されたホムンクルス』

それが、イリヤの正体なのだという。

それを聞いたとき、真っ先に抱いたのは、ふぎけるな、という怒りだった。

イリヤはどこからどう見ても、普通の女の子だ。

笑って、泣いて、怒って。学校の友達と仲良く遊んで。最近ではマンガやアニメにも夢中になって。いろんな表情を見せてくれる年頃の女の子だ。

ずっと家族として傍で暮らしてきた士郎は断言できる。決して魔術に関わるような——それこそ非人間的な、装置などでは無い。

アーチャーもその点は認めていた。確かにこのイリヤスフィールは、生まれがどうであれ今は普通の少女として生活を送っている、と。

(おそらく貴様の養父である衛宮切嗣、そして養母であるアイリス・フィール・フォン・アインツベルンがそう望んだのだろう。魔術師の悲願ともいえる『根源』へ至る道を捨て、装置として調整し生み出した実の娘の幸せを願うとは……なかなか奇矯な人間だよ、彼らは) 僅かに哀切が伴ったアーチャーの声音に、一時的に怒りが和らいだ士郎だったが、

(それにしても混ぜ方が悪い。生地は切るように軽く混ぜなければ食感が台無しだ。そろそろオーブンの予熱もした方がいいだろう——) どうした、親切にもアドバイスしてやっているのに、それすらもできないいのか)

続くアーチャーの辛口な指導に、猛然と腕を動かすこととなった。そう、アーチャーが知った諸々の事情説明は、何故かイリヤに持たせるクッキーづくりと並行して行われたのだ。

きっかけは、クッキーを焼く用意をしながら、いつの間にか鞆に入っていた見慣れない赤い包みを解いてしまったことか。

再びアーチャーと会話ができるようになり、隣の豪邸にイリヤが泊りに行くので、手土産にクッキーを焼くのだと現状を説明した、次の台詞がこれだ。

(豪邸か……無様なものを晒して、イリヤスフィールに恥をかかせるわけにはいかんからな。私が手伝ってやろう)

あまりの言い草に、士郎はぶっきらぼうに断りを入れた。

「いいよ。これでも評判はいいんだ。第一、お前は料理できるのかよ」(愚問だな。今日の朝食は私が作ったのだが、お気に召さなかったのかね？ また評判がいいと言っても近所付き合いの中であろう？ 家庭の味の域を出ないと思われるのだがな。それで舌の肥えた上級階級の人間に通用するか怪しいものだ)

夕飯にでた朝食の残りを、美味しいと称賛してしまった前科もあり、ぐうの音も出せなかった士郎は、結局アーチャーのアドバイスを受け入れてクッキーづくりを開始したのだ。

材料は用意した分しか使わなかったが、その分手順や技巧的なやり方など、高度な技術を要求され、アーチャーからの指示をこなすこと

で士郎は手一杯になってしまった。

しかも、アーチャーは時間が無いことを理由に、指示の合間にアーチャーが把握している今の状況を語ったのだ。

クツキーの形が多少、不恰好になってしまっても仕方ないだろう。

(クラスカードに魔術、英霊。そして——じいさんとアイリさん)

アーチャーは、士郎が何も知らず魔術になど関わっていない立場でいることを推してきた。曰く、余計な真似はするな、と。

この家はあえて魔術的な守りを排している。それも魔術的価値のあるイリヤを狙う外敵に見つからないようにと、養父母が打った策の一つなのだそうだ。

士郎はまさか養父母も魔術師だとは思ってもいなかったので、告げられた際はひどく動揺して、かき混ぜていたボウルを危うく落としそうになった。

(魔術装置としてホムンクルスを生み出してきた家系だぞ。アイリスフィールは外見からしてその血筋であることは明白であるし、その家の婿として迎えられた切嗣も魔術に関わる者であると考えるのが自然だ。

ちなみにハウスメイドの二人も、恐らくは護衛として生み出されたホムンクルスだろうな)

アーチャーの追加のダブルパンチに、士郎はノックアウト寸前にま でなった。

(セラとリズもホムンクルス?! そんな馬鹿な。……あ、でも10年前から全然老けた感じがしないのは、それだからなのか?)

呆然としたのも束の間、アーチャーの監督下で手を止めている余裕は無く、その時は慌ててクツキーを絞り出す工程に取り掛かる羽目になった。

(それにしても、イリヤが魔法少女なんてな。……ここ最近、様子が少しおかしかったのは、そのせいかな)

イリヤは今、クラスカードの回収という訳の分からない事態に巻き込まれているそうだ。

アーチャーが言うには、非常に厄介な性格の魔法のステッキが、イ

リヤを魔法少女としておもちゃにしたかったから、らしい。……なん
で。

カード回収は魔術協会という組織から、遠坂とルヴィアが任務とし
て請け負っており、本来ならば彼女たちだけで十分のはずが、その魔
法のステッキと意見の相違があり、イリヤが参戦するようになったそ
うだ。

幸いなことに、イリヤはただの普通の一般人と思われるよう
で、このカード回収が終わったら、魔術世界との縁が後腐れもなく切
れるはずだという。

なぜならば魔術は基本的に一般には秘匿されるべきものであり、イ
リヤ（一般人）の参戦は遠坂たちにとって非常にまずい事態だからだ。
アーチャーの見立てでは、イリヤに関して二人は協会へ報告しない可
能性が高い、とのこと。

士郎からしてみれば、妹と同級生の命を失うような危険な行為は止
めさせたい。

昨夜のクラスカードが引き起こす歪み——鏡面界と英霊の現象を
目の当たりにした経験から、士郎は強くそう思う。

何か間違いが起こってからでは遅いのだ。事実、遠坂とルヴィアは
黒騎士の一撃に飲み込まれ死んだと思ったのだ。その時の後悔は今
も生々しく思い出せる。

しかし、士郎が口出しすれば、クラスカードのことを何故知ったの
かという経緯から、遠坂とルヴィアに変に勘ぐられ、養父母の策を台
無しにしてしまうだろう。

よって、士郎はただ何も知らない振りをして、傍観していなくては
ならないのだ。

「俺はアーチャーを頼ることしか出来ない」

士郎はそう呟いて、やっと殴る腕を止めた。標的が枕であったゆ
え、拳に怪我は無いが、それがいつそう無力感を募らせる。

士郎はポケットに入れていた『アーチャー』のクラスカードを取り
出して、改めて観察する。この手の平に収まるカードが、全ての始ま
りだった。

クラスカードに宿る無銘の英霊、アーチャー。

昨夜からの非日常へ士郎を導いた元凶にして、イリヤたちの助けとなれる唯一の希望。

(……『夢幻召喚(インストール)』か。俺が必要だと言っても、実際に戦うのはアーチャーなんだよな)

士郎がたまたま拾ったこのカードは、実はとてつもない力を持つ魔術礼装らしい。

世界の外側に構える『座』に干渉し、英霊の力の一端をその身に宿す力を持つ。『根源』を指す魔術師からすれば垂涎の的だそう。今はこの地の霊脈を歪め、最悪の場合、大災害を引き起こしてしまう代物だが、更に注目が集まれば、手段を問わない厄介な魔術師も惹きつけてしまう可能性もある。

よって早期の回収が望まれ、カードを回収した後は遠坂とルヴィアの任務にかこつけて、押し付けてしまうのがいいらしい。

遠坂やルヴィアにクラスカードを渡しても大丈夫なのか、と若干の不安を覚えたが、何故かアーチャーは問題ないと太鼓判を押した。曰く、彼女たちの誇りにかけて、無事に処理するだろう、と。

実際に魔術師としての遠坂やルヴィアと対面したアーチャーだからこそ言えるのだが、初対面でそこまで内面を推し量れるのだろうか？

士郎は多少の引つ掛かりを覚えつつ、『アーチャー』のカードをもてあそぶ。

このカードは恐らく、クラスカードを回収していたイリヤが落としたものなのだろう。

本来ならばすぐに返してやりたいのだが、アーチャーがイリヤたちの前に姿を現し、クラスカードを回収すると宣言してしまった手前、渡すことは出来なくなってしまった。

アーチャーが現界し戦うためには、このクラスカードが必要不可欠なのだ。

そもそも、アーチャーは意図せずしてこのカードに呼びだされた英霊なのだそう。本来ならば『英霊の力』の一端のみが写し取られる

だけのはずが、靈格の低いせいか『英靈の意志』までもが取り込まれてしまったらしい。

しかもイレギュラーな発動をしたせいか、士郎とラインが繋がりに、今の状態となつているとのこと。

本当ならば無銘の英靈であるアーチャーが戦う理由など無いはずだ。それなのに縁もゆかりもないこの街のため、そしてイリヤたちのために剣を取ろうとしてくれている。

もつとも、あの黒騎士には深い因縁があつたようだが――。

士郎はあの柔らかな感触を思い出してしまい、一人顔を赤くする。(あのことは黙っている方がいいかもな。アーチャーに話してもしたら……後が怖い)

アーチャーは『夢幻召喚(インストール)』で意識が表に出た際、士郎が内側でアーチャーの感覚を共有していることに気が付いている様子はなかった。よって、アーチャーはあの黒騎士への言葉は誰にも聞かれていないと思つている。士郎が聞いていたと知つたら、羞恥心のあまり、何かをこじらせて徹底的に攻撃して来そうである。もちろん言葉攻めで。

ちなみに今の状態では、士郎がそう思わなければアーチャーへ向けた言葉は伝わらず、心の中の独り言は聞こえないらしい。もつとも五感は共有しているので、声に出してしまつた内容は拾われてしまうが。

また出来上がったクッキーの味見の際には、アーチャーから辛口な評価をもらつてしまった。自分では最高のできだと自負していたんだけどな。

それにしても、よほどのお人好しで無い限り、こんな報酬も無いことに協力などしてくれないだろうに。英靈となるような人物はみな、このような性質を持つているのか？

とにかく、士郎にとってアーチャーの行動はありがたいものなのだが……。

いかんせん、態度が悪すぎる。

口を開けば嫌味ばかり溢れかえり、上から目線の皮肉たっぷりな台

詞が感謝の気持ちをしぼませる。

イリヤを心配し、士郎の知らなかった家族のことを教えてくれたのは、確かに感謝すべきことだ。例えそれが士郎にとって厳しい現実だったとしても。

またこの日常を壊さないようにと、意識が無いときに士郎のフリをして学校へ登校したり用事をこなしてくれたのは、意外であった。アーチャーはもっと冷淡で自分勝手なイメージがあったのだが――
―正直言つて、やりすぎだ。確かに部活の当番やら、学校の授業、一成との約束を果たしてくれたのには感謝する。特に他人には迷惑をかけたくなかったから、なおさらだ。

しかし、だ。

英霊であるアーチャーの技能に一般人の士郎が敵うものだろうか？

否、敵うわけがない。

明日以降、過大評価されてしまった自分はどうしたらよいのやら。
(おまけにアーチャーが受け取るべき感謝の言葉を、俺がもらっちゃったからな。気まずいにもほどがある)

そんな事情もあつて、士郎のアーチャーに対する思いは複雑怪奇なものとなつてしまっている。感謝をしたいが、アーチャーの態度故、素直に表すことができない。

また、危険な事情に首を突っ込んでいるイリヤを助けるのに、アーチャーの手を借りるしかないという状況で、己の無力さが無性に悔しい胸中でもある。

だから、衛宮士郎はこう告げるのだ。

(アーチャー、俺が体を貸すのはべつにいい。だけど条件がある)

(……なんだ。言ってみろ)

(俺に魔術を教えてください)

アーチャーは呆れて天を仰ぎたくなった。

衛宮士郎は今なんと言つた？

――魔術を教えてください。

馬鹿馬鹿しい。

よりもよつてソレか。

衛宮士郎が『正義の味方（エミヤシロウ）』になる可能性の中で、一番の近道は魔術の習得だ。

魔術は一般人とは一線を画す力。

魔術という神秘によって覆される運命は、一般的な警察官やら医者よりも多くの命を救えてしまう。

衛宮士郎（エミヤシロウ）は魔術を体得したからこそ、理想を追い求めて突き進んだ。

自分だけにしかできないことがあるはずだ。

いや、身を賭してでもやらなければいけないんだ。

——じいさんのかわりにオレが正義の味方になってやるよ。

強迫観念ともいえる使命感と、在りし日に誓った切嗣との約束。力と理想に溺れて行きついた先は——。

（この衛宮士郎にそんな道を歩ませるわけには行かん）

何のイタズラか、せつかくの平和な世界なのだ。イリヤとは兄妹として一緒に暮らしており、アーチャー自身の生では早くに亡くなってしまった切嗣も、そして第四次聖杯戦争の『聖杯』であっただろうイリヤの母親も生存している世界で、いったい何を望むというのか。

アーチャーは士郎に拒絶の意志を込めて返答した。

（……魔術の最初の心得は、『死』を容認することだ。魔術とは常に死と隣り合わせであり、失敗すれば容易に命を落とす。——平和ボケしている貴様には過ぎた代物だ。身の程を知れ）

ここで大人しく引き下がっていればよいのだ。

わざわざ、地獄の縁に片足を突っ込むこともあるまい。

魔術に自ら関わるということは、否が応でも残酷な世界の裏側を垣間見ることになるのだから。

（いや——コイツはもう見ているのだったな）

十年前の大火災。十数件の住宅が全焼し、ただ一人生き残った。

アーチャーの摩耗した記憶に残る災害よりも、被害は少ないといえるかもしれない。だが、そこで見た地獄はそう変わらないはずだ。

ならば、理解しているだろう。この日常がいかに尊いものであるかを。

せつかく得た温もりを再び手放すことなど出来はしないだろう。なぜならば、一人であったアーチャーとは違い、守るべき家族がいるからだ。

(なあ、アーチャー)

(どうした衛宮士郎。潔く観念したか。所詮、魔術師の家系でもない貴様ができることなどが知れている。無駄なことはするな)

士郎の呼びかけに、アーチャーはきつい物言い返す。

これで本当に諦めればいい。お前には優しい光の世界がお似合いだ。

だが、アーチャーは失念していた。

衛宮士郎という人間の性質を。

家族という要素があつたとしても変わらない、その愚直なまでの性質を。

(俺は、もう後悔したくないんだ)

この一言で、アーチャーは士郎の心が折れていないことを悟った。

(何もできない自分が悔しいんだ。誰かにやらせて、誰かに守られて、自分だけ助かるのはもう嫌なんだ。俺を守ってくれる人が家族なら、なおさらだ)

アーチャーの目の前には、銀の花を咲かせた赤い大地に立つ衛宮士郎がいた。

目には決して退かないという決意を宿し、少年は赤い男と向かい合う。

「俺は自分の力で、家族を守りたい。クラスカードのことじゃイヤに、魔術の世界からはじいさんたちに、今は守られる。

でもな、知ったからには今までみたいに暮らせるわけがないんだ」
アーチャーは眼光に殺意さえにじませ、少年を射抜く。

何故、アーチャーが持ちえなかったものを、コイツは簡単に手放してしまうのか。

「お前がこちら側に関わることを、彼らは望んではない。むしろ足

手まといだ。

そもそも、その感情がどこから来ているものか分かっているのか？ それはただの過去の罪悪感からの逃避だろう。後悔するのはもう嫌だ？ はっ、自分勝手な感情で、家族の願いを踏み躪ることの何が、家族を守るだ！」

アーチャーの怒声に、士郎はわずかに身体を振るわせる。だが、それだけだ。琥珀色の瞳は真っ直ぐにこちらを見据えて、告げる。

「確かに罪悪感から逃げているのかもしれない。でも、現状を知ってただ何もせず傍観している方が、よっぽど逃避になると思う。

俺は目の前の現実から逃げないことを選ぶ。家族には申し訳ないけどな、これが俺の意志だ。家族みんなが笑っていられるような道を模索する。できなくでも、無様でも、足手まといになっても、少しずつできることを増やしていく。それは決して無駄にはならないと思うんだ」

乾いた錆交じりの風が、アーチャーの剣の荒野から駆け抜けた。

少年は一步も引くことなく、ただ相對し続ける。背後の銀の花だけが、静かに花弁を揺らした。

「全ては家族のためか……」

アーチャーは大きく息を吐き出した。

この頑固者はもう梃子でも動かん。

それが分ってしまうからこそその嘆息だった。

「それで手始めに魔術か。……死んだら元の子も無いぞ」

「そこは慎重にやるさ。だからこそアーチャーに頼んでいるわけだし」

士郎はアーチャーが折れたことを悟ったらしく、肩の力を抜いて笑った。

「そもそも最初に俺の体で魔術を使ったのはお前だし、懇切丁寧にうちの現状を説明してくれたのもお前だ。それに昼間は好き勝手にやってくれただろ？ 対価としたら妥当じゃないか」

いけしやあしやあとと言う士郎に、アーチャーは頭痛を覚える。

どうやらこの衛宮士郎はなかなか強からしい。

アインツベルンの女性陣に囲まれ、暮らしてきたからなのか。

だが、だからこそ、安心できる。

この衛宮士郎の行動原理の中心はその家族と日常にある。己のよ
うに、世界を相手に『正義の味方』を志した大馬鹿者にはならないだ
ろう。

ならば、コイツが無茶をしてイリヤやその家族を心配させないよ
う、基本だけでも叩き込んでやるか。

(無茶の仕方だけは、変わらないのだからな)

アーチャーが士郎に、ほぼすべての現状を嘘偽りなく伝えたのには
わけがあった。

つまり、大人しく協力させるため。

何も語らず放置するだけでは、いたずらに混乱を招く。中途半端な
説明でも同様だ。

士郎の口からクラスカード、ひいてアーチャーのことを言いふらさ
れたら、確実に面倒なことになると予想できる。特に凜やルヴィアに
目を付けられたら、厄介だ。

さらにアーチャーが現界するには、クラスカードによって『夢幻召
喚(インストール)』するしかなく、正式な手順も知らぬまま内側から
発動させるには、魔術的ラインが繋がりに、同位体でもある衛宮士郎が
うってつけなのである。

昼間はうっかりラインが切れる事態にも陥ってしまったわけだが、
士郎が再び接触してきた方法を思えば、すべて納得尽くで行動しても
らった方が、アーチャーとしても気が休まるのだ。もつとも、そのせ
いで士郎に魔術に関わることを決意させてしまったわけだが。

(まさかクラスカードに解析の魔術をかけて来るとはな)

士郎の魔術回路は持つて生まれた27本の全てがアーチャーに
よって開かれ、スイッチもオンとオフとで切り替えられるようになって
いる。さらに『知識』の混在化も影響しているのか、士郎は自力で
何の指導もなしに解析魔術を行使したのだ。

まだ魔力の流れも満足に調節できず、不安定なことこの上ない魔術

は、アーチャーとラインが回復した時点ですぐに止めさせた。下手に魔力を暴走させれば、肉が裂け、血が噴き出しただろうに。アーチャーと接触するには少量の血や体液など、魔力の籠った物ならば何でもよかったのだ。

無知ゆえに招いた事態だったが、当の本人はけろりとしているので、アーチャーがつい嫌味をいつもの二倍ほど増量した態度をとってしまったのも、仕方ないことだろう。

アーチャーは改めて、今度はお菓子ならぬ魔術の監督者として、士郎に向かい合った。

「私は魔術師としては三流の腕しかない。だが幸運なことに、お前と私の属性、魔術特性は非常に似ている。だから、まずはひたすら模倣（トレース）しろ。それが最も早い近道だ」

アーチャーが行使する魔術。それは衛宮士郎（エミヤシロウ）が生涯をかけて磨き上げ、極めたものだ。多少ぼかして伝えたが、並行世界の同位体なのだ、属性と魔術特性は同一のものである。

アーチャーは衛宮士郎が到達しうる最高の見本だ。よって真似するのが一番効率良い。

なにせ時間は限られているのだ。アーチャーはクラスカードの回収が終わる次第、士郎と離れるつもりだと伝えてある。

「それから魔術を行使するにあたっての条件がある。

まずは魔術の秘匿だ。基本的に神秘の類は一般の目に触れさせてはならない。

一般人に目撃されたら、記憶操作か口封じに殺すかが、この世界では基本だ。そんな事態に陥らないように精々気を付けるんだな」

「口封じって物騒だな。……イリヤともう一人の小学生は大丈夫なのか？」

「遠坂凜はあれで情に甘い。殺傷はもちろん記憶操作もしないだろうな」

「それはそれで遠坂の方が心配になるな。魔術協会ってところから罰則とか受けるんじゃないのか？」

「バレなければ問題ない。遠坂凜は上手くやるや」

アーチャーは知っている。あの『あかいあくま』がどんなに優秀なのかも。持ち前の『うっかり』さえ発動しなければ、大抵のことは丸く収まるだろう。

「またお前自身が魔術師だと、他の魔術師に知られてはならない。お前からイリヤスフィールにも目が向けられてしまうからな。」

そしてちよいどいい具合にクラスカードを隠すために投影した聖骸布がある。探索魔術を弾く礼装だ。目立たない箇所巻いておくのがいいだろう」

「わかった、気を付けるよ。……あの赤い包みつて、結構たいそうな物だったんだな」

感心したように頷く士郎に、アーチャーは最後の条件を切り出す。「それから——お前が魔術に関わるということを養父母に必ず話せ。できれば早いうちにだ」

衛宮士郎の最終的なストッパーは、恐らく衛宮切嗣になるはずだ。無茶の加減も分からんうちは切嗣に任せてしまった方がいいだろう。

もつとも、魔術なんてとんでもない、と魔術禁止を言い渡される可能性もあるが。

「別にそれはいいんだけどな。あー、どうやって切り出そう」

悩む割には嬉しそうな顔をする士郎に、アーチャーは片側の眉宇をあげた。

「随分顔がにやけているが、どうかしたか」

士郎は少し恥ずかしそうに顔を逸らしながら答えた。

「じいさんってさ、仕事のこととかあんまり話さないんだ。でもアーチャーの話から、家族を守るために飛び回ってるんだってわかったら、改めてカツコイイなって思ってたさ。」

俺が魔術を使えるようになったら、じいさんの隣に並び立てるか
な」

少年は憧れの光景を夢に見つつ、実現への道しるべとする。

「じいさんだって、この先ずっと守り続けるなんて多分無理だろ？」

だから、俺が継いでやるんだ。家族を守る『ヒーロー』ってやつを
さ」

——
すがすがしく笑う少年に、いつかの夜の約束が重なって見えた。

僅かに薄雲がかかり、星の煌めきが合間に顔を出す空の下。
街外れの森の方角へ、一台の自転車が疾駆する。

ペダルの漕ぎ手は赤毛の少年——衛宮士郎。

携えるは無銘の英霊が宿るクラスカードのみ。

目指す先は、クラスカードによって引き起こされる霊的歪みの中心。

少年は家族を守るため、英霊という敵の下へと向かっていく。

（——だから、手入れは欠かさずに行っているし、この自転車を赤く塗装し直したのだから自分でやったんだぞ）

（ふん。粗が目立つな未熟者。フレームが少し歪んでいるぞ。随分と荒い乗り方をしている。それに塗り残しもあるな。元の色は……黄色と黒か）

（フレームの歪みは俺のせいじゃないぞ。これは貰い物なんだ。元の持ち主は——察してくれ）

士郎はペダルを漕ぐ足に力を込めながら、アーチャーの細かすぎるダメ出しに答える。

早速クラスカード回収に出陣だ、と意気込んで家を出たのだが、30分以上も自転車を漕いでいればそのモチベーションも下がるといふもの。

士郎の胸中はアーチャーとの自転車談義で盛り上がっていた。

ギアによる変速やタイヤの交換、ブレーキ調整について、油を刺したようによく口が回ったものである。

士郎自身も、まさかアーチャーとこんな話が合うとは思っていなかった。偶に混じる皮肉が辛い、なんというか、共感できるポイントが実に似ているのだ。

（あれ、コイツって英霊っていうスゴいやつなんだよな？）

確か何らかの偉業を成し遂げて、世界から認められた英雄のはずだが……まったくそんな気がしないのは、どうしてだろうか。

ちなみにこの自転車は、昔住んでいた家から今の家に引っ越す際、

よくうちに入りに出入りしていた隣の家のお姉さんから譲り受けたものだ。もらった当時はサドルの高いマウンテンバイクに四苦八苦したが、身体が成長するにつれてどこへでも乗り回すようになった。それ以来、自分で整備し通学にも利用している。

色を赤く塗り直したのは、傷を隠すためというものもあるが、彼女のトレードマークだと一発で分かってしまう、あの色の組み合わせのためでもある。

(……明日は彼女のために、弁当のおかずを一品用意しろ)

(えっ、なんでさ)

アーチャーの唐突な発言に、思わずハンドルを揺らしてしまう土郎。

(今日の昼に、運悪く冬木の虎の理不尽に巻き込まれてしまったな)

(いったい何が)

(口は災いの元ということだ)

続きが気になったが、アーチャーは詳細を語ろうとはしなかった。

(それから柳洞一成の分も追加だ。お前の身体をわざわざ保健室まで運んでくれたのだ。授業にも遅れただろうに。詫びの一品だ)

(——了解。今夜の外出の口実にも使わせてもらったからな。口裏を合わせてもらう為にも、うまいものを作るか)

土郎は自宅を出るときに、柳洞寺まで一成の手伝いに行くと、ハウスメイドであるセラとリスに説明していた。

当然のことながら、土郎の夜のこんな遅い時間からの外出に、セラは柳眉を釣り上げた。

だが土郎は「急遽明日までに学校に提出しなければならぬ生徒会の書類の用意に備品を熟知している俺の手がどうしても必要で現生徒会長を困らせたくないんだ」とノンブレスで言い切って反論を封じ込めたのである。

セラは必死な様子の土郎にどうか折れてくれたようで、くれぐれも事故などに遭わないこと、と厳命するだけで送り出してくれた。リズはいつものように手をひらひらさせるだけだったが。

(そもそも昨日今日の休みなしで、クラスカードの回収に踏み切ると

は思わなかった)

昨夜は「キヤスター」と「セイバー」のカードを回収したのだ。一日くらい休みがあるかと思いきや、今日のイリヤの外泊である。

アーチャーが言うには、最近建てられた向かいの豪邸には魔術的結界が張ってあり、十中八九、倫敦からの留学生ルヴィア・リゼッタ・エーデルフェルトの拠点に違いないだろう。

そこに泊まるということは、今夜もクラスカード回収を決行すると予測できるらしい。

(あちら側には、カレイドステッキという無制限に魔力を供給する礼装がある。回復魔術も併用すれば、連日の戦闘にも耐えるは容易だ) 更に言えば、イリヤたちは霊位が最も安定する午前0時を狙って、鏡界面へ降り立つ可能性が高いそう。ならば危険を承知で午前0時前に鏡界面へ接界(ジャンプ)し、具現化した黒化英霊を倒してしまえば、イリヤたちが戦わないでもすむことになる。

そういう訳で士郎は、愛用の自転車にまたがり、ぽつぽつと住宅の灯りが消えつつある夜道を走っているのである。

アーチャーに指示されるままに、自転車は人里を離れていく。

道路の街灯と比例してアーチャーと士郎の口数は少なくなり、うすら寒い冷気に神経が張りつめる。

人気のまったくない夜の闇は、この世界には士郎一人しか存在していないかのような錯覚を抱かせる。

いつしか、漠然とした鈍い思いがひたひたと胸にわいて出てきた。

(正しいことをしているはずなのに、何だろうな。この感じは。――)

―不安? いや、寂しいのか?)

ただ一人で闇を走る自分に襲い掛かるのは、世界から切り離されてしまったかのような孤独感だ。

内にはアーチャーもいるのだが、先ほどから時折指示を出すだけで黙り込んでしまい、この感覚を和らげるには至らない。

……クラスカードを密かに回収することは、正しい。大々的に知られ、混乱やパニックになつたら大変だ。

だから、誰にも気づかれぬうちに処理する。

それが理想的な結果のはずだ。

だが、それでは誰からも救ったことを認知されず、知らないのだから理解もされない。

つまりは守った人々から称賛もされず、謝礼も言われることも無い、ということだ。

それはあまりにも——孤独で虚しいことではないか？

(いや、俺はイリヤが笑っていてくれさえいれば、いいんだ)

士郎は街の人々を全て助けるつもりで、ここまで来ているわけでは無い。さすがにそこまでできた人間では無い。

ただ、その中に家族が含まれているから。家族のいる日常を壊したくないから、危険を承知で敵が構える場所へ向かっているのである。

(……アーチャーはどんな気持ちなんだろうな)

皮肉屋で生意気で、しかし実はものすごくお人好しでもあるアイツは、士郎が感じたような漠然とした虚を感じたことがあるのだろうか。

(でもアイツは、助けた相手からの謝礼も受け取らない奴だからな。案外、平気なのかもしれない。——なんていったって英雄なんだから)

それでも、この先の見えない暗闇のような道を踏破するには、相当な心の強さが求められそうだ。家族や支えてくれる人たち、それから救った人たちとの繋がりが無ければ、糸の切れた凧のようにどこか手の届かない存在へなってしまうと、漠然とした予感がするからだ。

(……だからこそ、お伽噺の中の英雄になれたのか——?)

道路の街灯はとうとう無くなり、自転車のライトと僅かな星明りを頼りに進む。

(——ここで止まれ)

アーチャーの制止の声でブレーキを握る。

到着したのは、鬱蒼と黒く繁る森の入り口だった。

(自転車はその茂みにでも隠しておけ。歪みの中心は森の奥だ)
(わかった)

士郎は傍目から自転車が見えないように茂みの影に止めさせると、森へと侵入した。

頼りにする灯りは、取り外し可能な自転車のヘッドライトである。
(森ってこんなに怖い所だったか?)

ライトが照らすのは、限られた範囲のみ。木々の影や茂みの裏はまったくの暗闇で、何が潜んでいるかも分からない。ただ己が立てる足音と、通り抜ける風が撫ぜた葉のざわめきだけが、森に響く。

(———なんだ?)

目に見えて異常なところはない。変哲のないただの森のはずだ。
しかし、何かが異常だった。

歩くにつれ、傾げるようになる体を立て直しながら、士郎は進む。
何か筋が通っていないような。あるべき流れが蛇行しているような。そう——異物が挟まっているような気がする。

(おかしい。ここは——不自然だ)

士郎の五感以外の感覚が訴える、決定的な違和感がそこにはあった。

(そう、これがクラスカードが引き起こす歪みだ。勘の鋭い者なら一般人でも感じ取れる。)

……お前もこういうモノに関しては鋭いのだったな)

アーチャーの声は険しい。

既に意識はこれからの戦いに向けられているようだ。

(ここが歪みの中心だ)

僅かに拓けた場所で足を止める。

(さて……衛宮士郎。自ら非日常へ足を踏み入れる覚悟はできているか)

(ここに来た時点でとつくに覚悟はしているさ。それに、これは放っておいたらヤバい気がする)

例えるなら、土砂崩れが川を塞いでしまった惨状を発見してしまった感じか。

ここでは簡易的なダムが形成され、流れるべき水は不自然に溜まり続ける。今はまだ下流に影響はあまり出ていないが、その容量を超え

たとき、ダムは決壊し中身は氾濫して様々な災厄を引き起こすだろう。

(これは人として見過ごせるわけがない)

アーチャーが手を貸してくれるのも分かる気がする。

士郎はポケットからクラスカードを取り出した。

——さあ、俺の戦いの始まりだ。

(貴様が覚えているかは知らんが、手順は前にやったのと同じだ。まずは魔術回路を開け)

アーチャーの指示に、士郎は呼吸と体勢を整え、部活で矢を射る時のように精神を集中させた。心にイメージするのは銃の撃鉄。

「同調、開始(トレース・オン)」

その感覚を、身体は正確に覚えていた。

開かれた魔術回路へ、士郎の有する生命力が走り、魔力へ変換される。

まだまだぎこちなさの残るソレに痛みが走るが、昨夜ほどでもない。

士郎の知らぬ間に修復された魔術回路は十全にその役割を全うする。

(あの金色の光についてもアーチャーに聞かなくちやな)

ちらりと余計な思考が頭をよぎる。

そういえば、昨夜はボロボロだった士郎の身体が、何故きれいに治っているのかを追及し忘れていた。昨日の出来事は黒騎士の少女にキスをされ、金色の光に包まれたことまでは覚えているのだが、その後気が付いたら学校の保健室だったのだ。おまけにあの時の記憶は、混乱と痛みがぐちゃぐちゃになって現実感が酷く薄い。夢だったと言われれば納得できてしまいそうだ。

(でもアーチャーがこうしているわけだし、本当にあったことなんだよな)

魔術回路が励起している今なら、アーチャーとつながりがはつきりと意識できた。

それはライン(線)というよりもリンク(重なり)と言った方がいい

いかもしれない。

多少の差異はあるものの、同じ赤い大地（心象風景）を内に抱いている。だからこそ、俺とアイツの世界は地続きに繋がりがやすかったのか。

（類は友を呼ぶというけれど）

まったくもって奇妙な縁になってしまったと思う。心の中がこんなにまで似ているなんて、世界中を探しても滅多にいないはずだ。――

――人の人生は十人十色なのだから。

（ポケつとするほど余裕があるのか？ もつと滑らかに適量の魔力を流せるようにならないければ、実戦になど到底使えんぞ）

アーチャーの呆れたような皮肉交じりの叱責に、士郎は気を取り直して魔力の行く先を意識する。

魔術回路を通し、生成された魔力は、一直線にクラスカードに刻まれた術式へと流れ込む。

士郎はその術式を理解しているわけでは無い。

だが、後は勝手にアーチャーが上手くやってくれるはずだ。

（あとは任せた――お人好しの英雄（ヒーロー）さんよ！）

期待と信頼を込めて、士郎はその起句を告げた。

「夢幻召喚（インスタール）」

混沌とした揺らぎの面に、格子線が引かれた偽りの空の下。

鏡面界へと侵入したアーチャーは、油断なく周囲を窺った。

両の手にはこちらへ接界（ジャンプ）する前に投影した干涉莫耶を握り、死角からの攻撃にも対処できるよう、感覚を研ぎ澄ます。

アサシンのクラススキル『気配遮断』があるとはいえ、攻撃の瞬間にはそのランクは著しく低下する。よって不意打ち狙いの攻撃には、逆にカウンターで対処するつもりで、体勢を調整した。

（もつともあの侍の亡霊ならば、いらぬ心配なのだがな）

あの花鳥風月を愛でるのが趣味な男は、不意打ちなどの卑怯な手を使わぬだろう。

これまでクラスカードと第五次聖杯戦争に参戦した英霊は、サーヴァントの枠のままに一致している。アーチャーの推測通りならば、この先に待ち構えるは、卓越した剣の腕を持つ侍の亡霊か、それとも異形の右手を持つ「山の翁」の一人か、どちらのかのはずだ。
(できればハサンの方がよいのだが……)

密集した木々と低い天井のせいで、中・遠距離からの狙撃は困難であり、必然的に近接戦闘となる。純粹な剣術のみで第二魔法の域の技を振るう剣士を制するのは、黒化して理性が飛んでいても難しいと言わざるを得ない。

思考を巡らせるアーチャーだが、次の瞬間、強化魔術を施した視界に黒の影を捉え、剣を構えた。

木陰にたたずむは、黒い肌に黒のボロを纏い、髑髏の仮面をつけた男。

いうまでも無く、暗殺者ハサン・サツバーハである。

アーチャーは、あの剣士で無かったことに安堵したのだが、そのアサシンの登場には眉を顰めた。

(アサシンの語源にまでなった者が、クラススキルの恩恵を捨て、身を晒すとは……黒化の影響か)

闇と同化してしまいそうな人影は、だらりと上半身を揺らし、唯一仮面で覆われていない口元は狂気的笑みに歪んでいる。

そして異形の右手の姿は無く、健全な両腕に構えるは黒塗りの短剣(ダーク)だ。

(私の知らないハサンが呼ばれたようだな)

アーチャーは気を引き締め、アサシンと対峙する。

「ハサン・サツバーハ」とは、イスラムの伝承に残る暗殺教団の教主「山の翁」の称号に過ぎない。冬木の聖杯戦争では通常、「アサシン」というクラス自体が触媒となり、歴代教主19人の一人が呼び出される。

ハサンが持つ宝具はおそらく個別に異なるはずであり、アーチャーは己の持つハサンの知識を捨てざるを得なかった。

(ならば、今こそ見極めるのみ)

アサシンの姿がぐらり、と揺らいだ。

そして唐突な加速。

驚異的な脚力に任せ、木々の枝を足場とし、変則的な角度から迫るアサシンは、奇声を発しながらアーチャーへと斬りこむ。

アーチャーは冷静に夫婦剣でその一撃を受け止めた。

強化を施したアーチャーの鷹の目は、闇夜でも確実に敵の姿を捉える。

如何に身軽な身のこなしであっても正面から対峙するのであれば、防御するのは容易い。

アーチャーは、正気を失い衝動のままに向かってくるアサシンの攻撃を捌く。

数合の打ち合いの後、アーチャーはもう十分と判断した。

(ここまで弱体化しているとは。——やはりセイバーとは比べ物にならない)

アーチャーはわざと隙を見せ、アサシんに元々投擲用であるダークを投げつけさせる。

そして思惑通りに武器を失ったアサシンの腕を切り落とし、返す刃で霊核ごと胴体を切り伏せた。

「ふっ、他愛ない。もつと苦戦するかと思ったのだが」

なにせこの身はこの世界の衛宮士郎の身体をベースとしているせいか、身体能力は精々アーチャーの生前の値と大して変わらないのだ。守護者はもとより、サーヴァントとして呼ばれた際のスペックよりも著しく劣っている。

昨夜この状態でセイバーと渡り合えたのも、槍兵と化したイリヤスフィールが大きなダメージを与えてくれたおかげだ。でなければ、地力の差で押し負けていたかもしれない。

アーチャーは塵と消えたアサシンの方に視線を移した。

回収すべきクラスカードは、英霊の現象の内に在る。倒したからには「セイバー」の時と同様に、カードが落ちているはずなのだが——
「なにも無いだと……」

そこにはただ荒れた地面が顔を見せているだけ。

イレギュラーな事態に、アーチャーの動きが一瞬止まる。
そこを、突かれた。

全方向からの殺気。

アーチャーが顔をあげる間もなく、ソレらから投擲されるダーク。
数は——カウントするのも馬鹿らしい。

アーチャーは咄嗟に右半身を盾とし、正面へと踏み込んだ。

この場合、中心から外れば被弾の確率は著しく下がる。

盾となる剣群を投影する暇など無かった。

左右・正面からの飛来物は出来る限り叩き落すが、それでもまった
く無傷で切り抜けるはずも無く、かすり、えぐられた箇所から血が流
れ出す。

だがアーチャーは構わず、踏み込んだ先の投擲主を斬り捨てた。

(一人、二人、三人——ち、隠れたか)

仕留めたのは三人のみ。残りの敵は分が悪いと判断したか、『気配
遮断』で感知できなくなってしまった。

(体格も年齢も違うハサン……先ほどの気配、50人以上は感じられ
たが、恐らくそれが全てではあるまい)

『気配遮断』は攻撃時のみ、その効力が薄れる。ならば総数を悟らせ
ないよう、攻撃せず隠れたままの敵がいてもおかしくは無い。

おそらく全ての「ハサン・サツバーハ」が呼ばれているわけでは無
いだろう。ハサンは伝承の通りならば19人しかいないはずだから
だ。ならば、これは何代目かのハサンの宝具による現象に違いない。

(先ほどの行動といい、理性があるらしいな。……一度退いたのは、何
か策があるからか?)

そこまで思考したところで、アーチャーは身体に違和感を覚えた。

少なくとも無い傷口から、じわじわと広がる麻痺。それに伴う魔術回
路を回る魔力の淀み。

「——毒か！」

先ほどの短剣に毒が塗布してあったのだろう。即死の毒で無いの
は、弱った相手ならば確実に止めを刺せるという、自信の表れか。

(あまりいいやり方ではないが、仕方がない)

動けなくなるよりはましだ。

アーチャーはあくまで構えを崩さずに、自己に訴えかける呪文を口にした。

「――I am the bone of my sword. (体は剣でできている)」

アーチャーの身体から過剰な魔力が迸った。傷口からも一齐に血が噴き出す。

唇からも臓器へのダメージを示す血が伝うが、アーチャーは微動だにせず、それに耐えた。

『毒』を解毒したわけでは無い。ただ半ば魔術回路を暴走させ、過剰に生成された魔力で、浸食する『毒』を押し流したのだ。

はつきり言って、無茶の極みである。一步間違えれば、自滅必至の裏技だ。

(アサシンの毒が概念的・呪術的なものであったからこそ、できたのだ(がな))

英霊の概念武装の一部として編まれたダークは、物理的な毒では無く、概念としての『毒』が込められていた。だから魂に属する魔術回路にも影響を及ぼすほどの効力を発揮した。

しかし、逆に概念的であったゆえに、魔力での強制排除が通用したのだ。

(ついでに止血もできるのだから、リスクを冒す価値はある)

一筋縄ではいかないアサシン相手に、体力の流出はなんのメリットにもならない。

アーチャーは、人体の奏でるはずのない異音が漏れる傷口に、視線を一瞬だけ向けた。

肉の下に垣間見える無数の刃。

ギチギチと金属同士がすれる響き。

(まったくもって、化け物じみた光景だ)

アーチャーは自嘲するように唇をゆがめた。

魔術回路の暴走は、アーチャーにとって内に抱く固有結界の暴走と同義だ。

今回は意図して半暴走で治めたが、完全に籠が外れれば身体の内側から、自らが登録した剣群に貫かれることとなる。

アーチャーの起源は『剣』。それゆえに魔術の属性・特性は『剣』に引かれ、魔法の一步手前であるアーチャーの固有結界の要素の一つとなっている。起源の更なる深奥である『根源』を目指す魔術の暴走で、アーチャーの肉体が『剣』へ変質したのは、当然の帰結と言えるだろう。

傷口周辺の肉を『剣』と化し、修復をしてから肉へ戻す。

それを治癒と呼べるかは微妙なところだが、止血程度には有効だ。もつとも、肉体へと引き戻せるギリギリのラインの見極めが重要となるが。

(これで魔力の余裕は無くなったな)

アーチャーは十分な太さのある幹に背を預け、見通しの利かない森を警戒しつつ、数十人はいるであろうアサシンへの対抗策を検討する。

分身が分裂かは分からないが、恐らく全てのアサシンを倒さない限り、「アサシン」のカードは現れないのだろう。

こういった一対多数の殲滅戦は、距離を置いた場所から高ランクの宝具を打ち込み、『壊れた幻想』で吹き飛ばすというのが、アーチャーの定石だ。また接近戦を強いられた際は、切り札でもある固有結界を展開する手もある。

だが、それらを実行するには十分な魔力を使えることが条件となる。

(私の魔力はいい。しかし小僧の魔力を考えるとそれは不可だ)

アーチャーはクラスカードによって、衛宮士郎の存在を上書きしているのだが、その術式を維持しているのは、士郎の魔力だ。

さらにアーチャーが魔術回路を使用する際にも、士郎の魔力が消費されているようなのだ。イメージするならば、「エンジン」と「潤滑油」の関係だろうか。

クラスカードによる置換は、基本的には術者の身体に英霊の力を疑似召喚しているに過ぎない。いわば身体をベースとした能力の拡張

とも捉えることができる。

イリヤスフィールが「ランサー」のカードで『夢幻召喚（インストール）』した際、英霊クー・フリーンの成人男性の身体では無く、あくまでイリヤスフィールの少女としての身体に、彼の武の技量と魔力と宝具が付加された形式だった。

アーチャーと衛宮士郎の場合、些かおかしな補正（肉体年齢が20代半ばへの変化）がかかっているが、そこは平行世界上の同一人物というイレギュラーのためだろう。

本来霊格の違う英霊の魔力を、後付で拡張したとはいえ人間である術者の魔術回路に流すことは当然、拒否反応もありえる。

だが、クラスカードにはそれも考慮された術式も練りこまれていた。

魔術回路という「エンジン」に、英霊の魔力という名の「ガソリン」を燃烧させた際、それが上手くかみ合うように「潤滑油」という術者の魔力を循環させる術式だ。

当然、エンジンを高回転させるほど潤滑油は劣化し、消費量は跳ね上がる。また潤滑油の供給が切れたまま、エンジンを無理矢理回せば、摩擦や負荷でエンジン本体を傷つけることになる。

（先ほどの半暴走で、小僧の魔力をだいぶ削ってしまったからな。高ランクの宝具の投影は出来ても精々一つか二つ。だがそれでは全方向にいるアサシンを全滅させるには、心許ない。——それでも、やりようはいくらでもある）

そこまで思考を進めたとき、またもやダークが飛んで来た。先ほどより数は少なく密度も無いが、背を隠した幹以外の全方向からの攻撃である。

だが身構えていたアーチャーは、背を隠していた幹の裏側へ身を翻すことでこれを避け、裏で待ち構えていたアサシンを一蹴して倒すと、

「投影・開始（トレース・オン）」

間髪入れず投影したまったく同じダークを、まるで逆再生するかのように投擲した。

暗闇に金属がぶつかる音と、数人分のくぐもつたうめき声がある。

(手ごたえがあつたのは五人。あとは防がれたようだな。——だがそれでいい)

敵を仕留めることが目的ではない。

真の狙いはダークを適度に分散させることにある。

アーチャーは場所を移動しながら、更に追撃してくるダークを干将莫耶で叩き落とし、再度投影したダークをばらまくように射出させる。

アサシンの概念武装であるダークは、英霊の持ち物としての神秘はそれなりにあるが、宝具には至らないものだ。魔術回路に負荷をかけずに大量に投影する分には、低コストな代物である。

アサシン一体にそれほど強さがあるわけではない。対魔力も底辺に等しいだろう。

だからこそ大量生産のダークで十分なのだ。

(あとはこのまま、イリヤたちが来る前に『設置』を終えられるからだ) 止血したとて、アーチャーへのダメージは確実に蓄積されているのだ。

特に盾とした右側の傷は多く、若干の反応の遅れが発生している。

もつともそれを逆手に取り、右側を囷とすることでアサシンの狙いを絞らせているが。

(アサシンの投擲は全て急所を突いてくる。……一本でも見逃したら死ぬな)

だが、負ける気はしない。

近接戦ではアーチャーに分がある。一斉に襲い掛かれても、それはそれで高ランクの宝具を自壊させれば一気に片が付くだけのこと。

アサシンは『気配遮断』を生かしたゲリラ戦で、アーチャーを仕留めるしかないのだ。

「さて——、向こうがしびれを切らすか、こちらの集中力が途切れるのが先か、根競べといこうか」

鏡面界の暗闇に包まれた森の中。

暗殺者たちと一人の弓兵による、どちらが獲物か判断しがたい狩り

は
続
く。

【16】

「あー、もうっ！ 何がどうなってんのよー！」

ルビーが張った結界の中、凜は頭をかきむしる。

イリヤは目を白黒させて固まるばかり。

なにしろ鏡面界へと接界（ジャンプ）し、片膝をついたフェイカーの警告の直後、閃光と衝撃が結界の外部で荒れ狂ったのだ。状況が読み込めず混乱するのも仕方がないだろう。

そんな中、サファイアが冷静な声で収集した情報を提示する。

「約50メートル四方からの神秘の爆発を観測しました。威力はランクBとCの魔術と同程度ですが、起点の数は二百以上と推測できません」

それを聞き、時計塔の魔術師二人が絶句する隣で、ルビーが興奮したように身をくねらせた。

「わお！ さながらここは地雷原となっていたわけですか！ 一斉爆破とか何気にえげつない攻撃ですねー。フェイカーさんは爆弾魔（ボマー）としても、やっていけないんじゃないでしょうか！」

「つていうか、フェイカーさんもこの爆発に巻き込まれているんじゃないか。大丈夫かな」

カレイドステッキたちが張った結界はイリヤたちの周辺のみである。当然、フェイカーはその範囲には入っていない。

イリヤは結界の外に目を凝らした。魔法少女として強化されている眼は容易に夜の暗闇の中をも見通す。

はたして、フェイカーはすぐに見つかった。

先ほどの爆発の余韻として残っていた土煙が薄れてゆく中、しっかりと二本の足で立つ姿は、堂々としたものだ。左手にはあの騎士王に止めを刺した白い剣を持ち、隙なく鋭い目を光らせている。

「よかった。無事だったんだ」

イリヤが安堵する傍らで、美遊は険しい顔でフェイカーを観察していた。

確かに微動だにせず剣を構える様子は、とても全身に傷を負って

る者のようには見えない。もしかしたら見た目以上に意外と傷は浅いのかもしれない。

けれど。

美遊は結界から踏み出す。行き先はフェイカーの方だ。

「ちよつと、美遊。先走るものではありませんわ——」

ルヴィアの制止の声に耳を傾けることなく、美遊は歩を進める。

周囲の木々は爆風によってなぎ倒され、視界を遮るものは無い。

フェイカーは美遊が近寄るのを黙認していたようだったが、自身に手を伸ばしてきたところで、声をあげた。

「下手な感傷は命取りだ。余計な手出しはしないでもらおうか——美遊」

美遊は熱した鉄に触れてしまったかのように、一瞬、伸ばした手を引き戻す。

フェイカーの拒絶に、心が委縮するのが分かった。

彼は美遊の手など必要ない、戦うのは自分一人で十分だと、言外に告げていた。

そして——触れてほしくない秘密をかかえているのだとも。

美遊自身も重大な秘密を抱えているが故に、その意図を正確に読み取った。

けれど、ここで退くわけにはいかない。

美遊はサファイアを強く握り直すと、瞳に強い意志を込めて言った。

「詮索はしない。ただ、治療だけさせて欲しい」

間近で見たフェイカーの傷は、予想以上に酷い物だった。傷口は引き攣り、爆発の影響か、血が滲んでいる箇所も多数ある。これでは身体を少し動かすだけでも激痛が走っているはずだ。

だがフェイカーはそんな様子は微塵も出さず、顔を上げたまま、ちらりと視線だけを美遊に落とした。その眼は美遊の真意を探っているようだった。

美遊は言葉を重ねる。少しでも信用を得るために。

「傷の診断以外の解析術式はかけない。誰だって他人に知られたくは

ない事情はあると思うから。それに、私はあなたのことをクラスカード回収の仲間と見なしている。ここであなたの力が削られるのは惜しい」

違う。これではまだ届かない。フェイカーの眼は冷めたままだ。

美遊は歯を噛みしめた。

本当は分かっている。フェイカーの言う通り、これは感傷なのかもしれない。でも美遊は知っている。

——自分の身を顧みずに戦う姿。

——心配をかけまいと、痛みを押し殺し平然と振る舞う態度。

フェイカーの、痛みなど感じていないその様子は、美遊にとっては身近にあつたものだった。

だから美遊は言う。この想いは本心からのものであるが故に。

「隠さないで——これ以上、私のせいで傷ついて欲しくない」

「美遊様……？」

サファイアが戸惑いの声を上げる。その発言は、美遊自身がこの騒動の原因であると言っているようなものだ。

フェイカーも美遊の必死の様子に何かを察したのだろう。ふっ、と目を緩ませると、僅かにぎこちない動作の右腕を伸ばし、美遊の頭をくしやつと撫でた。

「……おそらく君だけが全ての原因でもあるまい。だからそんなに自分を責めてやるな」

フェイカーの声音には優しさと——僅かな郷愁が含まれているように感じた。

「それに、これらの傷は私の判断ミスによるものだ。君が背負うことでもない。だが——君の心が少しでも軽くなるのなら、私に拒む理由は無いな」

美遊はフェイカーへの治療を許されたことに安堵しつつ、早速サファイアと共に治癒の術式を展開する。

そこへ遅れて駆けつけた凜たちが合流した。

「随分とボロボロね。前のあの余裕ぶつた態度はなんだったのかしら

？ 一人で格好つけようとするから、そんな有様になるのよ」

「美遊に治療までさせて……殿方の見栄のせいでとんだとぼつちりですわね」

「せめて、私たちが来るまで現実世界の方で待っていればよかったのに……」

間近でフェイカーの様子を確認した凜は呆れと挑発混じりの台詞を投げつけ、ルヴィアは慣れない他人への治療に苦戦する美遊を気にし、イリヤは意外に酷い傷口から目を背けつつ溜息をついた。

多少、気が緩んだ態度だが、敵の気配がないことを確認して結界を解除してきたのだ。アサシンの黒化英霊は先ほどの爆発で倒されたものと、凜とルヴィアは判断していた。

フェイカーはついさっきの穏やかな表情はなんのその、周囲を警戒したまま皮肉気な笑みを浮かべて言った。

「少々当てが外れてな。アサシンのクラスはどうやらイレギュラーが多いようだ。」

もつとも——この敵に関して言えば、君たちがいたところで足手纏いにしかならなかつただろうがな」

「——なんですって」

地獄の底を這うような声が、凜から発せられる。フェイカーの言いように怒りのパラメーターが早くも振り切れたようだ。

「無制限に魔力砲を放つことができるカレイドステッキが二基、それに時計塔の今季首席候補が二人いて、それでも足手纏い？ 贅沢言つてんじゃないわよ！」

「遠坂凜が足手纏いなのはわかりますが、私と美遊まで含められるのは論外ですわ！」

「……ちよつと、なに自分と美遊だけを待ちあげてんのよ」

無視できなかつた凜のルヴィアへのツツコミは当然のことながらスルーされ、

「私もスルーされてるー」

とイリヤは生氣なく笑う。

それはともかく、凜とルヴィアの反論はフェイカーを揺るがすには

至らなかつたようだ。

「問題はそこでは無い」

「じゃあいったい何が不満なの——」

凜の言葉は不自然に途切れる。なぜなら唐突にフェイカーの両腕が閃いたからだ。

直後、それぞれの耳元で金属音が響く。

その残響が宙へ消える前にフェイカーの右手が勢いよく振り抜かれ、背後で何かが倒れる気配がした。

凜とルヴィアはすぐさま臨戦態勢をとり、宝石を構える。

一人遅れてイリヤが恐る恐る振り向いてみれば、黒い肌に白い仮面をつけた瘦躯の男と小柄な少年が塵となって消えていく様子が目に映った。

「見ての通り、アサシンは複数だ。しかも黒化によって理性が飛んでいる様子も無く、連携をとって攻撃してくる。『気配遮断』のスキルも合わされば、戦闘経験が未熟な子供はいい的でなくなる」

凜とルヴィアは、フェイカーの言う「子供」の範疇に、自分たちも含まれていることに気づきながらも、ただ口を閉じているしかなかった。

フェイカーが行動に移すまで何も反応できなかつた。フェイカーがいなければ、今頃死体を晒していたのは自分たちの方だったのだ。

一方、イリヤは何が起こっていたか理解できず、呆然とルビーに尋ねる。

「ねえ、ルビー。今の……解説をお願いします」

「そうですねー。まず背後に忍び寄っていたアサシンさん二人が、ナイフを皆さんの首元めがけて投げつけたんですよー。それを察知したフェイカーさんが左手の剣と右手に潜ませていたナイフで叩き落とし、今度は更に追加された右手のナイフをアサシンさんたちに投げつけて倒したって感じですかね。ちなみに同時に投げっていた二本のナイフは、それぞれアサシンさんたちの頭にジャストミートでした!」

「そ、そこは聞かないでもよかつたかな……」

乾いた笑みを浮かべるイリヤの横では、美遊がジトーツとフェイ

カーを見つめていた。

フェイカーが急に動いたせいで治療の魔術が中断されてしまったのだ。せめて一言くらい事前に言っておいてほしかった。

「すまなかったな、美遊。だが、全てのアサシンを倒すまで私は休むわけには行かないのでな。手間をかけさせてしまいが承知してくれ」

「えっ、さっきので最後じゃなかったの」

反射的に出てしまったイリヤの言葉に、ルヴィアが厳しい声で答える。

「クラスカードも出現していないですし、この空間が崩落する気配もありませんわ。」

……まだアサシンは辺りに潜んでいる、ということなのでしょう？」

ルヴィアに視線で問われたフェイカーは、小さく頷いた。

「ああ、先の爆発でだいたいは削ったが、やはり取りこぼしがあったようだ。……敵が減ってもお守りの対象が増えたのだから、差し引きはゼロだが」

「いちいち嫌味な言い方ね。——まあいいわ。あなたの治療が終わるまでは私たちが守ってやるわよ。それでさっきの借りは返すわ」

凜は柳眉を立ててそう言い放つと、何故かイリヤの方へ向かって指を向けた。

「ということでルビー、全員を囲む魔術障壁を展開！」

「私（ルビー）任せ！」

「使えるものは使う主義なの。無料（タダ）でAランクの魔術障壁を張れるあんたがいるんだから、わざわざ高価な宝石を消費することも無いわ」

凜のご高説に、イリヤはトホホと肩を落としながらも、魔法を発動させるのであった。

（あれ？…でも私が魔力砲をそこら中に打ち込んだら、それでアサシンさん倒せるんじゃないかな？）

攻撃の最中に不意打ちされても、フェイカーさんが迎撃してくれる

し。

イリヤはそんな提案をしようと思ったが、凜からの念話（テレパシー）で開きかけた口をパクパクさせる羽目になった。

（いいこと、美遊はできる限り時間を稼ぐこと。フェイカーはアサシンを倒したらすぐに、煙を巻いて逃げようとするはず。大人しく治療を受けている今が、アイツを問い詰めるチャンスよ）

（さすがは小賢しさでのし上がったお人ですわ。まあ、いいでしょう。乗って差し上げますわ）

（……治療は丁寧にします）

それぞれの念話が飛び交う中、イリヤはこのための宝石だったのかと、内心で手を打っていた。

ここに来る道中の車で、凜が小さく砕いた宝石を皆に配っていたのだ。何でも、簡易的なラインを結ぶことによつて、念話（テレパシー）が使えるようになるらしい。

そんなに遠く離れるわけじゃないし、普通に話せばいいんじゃない？ とイリヤは首をひねっていたが、フェイカーを前にして内緒話をするためだったようだ。

（でも、小さいとはいえ、石を飲み込むものには抵抗があつたな）

イリヤは強引に飲まされた記憶を思い返す。凜曰く、体内で溶けるから身体を壊すことは無いそうだが。

「で、あんたの言う“当て”っていうのは何なのかしらね。クラスカードの内訳に詳しいことにも関係してるんでしょう？ 最後のカードに関する情報も間違っていたら、目も当てられないわ」

さつそく凜がフェイカーの前言を切り口に、詰問を始める。

フェイカーは眉間にしわを寄せた

「……さて、どう答えたものかな。私の存在自体が世界の気まぐれと
いうか、もしくは奇跡といふべきか」

「下手な御託は並べなくてもいいわよ。時間は無限にあるわけじゃないんでしょ？」

凜はフェイカーの口上をバツサリ切り捨てる。フェイカーのこの誤魔化し方、どうやら核心を突く質問だったようだ。

フエイカーは数秒間、黙考していたが、ついに口を開いた。

「———そうだな。まずは伝えるべきことは言っておこう。アサシンの例もあって遭遇してみないことには確定はできないのだがな。———最後のカード『バーサーカー』の英霊は、おそらくヘラクレスだろう」

「な、ヘラクレス!?! ギリシャ神話の大英雄ですわよ!」

神々と人が混じり合うギリシャ神話の中でも半神半人として誕生し、多くの偉業を達成した世界屈指の英霊である。当然、黒化していたとしても手ごわい相手となるだろう。

「彼は巖のような大男でな。狂化していてもその戦士の技量は衰えず、その腕力だけで大地を割るほどだ。」

さらにその肉体はBランク以下の攻撃を無効化し、十二もの命のストックを持つ宝具であり、しかも既知の攻撃に対する耐性が付くおかげで、いかなる攻撃も二度は通用しない」

フエイカーはあくまで淡々と情報を出していくが、聞く側は絶句するしかない。

やけに具体的なのは、この際棚に上げておこう。だが聞けば聞くほど、強大な敵に立ち向かわねばならないプレッシャーがきつくなる。

「うわあ。なんかすげえ強そうー。倒しても倒しても復活してくるってことは、一晩じゃ無理そうだねー」

イリヤもさすがにヘラクレスの名は知っていた。漫画やゲームのネタにされるくらい有名なのだ。その元となった人物と相對せねばならないとは……色々許容範囲を越えて、棒読みな台詞しか出て来ない。

「これはキャスターさんを倒してみたいに、何日かに分けて攻略した方がよさそうですね! それはもう通い妻の如く! 連日徹夜になつてイリヤさんのお肌が荒れに荒れてしまうのが心配になりますかー」

……———チーン。

痛い沈黙が辺りを包む。

あんまりなタイミングで発せられたボケに、ツツコむ者は無く。

ルビー渾身のボケは虚しく滑って終わった。

羽でのの字を描くルビーを横目に、フェイカーは何事もなかったかのように、更に突き落とすような情報を差し出す。

「残念ながら、命を減らしたとしても、ストックは魔力が供給されれば回復する。この霊脈上の世界では一日もあれば回復は完了するだろうな」

それを聞きルヴィアは爪を噛んだ。

「なんてデタラメ……。それが本当なら相応の準備が必要ですわね。一晩にAランク相当の十二種類もの攻撃を使用しなくてはならないなんて。最低一週間は用意にかかりますわ」

Aランク相当ともなると、一発で家一軒が軽々吹っ飛ばす威力であり、宝石魔術で言えば数千万円クラスの宝石に、何年も魔力を充填させたものを使用しなければならぬ。

カレイドステッキたちの魔力砲で一回、『ランサー』のゲイ・ボルグで一回。『セイバー』のエクスカリバーで一回。合わせて三度倒せても、あと九回分は何とかしてそろえる必要がある。フェイカーが『アーチャー』の宝具を提供してくれるのならば、あと八回分になるのだが。

ちなみに他のクラスカードも「限定展開(インクルード)」させてみたのだが、『キャスター』の歪んだ短剣や『ライダー』の黄金の鞭と手綱はこうした攻撃には使えそうにない。

ルヴィアは最低一週間と言ったが、エーデルフェルト家の魔術と財力に物を言わせてのことであり、並の魔術師ならば十年たっても揃えられるか分からないほどである。

だが、ルヴィアの設定する期限に、凜は待ったの声をかけた。

「……ダメよ。この後一週間も間を置けば、霊脈の歪みが現実世界に及ばず影響は予想の付かないほどになる。冬木の地の管理人(セカンドオーナー)として、看過できないわ」

凜は食い込まんばかりに指を握りこむ。一発二発ならまだしもそれ以上は物理的にも、時間的にも厳しいと言わざるを得ない。しかも一晩に騎士王と匹敵する敵と戦いながらAランクの魔術の連続使用

など、不安要素しかない。

凜のそのしおれた様子に、フェイカーは口元ニヤリとさせ言った。「ふむ……二日くれるというのであれば、私が六度は殺して見せよう」凜、ルヴィア、イリヤ、そして治療に集中していた美遊も目を見開きまじまじとフェイカーの顔を凝視した。

自信を湛えたその笑みに、誇張などは無い。当然のことを言っただけ、という顔だ。

「あ、あなたは三流の魔術師なんでしょう！ Aランクの魔術も扱えるかも怪しいのによくもそんなことが言えるわね！ いくら剣術がすぐくつても、武器（攻撃）が通用しないのなら、どうしようもないでしょうが！」

「力が無いならば余所から借りてくればいい。……なに、既に分かっていたことだ。後は持つてくるだけだ」

凜の剣幕をフェイカーは余裕をもって躲す。

「持つてくる……よほど強力な武器をお持ちのようですね。もしかして『伝承保菌者（ゴツズホルダー）』ですか？」

もし本当にフェイカーが、神代の宝具を現代まで伝えきる『伝承保菌者（ゴツズホルダー）』ならば、Aランク相当の武器も所持しているも納得できる話だ。

だがフェイカーは肩を竦めただけだった。これではどちらなのか判断できない。

（ちっ、またあの曖昧な態度……腹が立つのよ！ まったくつ。そもそも——）

「あなたの情報の根拠はなんなのよ！ そこが肝心なところでしよう！」

凜の苛立ちは既に沸点を通り越していた。

フェイカーを尋問するつもりが、逆に翻弄されてしまっている。これではせつかく作ったチャンスが無駄になる。

この流れを仕掛けた凜にとって非常に悔しいことだが、今この場の流れを握っているのはフェイカーだ。

それをこちら側に奪うには。

凜は目を据わらせて指を突き付ける。

この切り札を切るしかない！

「——あなたとアーサー王、いえ、アルトリアとのことだって、それに関係していたりするんでしょ！」

「アルトリア？ ……つまさか！」

フェイカーが初めて見せる動揺。

その様子に凜は目を細め、畳みかけるように追撃をかける。

「ええ、ばっちり見させてもらったわよ。あんたが正義の味方よろしくイリヤを助け出すところから、騎士王とのあれやこれやをね！」

フェイカーは何とか無表情を貫こうとしているが、頬が引き攣って上手くいっていない。既に耳の赤さはどうしようもなく表れてしまっている。

「カレイドステッキ・ルビー……やはりあの時に切り捨てておくべきだったか」

足元をすくわれた者の言葉など、凜は聞く耳を持たなかった。

「さあ、今度は私たちのターンよ！ 覚悟しなさい、フェイカー！」

まずいことになった。

赤い外套を纏うフェイカー、もといアーチャーは、慚愧の念で崩れそうになる顔を必死で引き締める。

昨夜のセイバーとの戦闘を、カレイドステッキの片割れであるルビーが、何らかの形で記録していたことを承知はしていたが、まさか既に公開済だとは。しかも「見た」と言うことは映像付きだということだ。

(下手に流さず、消去を確認するまで脅しておけば……)

忸怩たる思いが全身を重くするが、後悔すること既に遅し。

遠坂凜は獲物を狙い定めた猫科の動物のように目を細め、隣のルヴィアゼリツタ・エーデルフェルトもまた狡猾な狐のように唇を弧に描く。

追いつめられた獲物はアーチャー自身だ。

今更あの時の己の行動を振り返ってみても、なんとも青臭い行動をしてしまったとは思う。だが、セイバー……彼女の前でそれ以外の行動は思いつかなかったのだ。例えばあの瞬間が何度でも来ようと、アーチャーは同じことを繰り返しただろう。

そこに後悔は無い。

だが、その場面を他人に鑑賞されることになろうとは——全身から火が噴き出しそうだ。告白のシーンを目撃されたならばどこまでも動揺してしまう学生時代に逆戻りしたかと思うほどである。

そして相手も悪かった。

自身の愉悦をどこまでも求めるといふふざけた性格の人工精霊ルビーに、狙った獲物は容赦なく叩き潰す凜。同じく五十歩百歩なルヴィア。また治療の魔術をかけながらも、じつとアーチャーを見つめる美遊も、どこまでも真実を追及してきそうである。

気の毒に、と同情の念を浮かべるイリヤスフィールだけならば、どんなに言いくるめるのが楽だったか。

「さて、まずは黒化した騎士王——アルトリアとの関係を喋って

もらいましょうか」

一番手は宣戦布告をした凜だ。そして今一番聞かれたくないことを突いてくる。

「えっ、そこから聞くの？ クラスカードについての情報源についてじゃなくて?!」

イリヤがもつともなことを言うが、凜は目配せをしながら簡単にあしらった。

「どうせ芋づる式に出てくるわよ。こいつが隠していることは多分、全部つながっている気がするの。勘だけどね」

鋭い。

アーチャーはどうか繕った仏頂面の裏で冷や汗をかく。

確かにアーチャーの隠し事はある一つの出来事に収束する。

すなわち——聖杯戦争。

冬木の地で行われたこの大儀式は、アーチャーの、ひいてはエミヤシロウの運命を位置付ける因果の塊だ。アーチャーの存在自体を語る上でも重要な事柄でもある。

だが、『小聖杯』であるイリヤが一般人として生活しているこの世界で、聖杯戦争についてなど言えるはずも無い。例え並行世界の出来事であっても、イリヤの家族——切嗣たちが隠している情報を晒すことはできない。

故に、アーチャーはさらに強固な鉄仮面を顔に貼り付ける。

必要以上の情報を漏らすような失敗は、するまい。

「別に君たちに告げる必要は無いと思うのだがな。今後の戦闘に必要な情報は渡したのだ。もう十分だろう。それともあれか。君たちは勝手にプライベートを嗅ぎ回る探偵にでも憧れているのかね？」

まずは挑発で相手の怒りを誘う。そうして相手が激昂し挙動を乱したところで、場の流れをこちらに取り戻す。

しかし、今まで何度か仕掛けた術中に、凜もさすがに学習したようで、冷静に切り返してきた。

「憧れなんか無いわよ。でもね。こうまでしないとあんだのことを少しも理解できないし」

「……君に理解してもらおう必要も無いのだが」

これは挑発でもなんでもなくアーチャーの本心である。クラスカードの回収さえしてしまえば、もはや接触することも無い。

アーチャーにとつては、最善の結果になりさえすれば、誰からどう思われようとも構わないのだ。むしろ自身の性格や正体はかなり捻じ曲がって複雑であることを自覚しているアーチャーは、他人に理解してもらおう労力と手間をかけさせてしまうことを、申し訳なく思うほどである。

「……いいわ。じゃあこれは私の知的好奇心つてやつよ！ あんたの気を悪くしようともあんたが答えるまでこの結界から出しはしないわ！ さすがにあんたでもAランクの障壁を突破するのは骨が折れるわよね！」

どうやら先の発言は、挑発として放った台詞よりも、凜の逆鱗に触れたらしい。

何故だ。

内心で首を傾げながらも、また面倒なことになったと眉を寄せる。アサシンも未だ残っている状況で、余分な魔力を消耗させられるはずも無く。

ここは適当に嘘八百で誤魔化すか、と方針を決めるが、凜はそんなことはお見通しだったようだ。

「ルビー、仕事の時間よ。どうせあんたのことだから、取り付けているんでしょ？」

拗ねて放っておかれていたルビーは、この凜の意味深長な一言で復活。

身をくねらせて舞い上がった。

「ふふふ、さすが凜さーん。私のことわかってきましたね〜」

別にわかりたくは無かったわよ、と愚痴をこぼす凜の前で、ルビーはその身を変形させる。

「24の秘密機能の中でもひとときわ高性能！ 『ウソ発見器』モード！

私の前に嘘なんて無意味だぜ！」

「バーン！」と効果音付きで変形を終了させたルビーの右の翼には、マイク状の部品が握られ、そして輪の天頂から突き出たアンテナからは緑やら赤の光を点滅させる。

「……………うわぁー」

イリヤの引き攣った心境に、アーチャーも同じ思いを抱く。

(えげつない)

もはや退路を断られた。なんだ、……………私は今から真実の断片を片手に、凜の切込みを躲していかねばならないのか。

「さあ、とつとと白状しなさい！ あんたとアルトリア、一介の魔術師と伝説のアーサー王との関係は!？」

勢いを増す凜の氣勢に、アーチャーは最後の抵抗とばかり沈黙を貫こうとするが、

『もう、いいんだ。アルトリア。君は間違つて——』

「やめんかー」

人生（英霊となつてからも含め）で最大と言つていいほどの恥ずかしい記録を再生される苦行の前に、思わず制止の声を出してしまつた。

「答えないのならコレ、延々と垂れ流すから」

「いやー、マジで鬼畜の所業ですね、凜さん！ 音声だけでもフェイカーさんには効果絶大です！」

ルビーと凜の連携は鮮やかにアーチャーを崖っぷちまで追い詰める。

仮面は鉄製でも、心は硝子でできているアーチャーである。

表面上は仏頂面を保つも、内心ではあまりの責め苦に、膝を屈した瞬間であつた。

(……………)までする必要があつたのかな?)

フェイカーさんの気を損ねて、クラスカード回収に協力しないとない言いだしたら、どうするんだろう？

イリヤはハラハラしながら凜とフェイカーのやり取りを見守つていた。口元は手のひらで蓋をしつつであるが。

さつきは迂闊に思ったことをそのまま外に垂れ流してしまい、凜に注意されたのだ。せっかくの念話の魔術が無駄になるでしょうが、と。

だからちやんと喉を震わすことなく念話でつぶやいたのだが――

（フェイカーの情報が全て正しいとは限りませんのよ。イリヤスフィール）

今度はルヴィアからの厳しい指摘が。

（与えられた情報を鵜呑みにするのは愚か者のすることですわ。きちんとした裏付けをとり、その情報が正しいことの確証を得て初めて、行動に移すものなのですのよ）

（でも、わざわざクラスカード回収を手伝ってくれているんだし、フェイカーさんはいい人っぽいと思うんだけどなー）

楽観的なイリヤの意見に、美遊も固い声で言葉を投げかける。

（イリヤ、世の中には都合のいいことばかりじゃない。どうしようもない理不尽なこともたくさんある。簡単に信じたらダメ）

（……ハーン。ワカリマシタ）

疑い深いルヴィアはともかく、美遊までもがフェイカーを前に気を張っている。

イリヤは一人、取り残された気分になるのであった。

「彼女とは主従関係だった。それだけのことだ」

澁々といった様子でフェイカーは口を開く。言葉数は少ないが、こちらの質問に最低限のことは答えてくれそうだ。それでこそ散々追い詰めた甲斐もある。

「王と従者って関係だけじゃないでしょう。じやなきや最後のアレはなんだったわけ？」

「あれは餞別のつもりだろう。アレのおかげで傷も癒えた。そういう呪い（まじない）の類だ」

本当だろうか？ 凜は猜疑の視線をフェイカーへ投げかける。

「ルビー、確認」

「嘘を言っただけじゃないよ。でも、あのチツスは明らかにラヴも含まれていたと思いますけどねー」

ルビーの煽りにもフェイカーの表情に変化はなかった。どうやら面の皮にも強化魔術をかけたようである。凜は、とりあえずはフェイカーとアーサー王は主従以上の関係があったものとして、聴取を進める。

「呪い（まじない）、ねえ。まあアーサー王の傍には魔術師マーリンがいたとされているから、何らかの術を習得していてもおかしくは無いけど……」

なら、現代に生きるあなたが古の伝説のアーサー王に仕えたっていう矛盾はどういうことなのかしら」

フェイカーは数秒、目を逸らし沈黙していたが、凜がルビーをけしかける直前で、衝撃的な事実を告げた。

「……私はこの時代に活動した魔術師では無い。そして生前の彼女とは縁があったただけだ」

口をパクパクとさせ、マヌケ面を晒す凜。

ルビーへと向いていた首をギギギと錆びついた人形のように回し。

「——なんですって！　じゃあ、あんたはアーサー王の時代から現代に來たっていうわけ?!」

生前の騎士王と面識があったということは、フェイカーは千数百年前に生きていた人物のはずである。アジア系の顔立ちや中華風の剣など、中世ヨーロッパには似合わない風体だが、東洋人が西洋にいた可能性は否めない。

「最初に言っただけだがな。私の存在自体が、世界の気まぐれ、いや奇跡だ」と

凜は唇をかんだ。前の発言は誤魔化しなどでは無く真実だったわけである。流してしまわず吟味すれば、こんなに厭味つたらしく復唱されることも無かったのだ。

(時空の移動……そこそ魔法の領域じゃない)

フェイカーの言い方から察するに、彼自身の力では無く、外的要因でこの時代に流れ着いたとも受け取れる。

頭を高速回転させる凜を横目に、今度は冷静に観察していたルヴィアが指摘をはさむ。

「フェイカー、あなたはアーサー王にこう言いましたわよね？ 『もう聖杯を求める必要はない』と。聖杯は万能の願望器を指しているのでしょうか。あなたがこの時代にいることは聖杯による奇跡なのですか？」

「……そうだな。『聖杯』のおかげで——私は彼女に出会い、その結果、今の私があると言っても間違いではないな」

「もったいぶった言い方はしないでいいわ。要するにアーサー王があなたを聖杯の力でこの時代に送り込んだんでしよう」

凜はフェイカーの発言を言い直す。

確かに聖杯なら時空の壁を越える奇跡も起こせるはずである。ましては騎士王が生きていたのは、精霊などの息吹きがまだ強く残っていた時代だ。十分にあり得る。

そしてフェイカーが騎士王へ贈ったもう一つの言葉——『君は間違っていないかった』は、フェイカーを現代へ渡航させたことに関するものかもしれない。フェイカーないしは騎士王の願いはこの時代で叶えられたということか。

「でもアーサー王は一度の奇跡でも満足できなかったようね。死後英霊になってからでも聖杯を求めるなんて……いつたいどんな願いを持っていたのよ」

険しい顔で考え込む凜の後ろでは、このやり取りを静かに窺っていたイリヤがおずおずと質問を切り出した。

「えっと、フェイカーさんはアルトリアさんの願いを諦めさせたんだよね？ 大事な人の願いなのに……。どうしてなの？」

自分の大切な人の願いであれば、叶えさせてあげたいと思うのが普通だと思うのだけれど。

戸惑いの色を隠さないイリヤに、フェイカーは僅かに気を緩めて言った。

「彼女の誇りのためにも、その願いの内容を詳しくは言えませんが——彼女自身が消滅してしまうかもしれない、そんな可能性の持った願い

は間違っていると思ったのだ。……私が言えた義理ではないのだがな」

イリヤはそれ以上、言葉をかけることができなかった。

自身が消滅する可能性を含んだ願いなど、想像もできず、またフェイカーの表情があまりにも穏やかで——なんと続けたら良いのか、わからなかったのだ。

「……あなたは何を願ったの？ その何でも叶える聖杯に」

次に声を上げたのは美遊だ。サファイアと治癒魔術を展開しながらも、視線はしっかりとフェイカーを捉えている。

「何も」

ポツリ、とフェイカーは言った。

「何も願いはしない。私の願いは自らが叶えなければ意味がない物だったからな。」

——今、あえて願うとすれば世界の恒久的平和か。もっとも、その願いのために切り捨てられる者が一人でもいるならば願い下げだが」

最後には自嘲の色を乗せたフェイカーの回答だったが、美遊はそれを聞き、大きく目を見開いた。

彼は聖杯を必要としない人間だった。ならば、『聖杯』である美遊を利用することも無いかもしれない。——みんなを『聖杯（美遊）』の奪い合いに巻き込まずにすむ。

美遊は静かに息を吐き出し、無意識に強張っていた身体から力を抜く。胸中に溜まったついていた重しの一つ、取り除かれた瞬間だった。

そんな美遊を横目に、凜は呆れたように念話で呟いた。

（なんて無欲なヤツ。普通、お金が欲しいとか、宝石が欲しいとか、名声が欲しいだとか、はたまた過去の過ちをやり直したいとか、思いつくでしょうに）

（……最初にお金と宝石が出てくるあたり、凜さんらしいね）

イリヤが合いの手を入れるが、凜は構わずに断言した。

「やっぱリアンタ、変人だわ」

フェイカーが返した反応は、ただ困ったように眉を寄せるのみだっ

た。

ルヴィアは凜の出した分かりきった結論を鼻で笑いながら、今までに出たフェイカーの情報を整理していた。

（フェイカーはアーサー王に仕えた中世の魔術師。そして聖杯により現代への時間跳躍を果たした。——まだクラスカードの関連も、イリヤスフィールとの接点も明らかではありませんわね）

美遊の治療も終盤である。それに無限の魔力供給があるとはいえ、結界を張り続けるイリヤスフィールの疲労も考えなくては。

先ほどから短剣が結界に弾かれる音がちよくちよく聞こえているのである。アサシンも様子を探っているのだろう。不用意に結界を解いたら、すぐにでもアサシンの反撃の狼煙が上がる可能性も高い。「フェイカー、あなたが変人なのは遠坂凜が言うまでもなく、最初から自明の理でしたが、まだまだ聞きたいことはありましてよ。」

鏡界面に突如として現れた礼装——クラスカード。そのクラスの内訳と英霊について、なぜ知っていますの？」

ルヴィアの正面切つての問いに、フェイカーは肩をすくめた。

『クラスカード』については、私は知らなかったとしか言いようがないな」

「嘘おつしやい！ あんなに情報を与えておいてそれは無いでしょう!？」

ルヴィアは血相を変えるが、

「嘘じやーありませんよー」

とルビーが口をはさむ。嘘が出たら思いっきりいじるつもりでルビーは、なかなか赤に変わらないアンテナのランプをベシベシと叩いていた。

ギリリと歯を食いしばり睨み付けるルヴィアに、フェイカーはやれやれと息をつくど、顔を引き締め話し出した。

「何度も言うようだがな——縁があったのだよ。数奇な運命ともいえるような縁が。」

……私とアーサー王は、ある戦争で彼らと会い、そして戦った」

戦争。現代の感覚では、戦車や航空機、銃器から砲弾が飛び交う近

代の様子をイメージするが、アーサー王の時代の戦争とくれば騎馬に槍、そして剣で制す戦いだったのだろう。

だが、決定的な矛盾がある。

「時代が違いすぎますわ。クー・フリーンにヘラクレス、それにアーサー王。数百年は離れているのですのよ。出会うはずの無い英雄たちが揃うなんて……」

ルヴィアの呟きにフェイカーは顔を歪め答えた。

「ああ、彼らは召喚されたのだ。枠（クラス）を用意され、その枠の範囲で力を振るう英霊としてな」

その言葉に目をむく魔術師二人を尻目に、フェイカーは続ける。

「用意された枠（クラス）は七つ。もう理解できると思うが——」

『クラスカード』の枠と同じだ」

もはや絶句するしかない。一国を率いるアーサー王の軍勢に、複数の英霊で対抗する相手がいようとは。そもそも、まだ大気中の魔力が濃い時代だったとはいえ、召喚魔術で英霊を召喚し使役し、戦争に用いようなど頭がぶっ飛んでいるとしか思えない。

「あれ？ でもアーサー王——アルトリアさんは『セイバー』の英霊だったよね？」

沈黙してしまったルヴィアと凜に代わり、イリヤが質問を投げかける。

先日のクラスカード回収の際、『セイバー』の黒化英霊は騎士王——アルトリアだったのだ。アーサー王がまだ生きている時代なら、『セイバー』のクラスには他の英霊が召喚されたはずなのだが……。

「彼の騎士王はイレギュラーの塊でな。生前にも関わらず、『セイバー』として召喚されたんだ」

今度こそ魔術師二人の顎がカクンと落ちた。ルビーを見やるが、アンテナのランプは緑のまま。魔術的観点からいえば、あまりにもふざけたイレギュラーだ。

「……結果は？」

美遊もこの展開は気になるようで、続きを催促する。

「その時の結果としては、アーサー王が英霊の中で一人勝ち残り、戦争

は終結した」

フエイカーは簡潔に締めくくった。

その際、僅か懐かしむように目を細めた気がした。

「……さすがアーサー王。最期の戦い、カムランの丘でモードレッドに敗れるまで負け無しの王様だったことはあるわ」

彫像から一足先に復活したのは凜の方であった。

「で？ その戦争とクラスカード、何が関係あるっていうのよ」

「先日の発言、『なぞり』というのにかかってくるのですの？」

遅れて復活したルヴィアも凜に追隨して問い詰める。

フエイカーはこの質問に苦虫を噛み潰したような顔で答えた。

「『世界』には修正力がある——ようだ。

既に起こった事象をもう一度繰り返すような——例え世界が違っていても——ルールが敷かれているようなものだ。そのルールから外れるには、ある種埒外な知識か、または誰かの小さな勇気か——はたまた大馬鹿者の判断などが必要だ」

フエイカーはここで大きく息を吐き出して、眉間のしわをなんとか緩めた。

「つまりだ。七つの枠に七の英霊。そして召喚魔術。ここまでの要素が揃えば私が体験した戦争を『なぞる』可能性が高い。

実際、『ランサー』としてクー・フリーン、『セイバー』としてアーサー王が接続先に選ばれ、さらに『ライダー』はゴルゴンの怪物メデューサ、『キャスター』は裏切りの魔女メデア、イレギュラーであった『アサシン』も暗殺集団の頭目・山の翁と、同じ顔触れがそろっている。ならば、残る『バーサーカー』はギリシャの英雄ヘラクレスだろう」

滔々と語られた情報を、凜とルヴィア、そして美遊も頭をフル回転させて咀嚼する中、イリヤは全ての理解することは諦め、気になった部分だけ聞いてみることにする。

「『アーチャー』の英霊は誰だったの？」

まだイリヤたちが判明できてなかったクラスカードの英霊の名も、

フェイカーは次々と挙げていったのだが、『アーチャー』の名だけが出ていなかったのだ。

気になるのも当然のこと。

「——私がアーサー王と共に参戦した戦争では、『アーチャー』の正体は最後まで判明せずにヤツは退場したよ」

そう言うフェイカーの表情はとても微妙なものになっていた。そう、イリヤの中の語彙では到底言い表せられないような。

『アーチャー』に対してフェイカーは、何か複雑な感情を抱いているようだった。

「さて、そろそろアサシンも痺れを切らす頃合いだ。……もう治療する箇所は無いはずだがな、美遊」

未だ倒し切れぬアサシンたちが潜む森。

その一角に構えられた強固な結界の中で。

少女たちと向かい合う赤い外套の男は、地に突き立てていた白の剣を握った。

（——時間切れね）

凜はこれ以上の治療行為による引き延ばしは不可能と判断した。僅かに眉を下げてこちらを見やる美遊に合図を送って、こちらへ下がらせる。

元々、フェイカーへの治療時間を利用した尋問タイムだったのだ。少々強引な手段を使って情報を訊きだしたのも、フェイカーが美遊の好意からくる治療を無碍にしてまで、乱暴はしまいと見越してのこと。

その見通しが立つ程度には、フェイカーの人間性を理解していた。意味も無く暴れたり、理不尽な怒りによつて子供を傷つけはしないだろう、と。

しかし、治療が終わった今、フェイカーに大人しくしている理由は無くなった。

『意味のある』力の行使は、ためらわずに行いそうだから油断できないのよね）

まだフェイカーに訊きたいことはあるが、結界にちよつかいを出してきているアサシンも気になるところでもある。フェイカーから少なからず情報を引き出せただけでも良しとしよう。……実のところ、訊きだした情報を整理したい気持ちもあった。

「今日のところはこれで勘弁してあげるわ。『バーサーカー』のカードの回収まで、美遊の好意を無駄にしないことね」

せっかく治した傷をまた開くようなことはするな、と念のため釘を

さしておく。

それは、アサシンやバーサーカーに単独で戦いを挑むことだけではなく——凜たちと敵対する真似をするな、という意味も込められている。……せつかく治療した相手に攻撃魔術を向けるのも馬鹿らしい。

凜は美遊を労わるように、ぽんぽんと頭をなでると、続けてイリヤにも目を向ける。

「イリヤも長時間、こんな高ランクの結界を張り続けて、疲れたでしよ。早いところ、このアサシン戦を終わらせましょう」

何でも無いように振る舞うイリヤだが、足元がふらふらしており、疲労がたまってきているのは一目瞭然だ。無制限の魔力タンクがあるうとも、魔術の行使は気力や体力が消耗する。特にこういった基点や補助となる道具の無い結界は、じわじわと気付かぬ内に削られるのである。魔術を使い慣れていない素人同然のイリヤであれば尚更だ。

凜はアサシンの攻撃に備え、宝石を取り出した。

恐らく結界を解いたなら、全員に対して攻撃が来るだろう。自分に対する攻撃くらいは迎撃して見せなければ、時計塔の首席候補の名が傷付く。

ルヴィアも同様に準備を整えていたのだが——、宝石を装備し終えた次の瞬間、

「これで終わりとは思わないことですわね。あなたに訊きたいことは、まだまだたくさんありますよ！」

ビシツとフェイカーに指を突き付けた。

(ちよつと！ この流れでそれを言う?!)

(やっぱり空気読めない人ですね)

ルビーにも呆れられる馬鹿である。

戦闘中の余計な雑念は取り除いておくのがベストだ。戦闘後にもまた尋問が控えていると知ったなら、フェイカーはそのまま姿を眩ます可能性が高い。アサシンのカードを回収した後も、バーサーカー戦に備えて、もう少し話を付けたいのだが。

そんな思考を巡らす凜を尻目に、ルヴィアはキリツとした顔でフェイカーを見つめている。どうやら気になる情報はとことん塗り取る

つもりらしい。アレは絶対に気が済むまで退かない顔だ。

そんなルヴィアを見やり、フェイカーは剣を片手に心底からと思われる溜め息をついた。

「何故そんなに興味が湧くのか、不思議でしようがないな。君たちの知的好奇心とやらは底なしなのかね」

そのままわざとらしく肩を上げるフェイカー。

こちらの諦め悪さを揶揄するような言葉に、ルヴィアのコメカミがピクリと引き攣る。

「フェイカー、あなたは信用と信頼の実績っていうモノがすつぽ抜けているようですわね。命を預けるかもしれない相手のことを知って、信頼に値するか計るのを無駄と仰るのかしら？」

ルヴィアの口上に乗るのは癪なのだが、この意見には凜も全面的に賛成だ。

一般人の、それも小学生のイリヤスフィールと美遊を巻き込んだ手前、判断を誤ることは許されない。

しかし、仮にもクラスカード回収に関しては、共に背を預ける仲間なのである。ある程度の意思疎通をとり、双方の信頼を築き、そしてフェイカーの目的によってはそちらの都合も考慮してもよいというのに——この男は。

「あんたがもう少し協力的に自分のことを説明してくれたなら、こつちもあんたのことを理解して仲良くやろうっていう気になるのよ。疑問ばかり増やされたんじゃ、たまったもんじゃないわ」

「……君たちに理解してもらって仲を深めたところで、何になる？」

君たちとはクラスカード回収後、二度と会うことも無いのに？」

大真面目に言うフェイカーに、凜のもう何度爆発したかもわからないう怒りの火床が、また勢いよく燃え上がる。

——どうしてこの男は、自ら他人からの理解を打ち捨てるような真似をするのか。

凜はフェイカーの泰然と構える立ち姿を視界に収め、拳を握りしめる。

フェイカーの言動に、自分の怒りの沸点が低くなっているのは、自

覚している。先ほどの尋問だって、怒りの勢いに任せて突っ走ってしまったと、多少反省もしている。

だが、おかしな話、何故か受け流せないのだ。

それはこの男の鼻に付く態度や————妙に馴れ馴れしい距離感のせいかもしれない。フェイカーの手の上で弄られているような話の流れや挑発の仕方。そして『凜たちが不用意に攻撃するはずも無い』と語る背中。まるで凜たちのことをよく知っているような、一方的な信頼感。そんな素振りが所々に見え隠れするから、調子も狂う。

(思えば、名前を尋ねたのは美遊だけだったわ)

他にも、凜とルヴィアの会話から、このクラスカード回収の背景を把握したりと、数百年前の過去から来た人間にしては、魔術協会に關して妙に詳しかった。

一体何年前からこの時代にいるのか、と疑問も湧くのだが————それよりも。

今の凜を苛立たせている原因は。

(やっぱり、コイツの存在自体が気に障るのよね)
フェイカーには大層な目的があるのだろう。——それを貫き通す意志の強さは感じられる。

この男は性根から腐った悪党では無いのだろう。——そのくらいの人をみる自信はある。けれど。

コイツは自分以外を頼らない。それだけの強さを持っている。

だから自らの目的を一人で成し遂げようとする。

他人に理解を求めず。頼らず。必要とせず。

たった一人で。

(そのくせ、他人の命は救っておいて。……矛盾しているのよ)

他者を拒絶しながらも、他者を救う男の有り様に、凜は苛立ちを隠せないでいた。

「クラスカード回収後は二度と会わない？ この狭い魔術社会、ぼったりと鉢合わることもあるかもしれないわよ」

ルヴィアはフェイカーの言葉尻を捉え、今後の可能性をぶつける。

黒化英霊とも渡り合うフェイカーの実力を考えれば、その可能性も無くはない。

特出した能力の持ち主は、早々隠居を決め込まない限り、魔術社会では良くも悪くも目を付けられやすいのだ。

しかし、フェイカーは嫌味な態度を崩さず、返答を投げ返す。

「クラスカードは、英霊の宝具を一時的に顕現する機能を持つ礼装だ。

——あくまでも『英霊の宝具』であるからな。よく考えれば『抑止』が働くまでもない。

……よつて、私がこの後、関与することも無かろう」

煙を巻くような、迂遠的な言い回し。聞いているのはそんなことでは無い筈なのだが、フェイカーにとってはこれが適当な答えらしい。

「それ、説明になってないわ」

凜は荒れ模様の感情のまま、憤然とフェイカーに突っかった。

「……そもそもね、あなた何様のつもりなの？」

一応、前にあなたの目的の建前は聞いたわ。『冬木の地に起きた歪みの解決』。そうでしょう？」

凜の、宝石を握る手に力が入る。硬質な石のこすれる音が決壊の合図だった。

「——通りすがりのあなたには全然関係ないじゃない！ しかも偉そうに一人で解決しようとして、自業自得の傷を負って。馬鹿でしょ！」

あなたは危険な事件に、わざわざ自分から首を突っ込むほどのお人好しなの?!

いえ、お伽噺の正義の味方（ヒーロー）にでもなったつもり?!」

凜の怒涛の口撃がビリビリと空気を震わせる。

突如爆発した凜の怒声に、ルヴィアも美遊も、そしてふらふらのイリヤでさえ呆気にとられ凜を注視する。

さすがのフェイカーも面を食らったようで、目を真ん丸にしていた。

眉の陰が取れたその表情は、誰かを思い出させたが——、そのイメージを掴む前に、フェイカーの顔が奇妙に歪んだ。

「——そうだったら、よかったのにな」

それは自嘲なのか、後悔なのか。それとも決して手の届かぬモノへの憧憬なのか。

複雑な色が混じったその貌は——男の内心を推し量るには、凜たちには難解過ぎたが——どこか泣きそうにも見えた。

だが、それも一瞬のこと。

見えない仮面をつけるように、褐色の大きな手が置かれると、たちまち元の皮肉屋の顔が現れた。

「……私の目的は、君が言った通り『冬木の歪みの解決』で間違いない。まあ、純粹なる善意では無く、多少の私情も混じっているがね」
「その私情を私たちに説明する気は？」

「無いな。だが、君たちを害するようなものではないから、安心したまえ」

未だ『ウソ発見器』モードのルビーを見るが、アンテナの先は緑のまま。

どうやら、本心らしい。

フェイカーの上からの言い方に、軽くイラツと来るものの、凜の怒りの炎はほぼ鎮静していた。先のフェイカーの表情、あれで調子が狂ったようなのだ。一度、怒りを爆発させてしまったのもよかったのだろう。イリヤたちには恥ずかしい姿を見せてしまったが、とりあえず頭は冷えた。

(怪我の功名みただけど、言質は取れたし。結果はオーライよね)

(凜さんのあの様子……まさかフェイカーさんに惚れちゃったとかそんな感じ?!)

凜の怒りの爆発に、イリヤが抱いた感想はこれである。

相手を心配する念を怒りで表すとは……あれはどう聞いてもツンデレ少女の台詞だ。

イリヤは、次いでなんとなく揺れる視界にルビーをおさめ、口元を引き攣らせた。ルビーの五芒星の横、金の輪の内側に『●REC』の

赤文字を発見してしまったのだ。

(コレ、後で凜さんが可哀そうなことになるフラグだ)

今までのシリアスモードが続いたのだ。恐らく後でその鬱憤を晴らすことを選んだのだろう。今は真剣にネタの回収に勤しんでいるとみた。

(……私、今日はなんかの役に立っているかな)

アサシンをだいたいやつつけたのはフェイカーさんだし。

美遊はフェイカーさんの治療をしたし。サファイアも美遊のことよく助けてるし。

凜さんとルヴィアさんは、フェイカーさんから上手く情報を訊きだしているし。

ルビーだって、ウソ発見と結界の構築と、重要な役をこなしているし。

(よく考えてみれば、私ってあんまりいる意味無くない!?)

アサシンが攻撃してきた時だって何にも反応できなかったのに。足手纏いにしかなっていかないかも、という昏い思いがイリヤの心に影を落とす。

実際には、ルビーを行使しているのがイリヤであって、イリヤがいなければ結界魔術を展開出来ないのだが、魔法少女仕様のせいなのか、魔術の負担がほとんど感じないおかげで「少し立ちっぱなしで疲れたかな」というのが、イリヤの今の認識であった。

故に、「自分も何かの役に立ちたい——」。

その一心で、イリヤは張り切ってしまったのだ。

ルビーに向けた視線の奥、結界の外。

イリヤは見つけてしまった。

先の爆発で倒された木々の隙間に見えたもの。

(あれは、木の枝とかそんなんじゃないやなくて……)

意識を集中させ、焦点を絞る。

視力強化の魔術を重ね掛けし、暗い陰の奥を見通す。

イリヤは気付いていない。自分がルビーを通さずに魔術を行使したことを。——内なる扉の鍵が、既に外れかけていることを。

強化された眼でイリヤははつきりと見た。
闇に紛れてしまいそうな暗い肌色。短い手足。
地面と平行に投げ出された肢体に力は無く。
かろうじて引掛つ掛っている衣服はボロボロで。

「女の子……？」

アサシンが潜む危険な結界の外。

そこに、イリヤと同じくらい女の子が倒れていた。

「凜さんごめん！ 結界、解除します！」

ルビーをわし掴みし、イリヤは叫ぶ。

結界が消え去ると同時に、ダツシユを開始。フェイカーを含めた他のメンバーを置き去りに、目標へと近づく。

この少女を助けることしか、イリヤの頭には無かった。知らぬうちに蓄積された疲労のせいで視野が狭くなっていたのかもしれない。しかし、いつ少女がアサシンに襲われるかもしれない状況で、相談などしていらなかった。

一刻も早く少女の下へ辿り着き、保護しなければ――。

結界を解除したことで、凜さんたちにアサシンの攻撃が及ぶことも、考えない訳では無かった。しかし、復活したフェイカーさんもいるし大丈夫だろうと、思った。それだけ――みんなは強い。

「大丈夫?! ねえ、しつかりして！」

倒れた木々を踏破し、少女の下へ駆けつけたイリヤは、必死に声をかける。

恐る恐る抱き起してやれば、痛ましい身体の惨状が目についた。

「ルビー、この子を治して！」

「はいはい。黒肌のロリツ娘ですね。了解しました！ ついでに魔法障壁も張りますが、ランクが低くなるのは承知してくださいよ」

ルビーは物わかりがいいことに、すぐに処置を開始する。その張り切り具合を見る限り、この少女はルビーの好みに合っていたようだ。

先ほどの結界よりは薄い桃色の障壁の内側で、イリヤは少女の手を握り、祈る。

(お願い、目を開けて!)

服越しであるが、少女が浅く息をしている感覚は、抱いた腕から伝わっている。

——まだ助かるはず。私が助けて見せる!

「あれ〜? イリヤさん、この子——」

「あ、気が付いたみたい! ちょっと黙ってルビー」

薄目を開けた少女に、イリヤは何か言いたげなルビーを制して話しかける。

「大丈夫? もう心配はいらないよ。あなたは私が助けるからね!」

少女の顔にかかる乱れた前髪を、イリヤは優しく払う。白い何かの破片が零れたが、イリヤは気にしなかった。

少女の瞳は焦点が合わず、ぼんやりしているようだったが、イリヤの声に反応し、顔を僅かにイリヤの方へ向ける。

「——…たい。いたいよ。…ココどこ? ……かえりたい」

掠れた声は、戸惑いに満ちていた。何故こんな状態になってしまったか、そもそも何故この空間に紛れ込んでしまったかも、少女は把握していないようだ。

「大丈夫。帰れるよ。私が帰してあげる」

イリヤは力強く頷き、少女の手を握り返した。

状況は悪いまま。アサシンはまだ潜んでいるはず。遠くで交戦している音も聞こえるから、凜さんたちの助力は届かない。

イリヤは考える。

この子を無事、帰すにはどうすればいいかを。

この子の願いを叶えるための方法を。

最善の方法は。

最善の結果は。

「——ルビー、シュート(速射)を用意」

心の内に浮かびあがった答えのままに、イリヤは呟いた。

「ん? どうしましたイリヤさん? 他のアサシンでも見つけました?」

突然のイリヤの要請に首を傾げるルビー。

だが、イリヤが返事をする前に。

パキンと結界が砕け散った。

続いて軽い飛翔音と共に飛来する黒いなにか。

それはまっすぐにイリヤの方へ向かってきて――

トンツと。抱きかかえていた少女の胸に突き立った。

「え――」

イリヤは呆然とソレを見た。黒く細長いそれは、イリヤの記憶にあるよりは短く、つまり残りは少女の中に埋まっているわけで……。

イリヤは面を上げ、それが飛来した方向に目を向ける。見据えた先にいたのは――

厳しくも冷たい顔をした、フェイカーだった。

「なんで。……どうして」

腕の中の鼓動が、急速に弱くなっていく。少女の黒い肌よりも、もつと色の濃いものが、口元から溢れるように零れる。

『助ける』って言ったのに。『帰してあげる』って言ったのに。

なんで、この子の命は消えようとしているの？

イリヤは湧き上がる衝動のまま叫ぶ。

この少女の命を奪わんとしている黒の短剣——ダークを投げつけた犯人へ。

今もなお、冷めた目でこちらを見つめる男へ向かって。

「どうしてこんなことしたの?! フェイカーさん！」

銀の少女の悲痛な声は、ただ夜の闇に吸い込まれてゆくだけであった。

「……まだ気付いていないのか。イリヤスフィール」

冷徹な雰囲気身を纏い、男はイリヤとの距離を縮めてゆく。結界を解除し飛び出してくる前よりも、はるかに鋭利な眼差しがイリヤを貫く。

どうして。どうしてそんな目で私を見るの。

イリヤの内に生じたフェイカーへの憤りが、僅かにその勢いを鈍らせる。

確かに何の相談も無く、急に飛び出したのは悪いと思ってる。

怒るのも当然のこと。けれど、信頼はしていたのだ。一人で戦いに臨み、アサシンの大半を切り伏せたフェイカー、それに判断力や魔術の腕はイリヤたちの数段上を行く凜やルヴィア。そしていつも冷静で優秀な美遊。このメンバーなら、無事にアサシンを切り抜けられるだろうと。

それに人の命がかかっていた。巻き込まれただけの小さな女の子を、アサシンの刃がいつ襲うかもしれない状況に放っておけなかったのだ。

なのに、この人は——フェイカーは助けるどころか、この子に向

かつて短剣を投げつけた。瀕死の少女に、とどめを刺すように。

悪いのはフェイカーの方だ。

イリヤはただ助けたかっただけ。

—— やつと役に立てると思ったのに。

—— せっかくこの子の『願い』を叶えられると思ったのに。

—— どうして、私（ワタシ）を否定するの。

「イリヤ、あんたその子が何なのか、本当に分かってないの？」

フェイカーの背後から、追いついた凜が顔を出す。ルヴィアと美遊はまだ先ほどの場所に留まったままだ。

凜の質問の意味がよく分からず、訝しげな顔を向けるイリヤに、状況を把握した凜は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべ、告げた。

「その子はね—— 複数いたアサシンの一人よ」

その宣告と、腕の中の少女が黒い粒子となって霧散したのは、ほぼ同時だった。

消える質量。確かに抱いていたはずの腕は空を切り、皮膚に残っていた温もりも何もかも、血糊でさえも最初から無かったような、呆気ない消失。

呆然とするイリヤの目の前に、はらりと落ちるは一枚のカード。

見覚えのある表装には両腕に刃物を持つ髑髏の男が描かれ、その下に刻まれた文字は—— 『Assassin』。

唯一残ったそれが、少女がアサシンであったことの、何よりの証明であった。

「そんな……。じゃあ、私のしたことは、全部、無駄だったの……」

腕をかき抱き、わなわなと震え出すイリヤ。目尻からは涙が滲む。

フェイカーはそれに気付くと、一度目を閉じ、一呼吸置いて——
——そして容赦なく追い打ちをかけた。

「無駄どころか、こちらにも損害が生じた」

俯いていたイリヤは、その言葉に顔を上げる。座り込むイリヤと仁王立ちになり見下ろすフェイカーとの高低差は大きく、フェイカーから受ける威圧感（プレッシャー）に拍車がかかる。

「唐突な結界解除に美遊が反応しきれず、アサシンの毒を受けた。幸

い、麻痺する程度のものだったがな。下手をすれば死んでいた。——
君の迂闊な行動が原因で、だ」

「美遊が……。私のせいで……。？」

イリヤの魔術で強化された眼は、フェイカーのはるか向こう側で蹲る美遊を捉える。その首筋に血が滲んでいるところまでも。

血の気が引き、蒼白になるイリヤの様子を見て、凜は慌てて声をあげた。

「ちよつとフェイカー。それは私たちが美遊のことを守り切れなかっただけで——」

「だがイリヤスフィールが先走らなければ、防ぐことはできた事態だ。

……虎視眈々と機会をうかがっていたアサシンの攻撃に、急に結界を解除された私たちは、自身の身を守ることしか出来なかつた」

凜のフォローを遮るようにフェイカーは言葉を被せていく。

感情を抑制した声音は鋼のような質感を伴い、イリヤには言葉の剣が降って来るようにも感じた。

「ここは死と隣り合わせの戦場だ。軽々しい行動の代償が、誰かの命になるかもしれん。

——そんなことも分からないのならば、イリヤスフィール、君はここに在るべきでは無い」

そこが限界だった。

フェイカーから振り下ろされた言葉の刃に、イリヤの心の中では憤りと自責と後悔と、自分でもよく分からない悲しみと恐怖がごちゃごちゃになつて——

「もういやー！」

叫びと共にイリヤの足元に展開されたのは、離界（ジャンプ）のための魔法陣。

この世界の全てを拒絶するように、イリヤはその場から掻き消えた。

「逃げたわね……。まあ、無理もないか」

凜は残されたアサシンのカードを拾い、イリヤの魔力の残片が宙に

散っていくのを見届けながら、呟いた。

一般人の、しかも年端もいかぬ小学生に今の仕打ちはあまりに酷だ。

その元凶はというと、既に背を向けて美遊たちの方へ歩き出している。夜の闇に浮かび上がる赤い外套に包まれた背中は城壁のように広く大きい——間近で見えていた凜には朽ちかけた、ただの石壁のようにも見えた。

凜の胸中をさまざまな感情と憶測と思惑とが駆け巡ったが、ため息一つでどうにか纏めると、フェイカーの背中に向かって結論を投げつけた。——恐らくこれが正解だろう。

「よっぽどイリヤのことが大事なようね、フェイカー」

「何のことかな。遠坂凜」

間髪入れずに発せられたフェイカーの返答。それが逆に凜の推測を支える材料となる。

「もう、イリヤをこの問題に関わらせたくないんでしよう。だから、あの子が二度と戻って来ることが無いように、わざと悪役を買って出た」

凜は見ていたのだ。あの、結界が消えイリヤが飛び出した瞬間、誰よりもイリヤのことを目で追っていたのは、フェイカーであったのを。そして、一刻も早くイリヤに追いつくために、らしくもない余裕の消えた戦いをしていたことも。

彼の實力であれば、身を守り、アサシンを返り討ちにするだけでは無く、治癒魔術の疲れから反応が遅れた美遊を守ることでもできただろう。だから先刻の言葉の『自身の身を守ることしか出来なかった』はフェイカー自身への自嘲も重ねていたはずだ。

そして黒の少女への攻撃。凜やルヴィアは、生き残っていたアサシンに応戦することしか出来ない中、フェイカーだけがイリヤの張った障壁さえその鋭い双眸で見透かし、イリヤの抱く少女がアサシンだと見抜き、自らの獲物を投擲した。

凜は、その実際の光景は目撃していない。

だが、アサシンを爆炎と共に焼き飛ばし、始末をつけて振り返った

先。投擲の残心を残すフェイカーの表情は、既に冷たい鋼のように固まっていた。

それは、どこまでも感情を押し殺したモノにも見えて——まだ、あの皮肉屋であった方がマシだと思った。

「……私は事実を指摘しただけだ。これ以上足手纏いになられても困るのでね。彼女がもう戻らないのなら、それでいい。あんな子供は日の当たる普通の世界がお似合いだ」

足を止めて振り向きざまに告げるフェイカー。

だんだんと戻ってきた皮肉屋の調子に、やっぱり無理してたんでしょ、と凜はひとりごちる。効果的とはいえ、わざわざあんな突き放すような態度であれば、双方ともに傷つくというもの。不器用なやり方に、凜は呆れてものも言えない。

(大切だったら、身近で守ってあげればいいものを)

だが、凜もまた知っていた。綺麗事だけでは済まされない魔術世界の人間が、表社会で平凡に生きる者を守る難しさを。

(……私も人のこと言えないか)

自分も成せていないことを他人に押し付ける訳にもいかない。

凜はフェイカーのイリヤへの所業については、これ以上言及しないことに決める。フェイカーがイリヤのことを何よりも大切にしている、という事実が証明されただけで、今日の成果としては十分だ。

(あー、そしたらイリヤへのフォローも考えておかないと。巻き込んだのはこっちだし。……これも全部、あのバカステッキのせいよ!)
イリヤへの今後の対応に、凜は頭を痛めるのであった。

「そう。イリヤは逃げ出したんですね」

凜からこれまでの経過を聞いた美遊は、無表情につぶやくと、そつと目を閉じた。

アサシンの毒はサファイアの尽力によりほぼ取り除かれ、身体を動かす分には支障は無い。アサシンの英霊が倒されカードを回収したにも関わらず、崩壊の兆しの無い空間に、前回の発言からフェイカーを警戒しつつ、いつでも離界(ジャンプ)できるようにしておく。

「それなら私は、バーサーカー戦では魔力砲と、ランサーとセイバーの宝具で三回バーサーカーを倒せばいいですね」

「ちよつと美遊?! 無理は禁物ですわよ!」

静かに言い放つ美遊に、付き添っていたルヴィアが制止の声をあげる。

いくらカレイドステッキの恩恵があるとはいえ、一晩に三回の大規模な魔術行使は身体の負担が大きい。しかもヘラクレスという怪物と戦いながらも、その強固な肉体を突破するために、消耗の激しい宝具の真名解放はせざるを得ないだろう。ルヴィアの懸念はもつともだった。

しかし美遊は首を横に振る。

「イリヤがない以上、クラスカードを『限定展開(インクルード)』できるのは私だけです。」

—— 大丈夫。私ひとりでもやれます」

決然と告げる美遊に戸惑いは無かった。

わかつていたことだ。

最初からイリヤには、クラスカードを巡る戦いに参戦する義務も責任も無かった。

ただ巻き込まれただけ。それでも一緒に戦ってくれたのは、非日常と魔法少女への憧れという遊び半分な気持ちがあつたから。

けれど、今回の戦いで身に染みて分かつたはずだ。私たちは命をかけて戦っていたんだと。

一つ判断を間違えれば、死が待っている戦場。自分の命を落とす可能性もあるし、誰かの人生を終わらせてしまう可能性もある。そして他人の死はこの先、一生ついて回るだろう。……そんな重荷、背負わせたくない。

だからイリヤはもう、戦わなくていい。—— 例え、その身に莫大な魔力と未知の能力を秘めていようと、イリヤは普通の世界に生きる子なのだ。美遊の事情に関わらず、普通の人生を歩めばいいのだ。

胸の奥で小さくうづく痛みを、美遊は感じないフリをする。

これはしょうがないことだと、理解していたから。

（イリヤはまだ間に合う。けれど、私は——）
既に起きてしまった過去を振り返っても、なかったことには出来ない。
い。

ならば、身近な友の身に降りかかる火の粉を払う方が、よほど建設的だ。

そのためにはフェイカーの協力が必要不可欠なのだが——

真一文字に口元を固く結び、前を見据える美遊。

そんな少女を見かねたように、アーチャーはつい、先ほどと同じように腕を伸ばす。

それはアサシンの毒の影響が残っていないか確かめるためでもあり、クラスカード回収を逃げ出したイリヤを恨むでもなく、ひとりでも厳しい戦いに挑む選択をした少女への激励のつもりでもあったのだが——その手は宙で止まることとなった。

——ビクリと跳ね上がった肩。

——後ろに引かれる上体。

——恐れを含んだ瞳。

アーチャーにとつて、よく覚えのある反応だった。

（アサシンとはいえ、無力な幼子を殺したのだ。怖れられても仕方がないか）

己に向かってくる敵を迎え撃つことは出来ても、攻撃意志もなく更に弱っている女子供を躊躇なく殺せる人間は限られる。それは人を殺すことに禁忌を感じない快樂殺人者であったり、人を食料としか見ない化け物であったり、人を材料の一つとしか見なせない魔術師であったり——はたまた、人の命を数でしか捉えられない『正義の味方』であったりする。

人間を殺すことをできる。そんな存在が近隣にいと知るだけで、平凡な世界で生きてきた者には恐怖を覚えるだろう。もしかしたら殺人者の手が己にかかるかもしれない、そんな可能性が発生するのだから。臆すのも当然だ。

だが、わかっていたことだ。

そう思われることも承知の上で、選択してきたのだから。

今更、そんな目で見られることにも、そして女子供に手をかけることにも、痛みを感じる心は——無い。

「……イリヤスフィールの抜けた穴は私が埋めよう。なに、責任は取るさ」

アーチャーは何事も無かったかのように腕を戻す。

美遊も視線は逸らすものの、動揺を静めて平静になろうとしている。バーサーカー戦では肩を並べて戦うのだ。このことで悪影響を残すまいと努める気概はあるようだ。

そんな様子を見守っていたルヴィアが、保護者よろしく背後から美遊を抱きしめた。

「当然ですわ。美遊ばかりに無茶ははさせられませんもの」

口調は柔らかいのだが、フェイカーをみる目は明らかに先ほどより数倍きつい。なんというか、自分の子供を守ろうと威嚇する母親狐が幻視出来た。

「つまり、ランサーかセイバーのどちらかのカードをあなたが『限定展開（インクルード）』するということかしら？ フェイカー」

凜はあえてルヴィアをスルーし、確認を取るように尋ねる。散々はぐらかしてきたせいも、具体的に要点を突いてくる。

「そうだ。クラスカードについては解析を進めているのでね。私なりのやり方で『宝具』を召喚するさ」

嘘では無い。投影魔術によって『宝具』を創ってもよいが——今日の衛宮士郎が接触してくるまでの間に、カードの『内側』から構造の解析を進めていたのだ。まさか製作者も、意志を持った英霊の力が解析するなど思いつかなかったのだろう。妨害の術式もほとんど無く、『限定展開（インクルード）』の術式もほぼ把握した。あとはそれを展開するに相応しい『容れ物』があればいい。『中身』まで作りこむよりも、こちらのほうが燃費は良い。

「そう。なら、コレを持っていきなさい」

アーチャーの返答を受けると、凜は懐から無造作に何かを掴みだし、アーチャーへ向かって放った。

闇夜であつても星明りを受けてキラリと瞬くモノたちを、一つも落とすことなく手で受け止め視線をむければ、それは上等な宝石類。

思わずまじまじと凜の顔を見つめてしまうアーチャー。

(まさか守銭奴のような彼女から、タダで宝石をプレゼントされるとは)

さつそく中身を確認すべく素早く解析魔術を走らせる。ルビーやエメラルドといった貴石の他に、水晶や瑪瑙など半貴石も混じっているが、いずれも込められた魔力は上等だ。

「チャージも兼ねた予備の宝石よ。キーを告げれば魔力を取り込めるわ」

術式の開放の起句さえ教える凜に、アーチャーは、いよいよ何かの策略の一端なのか、と疑いの色を濃くする。

「なによその顔は。一応、イリヤの命の恩人だし、あんたばかりに負担させるのも悪いと思ってるんだからね!」

凜の必死な様子に、この贈り物は本当に純粋な好意からか?と思つたが、もう一度しっかり解析をかけ直して——頬を引き攣らせた。

(これはうっかりなのか、狙っているのか。やはり……純粋な好意ではない、のか?)

とりあえずアーチャーは半貴石のものは手元に残し、高級な部類に入る貴石を凜に投げ返した。

「私には過ぎた代物だな。庶民には半貴石で十分だ」

「ちよつと、なに人の好意を無下にしてんのよ!」

無然とする凜に、耳敏く反応したルヴィアが茶々を入れる。

「あら、半貴石なんてものも使っているなんて、貧乏人にはお似合いですわね」

「あんたは黙っていないさい! このバカネ持ち!」

凜とルヴィアのいつもながらの口論が始まり、やつと矛先が外れたアーチャーは、一部で張り詰めていた感覚を解く。もうそろそろ、退場してもよい頃合いだ。

格子の引かれた偽りの空に、ぴしりと一条のヒビが入る。それは急

速にこの空間全体へと伝播してゆき、この世界の終焉の合図となる。
——アーチャーが維持していた鏡面界の崩落が始まったのだ。

もともと鏡面界はクラスカードと、現象として現界した英霊が核となり、発生している空間である。キャスターが倒された後、セイバーに空間が引き継がれたのと同じように、この空間の核は、アサシンを倒した時点で、クラスカードを依代に現界しているアーチャーに移っていた。維持にも魔力を取られるが、一度成立した空間を支えるだけならば、消費される魔力は微々たるものだ。

突如始まった鏡面界の崩落に騒然とする三人に、アーチャーは次へ続く言葉を言い残す。

「今日のところはこれでお開きだ。ヘラクレスという希代の英雄に相対する覚悟があるのなら、次の夜にでもまた会おうだろう。早々に潰されたくなければ、くれぐれも軽装備で来ないことだ」

既に離界（ジャンプ）のための術式は起動させてある。凜たちが何かを言う前に身を翻すと、挨拶代りに片腕をあげ、アーチャーは予想外に長丁場となった戦場から退場したのであった。

「ち、やっぱりもう気配は無いわね。今夜はこれで帰るしかないか」
現実世界へ帰還し、フェイカーの姿がまったく見えないことを確認して、凜たちはエーデルフェルト邸へ戻るため待機させてあった車へと足を進める。

「ところでルヴィア。あなた、あんな啖呵を切っておきながら、あっさりフェイカーを解放していたけど、どういうつもりよ」

フェイカーに関しての気になる情報は、すべて筆り取る気満々だったと思うのだけれど。

凜は手のひらを返したようなルヴィアの態度を問い質す。途中からフェイカーへの注意を放り出して、凜との小競り合いを始めたのだ。それが、フェイカーが逃げる絶好のチャンスとなったようなのだが——

「あれ以上のフェイカーとの接触は、美遊の精神衛生上よくないと判断したままですわ。」

アサシンとはいえ、美遊と同じくらいの幼子を躊躇なく刃にかけるなんて、極悪非道の極み！ 美遊がフェイカーを怖がるのも当然ですわ！」

えっへんと豊かすぎる胸を張ってルヴィアは高々に言う。どういう経緯でルヴィアが美遊の後見人を務めるようになったのかは知らないが、ちよつと過保護過ぎない？と凜はげんなりと息を吐き出す。もつともこの馬鹿は、やること成すことが極端なのだからこれが通常運転かもしれないが。

肝心の美遊はというと、硬い表情のままどこか上の空で、機械的に足を動かすのみ。ルヴィアの言葉は届いていないようだ。

「それにしても、あなたのずる賢さ、もとい凶々しさには呆れを通り越して、感動さえ覚えましてよ。まあ、フェイカーにはそれも通じなかつたようですけど」

「え？ 一体何のことよ？」

凜は本気でルヴィアが何を指して言っているのか分からず、眉間にしわを寄せる。

「あら、時計塔で意気揚々と貧乏人の細々とした仕掛けを語って下さったのは、いつの事でしたかしら」

耄碌するには早すぎるんじゃないやありませんの。

そんな言葉で締めくくったルヴィアの挑発にカチンとまた触発されそうになるものの、凜はそこで、はた、と気がついた。

そういえば、高価な宝石には確か——

「追跡と遠隔解放の術式をかけてたんだった……」

これでは発信機付きの、いつでも爆破可能な爆弾をプレゼントしたようなものだ。

凜は顔を青くしながら思わず絶叫する。せつかく好意的な態度を示したのに、これは誤解を招いただけかもしれない——

「しまったああああああああ!!」

そのあまり優雅とは言えない声は、森の隅々にまで木霊したという。

潮の香りをはらんだ風が、火照った体を冷ましていく。

浜に寄せては引いていく波は、静かに一定のリズムを耳に刻む。雲がかかる空の下。隙間から覗く星の光は遠く。

夜の海辺で一人、イリヤは膝を抱えて座り込んでいた。

「ルビー、どこに行ったかな」

湿った海風に、イリヤは身震いする。夏服から突き出た手足から、体温が風に巻き取られていくようだ。

（空気を読んでくれたのはいいけど、少し、寂しくなっちゃったな）

一緒について来ていたルビーはいま、そばにはいない。

イリヤがそう望んだからだ。

鏡面界から現実世界へ戻った後。イリヤは無我夢中だった。とにかくあの場所から少しでも離れて、一人になりたかった。

どうやったかは覚えていない。気が付けばこの海岸に来ていた。

白い砂浜と、大きめの岩が海面から突き出したこの場所は、夏になるとよく遊びにくるお気に入りのところだ。

昼間は多少の人影もあるのだが、今は真夜中。散策に来る者もいない。

転身を解除し、体育座りで顔を伏せたイリヤに、ルビーは雰囲気をもるくしようとおれこれ自身の仕掛けをひっくり返したが、イリヤは到底そんな気分では無かったから、「もう一人にして」とルビーを追い払った。

一人になって気が落ち着けば、なんとか気持ちの整理も付けられるだろうと思っていたのだ。

しかし、昂ぶった気持ちの波が通り過ぎたところで、今度は先ほどの光景が何度も頭の中でリピートされる。

潮騒の音だけが響く夜の砂浜。

イリヤは、もう何回目かも分からない思考の迷路をさまよっていた。た。

（私のせいで、美遊は死にそうになった）

まだ瞼の裏にうづくまる美遊の姿が焼き付いている。

運がよかったただけだ。もしかしたら、アサシンの短剣には触れただけで死に至るような毒が塗ってあったかもしれないなかった。

(私があの子を助けたいと思ったから)

助けたいと思った少女は、アサシンだった。倒すべき敵だった。

治療をしたところで意味が無かった。

(フェイカーさんの言うことは正しい)

鋭い切っ先を持つ言葉は全ての的を射ていた。

何も言い返すことなどできない。イリヤのとった行動は全て、無駄だった。

(私が悪いっていうのは分かってる)

勝手な思い込みで行動した結果が、これだ。

もう、美遊も、凜さんもルヴィアさんも信用してくれないだろう。

カード回収に参加したところでイリヤは皆の足を引っ張るだけだ。

でも。

それでも。

頭では理解していても、割り切れない気持ちがあった。

(私は———あの子を助けたいと思った気持ち否定したくない！)

結果だけ見れば、イリヤの行動は全て余計なものだった。

けれど、あの時点ではアサシンだとは知らなかった。もしも、本当にただの巻き込まれただけの女の子だったら、イリヤのとった行動は意味のあるものになっていたはずだ。

イリヤの腫れて赤くなつた瞼から、また涙が滲む。

胸の内を締め付けるように込み上げてくるもの。これは、たぶん憤りと悔しさと悲しさなんだろうと思う。

目の前でフェイカーにあの子を消された時、イリヤが抱いた感情はまさにそれだ。

助けようとした子を殺されたこと、それまでの行動———勇気を出してアサシンが潜む境界外に飛び出し、慣れない治癒魔法を行使したこと———を全て台無しにされた。それに憤りを覚えた。

助けてあげられなかったことが悲しかった。フェイカーに全てを否定されて悲しかった。

あの子の願いを叶えてあげられなくて悔しかった。何もフェイカーに言い返せなくて悔しかった。

その全てが、胸の中心で駄々をこねる子供のように居座り続ける。そして。

(私はあの時、どうして——『横取りされた』と思ったんだろう)

心の隅に、奥歯にもものが挟まったかのような違和感がある。それも感情の整理を邪魔する一因だ。

「私が私でないような感じ……」

自分以外の誰か、自分の知らない『私』がいるの？

そんな恐怖が胸の奥底にひたひたと漂う。

「もう、分かんないよ」

混乱が収まらない。

それゆえ、浜に座ったまま身動きもする気も起きず、どれくらい時間が経ったかすら曖昧だ。

暗い海の前で、イリヤは一人うずくまる。このままでは家に帰れない。でも、朝までに戻らなければ、さすがに家にもルヴィアからの連絡が届くだろう。それならいつそ朝が来なければいいのに。

だが——

不意に紛れ込んだ異音が、その妙な沈滞を破った。砂を蹴る足音。

それはリズムを速めながら、こちらへと近づいてくる。

流石に気になったイリヤが顔を上げ振り返った先。

そこにいたのは——

「やっぱりイリヤだ」

どこかホツとしたような表情で微笑む、兄の姿だった。

「ほら、そんな恰好でこんなところにいたら風邪ひくだろう」

そう言いながら、土郎は自らが羽織っていた黒い外套をイリヤに被せた。

士郎にも裾が余るくらいの大きめの外套は、イリヤの身をすっぽりと覆い隠す。

夏とはいえ、今は真夜中。海辺の風は涼しく、長時間、肌を晒していたならば確実に体温を奪われる。士郎はついさつき触れたイリヤの肩の冷たさに、歯を噛みしめた。

もっと早くに来ればよかった。

そんな思いが頭をよぎる。

「ど、どうしてお兄ちゃんがここにいるの!?!」

イリヤの驚愕に、士郎は頬を掻くしかない。

確かに今は普段であつたら布団の中にいる時間帯だ。外出するにしても非常識な時刻だろう。

「いやあ、ちよつとした用事を一成のところで済ませたところなんだ。家に帰る途中で、無性に海が見たくなつて、寄つてみたらイリヤらしき人影が見えたからさ」

「……………」、柳洞寺から家までのルートで、けつこう外れたところだよ?」

苦しい言い訳に容赦ない妹のツツコミが入る。

訝しげにこちらを見つめて来るイリヤに、腹をくくるしかないかと士郎は少しだけ本当のことを言った。

「イリヤが泣いてる気がしたんだ」

途端、イリヤは今まで泣いていたことを思い出したのだろう、涙で腫れぼつたくなつた顔を勢いよく外套に埋めてしまった。そのまま無言で身じろぎ一つしない。

長期戦になるな、と士郎は覚悟して、イリヤの背後に回つた。そのままイリヤを膝の間で抱きかかえる形で、砂地に腰を下ろす。少しでもこの小さな背中を温められるよう、腕を回した。

士郎は焦らずイリヤに付き合うつもりだった。

こうなつた経緯も理由も、十分に承知していたから。

——せめて、イリヤが自分で立ち上がって家に帰れるまで。

(アーチャーの野郎、あとで絶対ぶん殴る)

後は任せたと、引つ込んでしまった相手に、士郎は胸の内て架空の

拳を突き出した。

誰もいない森の中、士郎が意識を取り戻したのは、現実世界に帰還してからずいぶん経った頃合いだった。

どうやらアーチャーが夢幻召喚（インストール）を解除した途端、魔力切れで気を失ってしまったらしい。昨日今日の即席魔術師である士郎が魔力量の加減もよく分からず、全て使い切ってしまったことが原因、とアーチャーはのたまった。

（……）いつが最後にコレを投影したのがトドメだった気もするけど（な）

士郎がいま羽織っている黒の外套。アーチャーは何を思ったか、遠坂たちを見送った後、おもむろにこの外套を投影したのだ。

神秘が込められていないのにも関わらず、何故か白黒の双剣を投影した時よりも魔力を消費したこの一品は、アーチャー（英霊）が投影しただけあって、見た目よりも軽く頑丈そうで、通気性はもちろん防寒も兼ねる優れたものだ。士郎のサイズより一回りも大きかったのだが、これを着ていたおかげか、野外で寝ていたのにも関わらず身体を冷やさないで済み、なんとか移動できるくらいの体力は回復した。もつとも大木を背に、片膝を立てた体勢で寝ていたせいで、首の筋が少々痛んだが。

士郎は起きて早々に、藪に隠していた自転車を引っ張り出し、イリヤが向かっただろう方向へと急いだ。なにせ目を覚まして聞かされた第一声が、

（すまないな。イリヤスフィールを泣かせてしまったようだ。——
フォローは頼んだ）

だったからだ。

ならなんで今まで気絶させるような真似をしたかと、問い詰めた気分だったが、とにかく今は時間が惜しい。

イリヤの居場所は見当がついていた。帰りがけに遠坂たちが青い羽を持つステッキを確認を取っているのを耳に挟んだからだ。

『姉さんがいるのはここから南東の方向、約4キロ地点です』

遠坂はあの赤い方のステツキがイリヤと一緒に移動したのを、しっかり見ていたらしい。アレがついているならば放っておいても大丈夫、と遠坂たちは判断をくだした。

(いや、でもさ。それでもイリヤはまだ小さいんだ——)

青いステツキの言う座標を頭の中の地図で参照すれば、思い当たる場所があった。

イリヤのお気に入り場所。一人になって頭を冷やしたいならば、お誂えの場所だ。

士郎は必死で足を動かした。とにかく大切な妹が心配で、外套の余った裾が風を受けバタバタと翻るのも気にならなかった。

しかし空気を読まないのは、あのおかしなステツキだけではないらしい。

その移動の最中でもアーチャーは淡々と報告を続けた。実際に内側から感覚を共有していた士郎にとっては、別に報告してくれなくとも困らないのだが、アーチャーはその事実を知らない。士郎も何を言われるか分かったものではないから、黙秘している。知らぬが仏とはよく言ったものだ。

だが、アーチャーの報告を聞いていて引っかかったことがある。

それは、コイツの話す言葉の中に、主観というものが入っていないことだ。公平を期すためだろうか、徹底して客観的な事実のみを並べて、感情的なものはまったく混じらない。

(これ、聞き方によってはコイツ一人が悪者にされてもおかしくないぞ)

士郎は知っていた。心の内を完全に読めたわけでは無かったが、身体に走った動揺は感じていた。アーチャーは冷血漢では無い。外に出さず内心で押し殺した思いがどれだけあったことか。

だが、こんな言い方では他人には理解されないだろう。

アーチャーがどんな思いで最後のアサシンを殺したのか。どんな思いでイリヤを突き放したのか。——全ては分厚い鉄仮面の下だ。

(……イリヤはあの時、なんて言ったんだろう)

アーチャーは攻撃を仕掛けるアサシンを相手しても、目の端でイリヤを追いかけていた。薄紅色の結界の中、イリヤが抱いた少女がアサシンだと気付いていたが、そんなに焦るような事態でも無かった気がする。傷付いた少女はイリヤを襲うだけの力も無かったはずだ。

しかし、何かイリヤの雰囲気が変わった気がした。それを肌で感じたアーチャーはイリヤに焦点を合わせた。強化された鷹の目は、些細な口元の動きさえ完全にとらえて——そして、いきなり手にしていた短剣（ダーク）を投擲したのだ。

あの瞬間、体中に走った焦燥はなんだっただろう。アーチャーは「あの少女がアサシンだと分かって、とどめを刺した」とだけ言っていたが。

（……少し後味が悪かったな）

襲ってくるアサシンを斬った感触もまた士郎は覚えている。だがアーチャーの手際が鮮やかすぎたためか、または現界した英霊という存在だったせいか、人を斬った感じとしてはあつさりしたものだった。あまり、生々しさを感じなかったというか。

だが、あの少女は別だった。距離が開いていたのが逆にいけなかったのかもしれない。

無抵抗な少女——イリヤと同じくらいの少女へ向けて、必殺の刃を放った。その事実が、苦く士郎の心に影を落とした。

（あの子はアサシンだったから倒すしかなかった、ってことは分かっているんだけどな。……これが現実ってやつか）

綺麗ごとだけでは回らず。物語の外には苦渋の現場があるだけ。

よくアーチャーは、こんな心苦しい決断をすぐに下せたものだ。

（もつとも、その後のことに関してはもつといいやり方があったと思うけどな！）

その点は譲れない。

例えばそれが、イリヤを危険から遠ざけるためだとしても、だ。

結果だけを突き付けて、それまでのイリヤの行動を全て否定して、心を叩き折るようなやり方は——俺は認めない。

だから、士郎は言うのだ。

「イリヤは頑張ったんだよな」

夜明け前の暗い浜辺。二人そろって座り込んだ砂の上。

イリヤは士郎にポツリポツリと話してくれた。詳しい状況もよく分からない、感情の欠片が零れ落ちるような、そんなたどたどしい涙声だったけれども。

士郎はその小さな背中に向かって、優しく語りかけた。

一生懸命に話してくれた妹へ。少しでもその頑張りが報われるように。

「イリヤはえらい。よくやったと思う。それが結果に繋がらなかったとしても、その勇気と頑張りは——決して無駄なんかじゃない」

せっかく頑張ったのに、成果にもならず、さらに誰にも認められないのは辛い。誰だつてそうだ。それが苦しくて立ち止まってしまふ。

どうして、なんでダメだったの、と自問自答の繰り返し。それは泥沼にも似た足枷だ。

だから士郎は肯定する。アーチャーが否定したソレ——自尊心（プライド）を士郎は認める。次へ進めるための足を、いやいやと引き止めるソレを斬り捨てるのではなく、一緒にすくいあげてやるのだ。

「だから、イリヤは間違つてはいなかった。間違いなんかじゃ、なかった」

士郎の力強い言葉にイリヤが振り返る。

身をよじり、士郎の顔を見上げてくる。

そして——見開いた赤い目から大きな雫が次々と溢れだした。

それが、さつきまでとは違う意味で流れていると分かるのは、長年一緒に暮らしてきた兄の特権だ。

士郎は腕の中に泣きついてきたイリヤをあやし続けた。

気が済むまで泣けばいい。それは次への活力になる。

しばらくたち、ひとまずイリヤの様子が落ち着いてきた頃には、空の端が白み始めていた。

「もう夜が明ける。……そろそろ家に帰るか」

士郎はそう言って、名残惜しそうにするイリヤを引きはがし、立ち上がった。

そしてイリヤへ向かって手を差し伸べる。

(さあ、自分の足で立ち上がったかい)

唇を尖らせた妹は、それに少しだけ戸惑っていたが、最後には士郎の手をとり、自力で立ち上がった。

ちょうど背後の海から朝日が差し込み、光を反射する銀の輪郭に、士郎は目を細める。

そこにはもう、蹲るだけの子供はいなかった。

(……もう大丈夫だ)

士郎は薄ら明るくなった砂浜を、イリヤの手を引いて歩いていく。空が明るくなり、どこからか鳥の鳴き声も聞こえて来る。

自転車を止めた場所まで来たところで、士郎は仕方ないな、と笑った。さつきから腕が不自然に上下していたのだ。隣を見れば銀の頭がコツクリと船を漕いでいる。

士郎は引き摺られていた外套ごとイリヤをおぶった。そのまま片手で自転車を押しながら帰ろうとしたのだが——流石に腕が悲鳴を上げた。

士郎自身の体力も考慮に入れつつ、さてどうしたものかと思案すれば、今にも地面を擦りそうな黒の生地が目に入った。

「まあ、こういう使い方もありだよな」

余った裾をねじり、太いひも状にして前に回す。そして腰の位置でしっかりと結べば、即席のおんぶ紐になる。

あとはイリヤの腕を前に回して左手で抑えれば、右手は自転車を押して行ける。

少々恰好悪いが、夏は日が昇る時間も早い。そんなにすれ違う人もいないだろう。

士郎はわが家へ向かって歩き出した。

こんな時間に帰ったらセラの小言攻撃は避けられないな、と内心で溜息をつくが、安らかに眠る妹の寝顔には替えられない。

「イリヤが危ないことに首を突っ込むのは反対なんだけどな。今は休んで——納得いくまで考えたらいい」

士郎とて、イリヤがこれ以上カード回収に関わるのは心配だ。

ただ——あのアーチャーのやり方は頂けない。下手をすればイリヤの一生モノのトラウマにもなるかもしれないのだ。

士郎は背にかかる重さと温もりを感じながら考える。
やる、やらないの選択権があるのはイリヤだ。

イリヤがカード回収を諦めるのなら、その不始末はこの兄がつけよう。

ただイリヤがよく考えた末に、覚悟を決めて協力するというのならば——陰から手助けをしてやるだけだ。

(といつても、今は全部アーチャー頼みだからな。早く自分でどうにか出来るようにならないと)

ちようどいい見本はすぐ目の前にいる。

士郎は、今は遠くに感じる奇妙な同居人のことを思った。
危険な魔術世界でも、守りたいものを守る力を持つ男。

未だこの世界に足を踏み入れて日の浅い士郎が思い描けるのは、コイツしかない。

(今はただ、あの背中をひたすら追いかけて行くだけだ)

淡い光の差し込むエーデルフェルト邸の一室。

美遊は明るくなる空を窓越しに見上げる。

部屋に備え付けられたベッドは整えられたまま、シーツのしわを直す必要もなく。簡素なソファでただ一人、固まっていただけの美遊は、昨晚からの身支度も解かないままだった。

(……どうして)

昨夜からの動揺は、美遊を休ませてはくれず。

結局、一睡もせず夜が明けてしまった。

脳裏にこびり付き離れないのは、フェイカーの冷たい機械(ロボット)のような表情。

(……最初はお兄ちゃんに似ていると思った)

どんな困難からでも守ってくれそうな背中は、元の世界に残してきた兄の姿を想起させた。

けれど。

美遊の心を温めたそのささやかな灯は、あの瞬間凍りついた。

無機質な横顔に重なるのは、まったく逆の立場の人間で。

世界を越えて追いかけて来る幻影に、美遊の心は悲鳴を上げる。

(どうして……あの男と同じ顔をするの)

夜明けの光は、美遊の闇を払い去るには、まだ足りない。

【番外編】 1

「まさかたった一年で帰ってくるなんて」

凧はそう呟いて門の前で足を止めた。空港でも同じ内容を零したかもしれないが、実際に生家の前に来てしまうと、何とも言えない感慨がこみ上げる。

バス停から長い坂を上りきった先にある大きな洋館は、この界限でも有名な名家の屋敷だ。数百年単位で数えられるほど古くから在り、人を遠ざけるような独特な雰囲気を放つ。

「やあやあここが凧さんのご実家ですか。流石、六代目となるとそれなりに立派ですね」

「全てはご先祖様の遺産よ。それよりルビー、迂闊に昼間つから出て来ないの。誰かに見られたら面倒じゃない」

「簡単な認識阻害の術式を展開しているから大丈夫ですよ。目撃されても、いい年こいた女子高生がおもちゃと会話しているようにしか見えませんか！」

まったく大丈夫じゃない。主に私が。

凧は口元を引き攣らせながら、フヨフヨと能天気宇宙に浮く羽の生えた礼装とこれから上手く付き合っていけるかと頭を抱えなくなった。押し付けられた任務に加えて、協力関係に当たる金髪ドリル馬鹿の件もある。決して幸先がいいとは言えない。

凧はとにかく呼吸を整え、門の認証キーを口にした。遠坂邸に張られた結界は無断侵入を許さず、認証が与えられた者しか通さない。

春の陽気は心地よいことだが、少しでも輸送賃を減らそうと、大いに荷物を詰め込んだスーツケースを坂の上まで引つ張り上げた凧には少々暑苦しい。早く家に入って一息つきたいと、ゴロゴロとキャスターを響かせ中庭を抜ける。ちょうど春の花が咲き乱れると同時に夏の早いものも花をつけていて、倫敦から荒れ気味だった凧は少し癒された気がした。

（本当はもつと箔を付けてから帰って来たかったけど、しょうがないわよね）

玄関の扉を前にして大きく深呼吸。そして意を決して把手に手をかけようとし——盛大に空振った。

「えっ」

ほんの一瞬の差で内側に開かれた扉。

奥にいた女性は、人が扉の一寸先にいたことに驚き目をパチクリさせる。

だが凜の姿を認めると、その黒い瞳に歓迎の色を浮かべた。

「お帰りなさい、凜」

「……ただいま戻りました、お母様」

気まずい顔で挨拶する娘に、遠坂葵は庭に咲き誇る花のように微笑んだ。

が、そんな母子の一年ぶりの再会に割り込む影が一つ。

「あー！ やっぱここはあの時のお屋敷ですね！」

空気をまったく読まないゴーイングマイウェイなステッキである。

「ちよっ、バカ！ ごめんなさいお母様。こいつ礼儀がなくなってなくて。このステッキは大師父がこの任務のため直々貸して下さった魔術礼装で——」

「……ルビーちゃん？」

「はっ！」

凜の必死の説明を遮って、葵は宙に浮かぶ五芒星と金のリングと白い翼で飾ったソレの名を呼んだ。

「そうです！ 可愛く可憐なカレイドステッキのルビーちゃんですよ。そういうあなたは葵ちゃんですね！」

あの葵ちゃんがこんな綺麗なお婦人になるとは！ いいえ、あなたも変わらないわねくと、いきなり和気あいあいと話し始めるステッキと母親に、凜は固まるしかない。

「……お母様、このバカス……もとい魔術礼装をご存知ですか？」

「ええ。もう二十年以上前になるかしら？ あの時の出会いはもう衝撃的過ぎて忘れるに忘れられないわ。——まあ、立ち話もなんだか、中で話しましょうか」

お茶の用意をするわね、と葵は上機嫌で屋敷の奥へと向かう。

ルビーは、おじやましまーす、と軽く戸をくぐり抜け、勝手知ったるように応接間の方へ飛んでいく。しばし呆然としていた凧も我に返ると重いスーツケースと共に懐かしの我が家へ足を踏み入れたのだった。

ところ変わって遠坂家の応接間。

凧は上等なソファア―に身を預け、葵が手ずから淹れた紅茶を口に運んでいた。渋みを出すこと無く茶葉の香りが十分に薫るこの一杯は、昔から慣れ親しんできたものであり、帰省の実感がわいてくる。このままゆっくりくつろぎたいところだが――無理だ。

いま、この家には遠坂家以外の闖入者が存在している。そう、何故か己の母親と随分仲良しなカレイドステッキ・ルビーである。出会って数日の短い付き合いだが、これの性格が煮ても焼いても冷凍して粉々に粉碎したとしても食えないものだと分かっている。これからされるルビーと葵の昔語りがただの和やかな話で終わるはずが無い、と凧は気を引き締めた。

「それではお母様。このカレイドステッキ・ルビーとの馴れ初めを、お願いします」

背筋を正した凧に、母親たる葵も真つ直ぐに向き合い口を開いた。

「そうね。まず私とルビーちゃんの出会っただけど……きっかけは時臣さんのうっかりなの」

「は？ お父様のうっかり？」

敬愛する父親の名が出てきて、思わず声が裏返った凧。

「そうなんですよ。わたしを封い……いえ保管していた特殊な箱をあのジジイがこの家に一時的に預けていた時期がありました」

「当時中学生だった時臣さんは、大師父から与えられた試練だと勘違いして、その箱の封印を解除してしまったの」

ふふ、と笑う口元に手を当て葵はとんでもない内容をさらりと語った。

凧は啞然とするしかない。

大師父からの預かりものを試練と勘違いしてしまった父親のうっ

かりにも呆れるが、仮にも魔法使いの一人に数えられる大師父の封印魔術を、中学生の父親が解除してしまったことに対して驚きを隠せない。

(流石お父様だわ)

どれだけの研鑽を幼い頃から積んでいたのだろうか。凜とて大師父からの課題(任務)を与えられたが、無事やり遂げられるかどうか自信はあまりない。

しかし、せっかく苦勞して開けた箱の中身がアレだったとしたら、父はどんな感想を抱いたのだろうか？

そこまで思考を巡らせたところで、凜ははたと気付いてしまった。この愉悦型魔術礼装が解放されて大人しくしているだろうか。

——いや、絶対に何かをやらかす。

凜はこの礼装を譲渡された直後の出来事を、鮮明に覚えていた。寧ろ忘れ去りたいくらいなのだが、アレは強烈過ぎた。

「ルビー、あなたまさか、お父様にまで毒牙をかけてはいないわよね……?」

恐る恐る凜は尋ねる。言葉とは裏腹に嫌な予感膨れるばかり。

ルビーと葵は顔を見合わせ(ルビーに顔はついていないが)、一つ頷くと言った。

「いやあ、可愛かったですよ。マジカルトツキー君」

「いやあああああああ!!!」

凜の悲鳴が遠坂邸を揺るがした。

「記念写真もあるけど見る? ほらなんて微笑ましいのかしら」

「お母様まで!! とうか、持ち歩いてらっしゃるの!?!」

葵が懐から取り出した手帳には、確かに古びた写真が一枚。つい視線をむけてしまい、視界に映りこんだソレに、凜の理想としてきた父親像にビキビキつと亀裂が入って——砕け散った。

少年期特有の線の細い体躯。緩いウェーブの黒髪に、凜と同じ色の蒼い瞳。幼くも鼻筋の通った凛々しい顔立ちは、確かに凜の記憶の中にある父親に通じるものがある。

しかし、黒髪の両側から垂れる小判型のふさふさしたものは一体何

なんだろうか？ 凜のものがネコ科であれば、これはイヌ科……ダックスフント？

さらには眩いばかりの白と赤のコントラスト。真っ赤なブーツにそこから伸びる白い生足、絶対領域を通り過ぎて赤のショートパンツに繋がり、黒のサスペンダーの下にはあまりに丈が短い優雅な白シャツ。魅惑的なおへそがアクセント。

真紅の手袋をはめた腕にはもちろん元凶が握られ。

ビシッとキラキラした瞳でポーズを決める若き遠坂時臣の姿がそこにあった。

「だあああああああああ!!!」

本日二度目のスクリーム。どうやら窓は割れなかった模様。防音結界のおかげでご近所迷惑にはなりません。

「あらら、家訓の優雅はどこにいったんでしようね。顔面作画崩壊の域に達してますよ」

「遠坂の当主たるもの、これくらい受け入れる器は必要よ、凜」

うふふふと笑い合う被害者の妻と被疑者。どうしてそんな波長が合うのか。何かオカシイ。

「まあ私たちのファーストコンタクトはこんな感じよ。一緒に雁夜君もいたのだけど、もう苦笑いしか浮かんでなかったわね」

ころころと笑う葵が凜に追い打ちをかける。雁夜おじさん、たぶんどん引いていたんだろうなあ、と凜には容易に想像できた。ああ、遠坂の魔術が誤解されそう。

「ちなみに正氣に戻ったトッキー君はその場で自殺しそうな勢いだつたので、記憶改竄デバイスでなあなあにしておきました！」

「だから、これは私たちだけの秘密なのよ」

ならば純粹に父親を慕っていた娘にばらさないで欲しかった。

凜はうつぶせのままキラリと涙を零す。

(お父様、この秘密は一生墓まで持っていきますわ)

その後ルビーと葵の、凜にはよく分からないトークが炸裂しだしたので、凜は早々に自分の部屋に引っ込んだ。

退出する前に拾ってしまった情報によれば、ルビーの封印が解除されてからの暴走っぷりが大師父の耳に入ったらしく、直々にお迎えが来たらしい。それまでの一週間強。ルビーと母は無二の友情を築いたそうなの。

大師父がこの地を訪ねて際、ルビーに関しては記憶が抜け落ちていたというかトラウマになっていた父を差し置いて、母が宝石翁の異名をもつ大魔法使いと相對したという。母は友となったルビーのため熱弁を奮い、何とか再封印は免れたらしい。

代わりに大師父はストッパーとなるカレイドステッキをもう一基制作することにしたそうなの。

「これがサファイアちゃん誕生秘話ですよ」

ルビーが重大な裏話だという風に語ったが、凜にとっては実にどうでもいい話で。

だけれども、まさか己の母親がこんなに影響力をもっていたとは思わなかった凜である。改めて葵に対してある種の尊敬の念を抱いた瞬間であった。

【番外編】 2

「あー、つかれた」

凜は実に心身共に疲弊した身体を行儀悪くスリッパのままベッドに投げだした。仰向けで目を閉じ、久しぶりの感触に身を委ねる。

ここは遠坂邸の凜の自室である。一年以上空けていたが布団はふかふか、シーツもパリツとしていて気持ちがいい。おそらく屋敷を管理している遠坂葵が手入れをしていたのだろう。

母親の気遣いに感謝する凜だが、同時にあのイロモノステッキと仲良くやっていることに大いに困惑していた。

(お母様ってあんな性格だったかしら?)

凜の良く知る葵はもつとこう、おしとやかで物腰柔らかかで、父の後ろで控えめに寄り添う、そんな理想的な母だったのだが――。

(まだ見ぬ一面を知ったってことか)

母の懐は凜の思っている以上に広がったようである。

いや、カレイドステッキに振り回されず、共に振り回す側なのだから、それはそれで驚嘆すべきことなのだ。ただ己の母親がアレと同類だとみなすことに抵抗があるのである。

(まあでも、これではつきりしたわ)

ルビーと葵の昔ばなしで得た教訓というか、確信。

「地下室にあるあの曰くありげな箱は、絶対開けたらいけないわね」

父が残した遺産の一つなのだが、厄介な封印がしてあったのだ。どうせルビーと同じ事情で、ろくでもないものが入っているに違いない。

そう結論をだした凜はうーん、と伸びを一つ。

「さ、荷を解きますか」

短期間ではあるが、冬木に滞在する準備を始めたのだった。

夜。遠坂邸のダイニングで凜は久方ぶりの純和食を楽しんでいた。

倫敦帰りの凜のために葵が腕を奮った料理の数々は、どれも涙が滲むほど懐かしく、また美味であった。

「やっぱりあっちの食事とは大違いよね」

しみじみと凜はつぶやく。節約のためにも自炊が多い生活であったが、やはり日本食の材料は手に入りにくいのである。

「あつらー。つまりは英国のメシマズ説は、まったくもってその通りだと、おっしゃるわけですか。ふん」

「……別にあっちの食事を貶めているわけじゃないから。ただ、ちよつと口に合わなかっただけよ」

ルビーの意地の悪い質問に、凜はわずかに視線を逸らして答える。

食材は悪くないのだ。ただその調理方法が——雑なだけなのである。

「はい、今日の食後のデザートですよ」

部屋の微妙な空気を破ったのは、デザートの用意にキッチンへ引っ込んでいた葵である。テーブルに差し出したボウルには、シンプルなりんごの甘煮が盛られていた。

凜はそれを見た瞬間、さっきの空気はどこへやら、目を輝かせてさつそくフォークを片手に手を伸ばす。

葵お手製のこれ、実は凜の好物の一つである。帰ってそうそう食べられるとは、と葵に気遣いに改めて感謝する凜だったが——その少し後に地雷級の気遣いが炸裂するとは、流石に予想できず。

至福の表情を浮かべてデザートを頬張る凜に向かって、葵はまず始めにと、軽めの弾幕を放った。

「美味しく食べてくれるのは嬉しいけれど、食べ過ぎには注意ね、凜。

明日は早めに起きてもらわないと。朝のシヨートルームが始まる前に、職員室に挨拶に伺うと先方には伝えてあるから、寝坊は許しませんよ」

「……は？」

凜は一瞬、葵が何を言っているのか分からなかった。

シヨートルームに職員室？

凜は時計塔の任務のため、一時的に——あくまで一時的に——日本に戻ってきているだけなのである。なぜ、去年にも卒業した学校のことを語るのか。

「もう穂群原学園高等部への短期留学の手続きはすませてあるの。学校の制服も部屋にかかっていたでしょう?」

「え、あつー!」

凜の脳裏にクローゼットの奥へ突っ込んだ穂群原学園の制服がよぎる。なぜかコート掛けにかかっている、きつとお母様のうっかりね、と苦笑したのだが——よくよく思い起こせば中等部では無く、高等部のデザインではなかったか。

「……お母様、私は今回任務のために冬木へ戻ってきています。学校に通う気も、そんな暇ありません」

にべもなく凜は返答する。あくまで仕事（しかも魔術がらみの）で帰省しただけであり、また今更日本の学校に通うメリツトなどどこにもない。ただでさえ、冬木には見たくない顔もいるのに——。

だが、そんな凜のつれない態度に葵は一つ爆弾を投下する。

「あら、もう一人の金髪のお嬢さんは行く気満々なようだけれど?」

「あの金バカドリルー——!」

凜は吼えた。それは優雅の欠片も無く。遠坂邸の窓ガラスがびりびりと振動するが、今回もなんとか無事耐えきったようである。流石は代々続く魔術師のお屋敷。

（いったいあのアホは何をやってるの! 任務はどうした、任務は。宝石翁への弟子入りもかかっているというのに——）

というか、それよりも。

「何故お母様がそれを知ってらっしゃるの」

凜の当然の疑問に、葵はニコニコ顔で答える。

何故か覚えのある嫌な予感が、ひしひしと迫ってくるような、そんなニコニコ顔である。

「昨日、お友達の学園長さんと個人的にお電話しているときに小耳に挟んだの。ちようどもう一人、短期留学を希望してきた方がいると。何でも『運命の殿方のハートを射とめに参りましたの!』と言っていたらしいわ」

どうやら北欧生まれのバカ貴族には、常識というものがすっぽ抜けているらしい。

「真性のバカね。そんな理由で留学なんてできるはずが——」

『それは素晴らしいでちゅ。ぜひ甘い青春を謳歌するでちゅよ!』と許可したそうよ。学園長さん」

「はあ?! 学園長それでいいの?!」

「というかその口調はなに?! そんな赤ちゃん口調の人物に学園長が務まるの? 教育舐めてるんじゃない?!」

「うがー、と気炎をはく凜の隣では、なんかその学園長さんとは気が合いそうですね、と非常に恐ろしいことを言うルビー。凜は藪をつつくまい、とルビーを認識から外すことにした。もうこの手合いは無視（スルー）するに限る。」

「そもそも、学校というのは仮にも公の機関であって、そんな漫画やアニメに出てきそうな馬鹿な話を通るわけが——」

「だから私も』ではうちの凜にも青春を送らせてください!』と頼んでしまったわ。やっぱり若い時期って大切だと思うの」

「お母様あああああ!」

「ちゃんと凜の分も許可してくれたわよ、と告げる葵に、もはや凜は項垂れるしかない。」

（それじゃあ私もルヴィアの同類みたいに思われたんじゃないの?! 私は任務のために帰ってきたってことお母様忘れてない?!）

「もちろん、葵とて遠坂という魔術師の家に嫁いだ身である。魔術世界の任務の危険性は分かっているつもりである。しかし。」

「任務のことは承知しているわ。でもね——」

「ジト目で見上げて来る凜に、葵はトドメの一撃、というかまさに凜にとつての地雷を放り込んだ。」

「その彼女が話した意中の殿方は、『きりりとした眉に夕焼けのような赤髪の男の子』だそうよ。それって、前に凜が話してくれた子ではないかしら? あの一人校庭で高飛びをしていたっていう」

「顔面が爆発したと、凜は思った。」

「おおおおお母様!?! いったいいつの話をしていますの!」

「湯気が出ているのでは、と思うくらいに顔が熱い。」

傍から見たらまさに茹でダコである。

「あら、てつきりその男の子が初恋の相手かな、と思っていたのだけど、見当違いだったかしら？」

「見当違いというか、アイツはそんなんじゃないやなくて、ただなんとなく馬鹿な感じが……その……綺麗と思っただけで……」

最初の勢いからだんだん尻つぼみになる凜。既に耳まで真っ赤である。

「凜さんの恋バナですか！ 葵ちゃん、そこんところ詳しく教えてくださーい！」

「あんたは喰いつくな！ ルビー！」

「あれは凜が中学生のときの話で——」

「お母様も無闇に教えないでください！」

後生ですから！ 机に額を擦り付けんばかりに頭を下げる娘に、母はしようがないわね、と凜の魔術刻印が刻まれている左の手を取った。

「わかりました。では—— b e r …… E s s c h w …… r e n

(我 誓いを掲げる)

遠坂家六代目当主の勅命により、契約のもと遠坂葵はこの話を口外しないことをここに誓います。……これでいいかしら？ 凜？」

僅かな魔力の発露。

遠坂家の刻印が僅かに発光する。

契約の魔術が成立し、葵には制約がかかる。これで葵は凜の許可なくその初恋エピソードを話すことができなくなったのだ。

魔術工房である遠坂邸の留守を預かる身、葵も多少の魔術も心得ているのである。もっとも自身の魔術回路は無いため、既に成立している術式や刻印を借りた裏技じみたものなのだが。

「あらー、これはガチのやつですねー。まことに残念！」

全身で悔しさを表現するルビーの横で、凜は

「え？ あ？ ……お母様？」

とつぶやくので精いっぱいだった。突然の葵の豹変具合に頭がついていていないのである。

間の抜けた顔を晒す娘に、葵は片目を瞑ってみせた。

「指切りげんまん、つてね。まあお呪い程度の効力しかないけれど……。あまり、あなたの負担になるのも、ね」

今まで散々自分の娘をいじってきた人が何を言いますか。

「……えーつと」

不審……もとい困惑気味の凜の前で、葵は床に膝をつき真っ直ぐに凜を見つめて言った。

「あなたの魔術師としての生き方を邪魔するつもりはないわ。けれどね。今しか出来ないことも大事だと思うの。それこそ、学校生活や恋愛とかね。人としての喜びも味わって欲しいというのが、私の一人の母親としての願いなの」

だからこそ凜が帰ってきたこの機会に、初恋が実るようにと全力で応援をかけるのである。

魔術師の活動時間は夜。ならば昼間だけでも普通の女子高生をさせてやりたいというのが親心。無論、衣食住のバックアップはもちろんのこと、調査や資料編纂なども手伝う気満々である。

「それに魔術にかかりきりになって、同門のライバルに初恋の男の子を取られちゃうのも、気の毒と思って」

「そ、それは、まあなんとというか。……なんでルヴィアも、よりにもよってアイツ狙いななのよ」

凜としても、あの縦ロールに出し抜かれるのは癪に障るものがある。

凜の危機感をあおった所で、更に葵はもうひと押しと、過去の実例を挙げた。

「それに、時臣さんはちゃんと両立させていたわよ。魔術も、恋愛に關しても」

私が生き証人だわ、と葵は咲きほころぶ花のように笑った。それこそ彼女の青春時代が垣間見えるようで、不覚にも凜はそれを綺麗と、見惚れてしまった。

そしてその美しい顔のまま、葵は最後にダメ押し、と言いつつ。

「だから、前当主である時臣さんが出来て、現当主たる遠坂凜に出来な

いなんてことは無いわよね？」

「——っ」

気が付けば既に退路はことごとく塞がれ、包囲網は完璧。

父親を引き合いに出されたならば、父を越えるべき目標とする凜が後に引けるわけがないのだ。

——よって凜はこう宣言するしかなかった。

「ええ、わかりましたわ、お母様！ 遠坂家六代目当主、遠坂凜の名に懸けて、この二足の草鞋、どちらも穿きこなして見せましょう！」

【21】

キーンコーン、カーンコーン——
耳慣れた鐘の音が、校舎から聞こえて来る。

士郎は限界寸前の足を叱咤し、ダッシュをかけた。ホームルーム教室は玄関を入れて2階に上がったすぐの部屋。担任の教諭がドアを開ける前に滑り込めば、セーフである。

乱暴に下駄箱を開け、靴をはきかえる。階段で踏み外しそうになりながらも、士郎は何とか朝の予鈴が鳴り終わる前に教室に滑り込んだ。

「おはよう、衛宮殿。こんなギリギリに登校とは珍しいでござるな」
「まあっ、ちよつと寝坊を、してな。……昨日、見たのは時代劇か何か？」

テレビの影響を受けやすいクラスメイトからの挨拶を受けつつ、士郎は荒い息で席に座りこんだ。全力で走ったおかげで体中が火照っており、朝は何も食べてないせいで空腹感が胃を締め付けて来る。

ショートホームルームが終わったら即、セラが用意してくれた朝食用の包みに手を伸ばそう、と士郎は決心した。やれやれといったアーチャーの気配はこの際、無視。

（しようがないだろう。昨日の夜から今日の朝にかけて非常識すぎたんだ。……むしろ今日はよく起きたなって、感心されるほうだと思っぞ）

イリヤを背負った士郎が自宅にたどり着いたのは、早朝の気が抜けるきらぬ時間帯だった。普段であればもう少し惰眠をむさぼっている時間であり、当然誰もいないリビングをすり足で抜けていくことになると思っていたのだが——扉を開けた瞬間、リズの赤い目とぼつちり目が合った。

どうやら徹夜態勢で士郎の帰りを待っていてくれたらしい。ソファーにはスナック菓子の空き袋とイリヤの部屋から借用したと思われる漫画が積み重ねていた。曰く、あくまで士郎の帰るまで待つと

いつて聞かないセラを、朝食の準備があるとかなんとか説き伏せて、リズが代わりに寝ずの番をしていた、とのこと。

「イリヤもおかえり」

「……あんまり驚かないんだな」

お泊りに出かけたはずのイリヤも、当然のように迎えるリズに疑問を零す土郎だったが

「イリヤに何かあった気がした。それだけ」

他に何か？ と真顔で言うリズに、何も言えなくなってしまった。

いや、下手に突っ込んだらこっちに飛び火しかねないし。

(ホームクルスつてことが、関係してるのか……?)

イリヤをひよいっと抱える姿は、どうみても普通の人間にしか見えないのだが。

その後リズにイリヤを任せると、土郎は軽くシャワーを浴びて早々に自室のベッドにもぐりこんだ。気が抜けたせいか、棚上げされていた疲労が一気に押し寄せてきたのである。目を閉じると同時に土郎の意識は途切れたのだった。

そしてその僅か数時間後。

(そろそろ起きるか、この未熟者！)

まったく優しくない声で叩き起こされた。

目を開け時刻を確認すれば、学校に間に合うかギリギリの間である。慌てて身支度をし、階下に下りれば、セラが「あら起きましたか」と受話器を置いたところだった。リズから土郎の帰宅時間を聞き、睡眠時間を考慮に入れてギリギリまで学園に遅刻の連絡を入れるか、検討していたらしい。ちなみにリズはいま自室で爆睡中だ。

土郎は慌ただしくリビングの机の上にあった物を鞆に押し込んだ。セラが午前の授業の合間に食べられるように、と用意してくれたサンドイッチと、昼食用の弁当、そして嚴重に紙ナプキンでくるまれた甘い匂いのする小包。

「ああっ！ リズ除けに隔離したシロウのクッキーが！ まだ一枚しか食べてないのに！」

(すまんセラ、また作るから勘弁してくれ！)

背後から聞こえる心からの悲鳴に、士郎は内心で謝りながらも家を出る。時間の余裕も無い。すぐさま学校をめざして自転車を漕ぎ出した。

本当は早起きして、おかずを一品×二人分作らねばならなかったのだ。アーチャーが何をやらかしたのかは知らないが、機嫌の悪い虎は厄介であるし、また昨晚の外出の理由に柳洞寺を使わせてもらった手前、一成にも口止め兼お礼にと、昼食に色をつけようと思っていたのだが。

(いや、無理だつて)

昨夜から朝にかけてのなんやかんやを思い返してみれば、料理する隙間なんぞ、てんで見つけれられない。ただでさえ睡眠時間は短いのである。あれでいつも通りの時間に起きれるやつは超人か変人の類だ。よつて、昨夜イリヤのために焼いたクツキーの余りを代替品として進呈することを、机を見た瞬間決定を下したのである。

(見た目はちよつとアレだけど、味はアーチャーが色々と指示してくれたおかげで、胸を張れるレベルだし、たぶんいける筈)

ただ冬木の虎の腹を満足させられるかどうかは怪しい。一応女性の枠に入っているから、甘味を無下にすることも無いだろうが。

一成は寺育ちだが、和菓子に次いで洋菓子も普通に食べる。

「まあっ、何も無いよりはマシだろうっ！」

士郎はやけくそ気味にペダルに力を込めた。通学の道に学生の姿は既がない。

寝不足の上に、全身は筋肉痛。しかしせつかく布団と決別したのだから、遅刻は勘弁願いたい。よつて士郎は全力を振り絞り、立ち漕ぎ走行で駆け抜けるしかなかった。

万全とは言い難い体調で、しかもスタートダッシュも遅れる中、予鈴が鳴り終える前に教室に着けたのは称賛ものではないかと思う。(俺だつてやるときはやれるんだ)

士郎はささやかながらに自信を持つたりもするのだが――。

所詮は平凡な日常生活を送ってきた高校生である。昨日、おとといと英霊やら魔術やらの非日常に巻き込まれて、精神的にも肉体的にも

疲労はたまる一方。更に登校時のダッシュに続き、セラの気遣いにより小腹も満たされた今、午前の授業からコックリコックリとしてしまふのも——まあ、仕方がないことなのだ。

(おい、衛宮士郎！)

突然とんだアーチャー注意。だが、眠気に頭を垂れていた士郎に反応などできるはずも無く。

バンツ！ と鋭く弾ける音が鼓膜に突き刺さった。

瞼を押し上げれば、机に叩き付けられた教科書が目に入る。士郎が恐る恐る腕の持ち主を辿り見上げると。

無感動な目がこちらを見下ろしていた。

「衛宮。授業後に私の研究室まで来い。いいな」

「……はい」

士郎がそう何とか返事をする、彼は——社会科の葛木教授は、何事も無かったかのように授業を再開した。

(やばいやばい)

眠気など吹っ飛んだ士郎は、未だ鼓動の早い心臓を静めようと、真剣に授業に耳を傾ける。

(あー、何を言われるんだろう)

葛木はまだ三十路には達していないはずなのだが、何故か悟りを開いたような近寄りがたい雰囲気を持つ教師であり、士郎は少々苦手としていた。いや、授業は淡々と進めるが意外とポイントを押さえたもので分かりやすく、授業自体は好きな方なのだが。

背は高く体格もしっかりしている。しかし表情はほとんど変わらない。必要以上のこととはしゃべらない寡黙な性格である。あれで何故先輩方に人気があるか疑問を抱いてしまうほどだ。

悶々としている間にも授業は進み、終了の鐘が響いた。

葛木はさっさと資料などをまとめると、目についてくるようにと合図してくる。

重い足取りで後を追ひ、少し歩いた先の社会科の研究室に足を踏み入れる。きちんと整理された資料が所狭しと並んでいる部屋の中、葛

木は何やら自身の机のわきから何かを取り出した。

「先日の礼だ」

ずいっと差し出されたのは甘く香ばしい匂いの漂う紙袋。

は？ と目を丸くして中身を確かめてみれば、地元商店街でも有名な大判焼きがそれなりの数で入っていた。

士郎は必死でこれを渡される理由を考える。「先日の礼」と「葛木」というキーワードで記憶を検索。すると思いたる節が一件ヒット。

先日というか、もう遙か昔のように思える一昨日の部活後。そろそろ帰るか、と駐輪場から自転車を出していたときに、葛木がちょうど通りかかり、それを借りれないかと声をかけてきたのだ。

いつも通りの、何を考えているのか分からない表情だったが、なんとなく急いでいるようにも感じられたので、士郎はあつさり愛車を貸し出した。おかげでその日は少々帰宅が遅くなったのだが、特に問題は無く。昨日も元の場所に戻ってあったので、貸したことすら忘れていたくらいだ。

「えっと、俺、葛木先生に自転車を貸しただけで。その、こんなにもらうわけには」

「いや、おかげで所用に間に合った。……少々買いすぎたようだが、衛宮なら捌けるだろう」

確かにお裾分けにする相手は家族を含め、心当たりはたくさんあるのだが。

士郎は恐縮しながらも、その紙袋を鞆に収めた。ここで受け取らなかつたら葛木も困るだろうと思っただ。それだけの量が入っていたのだ。士郎としては、本当に大したことをしていないのに、申し訳ないという気持ちでいっぱいである。

「それから、体調がすぐれないようなら保健室へ行くように。腕はともかくあの保健医の見立ては確かだ」

さっきの授業態度を見かねてだろうが、特に叱責もせず、葛木はそんな言葉もかけてくれた。そんなにひどい顔をしていたのだろうか？

だが個人的に苦手な先生ワースト1の折手死亜先生に厄介になる

のも気が進まず、そこは言葉を濁して、大判焼きの礼だけ言うときつと研究室から退室してしまった。

葛木って意外といい先生なのか？ と若干失礼なことを考えつつ、次の授業の教室へと向かう士郎に、今まで沈黙を貫いていたアーチャーの声がかかった。

(……葛木はカレン・オルテンシアと面識があるのか?)

(同じ学校に勤めているんだから、当然あるだろ？ なんかに気になることでもあったか?)

(——いや、彼ほど保健室と無縁な男はいない、と思っただけだ。忘れてくれ)

そう言われると余計気になるのだが。まあ葛木は病気で寝込むようなイメージは持ちにくい。寧ろ怪我した生徒の付き添いで訪れる方がよほどしつくりくる。……カレン・オルテンシアって折手死亜先生の名前を外国語っぽく言っただけだよな？

(にしても貴様の幸運値は侮れんな。これで柳洞一成と虎への憂慮も払拭することができただろう)

(そうだな。自分でも驚いてる。これも日頃の行いがいいおかげかな)

軽く返事をしながら士郎は、今更だがアーチャーの雰囲気が緩んだことに気付いた。裏を返せば、葛木を前にしていた時は気を張っていたということだ。

(やっぱり葛木に対して何か思う所があったのか?)

いやでも、アーチャーは仮にも英霊だし、葛木もちよつと体格のいい教師に過ぎない。接点などあるはずもない。

(……気のせいかな?)

昼休み。なんとか残りの午前の授業を乗り切った士郎は、職員室へと急いでいた。

昨日の一成との約束もあり昼休みは生徒会室に向かわねばならぬのだが、先に腹を空かせた虎に貢物を渡さねば、後から突撃して来そうな予感がしたのである。また自身の空腹を主張する腹をなだめるためにも弁当を食べる時間も確保したい。

「藤村先生はいますかー」

「あーっ、士郎！ こっちこっち！」

扉を開けた傍から冬木の虎こと藤村大河の招き声が職員室に響いた。

いい年した大人が大声で生徒を呼ぶのもアレだが、周りの職員らは苦笑するだけで非難の目は無い。どうもこういう性格だと受け入れられているようだ。

士郎は列をなす職員の机の隙間を縫い、自分を手招きする黄色と黒のボーダーシャツに緑のワンピースを重ねた女性の元へと、若干及び腰で近づいた。いつもと変わらない笑顔のはずなのだが、何故か威圧感というか、背後に虎が見えた気がした。

「それで今日のオカズはな〜にかな？ 人のこと、いかず後家呼ばわりしたんだから、相応のモノを持ってきてきているんでしょ〜うね！」

(……おい、なんてこと言ったんだ。アーチャー)

それは完全に地雷だ。よくも俺の身体でやってくれたな、この野郎。

(いや待て。私はそこまでは言っていないぞ！ 彼女が話を盛っているだけだ！)

必死に言い募る内側の同居人に、いつもの皮肉な色は見えず。

むしろ話を大げさにするのは彼女の方であるのは、常日頃から痛感していることであり。

(……アレが私の失言なのは違いない。すまなかった、と伝えてもらえないか)

(わかった。随分と反省しているみたいだし、俺から言つとくよ)

常時嫌味を言われる意趣返しにともおもったが、思ったより消沈する男にいつまでも居座られるのも面倒なので、士郎は素直に要望に応えてやった。

まず彼女の正面で背筋を伸ばす。そして。

「あー、その、昨日のアレは悪かった。本当に(アーチャーは)反省してる。すまなかった」

言いながら、きつちり頭を下げた。

内側でアーチャーも頭を下げている気配がするから、なんだか可笑しな気分である。仮にも英霊のはずなのに、律儀というか、真面目というか。彼女の前では英雄様も形無しだ。

「うむ、よろしい。そこまでするなら許してあげようぞ。……で、オカズは？」

どうやら冬木の虎も昨日はテレビで時代劇を見ていたらしい。やけに低い声でのたまうものだから、後半の台詞とのギャップが。

「そのおかげに聞していただけだな。……悪い寝坊して作れなかった。だから、これで勘弁してくれ！」

頭を下げたまま差し出したのは、小分けにした大判焼きの紙袋。

大ぶりな大判焼きは二つも食べたらず普通は満足するくらいの量となるのだが、念のため倍の四つほど入れ込んだ。健啖家の胃袋はデカイからな。これで満たされてくれるといいけど。

「ふむふむ、これはあの商店街の大判焼きね。いつもすぐ売り切れちゃうのに、やるじゃないの。……あとこの小袋は？」

「それは昨日ちよつと俺が焼いたクッキーなんだ。少ししかないけど、足しにはなるかと思って」

士郎の手作り！と目を丸くする虎。早速、袋を開けて不恰好なソレを一つ摘まみ――

「うっわ、うつまー！ーいー！」

歓喜の咆哮を放った。

室内の注目の目を集めながらも、残りのクッキーに手を伸ばそうとするのを、士郎は待ったと制止の手をかざす。いや、昼前に菓子でお腹いっぱいになられてもな。

「ご満悦いただけたなら結構。これで許してくれるか？」

「許す許す！　すごく美味しいわよ！　これ！　いつの間にこんなに上手く作れるようになったの？　また今度焼いたらお裾分けよろしく！」

あつという間に機嫌の直った相手に、本当に食べ物力は偉大だと感謝する士郎。

そのまま用事は済んだとばかり、退室しようと踵を返したところ

で、もう一つ用があったことを思い出した。

「あ、あとちよつと頼みたいことがあるんだけど、いいかな？ 藤ねえ」

「うーん？ 内容によるわよ？」

あえての昔ながらの呼び名に、個人的な要件だろうと察した彼女は姿勢を正して士郎と相對する。ただし、紙袋は腕の中でがちりホールドしていたが。

「前に住んでいた家の鍵を借りたいんだ。今は藤ねえの家の人たちが管理してくれているんだろう？ しばらく道場とかで体を動かしたいんだ」

真剣な面持ちで告げる士郎に、昔から家が隣同士ということで交流のあった近所のお姉さんは、

「あら、別にそんなかしこまらなくてもいいのよ。元々は士郎の家なんだし、遠慮しないでどんどん使いなさいな」

と、あつさり了承した。拍子抜けした士郎を前に、顔馴染の女性は首を傾げる。

「でも、いきなり道場を使いたいなんて、どんな心境の変化かな。昔はちよつと相手にしてあげたら、びーびー泣いてたくせに」

「昔のことを持ち出さないでくれよ！ それ小学生の頃の話だろう！」

現在の住居に引越す前は士郎の家によく入り浸っていた彼女には、幼い頃の思い出も共有されてしまっている。竹刀を片手に追い回された古傷を刺激され、取り繕うことも出来ないまま顔を赤くした士郎は、追及の視線から目を逸らして押し黙った。

「……理由はまあ、聞かないでおいてあげる。年頃の男の子なんてそんなもんでしょ。」

うちの人に連絡して今日からでも使えるようにしておくわ」

「——ありがとう、藤ねえ」

鍵はいつものところに置いておくわ、と手を振るかつての隣人に、士郎は一礼をして職員室を後にしたのだった。

(これで魔術の鍛錬場所は確保できたな。今日の夜にでも、よろしく頼む)

(ふん、授業中に居眠りするような軟弱者が、危険な鍛錬に耐えられるとでも?)

(午後に入っている体育は見学させてもらうつもりだし、残りの授業は座学だけだ。部活も今日は休みで、十分体力は回復できるさ。それに……お前と一緒にいられる時間はそう長くないんだろう?)

以上が昼休み中に交わしたアーチャーと士郎の会話である。

生徒会室で柳洞一成にお礼の品を渡したり、彼と葛木教授の意外な関係を知ったり、昨日頼まれていた備品の修理に手が回らず明日に延長したりと、残り少なくなつた昼休みも休む間もなく消化した衛宮士郎だったが。

「ごめん、衛宮君。人数が足りなくて。今日の試合、助っ人として出てくれない?」

午後一番目の授業の体育。内容は男女混合のバレーボール。

頼みごとを断れないお人好しは、見学を名乗り出ることもせず試合に参加した。

しかし、身体の調子が整わない中での球技は一瞬の油断が命とりだ。

案の定、姿勢がふらついた衛宮士郎は受け止める腕の角度が甘くなり、打ち込まれたボールを自らの顎へとクリーンヒットさせた。

一瞬にしてブラックアウトした視覚の情報に、アーチャーがやれやれと呆れの感情を零したのは本日何度目か。

(この調子では今晚から魔術修行を始めるにしても、魔術回路を暴走させるのがオチだな)

そもそも今晚はバーサーカー戦への偵察をすると、昨夜宣言してしまっている手前、あまり無茶なことはさせられない。宝具の投影も二・三本はしておきたいところだ。

だからこの際、気絶とはいえ衛宮士郎の身体を横にして休めるのは歓迎すべきことなのだ。――。

突如、鼻孔に感じる強烈な刺激。

アーチャーの魂に染みついた過去の経験は本能レベルの危機を訴えた。即座に意識を戦闘段階まで覚醒させる。バチリと目を見開き、その刺激物の根源を探すべく、視界を回した先に目に入ったのは――

真っ赤に煮えたぎったナニカだった。

(なんでさ！)

辛い、というにはあまりにも次元が異なるだろう。

視覚的にも毒々しい赤がハレーションを起こし、口に含む前から揮発する辛味成分が鼻孔を刺激する。決死の思いで匙ごと口へ入れれば、脳が焼き切れるばかりの感覚が爆発し、生理的に涙がにじむ。

だが、コレはただ辛いだけでは無いのだ。

擦り切れた箸の記憶の彼方で、とある神父は語った。コレの辛味に使われた香辛料と、具となった野菜や肉や豆腐が、平坦な刺激に奥行きを作り出し、さらに高次元の辛味を味覚に送り込む。この真っ赤な地獄のような、目の前に火花さえ散る感覚の先に、美味いと断言できる味わいを追求した一品。それが、冬木名物・泰山の麻婆豆腐である、と。

本来ならばこの灼熱と激痛の中に、完食できるだけの美味さが有る筈なのだ。

そう、本来ならば。

「くっ」

苦悶の色を滲ませ、アーチャーの手が止まった。

目の前の皿にはまだ半分も中身が残っている。

「あら、まだ折り返し地点なのにもうギブアップですか？ 飼い馴らされたペットは最後まできちんと食べるというのに……。今までの苦労が水の泡になりますよ？」

同じ色のモノを食している保険医は平然と、いやむしろ堪能するように咀嚼している。汗をたらし、震える手で食事を再開したアーチャーとはまったく対照的だ。

(なぜこうなった)

意識が朦朧とし、もはや機械的に腕を動かすのみになったアーチャーに対して、穂群原学園の養護教諭・折手死亜華憐は満面の笑みでその食指を進めた。

アーチャーを覚醒させた赤い物体、麻婆豆腐。

それがただの麻婆豆腐で無いことは、その外観、匂いから察することができた。なお且つあの最古の英雄王やアイルランドの光の御子を撃沈させたものとして、幾つもの記録が脳裏で踊っている。

自分がまたもや衛宮士郎の身体の主導権を握っているのだとか、そういう些末なことは脇へ押しやり、まずはこの重大かつ強敵になり得るモノを、目の前に差し出した人物に注意を向けた。

この部屋の主にして、赤い物体に怯むことなく己の分の皿も確保している銀髪の女。

衛宮士郎の知識によれば、この学園の養護教諭を務めているようなのだが、アーチャーは別の名で彼女を知っていた。すなわち聖堂教会所属・毒舌シスターことカレン・オルテンシア。

無論、この世界は並行世界であり、アーチャーの知っている世界とは異なる。イリヤと同様、また違った人生を送り性格さえ変わっているかもしれないと、淡い期待も浮かぶのだが――
「ご機嫌よう、食べ物に釣られた哀れな子羊さん。起きて早々に私の身体を嘗め回すように見つめるとは。発情期を迎えてお盛んな年頃なようですな」

……やはり彼女の性格は並行世界でも健在なようだ。

アーチャーは一つ咳払いと共に期待の泡を流すと、彼女の発言を訂正した。

「いや、こんな強烈なものを病人の枕元へ持ってくる人物は、いったいどんな神経を持ち合わせているのかと考えていただけだ。……決して下心は無いぞ。ああ、まったく無い」

むしろ眼前の赤い脅威の方が気になってしまうアーチャーである。いや、誰だつて危機感を覚える代物だろう、コレは。

怪しい雲行きを感じながらもアーチャーは果敢に尋ねた。この恐ろしい麻婆豆腐がなぜ彼の前にあるのかを。

「二日も続けて保健室へ運ばれてきたので。さぞかし疲労が溜まっているのでしよう。ならばこの学園の養護教諭として、生徒には美味しいものを食べて元気になつてもらいませんと」

見事に建前とわかる理屈を述べるカレン。このいかにも身体に悪

そうならー油たっぷり麻婆豆腐で本当に元気になれると思っ
てるのか。

彼女の口の端が歪んでいるのを、アーチャーは見逃したりはし
なかった。

「もつともこの麻婆豆腐はあくまでオマケ。私の昼食のついでに頼
みただけなので。メインはこちら」

カレンが取り出したのは、無色の液体が入った小瓶。表には堂々と
聖堂教会の十字架が彫り込まれている。

「私の実家でよく使われている霊験あらたかな疲労回復薬です。私は
口にすることはありませんが、効果は抜群だそうですよ」

アーチャーは半眼になってその小瓶を睨みつけた。

——明らかに怪しい。

彼女の実家が聖堂教会なのは明白であり、効能も、まあ信憑性はあ
る。

しかし、何故彼女がこうまで厚意を示してくれるのかが分からな
い。目的の分からない親切は心底恐ろしい。特に彼女の場合は。

「……そこまで気に掛けてもらわなくても大丈夫だ。もう少し休ませ
てもらっただけでいい。あまり鼻屑にしてもらったら、他の生徒にも悪
いだろう」

カレンに背を向けるようにベッドに身を横たえる。もう彼女との
接触は極力控えることにする。あまり長く接すれば、この異常な状態
のことも全て見透かされてしまいそうだ。

そんな拒絶の意思を示す背中に、カレンは一言、投げつけた。

「——必要でしょう？ あなたたちには」

アーチャーは目を見開いた。

——あなたたち？

アーチャーは一呼吸おくと、ゆっくりと身を起こし改めて彼女と向
かい合う。

「君は——どこまで知っている？」

幼さの残る少年の顔立ちに浮かぶは、平凡な高校生『衛宮士郎』の
範疇から外れた表情。

鷹の目と称された鋭い目で、アーチャーはカレン・オルテンシアに問うた。

「さあ?」

鋭い言葉の切っ先を、たおやかな笑みで華麗に受け流すカレン。

二人の間の空気が、弓に張った弦のように張り詰めた。外は穏やかな日差しの下、生徒の賑わう声が聞こえるが、この部屋の内はまさしく異空間だ。

日常風景からの乖離。

表の保健医を謳歌する聖女と、平凡な学生の皮を被った魔術師。

束の間の緊張は、魔術師の男が折れたことで霧散する。

(流石は聖堂教会の人間だな)

先の問いにかけての圧力は尋常では無かった筈だが、やはりちよつとやそつとのことでは動じる気配も無い。また彼女相手に気を張り続けても糠に釘、暖簾に腕押しだと、いつぞやの記録が囁いていた。

「できれば黙っていてほしいのだが」

教会へ報告などされたら、厄介なだけでは済まされない。

アーチャーの要請に、カレンは片目を軽く閉じた。

「ええ。あなたが何者であろうと、私の自由を侵さない限り、詮索や吹聴をするつもりはありません」

白衣を着たシスターは、机の上の湯呑に砂糖の塊を入れながら言う。

隣の急須からは中身が入っているだろう、湯気が漂い出ている。

「ただ、アレの不始末の尻拭いは面倒だから、進んで汚物処理をしてくれる忠義な誰かさんをバックアップしたくなかった。それだけのことです」

そして彼女は急須を手に取り、緑の液体を砂糖入りの湯呑に注ぎ入れた。

……ちよつと待て。

あれは察するに一般的な緑茶に見えたが。

(いったいいくつ角砂糖を入れた!?)

顔を引き攣らせるアーチャーの前で、カレンはじよりじよりという

音が聞こえそうな緑茶を呷る。

「……やはりお茶はこれくらい甘くなくては、味わうこともできませんね。まあ、こちらの小瓶の中身も相当な味わいだと伺っています」

埋葬機関の代行者でも小一時間は悶絶するレベル、と彼女はのたまった。

全てを飲み干さないと効果は半減だとも。

「……そんな代物を飲ませようとしたのか」

カレン・オルテンシア。彼女の好意は悪意と表裏一体である。

だが、彼女の思いやりの悪質さはアーチャーの想像を超えていた。

「いえ、さすがに直接飲んで頂くのはきついだらうと、私は思いました。なので——」

彼女はそう言うと、おもむろに小瓶の蓋を開けひっくり返した。

目の前の麻婆豆腐、その上で。

「……………」

そのまま匙を差し入れグルグルとかき回す。

「さあ、どうぞ召し上がれ。これで少しは味が誤魔化されたことでしょうか」

そこには聖女の微笑みを浮かべた悪魔がいた。

いや、どう見ても誤魔化されたとかそういうレベルでは無い。

不用意な合体事故とか、放射能汚染のような、あつてはならない融合がなされてしまったような。一見、少し水っぽくなった麻婆豆腐という様相なのだが、味がどんな変化を受けているか想像の埒外だ。

(コレを口に入れるのか)

アーチャーは真剣に悩んだ。

今すぐ本能的な危機感に従い、この部屋からの離脱を計るか、この悪魔的な食べ物を胃に収めるか。

しかし今後のことを考えれば、ここで聖堂教会お墨付きの薬を摂取することは、これからの戦いにおいてへっぴょこ魔術師の限界領域ギリギリまで力を発揮できることに繋がる。マイナス要素は出来るだけ排除しておきたいところではある。

(支払うべき代償は私の精神的苦痛だけ、か)

額に手をやり、視線を横に逸らす。

その拍子に視界に入り込んだのは、鏡に映る少年の顔。

健康的とは言い難い血の気の無い顔に、薄らと目の下にかかる隈。

それを数秒見つめ、アーチャーは覚悟を決めた。

例え己の魂が改悪麻婆によって摩滅しようとも、コレを完食する覚悟を。

「……いただきます」

「ずいぶんと根性あるお人好しが憑いていること」

カレンはそう感想を洩らして、ベッドの上で目を回す赤毛の少年に対し、適当に毛布を掛けた。

皿を空にし、律儀にも申し訳程度に置いた水も飲み込んでからベッドに倒れこんだ少年。

『彼の苦悩と苦悶と、悲愴漂う食事タイムを眺めるのは中々に愉快だったのだが、まさか本当に完食するとは。

必死で口に運んだにも関わらず途中で力尽き薬の効果は半減、という悲劇的な展開も期待していたカレンである。見事、食べ尽されたサイドテーブル上の皿を見て、残念、と呟いた。

(それにしても、こころも穏やかな感触は初めてですね)

カレン・オルテンシア。聖堂教会所属のシスターであり、ある魔術的儀式の監視者としてこの地に派遣され、今はここ数週間に発生した歪みの原因であるカード回収のバックアップを兼任。どこぞのカラー魔人のような超人的戦闘能力を有していないが、『被虐霊媒体質』という非常に便利な体質のため、代行者という大変ありがたい役職を頂戴していた。

(拒絶反応が無い……。馴染みやすい波長、相似の性質。もしくは元々同じ——?)

その体質故に、憑依された人間と同じ霊障を、カレンはその身に体験してきた。今までにこなした任務の勲章として、五感は低下し、右

目の視力は完全に失われ、走ることさえ困難なほど肉体に損傷を受けている。今回の任務ではどのような負傷を負うか、と待ち構えていたのだが。

(身体が重い、怠い。それから妙な圧迫感くらいかしら)

この赤毛の少年に憑いているモノはよほど、カレンを労わってくれているようだ。

生傷・流血もなにも無いとは、平穩すぎて逆に退屈を感じてしまう。

(まあいいでしょう。今回はあの男に至宝と言わしめたものを冒瀆しつつ、『彼』がなんとも魅力的な顔で召し上がってくれましたから)

カレンは食べ終えた己の皿を重ねると、愉悦が滲む金の瞳を眠る少年に向け、言った。

「ごちそうさまでした」

衛宮士郎が目を覚ましたのは、既に夕暮れの赤が差し込む時間帯だった。

二日続けて見る天井である。潔く状況を理解した士郎は、起き上がって常駐しているはずの保健医の姿が無いことに気付いた。

(おいアーチャー。ここの先生がどこに行ったか知ってるか?)

ダメ元で内側の住人に問いかける。自分が寝ている間は、アーチャーも外のことは分からないだろうが、念のため。

(……アーチャー? おーい)

再度呼び掛けるが返事が無い。まるで屍のようだ。

まあ、息はあるようだし、存在している感じはあるので、放っておくことにする。

時刻を確認すれば、部活動の終了間際の時間だった。

(……今日が弓道部の休みの日でよかった)

無断で休んだら部活仲間に申し訳ない。

「おっと、こうしちゃいられない」

いつまでもここに居座っていると、施錠されて閉じ込められてしまう。

幸いにして着替えや荷物などは、親切な誰かが保健室まで運んでくれたようである。

士郎は身支度を整えると、とりあえず隣の部屋にいた馴染みの用務員のおじさんに声をかけた。

「あの美人の先生なら早々と帰られたよ」

折手死亜先生の所在を尋ねた返答がこれだ。

……生徒が寝ているのに先に帰るって。

絶句した士郎の前で、用務のおじさんは懐から鍵を取り出し、保健室の施錠をした。一応、戸締りに関しては彼に任せていたらしい。

「じゃ、お大事に」

士郎の肩にポンと軽く手を置いて、そんな言葉と共に用務のおじさんは去っていった。

(……俺が起きるのを待っていてくれたのか)

士郎が漸く気付いた時には、彼の姿はもう視界には無く。

ただ彼が消えた方向へ、士郎は頭を下げた。

(いろんな人に世話になってるな)

帰り道、士郎は自転車を走らせながら考えた。

(朝はセラのサンドイッチで午前の授業を乗り切れたし、葛木のおかげで藤ねえと一成に贈り物は出来たし、藤ねえには道場の確保をお願いしたし)

ペダルを漕ぐ足は力強く、今朝のへ口へ口具合が嘘のようだ。

(体育のときは誰かに運んでもらったし。荷物も一緒だったから助かった。用務のおじさんもギリギリまで寝かせてくれたんだよな)

夕焼けの空は山際から群青へと移行している。家についたらすぐ夕食の時間になるだろう。

(身体の調子もバカみたいがいい。折手死亜先生のおかげか?)

あの銀髪の先生が無償で何かをしてくれる姿はあまり想像できないのだが、数時間の睡眠でここまで体調がよくなるわけがない。

なにより。

(なんか口の中がヒリヒリして麻痺しているみたいだし、胃も若干も

たれてる感じがするんだよな」

一体どんな薬を処方されたかは知らないが、体調は万全なのだ。あまり深く考えても仕方ないかもしれない。

それに仮にも学校の先生。生徒に対し、変なものを盛るはずが無い。きつと。

しばらくして、いつも通りのわが家が見えてきた。自転車を止めドアを開ければ、昔から一緒に暮らしているセラとリズ、妹のイリヤの「おかえり」の声が出迎える。

(いろんな人に手を貸してもらえて、俺は幸せ者だ)

人並みの幸せはもう手に入れている。周りの人間がそうであれば願い、守り、力を貸してくれているからだ。皆で囲む食卓の風景は、何よりも得難い平穏な日常の象徴だろう。

しかし。

士郎がこれからすることは、その人たち全てに対する裏切りだ。

彼らは士郎の充実した平穏で安全な学園生活を望んでくれている。

けれど士郎の望む魔術なんてものは安全とはほど遠いもので。――

――死ぬ危険性すらある。

それでも。

「俺はイリヤを守るって、家族を守るって決めた」

いつまでも甘えて守られる側にはいられない。

守る、守られるの切り替えの時期など、誰にも決められるものではない。無い。

その意志さえあれば、誰だって守る側に立つことは出来る。

「だけど、俺の力なんてちっぽけだ」

守る力が無い者は、結局は守られる側になってしまう。それどころか足を引つ張ったり、害を齎してしまうかもしれない。

「だから俺を鍛えてくれ、アーチャー。イリヤの巻き込まれた世界で、じいさんが戦っている世界で通用する力を、俺に教えてくれ」

シンツと静まり返った道場。

冴え冴えと輝く月の光が一人、士郎だけを照らしている。

本格的な日本家屋の一角。板張りの道場で正座する士郎の前に、人

の姿は無い。

しかし士郎には見えていた。

夜に溶け込む褐色の肌と、対照的に浮かび上がる白の短髪。

一切無駄のない鍛え抜かれた長軀は、黒の軽鎧と月夜にも鮮やかな赤の外套に包まれ。

鋼色の鷹の目は、険しく鋭く士郎を射抜く。

「精々、原初の思いを見失わぬことだな、衛宮士郎。

でなければ——叶わぬ理想に溺死するだけだ」

バチツと鋭い痛みが走った。

肌を雫が伝う感触から、またどこか血管が裂けたのか、と士郎は眉を顰める。

——まだ魔術は継続中だ。少し魔力の流れが乱れただけ。まだいけるはず。

不安定な魔力の手綱を手繰り、士郎は出力を続ける。

『世界』に描き出す。読み込んだ『剣』の情報を元に外形を整え、身を構成していく。

材質に重さ。カタチに込められた作り手の意図。それから——

(あつ)

僅かに跳ねた魔力。

それに気をとられたのが、いけなかった。

「ぐ、がっ」

それはまさしく氾濫と表すのが相応しい。

制御を失った魔力が、魔術回路に溢れかえる。

無作為に放出すもの。逆流さえしてくるもの。

士郎の脳裏に鮮明な死のイメージが浮ぶ。

飽和した魔力は刃となり、魔術回路を突き破る。それは容れ物(肉体)を食い破ることと同義。内臓を、骨を、血管を、内側から『剣』によって切り裂かれ、死ぬ。

それが、『エミヤシロウ』の魔術に手を出した結末。だが。

「——無様だな」

力強い流れが全てを押し流した。

明確な意志をもって統一された魔力が、士郎の無秩序に溢れた魔力を飲み込み、魔術回路を傷つけることなく循環する。

そこには士郎が及びつかないほどの安定があった。

(……また、助けられた)

鼓動は早く、冷や汗が背を震わせる。

死と直面した。それだけで士郎の顔色は白を通り越して青に近かった。

士郎は座禅の姿勢を崩して、土間の地面に手を突いた。

閉じられた土蔵の内部は魔力が散逸しにくい。不発に終わった魔術の残滓が残る中、士郎は数十分は費やしたはずの結果に、数時間前の自分をぶん殴りたくなかった。

(死んでた。……アーチャーがいなかったら、俺は死んでいた)

否が応でも意識させられる明確な『死』。こんなにも近くに感じるのは、十年前のあの時以来か。

(――これが『魔術』)

失敗は即、死へと繋がる。魔力を操ることにさえ、苦痛はつきもの。いとも容易く魔術を行使するアーチャーの感覚を知っているが故に、解析も投影もやればできるだろう、と高をくくっていた結果がこれだ。

(じいさんが隠す理由が分かるな)

家族の内誰かがこんな危険なものに手を出していたら、士郎も苦い顔になる。

本当に少しでも足を踏み外したら、死の底まで真つ逆さまなのである。セーフティが何重にも張られている平穏な日常からすれば、正気を疑うような所業だ。

(それでも)

体のあちこちから危険信号のサインは出ている。制御に失敗したノックバックで末端の血管は破れ、服も血で汚してしまった。

だが、重大な傷はない。これも致命的なダメージになる寸前でアーチャーが介入してくれているからだ。

だから、まだ大丈夫。まだ、やれる。

「アーチャー、もう一回だ。もう一回挑戦する」

衛宮士郎は止まらない。

全ては家族のため。可愛い妹を守るため。そして今なお戦い続ける両親に並び立つため。

少年は、掲げた目標に向かって突き進む。

(せつかく拾ってもらった命、こんなことで無駄にはしない)

たかが魔術の訓練。命を賭けるにはあまりに安い。

しかし実際に魔術世界に足を踏み入れ、その入り口に立って初めて、士郎は実感したのだ。

アーチャー（理想）と自分（現実）の差を。

それはあまりに遠い背中だった。追いつくのに何年かかるか予想もつかない。

だからこそ今は絶好のチャンスなのだ。

トレース（模倣）すべきヤツがこんなに近くにいる。この状況が、理想への近道だと理解しているが故に、士郎は多少の無理を押ししても、挑み続ける。

—— 掴むんだ。あいつみたいなの皆を守れる力を。

(並行世界でも、この性分は変わらんのだな)

そんな感想を、アーチャーは苦々しい溜息と共に吐き出した。

目の前には非常に危なっかしく魔術を行使する衛宮士郎がいる。

既に失敗は十数回を数えた。ノックバックのダメージもアーチャーが抑えているとはいえ、確実に蓄積されている。痛みを感じていないわけでは無かろうが、放たれたら一直線に進むしかない矢のように、己が掲げた目標（理想）へ我武者羅に打ち込む姿は、アーチャーには十分に見覚えのある光景だった。

(まったく、二日前には痛みに転げまわっていたヤツとは思えんな)

覚悟を決めた衛宮士郎は、どこまでも我慢強くなれるようだ。それこそ常人が一度でトラウマになるような死線の間際に、躊躇なく踏み出すというように。

己の命を軽視しているわけではなさそうだが、やはりあの地獄を経験したせいだろうか、あまりに『死』までのデッドラインが近い。

安全の余地を削って、己の限界を引き上げる。

それはアーチャーの戦い方にも共通することだ。

並行世界とはいえ、まさか過去の自分の魔術監督をする羽目になるとは思っていなかったアーチャーである。己の厄介な性質を改めて

客観的に見せられ、どうしようもないと、歪な笑みを浮かべた。

(三つ子の魂百までとはよく言ったものだ)

百どころか死んでからも、また世界が異なっている、『エミヤシロウ』の性質は変わらないのだから。

アーチャーは組んだ腕をそのままに天を仰ぐ。視界に入るは随分と既視感を覚える天井だ。

切れ切れに思い出した記憶の中に、確かこれと同じ景色があった。そう、毎晩のように鍛錬で気絶しては世話になった天井だ。小さくとられた窓から差し込む淡い月明りで、むき出しの太い梁がかすかに輪郭をとる。

それに目を細めながら、アーチャーは現在の己の状態を考察する。

アーチャーは今、衛宮士郎を客観的に『外』から見ている。

座禅を組んだ少年は真剣な面持ちで、目の前の手本としてアーチャーが投影した『剣』を凝視している。体勢の差から自然と見下ろす角度になるため、赤毛のつむじがとてもよく見える。

これまでは内側から感覚の共有という形でしか、外部の情報を得ることができなかったが、前回の意識の浮上からあまり思い出したくない経緯で気絶した後、気付けば己の意識は『外』にあった。

聖杯戦争のサーヴァントであった時の霊体化に近い状態だ。おそらくラインが繋がっている者以外には見えないのだろう。色々試してみたが、伸ばした腕は物体を素通りし、声も空気を震わせることは無かった。

まさかあの麻婆……もとい教会印の薬品が、クラスカードと製作者も真つ青な事故を起こしたのか、と穿った見方もしてしまうが、精密な解析をできているわけでは無いので、依然こうなった原因は不明である。

ただ、ラインの繋がる先、衛宮士郎の感覚は共有したままだ。流石に視覚などは二重写しとなるため遮断させてもらっているが、その他の五感と魔術回路の感覚は繋いでいた。

問題なのは、異物であるアーチャーの魔力を、そこに任意で走らせることが可能ということだ。

魔術師同士が深くラインを繋いでいれば、互いの魔術回路の動向を監視するということは可能かもしれないが、魔術の発動まで可能とならば、それは魔術協会に封印指定されるほどのものだろう。

魔術回路は魂の付属品であり、その属性は個人の起源とも関わる。外から大魔力（マナ）を取り込み、個人で行使する小魔力（オド）に変換する性質から、外部の魔力を取り込むことはあっても、固有にイメージする魔術回路を起動し、行使できるのは本人しかいない。

他者の魔術回路を利用したいのならば、同意させるか洗脳でもして示した術式を本人に行使させるのが、最も手っ取り早い。わざわざそのために他者の起源を説明・理解し、魂を同調させるなりして、他人の魔術回路を使うなど非効率極まりないのだ。

だが、ここでアーチャーは眉間にしわを寄せた。

アーチャーが手本となる『剣』を投影した時のことだ。

道場で啖呵を切った衛宮士郎を、ここでは風通しが良すぎると土蔵の方まで誘導し、一通りの説明をしたまではよかった。アーチャーが思っていたよりも、すんなりと基礎的知識を理解したのは少々解せないかったが、魔術回路を開くのも昨夜カードを使ったこともあってか順調だった。

しかしつい先日まで一般人だった高校生が、いきなり魔術を行使できるか。

答えは否である。

とりあえず、起源である『剣』に属した刃物をイメージしろと、言ってみたものの、やはり簡単には行かず。そもそもイメージする以前の問題が浮上した。

端的に言えば、魔力の制御が恐ろしく不安定なのだ。

まるでハイハイからやつと立ち上がったばかりの赤ん坊が、いきなり包丁を持って調理に挑むような、そんな無謀な試みである。

考えてみれば当たり前だ。魔術師としての下地がまったく無いのだから。

アーチャーの場合、始めは魔術回路を作ることだけに数年を費やした。毎晩のように死との境界線を綱渡りし、魔術回路を生成し続け

た。本来ならばただ一度で済む危険な工程を繰り返したせい、魔術回路は身体の神経と一体化し、とにかく頑丈なものとなった。それと同時に、魔力の制御力も随分と高くなっていったようなのだ。

先の例えで言えば、立ち上がって歩くことだけをひたすら訓練していたのだ。普通に歩けるようになっても馬鹿の一つ覚えのように歩く訓練を止めなかった。その努力の甲斐あってか、どんな状況でも倒れずに歩き続けられる程度にはなった。

だからだろう、聖杯戦争で宝具という当時の己の限界を超えた投影をしても、暴走を最小限に抑えてなんとか命を拾って帰って来れたのは。

そういえば当時既に一流の魔術師として教師役を勝手出してくれた彼女には、へっぴょこと罵られようと、その点に関しては文句を言われることは無かった。まあ、一流の魔術師ならば己の魔力のコントロールなどできて当然、数年をかけてやっと並び立てたというだけで僥倖だったのだろう。

だが、この新米魔術師は違う。本格的に魔術を行使するのは今夜が初めてだという、下積みも何も無いところからの投影である。魔術回路はやわなまま、魔力を扱う感覚も慣れていないだろう。このまま戦場に出たところで、武器を生成する前に魔力を暴走させて自滅するのがオチである。

この衛宮士郎と、過去の同年齢の己を比較し思ったことは一つ。
(じいさん、あんたから教わった方法は間違っていたが……どうやら無駄では無かったようだよ)

来る日も来る日もこの薄暗い土蔵で一人、魔術の鍛錬をした。切嗣の教授した魔術の鍛錬方法は出鱈目で苦しいことばかり、養父が死んでからは独学で誰にも知られず我武者羅に打ち込んだ。

そして聖杯戦争の冬、師匠たる彼女はそれを無駄だったと断言した。馬鹿なことだとも。

けれど千や二千では聞かないほど、天秤に己の命を賭けてきた結果、魔力のコントロールは堅実なものとなったのだ。生死のかかる状況での集中力は、人間の限界ギリギリまで力を底上げする。この畜行

が無ければ、一流となる才能など持たなかった己が、いきなりサーヴァントに襲われ、数少ない手持ちの魔術で生き延びれるはずがなかっただろう。

さらにこの制御力と頑丈が取り柄の魔術回路は後年、固有結界という魔法にも近い魔術を修得させるに至ったのだ。

(まさか、今ごろになってこんな事実に気が付くとは)

守護者となつて幾星霜。存在し続けてみるものである。

現世への顕現は、偶に混じる聖杯戦争の記録以外、変わり映えのない記録ばかりが降り積もるだけだった。

それがイレギュラーとはいえ、この平和な世界に呼ばれ、そしてこの世界の衛宮士郎に見え気付いたのだ。聖杯戦争が始まるまでの十年弱、使い物になるかも分からない鍛錬は、無駄では無かったと。

なんとも奇妙な巡り合わせもあったものだと思う。

つい感慨に浸つてしまふが、悪戦苦闘していた士郎には、ほつたらかしされているように見えたらしい。

「模倣しろといったからには、手本くらい見せろよ」

精一杯顔を顰めたその顔は、ガラスなどに映る己のしかめっ面によく似ていて、

(そこまで模倣しろと言つた覚えはないのだがな)

と、つれない態度をとつてしまうのも、仕方がないことだろう。

アーチャーはここになつてやつと、この状態での魔術行使を踏み切ることにした。もともとアーチャーの魔術回路は特殊な上に身体の神経と直結している。霊体のまま魔術を発動できるか甚だ疑問だったが、やれと催促されたからには、どんな結果になろうと、試してみるしか無いだろう。

そして。

「……なんでや」

「ふむ、こんなものか」

投影魔術は為された。

少年の手の上には見本として丁寧な基本の六工程をなぞつた『剣』がある。創造理念から始まり、蓄積年月でさえも完璧に模倣した、素

晴らしい出来だ。

問題はそう、使用した魔術回路が衛宮士郎のものだったということだ。

「——なんで、見本がコレなんだ？」

「初心者にはお誂え向きの『剣』だと思うが？」

アーチャーの魔力は確かに衛宮士郎の魔術回路を巡り、一つの魔術を成立させた。——それは本来ならばありえないことだ。例えば平行世界上の同一人物であろうと、既に袂を分かった他人であり更には英霊と人間という垣根がある。起源や回路のイメージが同一であつても、規格が違うのだ。

しかし、アーチャーは気付いた。士郎の魔術回路に己の魔力が流れ込んだ際、クラスカードの一部の術式が反応したのを。

(……クラスカードの本質は写し取った英霊への『置換』。つまりは存在の『上書き』だ。そしてクラスカードは、英霊の力である『私』の都合のいいように、『置換』対象であるコイツに干渉を及ぼしている) 邪推のし過ぎかもしれないが、最悪の想像はしておいて損は無い。クラスカードは、英霊の力を我が身に降ろし行使する術具である——しかしそれは抑止力に対する別の目的のための隠れ蓑ではないのだろうか？ 聖杯戦争の真の目的が、戦いで敗れた英霊たちの魂を利用し『根源』へ至る孔を穿つことであるように。

「なあ、本当にコレは『剣』なのか？」

この事態の重大さを欠片も理解していない少年は、投影された『剣』を見つめ訝しげに声をあげる。

手の中にあるソレに、不満があるようだが。

「持ち手があつて、鋭い刀身がある。『剣』の要素は十分に満たしていると思うがね」

当然のことを指摘するアーチャーに、士郎少年は我慢できないというように叫んだ。

「それはそうだけど！　なんで初めての見本が、うちの包丁なんだ——！」

思っていたのと違う！　チェンジ！　とわめく士郎に、アーチャー

はいい笑顔で拳骨をお見舞いしてやるのだった。

（――存在の『置換』、そして『上書き』。今はまだ一時的に過ぎないが、完全なる『上書き』で固定された場合、元の存在は一体どうなってしまうのだろうか）

何かに集中している時ほど、時間の流れは忘れがちである。

士郎がアーチャーに鍛錬の終了を告げられたのは、あと一時間もしないうちに日付が変わろうかという時間帯だった。

「しまった……。今夜は一旦家に帰って、皆が寝静まったのを見計らって抜け出すつもりだったのに。こんな時間じゃ、もうこっちの家に泊まり込むって連絡入れといた方がいいか」

昨日の今日で怪しまれないといいけど。

ズボンについた土埃を払いながら、士郎は本棟へ向かって歩き出す。

身体のうちこちで引き攣ったような痛みが走るが、このくらいならば付け焼刃のポーカーフェイスで誤魔化せそうである。もともと、しばらくは人前で肌を見せないようにする必要があるがそうだが。

今日の外出のお題目は、やはりというか学校の備品の修理である。自宅の部屋では手狭になってきたから作業場所を別にするということで、自転車で十分ほどの距離にある日本家屋に行くとセラたちには伝えてあった。

シロウがそこまでしなくてもいいのでは、とセラはブツブツ言っていたが、半分趣味のようなものだから、と強引に押し切って出てきた。以前に預かっていた備品と愛用の工具を自転車に括り付け、この昔懐かしの我が家に着いたのは、月が山の端から顔を出した頃だ。

それから数時間、ぶっ通しで土蔵に籠って鍛錬をしていたのだ。試しに肩を回してみるとコキコキと音が鳴った。

後ろを振り返れば、己の未熟さに泣きたくなる思いである。

最後の最後でようやく成立した投影品は、士郎の目から見ても中身

のスカスカな代物だった。

ただの包丁と侮ることなかれ。

アーチャーの双剣やら騎士王の聖剣を見ていた士郎からすれば、かなり舐められているとしか思えない見本のチョイスであったが、取り掛かってみると正にこれが己の適正レベルだと痛感したのだ。

この『剣』が比較的易しいものだとは理解できる。作り方も思い浮かぶ。しかし、いざそれを構築しようとする、どうしても上手くない。

理由ははっきりしている。単に手が追いついていないだけだ。魔力という道具を十全に使いこなせていないだけの、ただの技量不足である。

（うん。いきなりできるようになるとは思っていなかったけどさ。――

――本当に遠いよ）

初の成功例は既に破棄され、塵に還されてしまった。他ならぬアーチャーの手で。

（見本とまったく同じものを、俺が投影したモノの真上に一秒足らずで投影、そのまま自由落下してきたそれに、呆気なく砕かれちまったな）

というか出現座標も指定できるのか。アーチャーがいなくなる前にできることはすべて確認しておかねばと、無理矢理にでも意気込む士郎である。そうでもしなければ、心が折れそうだった。

外に出ると月は既に天頂付近にあった。暗さに慣れた目には、外は随分明るく見える。中庭から中へ上がると、灯りもつけずにまずは台所へ向かった。蛇口をひねり、乾いた喉を潤す。そして普段と同じ声が出るようにしてから、廊下の黒電話の受話器を手を取った。今では滅多に見なくなった古いモデルに、こんなに小さかったかな、と首を傾げつつ自宅の番号を回す。

幸いなことに、家を久しく空けていたのにも関わらず電話線はちゃんと繋がっていたようで、すぐに呼び出しのコールがかかる。

セラじゃなくリズが出てくれた方が、小言が少なくてありがたいんだけどな、と思っていると

『ハーイ！ こちらアイリスフィール・フォン・アインツベルンです。シロウかな？ 久しぶりね。元気にしてた？』

予想外の相手が出た。

「え、アイリスさん!? いつの間に戻ってきてたんだ？ 帰国はまだ先じゃ……。っていうかよく俺だつて分かったな」

『ふっふっふ。そこは母親の勘って言うておきましようか。まあ、今回の帰国もその勘にし従ってやってきた感じだけど』

そろそろ布団に入って休んでしまってもおかしくない時間帯なのだが、この人のテンションはいつも通り振り切れているようだ。

『それで、こんな夜遅くなっても帰って来ない不良息子は、どんな報告をしてくれるのかしら』

「えっと、その」

茶目っ気たっぷりに尋ねて来るアイリスフィールに、しどろもどろになる士郎。

昔から嘘をつくのは苦手なのだ。特にアイリスフィール相手だと、すぐに見破られそうな感じがあるから、余計に。

「えーと、やろうと思つてたことが、意外と難しくくて。俺がまだまだ未熟だから、色々と練習が必要で。何とかしようと、それと格闘しているうちに、気付いたらこんな時間になつてたんだ。もつと早く連絡出来たらよかつたんだけど……。」

それはもう少し時間がかかりそうだし、今日はこっちの家に泊まるよ。

せつかく帰ってきたのにごめん。明日の朝食は一緒に食べれるように帰るから」

これで上手く誤魔化せただろうか。これもアーチャーを参考に真似（トレース）したのだが。

『……そう。修理つてそんなに大変なのね。分かつたわ。』

あんまり夜遅くならないように。無理は禁物よ！ シロウ』
「うん、分かつてるよ、アイリスさん。……ありがとう」

士郎の帰宅を待っていたらうに、怒りもせず逆に心配してくれるアイリスフィールに、士郎は頭が下がりっぱなしである。

しかしアイリスフィールはここで少し不満の色をにじませた。

『うーん、出来れば前に呼んでくれた呼び方で言つて欲しいなー』

「え、あー、アレか？」

『そう、いつもの呼び方もいいんだけど、久々に聞きたくなつちやつた』

語尾にハートが付きそうな声音に、士郎は断り切れなかった。ここに自分一人しか人の姿が無いのも要因の一つだったのだろう。普段は気恥ずかしくて口にできないそれを、なんとか絞り出した。

「――母さん、ありがとう。……っ、おやすみなさい！」

言い終わると同時にガチャンつと受話器を置いた。

電話の向こうではアイリスフィールが、あらあらと微笑んでいることだろう。

こう呼ぶといつも顔が赤くなってしまふ癖は、ホント、どうにかならないのか。

顔を俯かせ、悶々とする士郎。

そこに頭上から降ってきた声の一つ。

「衛宮士郎」

「げ」

いつの間にかアーチャーが近くまで来ていた。電話をかける前は庭で優雅に月見でもしていたはずなのに。ああ、幽霊状態だから足音はしないのか。

こんな醜態を目撃したのだから、青臭い甘ちゃんが、とか思つてそんな厭味つたらしい表情を浮かべているかと思いきや。

「いい母親を持ったな」

そう言ったアーチャーの顔は穏やかだった。身構えた士郎が拍子抜けるくらいに。

「ああ、俺には勿体無いくらいの人だよ。いつも楽しそうで、優しく
て」

もはや見慣れてしまったアーチャーの眉間の皺が無い。珍しいことでもあるもんだ。

けれど、次の士郎の発言でそれもピシリツと固まった。

「そして——アイリさんは、基本いい加減なノリだけで、大抵のことは大雑把になんとかしちやう人だけだな」

「……そ、そうか」

これはイリヤと何度も話し合った結果、がちり一致した共通認識である。

だいぶ天然が入った、突然現れてはその場の空気をぶち壊すある種の天才だ。

「母親の勘っただけで、電話の相手が俺だつて当てたし。本当にアイリさんの勘はどうなっているんだろう」

「……あー、お前の家の電話は、画面に番号が表示されるものだろう。お前がこの屋敷にいると聞き、この屋敷からかかってきた電話となれば、その推理は簡単だろう」

そういうものか。でもあの人は、きつと画面も確認せずに受話器を手を取ったに違いない。そんな想像が容易に頭に思い浮かぶ。

「にしてもお前のさっきの言い訳は六十点だな。特定の言葉を避けようと、露骨にぼかしすぎた。もつと自然に話せるようにしろ。それこそ隠した違和感を気取られないくらいにはな」

「……アーチャー、お前全部、聞いていたのかよ」

さっきの表情から一変、アーチャーから厳しいダメ出しを喰らう。勝手に盗み聞きするなんて、コイツの親の顔を見てみたいもんだ。

「あれ、でも魔術のことは早めに切嗣やアイリさんに話した方がいいんだろ？　なら今話してもよかつたんじゃ……」

両親に早めに伝える、と言ったのはアーチャーだった気がするが。「今はまだいい。彼らに私の存在が知られると、カード回収に支障をきたす恐れがある。」

話すのはこのカード回収後、私がいなくなつてからでいいだろう。どうせ、貴様がこちらの世界でいっぱしの口を聞けるようになるのは、今のお前の力量を見る限り数年先のことだろうからな」

そう言われて何も言い返せないのが、今の士郎の現状だ。

うん、分かつてる。今夜の鍛錬で十分身に染みた。

アーチャーのいる到達点は、あまりに長い道のりの先にある。けれ

ど、追いかけることを諦めたりはしない。

拳を握りしめ、決意を新たにアーチャーへ顔を上げる。

鋼の瞳と、琥珀の瞳がかち合った。

「——いいだろう、お前に最高の手本をくれてやる。それぞれの一度きりの投影だ。決して見逃すな」

「ああ、絶対ものにしてやるよ。無駄になんかするものか」

士郎は意気込んで返答した。一分一秒でも時間が惜しいくらいだ。

「……………」

そんな士郎の目の前に、アーチャーは無造作に腕を伸ばした。

これも何か修行の一環か、と凝視していると。

バチン。

目の前で火花が舞った。

実際の現象ではなく、比喩的な意味で。

「痛ってえ。何するんだよこの野郎！」

「ふん、力み過ぎだ馬鹿者。このくらい避けて見せろ」

なに、頭に血が上った単純なおつむを覚まさせるだけの、簡単なスキップだ、と嘯くアーチャーに、無防備にもデコピンをくらった額を抑え士郎は涙目になる。

（触れられるのが俺だけだからって、こんなスキップはいらなかった！）

どうやらラインが繋がっているせいか、この幽霊っぽく『外』にいるアーチャーは、士郎にだけ影響を及ぼすことができるらしい。

数時間前に拳骨をもらった時にも思っただが、これなら『内』で嫌味を聞かされる方がまだよかった。物理的な被害は無かったのだから。

「さっさとシャワーを浴びて着替えてこい。新都へ向かうにも、その姿だと職務質問に引っかかるぞ」

アーチャーに背中を押され、つんのめりながらも風呂場へと向かう。

確かにこの血まみれの衣服では、不審者に間違えられてもおかしくは無いが。

(つまり、少しは休憩も入れろってことだろう?)
非常にわかりにくい監督役の提言に、士郎は半眼で溜息をつくのであった。

【24】

夢を見た。

雪が舞い散る真っ白な世界。

大きなお城を背景に、その子はいた。

「やっと会えたね、お姉ちゃん？」

にっこりと笑うその子は、私と同じ顔をしていた。

強大な巖を受け止める。

サファイアの防護壁を咄嗟に挟んだのは正解だった。

「美遊!!」

「大丈夫です!」

軽々と吹き飛ばされたが、着地に支障は無し。すぐさま牽制として魔力弾を放つ。

「砲射(シュート)!」

だが相手は止まらない。魔力弾は身体の表面で掻き消され、受け止めた反動さえ無かった。

凶悪かつ巨大な拳が突進のエネルギーと共に振り下ろされる。

「……………」

間一髪で距離を取った美遊が見たのは、陥没したコンクリートの床面と、さらに階下へと続く大穴だった。

「なんてデタラメな腕力……………」

「絶対に直撃は避けてください! 物理保護でも守り切れません!」

いつもは冷静なサファイアの声に、焦りが滲んでいる。それほど敵の攻撃力は高い。

二メートルを超える大男はのそりと体勢を整えた。美遊とサファイア、その対角線にいる凜とルヴィアのどちらに向かうか考えているのか。

とにかく飛び上がる余地のないこの狭い空間で、あの巨体での突進力はかなり脅威だ。

「魔力砲による牽制がまったく効かない。やっぱりフェイカーの言っ

ていた通り……」

「巖のような大男、大地を割る拳、Bランク以下の攻撃の無効化。……あの黒化英霊の正体は、ギリシャの英雄ヘラクレスで間違いないでしょう」

ならばこれ以上の偵察は不要。早くこの空間から脱出しなければ。しかし離界（ジャンプ）のための陣を引くには数秒ほどかかる。その間に攻撃されるのはまずい。

「誰かが足止めしないと……」

だが美遊が念話で伝えるまでも無く、二人は動いていた。

「Anfang——！轟風弾七連」

「Zeichen——！爆炎弾七連」

敵である巖の巨人を中心に、爆炎混じりの台風が吹き荒れた。

凜とルヴィアの風属性と火属性による相乗魔術掃射・炎色の荒嵐（ローターシュトゥルム）。

キャストー戦でも披露したこの魔術はBランク程度の攻撃力しかないが、一工程（シングルアクション）で発動できるという速効性が強みだ。石に魔力と術式を留める宝石魔術の真骨頂とも言える。

凜としてはルヴィアと合わせるなど気に喰わないにもほどがあるが、この状況では甘いことは言っていられない。即席のBランク魔術でアレを足止めするには、同じ実力を持つルヴィアと魔術効果を倍増させるしかなかったのだ。

（キャストーのときはケチった宝石も足して、ちゃんと七連にしてやったわよ！）

それでもAランクにはわずかばかり届かない。だが、それでいいのだ。風は火を助ける。目的は、派手に燃え上がる炎の壁での目くらましなのだから。

（美遊！・離界（ジャンプ）の用意を！）

渦巻く炎を横目に、凜とルヴィアは美遊と合流すべく、弧を描くように駆け出した。

今回の場所は、広いとは言えないビルの上。クラスカードを回収するたびに空間は狭まってきているが、この逃げ場のないフィールド

では不利な条件が多い。

投擲武器の無い近接戦闘主体の相手には、距離を置いた狙撃戦が有効なのだが、この狭さでは構えてチャージしている間に接近されて叩き潰される。

(戻ったらよく作戦を練らないと)

そんなことを美遊までの二十メートルを駆ける間に考えていたせいか。

「凜さん！」

横合いからから伸びる剛腕に、一瞬反応が遅れた。

「……っ、しまった」

炎が燻る中から迫る鉛色の巨軀。

黒い鬣をなびかせ、赤と黄の瞳は凜を標的と定め。

鋼のような腕が、凜の細腰に触れる——その寸前。

十数本の矢がそれを叩き落した。

「え？ ……あ？」

続いて起きる炸裂音。

指向性を持った爆発が鉛の巨人を後退させる。

駆けていた勢いのままコンクリートの床面に倒れんだ凜は。

「まったく君は危なっかしいな」

現在、最高に顔を合わせづらい男に、ひよいと抱き上げられた。

「ちよっ、ちよっ！ ……どこ触ってんのよー！」

背やひざ裏に感じる腕の感触と、がっしりした男の胸板に、軽くパニックになる凜。

バタバタと手足を動かし、なんとか脱出しようと試みるが——

「……開口一番に言うことはそれか。まあ、今は口を閉じることだ。噛むぞ」

凜をお姫様抱っこでがっしりホールドすると、フェイカーは駆けた。

背後では更に大きな爆発音が鳴り、前方では美遊とルヴィアが咄然とした表情を向けている。

ものの数秒で美遊が展開した魔法陣へと辿り着いたフェイカーは

「では帰るとしようか」

と、美遊に何食わぬ顔で飄々と告げた。

鏡面界から去る直前、フェイカーの肩越しに爆心地を確認した凜が見た光景は――

えぐり取られたように欠落した屋上の一角だった。

「は……。やっぱりお風呂は落ちつくねえ……」

チャポン、と湯船に浸かりながら、イリヤは至高の表情を浮かべ言った。

このところ夜はクラスカードの回収で忙しかったから、こうしてのんびりとお風呂を楽しむのは久しぶりかもしれない。

「なんだかジジむさいですよ、イリヤさん」

魔術礼装であるカレイドステッキ・ルビーが、石鹸の泡でワシヤワシヤと自身を洗いながらコメントする。

……いつも思うのだが、あれ、お湯洗いして中身は大丈夫なのかな？ たびたび披露される機械っぽいモノなんかは、水に濡れたら一発でアウトな気がするんだけど。

そんなことを内心で思いつつ、イリヤはルビーに反論の言葉をあげる。

「お風呂は人類が生んだ至高の文化だよ。ホントに日本人に生まれてよかったと思う瞬間よねー。あとジャパニメーションを観ているときとか」

「イリヤさんは日本人とドイツ人のハーフでしょうー」

というかその二つが同列というのも何か問題な気もしますが、と、ルビーのツツコミが入るが、ルビー自身も桶にお湯を張ってくつろいでいるので、なんだかな、という感じである。

「……夜だね」

「夜ですぬ〜」

カポーンという効果音が似合いそうな穏やかな時間。だがイリヤが思い返すのは、この日常の裏側――クラスカードとの戦いだっ

「ミュ、大丈夫かな」

今日のところは偵察だけだと、凜からルビーを介して連絡を受けていた。

だから明日、残る最後のカード『バーサーカー』との戦いに参加するか否かを聞きたい、とも。

イリヤは一生懸命考えていた。

朝帰りをしたせいでセラに小言を言われつつ、今日も学校を休ませてもらって一日中自室で自問自答を繰り返した。

自分はどうしたいのか。

自分にやれることはなんなのか。

どうすればみんなの足手纏いにならないのか。

———失敗のない、全てが上手くいく方法は。

「……ミュに謝りたい。凜さんとルヴィアさんにも」

イリヤの早まった判断が皆を危険にさらしてしまった。ミュにいたっては危うく死ぬところだった。

今も鮮明にあのミュの姿は思い出せる。

この時点でイリヤは自分が死ぬ危険性があることより、自分の間違った行動でみんなの命が危うくなることの方が、怖くなっていた。

そしてその範疇にイリヤの戦線離脱も含まれることも———分かっていた。

カレイドステッキ・ルビーを扱えるのは今のところイリヤだけ。クラスカードを駆使でき、無限の魔力が供給される魔法少女は戦力として大きい。その一角を欠いての戦闘は余裕の無いものになるのではないか。

この問題の解答は簡単だ。

つまりはルビーが大人しく凜にマスター登録を戻せばいいのだ。

だがルビーは頑固だった。あの白い羽を引き千切る勢いで引つ張ってみても、鉄で脅してみようとも、ルビーの意志はナイロンザイル並みに頑丈だった。

（『わたしのマスターはわたしが決めます！』なんてかつこいいこと言っているけど）

ルビーはイリヤをこの事態に巻き込んだ全ての元凶だ。まあ、ルビーのおかげでミュやサファイア、凜、ルヴィアに出会えたとも言えなくはないが。

そんな元凶として凶々しくもイリヤの傍に居座るルビーをどうこうするのは、イリヤには無理な話だった。もともと自分より実力のある凜たちでさえ無理だったのだ。だからルビーに関しては、もう諦めるしかなかった。

それに……やっぱりしたくないのだ。友達として『イリヤ』と呼んでくれたミュを見捨てるようなことは。

(だから結局は、私が上手くやればいい話なんだよね)

間違えず、常に最善で正しい判断で動ければ、誰も死なず怪我もしなくていい。

そしてそのためには――……………。

温いお湯と、前向きになった思考にどっぷり浸かっていたイリヤは気付かなかった。

ドタバタと騒がしくなっていた浴室の外。

だんだんと長髪の女性の影が迫り――。

「イヤッホウ、イリヤちゃん！ お・ひ・さ・さー!!」

「えっ、マ……ママ!?!」

突然スパーンと開けられた浴室のドア。そこから顔を出したのは、外国にいるはずのイリヤの母親、アイリスフィールだった。

「ただいまー！ イリヤ」

「お帰り、つてどうして急に!? 帰国はまだ先じゃ……」

「一時帰国よ、一時帰国。仕事が一段落ついたから、私だけ帰ってきたの。切嗣はまだ向こうで仕事だからすぐに戻らないといけないんだけどね」

アイリはそう言いながら、ぽんぽん服を脱いでいく。

(この流れはまさか)

「長旅で疲れちゃったの。久々に一緒に入りましょう!」

「やっぱりー!」

言っておくが、イリヤの家の浴槽は一般的な大きさである。一人で

入る分には余裕のある広さなのだが、二人となるとけっこうきついのだ。

それでもアイリはちゃっちゃと長い髪をまとめ上げると、イリヤを膝の間に抱え込む形で湯船の中へ入ってしまった。当然の如くお湯が盛大に溢れるが、アイリが気にした様子は無い。

昔は風呂で遊んで湯船の量を減らしてしまうと、セラの小言が飛んできたものだが——今日はアイリがいるのと、わずかな帰国の合間のスキンシップということで、まあ許されるかもしれない。

「は——……。やっぱりお風呂は落ちつくわねえ……」

イリヤと同じことを呟いて風呂を満喫するアイリ。

ただしその腕はイリヤの慎ましい胸に回されている。……久々のスキンシップとしてはちよーつと過剰な気もするのだが。

「うーん、ちよつと留守している間に随分と変わったようね」

「胸は急には大きくなるよ!?!」

アイリのいきなりのセクハラ発言に、即座に反応するイリヤ。ツツコミ力が上がってますねーと傍で見守るルビーは、今はただの玩具モードであった。

「あら、胸のことじゃないわよ? ほら、うちの目の前に豪邸が建っていたでしょ? 家の前の景観が変わりすぎて、一瞬、帰り道を間違えたかと思っただの」

「あ、そっちのこと」

ちよつとだけイリヤは安堵する。変わったこと——イリヤが魔法少女となつて、夜な夜な魔法戦を繰り返していることがバレたのか、とも思っただのだ。

「セラから聞いたけど、イリヤのクラスメイトが住んでいるんですってね。名前は? もう友達にはなれた?」

「名前はミュっていうの。友達には——なれたよ。皆みたいに『イリヤ』って呼んでくれたんだ」

「あら、それは素敵なことね。……それで、今日は何を一日中悩んでいたのかしら? 部屋からずっと唸り声が聞こえてたって、リズが言っていたわよ。ミュちゃんって子と関係あるのかしら?」

「……………えっと」

イリヤは迷った。

悩みは一般人であるアイリに話せるような内容では無い。魔法少女に変身してステツキ片手に冬木の平和のため戦っていますなんて、到底話せる訳がない。

けれど。

さっきまで悩み考えぬいて出た結論がちゃんと正しいものなのか、この決断でよかったのか、という不安もまたある。ルビーはイリヤさんの好きにすればいいですよ、としか言わないから、当てにならないのだ。

だからイリヤはポツリポツリと話しだした。

ちようど兄が浜辺で聞いてくれていたように、背から伝わるアイリの温もりは、イリヤの心の底で張りつめていたものを緩ませる。

イリヤは昨日のことで分かったのだ。

誰かに吐露することは胸が軽くなることだと。例え、抱えているものが減りはしないと分かっているとしても、ただ話を聞いてくれる、それだけで随分と変わるのだと。

「ミユはなんて言うか、すごいんだ」

出会ってまだ短いけれど、ミユができることはたくさんあった。

運動も勉強も一気にクラスで一番になるくらいできて。

冷静で、周りの難しい話にもついていけて。

——やるべきことをちゃんとやれて。

「なんでもできる子なの。……私とは違って」

「あら、イリヤだってできる事はたくさんあるでしょう?」

アイリの温かい言葉に、イリヤが浮かべたのは苦笑いだ。

自分は慌てふためくばかりで、戦いなんかその場その場で何とか凌いでいただけだった。

戦い始めた動機だって、アニメの中の魔法少女に憧れて、ただやってみたかったという半端な気持ちでクラスカード回収に参加していた。

だけどミュは、最初から覚悟していた。真面目に命を賭けて戦っていたのだ。

「……二人でやろうって決めたことがあったの。でも私はそれで失敗しちゃって」

危うくミュを死なすところだった、という言葉は飲み込んだ。

「一緒にいた人にすぐ怒られた。私の自分勝手な行動が、みんなの足を引っ張ったって。もう来るなって」

今でもフェイカーのことを思い出すと、お腹のあたりがキューッと縮こまる。

怖かった。刺すような鋭い視線と、自分のミスを糾弾する声があった。

フェイカーは言っていた。

もう、関わるなど。足手纏いになるのなら、いない方がいいと。

「でも、私は」

それは教訓。フェイカーに切りつけられた傷口はまだ痛むけれど、これを糧として次に生かせばいい。

「ミュと一緒にやろうって決めたことをやり遂げたいの。今度は間違えないから……」

覚悟も決めるし、ちゃんと一緒に戦いたいの！

——だって、ミュは友達だもん！」

すっかり言い切るイリヤ。

これが今日一日考えて考え抜いた末の結論。これがアイリに否定されたらちよつと立ち直れないかも、と不安になりつつ後ろを見上げると。

アイリは笑っていた。深く愛に溢れた母親の笑みだった

「そう。あなたは逃げ出さないのね。えらいわ、イリヤ。……本当にしばらく見ないうちに成長したわね」

嬉しそうに声を弾ませるアイリ。

「そ、そんなことないよ。ホントは一度、逃げ出しちゃったし。でも、お兄ちゃんが迎えに来てくれたの。それで今みたいに話を聞いてくれて——」

イリヤは宝物となった兄の言葉を思い出す。この言葉があるから、イリヤはまた戦うことを選択できたのだ。

『間違つてなかった』つて言ってくれたの。失敗したけど、私の頑張りは無駄じゃなかったって」

自分の行動を肯定してくれた。それだけで次も頑張ろうという気になれたのだ。

「あらあら、シロウも随分と立派になったわね。帰ってきたら、うんと褒めてあげないと」

アイリはコロコロと笑う。

子供の成長を実感できたのがよほどうれしいらしい。切嗣もこんな気持ちだったのかしら、とちよつとずれた感想を洩らしていた。いや、おとーさんも子育ては初めてのはずだよね？

ちなみに兄は今、学校の備品の修理とやらで昔住んでいた家のほうに出掛けていた。夜の外出にセラは苦い顔をしていたが、行先も勝手知ったるところだったから、渋々許可を下したのだ。

スキンシップが過剰なアイリに、兄はどんな褒め方をされるだろうか。

兄のリアクションにちよつぴり期待するイリヤである。

「でもまあ安心したわ。鍵が二度も開いちゃっているし、十年間溜めてた魔力もほとんど空になっているし。随分と盛大に使っちゃったようだから、ちよつと心配だったのよ？」

「……え？」

一瞬、聞き間違えたかと思った。

アイリから魔力なんて言葉が飛び出すとは。

「マ、ママ？ 何を言っているの？」

鍵？ 十年間溜めていた？ 盛大に使う？ 魔法少女のことじゃなくて？

ぽかんと戸惑いだけが浮かぶ。

イリヤの心当たりがない様子に、アイリは逆に驚いたようだ。

「あれ？もしかして力を使ったこと自覚して無かった？ ……あー、やっちゃったかなー」

どうしましょう、と目を泳がせるアイリに、イリヤは逃さないとかかり喰いつく。

いや、魔力という力が起こす現象を知っているだけに、ここはちゃんと把握しておかねばと思ったのだ。

「どういうこと?! 力ってなに?!」

「えーっと、ホラあれよ。『それは自分で気付かねば意味がないのだ』とか『今はまだその時ではない』みたいな」

「なにそれ!?! 余計に気になるんですけどー!?! っていうか惚けないで教えてよ!」

イリヤは更に追求しようとするが――

「あーもー反論禁止!」

「DV?!」

ずべしつと頭の登頂に入ったチョップ。これは痛い。

「うう、家庭内暴力はんたーい」

理不尽な仕打ちにイリヤは涙目になるが、アイリは愛の鞭よ、と片目を瞑って見せた。

そして静かになったイリヤの前で、うーんと腕を組んで悩む素振りをする。十秒。

アイリは姿勢を正すと、正面からイリヤと向かい合った。

「……イリヤは、恐ろしくない? この『力』のことを知ったことによつて、今までの自分(常識)が崩れていくことになるかもしれないのよ?」

どうやら、イリヤの必死な様子に何か感じるものがあつたようである。

アイリからの問いかけに、イリヤは慎重に答えた。

「怖くないって言ったら、嘘になるかもしれない。……けど、このまま知らんぷりして生きていけるほど、私はノーテンキじゃないよ」

もう時既に遅し、だ。イリヤは知っている。クラスカードに魔術師。魔法少女に黒化英霊。そして魔力による魔術の威力。

自分で把握できない『力』があるなんて知れた日には、それがいつ暴発するのか冷や汗が止まらない。――いつの間にか『力』に自

分が取って代わられる、それが怖い。

(あれ? この感じ前にも……?)

その感覚の尾を捉える前に、アイリの返答が割り込んだ。

「逃げないのね。……いいわ。ならちよつとだけ、話すわね」

イリヤはなんとなく、今日もまた特別な日になると、予感した。

浴室の窓には満天の星空。奇しくもルビーが飛び込んで来た夜と同じ空だった。

「まず言っておくと、『力』そのものに良いも悪いも無いの。重要なのは使う人の意志であって、『力』自体を恐れる必要はないわ」

母は語る。イリヤが見たことも無かった『魔術師』の顔で。

「それを踏まえた上よく聞きなさい。」

あなたには『力』が備わっている。それは生まれついでのもので——おそらく、あなたが今、一番必要としているものよ」

「……………」

何も言えず目を見開くイリヤ。ちなみに傍で聞いていたルビーの感想は、意外と直球キター! だった。

「本当は不安もあるんでしょう? そのミュちゃんと一緒にやろうって決めたことで、また失敗しちゃうんじゃないかって。上手くないかなかったらどうしようって」

「それは……………」

凶星だった。

そればかりは、考えただけでは払拭できず、蓋をして遠巻きに眺めていたことだった。

いくら戦う覚悟と意志を固めても、実力がいきなり上がる訳では無い。そして実力アップのための経験値は実戦に出ないと手に入れる事は出来ない。しかし次の実戦はもう失敗できない本番で。実のところ、どうすればいいか分かっていなかったのだ。

「……………」でも、うまくやるしかないの。間違ったらまた……………」
誰かを死なせてしまうかもしれない。

——それはダメだ。それだけはやっちゃいけない。
俯いてしまったイリヤを、アイリは抱き寄せた。

「大丈夫よ、イリヤ」

優しいアイリの声が響く。それは啓示。一人で奮闘していたイリヤへのご褒美。

(本当は最期の時まで、開かれなければいいと思っていたけれど)

「あなたが望むのなら、あなたの『力』はそれに応える。そういうものよ」

イリヤスフィールは前に進もうとしている。ここにはもう、守られるだけの子供はいない。

ならば。

「——うまく使いなさい。もう鍵は開いているわ」

冬の聖女が告げる、解錠の音。

扉は放たれ、運命は回る。

(これが我が子にとって福音とならんことを)

風呂上がり。衝撃的な事実を告げられ、自室のベッドで昼間とは違う理由によりゴロゴロと唸っていたイリヤは、軽いノックの音に顔を上げた。

「やつほー。イリヤちゃん。ちよつとは落ち着いた？」

扉から顔をのぞかせたのは、先ほど色々ぶっちゃけてくれたアイリスフィールである。

「あんまり……。正直、ほんとに『力』があるなんて実感ないし、なんかぐるぐるしてわけわかんないよ」

「あらあら。そういうのは一晩寝れば、すっと整理されるわよ。今日は早く休んだほうがいいかもしれないわね」

そういう問題かなーと首を傾げるも、パンクしそうな頭では同じ思考をぐるぐる巡るだけであつたので、とりあえず寝る支度をする方針に舵を切ることにする。

『力』については自分次第とアイリから告げられていた。錠は外したのだから、あとはイリヤが自分で気付いて理解しなさい、と。

しかしいくら考えても瞑想っぽいことをしようと、全く『力』らしきモノは感じられないのだ。アニメやマンガでは「内から力が漲ってくる」とかそれっぽい閃光やら力の奔流などが描写されるが、イリヤの身に秘められた『力』は今更出て行くのは気恥ずかしいというように、うんとも寸とも反応がない。一緒に聞いていたはずのルビーにも、それらしきものは感知できず「ほんとにあるんですかー？ 実はドツキリだったりとかー」とイリヤを茶化すばかりであつた。

(……こんな有様でちゃんとミュと一緒に戦えるのかな)

モヤモヤとイリヤの表情は曇つたまま。

その様子にアイリは苦笑を漏らすと、イリヤの手を取り言った。

「大丈夫よ。イリヤが『聖杯(イリヤ)』である限り、『力』が無くなることはないわ。望むと望まないに関わらず、あなたはそう生まれてきたのだから」

「……そういわれても」

わからないものはわからないのだから、仕方がない。

唇を尖らせるイリヤに、アイリは「とにかく今日はもう寝なさい」とイリヤの額のしわを小突く。

そしてイリヤの手のひらの中にあるモノを滑り込ませた。

「はい、これお守りね。これからは必ず身につけること。お風呂の時でも外しちやダメよ」

手に触れたのは冷たい金属の感触。視線を落とせば、丸い銀の輝きと同色の細いチェーンが目に入った。

「……コインのペンダント?」

ちようど百円玉くらいのコインには見知らぬ文字が細かに刻まれ、裏返せば精緻で繊細な文様がびっしりと書き込まれていた。まるで魔法陣みたいと感想を漏らせば、正解、という声が返ってきた。

「イリヤが悪い大人に捕まらないように、つていうおまじないよ。」

わたしたちはある人たちから見たら、とつても珍しくて貴重な存在なの。もしもそういうモノだつて知られたら、イリヤちゃんがよく読んでるマンガみたいに、闇の組織に誘拐されて人体実験にされたり標本にされたり、あんなことやこんなこともされてしまうの。

だからね。知らぬが仏、だつたかしら? 悟られないこと、それが一番の安全策なのよ」

わかつた? と、笑顔でとても物騒なことを茶目つ気たつぷりに語るアイリには、ただならぬ迫力があつた。

イリヤはコクコクと頷くしかなかった。

「……ハ―イ。ワカリマシタ。以後気ツツケマス」

そうして嵐のようなアイリの訪問の後、イリヤはローテンションなまま部屋を自由に飛び回るルビーに聞いてみた。

「ルビー、ママの言つてたことつてほんとにあるのかな? その……誘拐とか人体実験とか標本とか」

「ありますよー。とかまままです。いや、実際はもっとひどいことになるかもしれませんね」

――まじですか。

イリヤは崩れ落ちた。

そう、自分の中に秘められた力があるなんてマンガ的でファンタジーなやつたうふふみたいな展開までは良かったのだが、それに伴う現実的で超危険なリスクが身に迫ることなどまるで考慮していなかったというか、いや魔法少女で黒化英霊とか魔術とか危険にはどっぷり浸かつちやつたけどそれは鏡面界の出来事で、こう日常でましてや一般人と生きていた母親からそうデンジャラスな脅しを聞くとは思わなかったというか――

「ちなみにママさんの言っていた悪い大人だとかある人たちとは、十中八九、凜さんやらルヴィアさんたち魔術師のことですねー。まあその二人は中でも甘々の甘ちゃんですから、おそらくは見逃してはくれると思いますが、どこから情報が漏れるかわからない世の中ですし？ 魔術師のみなさんは自分の研究のためならどんな犠牲も厭わないマッドな方たちばかりなのでー。だいたい凜さんが所属している時計塔という魔術組織でも、稀少と認定されたモノは封印指定として生きたまま脳髓を取り出されて深い地下に標本として飾られるという噂で――」

「やめ！ わかった、わかったから、もう怖い話はしないで！」

ルビーからもたらされる知りたくなかった情報をシャットダウンし、イリヤは懇願の目を向ける。

「ルビー、私の『力』こと、ママのこと、絶対内緒にして！ お願いで！」
「わかりましたよイリヤさん！ イリヤさんは私のマスターですから！」

ルビーの潔い返事に、よかつたーと安堵の息を吐くイリヤ。

しかし忘れてはいないか。カレイドステッキ・ルビーはこんなに物わりのいい性格だったか？

否、ルビーのねじくれっぷりはあの宝石翁でさえ厄介といわしめるもの！

つまりはこういうことで。

「あ、でもマスターを変更したらその限りではありませんので」

「え、ちよつと。ちよつと待ってよルビーー！」

それはイリヤがマスターの内は黙ってくれるということ。転じて、

秘密を守るにはこの先ずっとイリヤが魔法少女をしていなくてはいけないということだ――

「私、大人になったらさすがに魔法少女なんてやりたくないからね！」
「え、でもイリヤさんとの契約を解除したら、私何かの拍子にイリヤさんの秘密をうつかり漏らしてしまうかもしれないですよ」

それでもいいんですかー？ というルビーの悪魔の囁きにイリヤの思考は加速的に追い詰められていく。

（つまり、秘密を守るためにこの先延々ルビーとつきあうか、秘密をバラされる危険を承知でルビーと離れるしかないわけで――いや、第三の道として何かの交換条件で秘密を永久に守ってもらおうとか――

でもどちらにせよ何らかの犠牲はつきもので――）
グルグルと混乱の迷宮を何度もさまよった挙句に、イリヤは結論をはじき出した。

将来を守るために犠牲にすべきは、今現在だと。

「ルビー、私、今なら何でも、何でもするから！ お願いだからこの先ずっと秘密を守って！ お願いします！」

こうしてイリヤの黒歴史が一ページ、追加されたのだった。

じゃあイリヤちゃん、おやすみなさい、と娘の部屋をあとにしたアイリスフィールは、自室の部屋に戻ると、風呂上がりの格好から外出できる服装へと着替えだした。ついでに部屋に魔術痕跡を残さぬよう留意しながら新たな術式を身に纏う。自らの隠蔽の礼装を娘に渡したための、一時的な処置である。

玄関を出ると、セラが車の用意をしていた。

「ありがとうセラ。ちょっと遅くなるかもしれないけど、留守をよろしくね」

セラから鍵を受け取り、愛車に乗り込んでエンジンをかける。城にいた頃から乗り回している愛車の手応えに、アイリは確かな信用を寄せる。

「（こちらのことはお任せください。奥様こそ、どうぞお気を付けて）」
律儀にも見送ってくれるメイドに、アイリはサイドブレーキを解除

しながら訊ねた。

「そういえばセラは、彼に何かメッセージでもある？」

今夜会いに行く相手は主にセラが世話を焼いていたはず。何か気になることでもあれば、と思ったのだが。

「いえ、特に何も。あれから既に十年も経っているんですよ。彼もいい歳した大人です。私に心配されるような軟弱者に仕立てた覚えはありません」

それに桜さんの様子はシロウから聞いていますから、とセラは澄まし顔で答える。

その様子は見栄を張っているわけでもなくただ当然のことを言っただけだと、アインツベルンのメイドとしての矜持をもって答えているように見えた。

（じゃあ、彼がどんなに立派になっているか、おみやげ話に持ち帰ってあげましょうか）

小さな楽しみを含みつつ、アイリはクラッチを踏み込む。ついでにアクセルもふかし――

「わかったわ。あとイリヤの封印を外したから、何か聞かれたらあまり誤魔化さないで答えてあげてね」

「……………はい？」

そしてアイリは勢いよく車を発進させた。

「え、ちよつ、奥様、どういふことですかー!？」

セラの叫びは置き去りに、夜の深山町へとアイリは繰り出した。

深山町のとある公園。昼間は子供たちが走り回る場所も、夕食時も過ぎたこの時間では様相を一変させる。

中央部の円形に空いた広場。そこに等間隔に配置された四つの電灯がその場のみを照らし、暗がりにはよりいっそう陰を深める。木々が多く植樹されたこの公園は外側からの見通しが悪く、夜の蜜月にはちよつどいい立地であった。

普段であれば、酔っぱらいの中年サラリーマンや、夜のデートとしてカッパルの一組や二組がたむろするであろうが、今日に限っては公

園内に人影は無く。公園の外縁には時折通行人が行き交うのに、内に入ろうとする者はいない。

そして初夏の月が後少しで天頂へとさしかかるかという頃、一台の高級車が公園の外周部に横付けされた。一般的な住宅地では不釣り合いな車から降り立ったのは、長い銀髪の外国人女性。

人形めいた顔立ちに赤い瞳を持つ彼女は、公園の入り口で立ち止まる。

そこには一見変哲のない蚊柱がたっていた。入り口の中央で無数の虫が密集し飛び交い、何気なく公園に入ろうとした者は気を削がれて回れ右するだろう。

(……うまいやり方。キリツグの教授をちゃんと活用しているよね)

相手に気取られるような結界を張るのは三流のする事。一流の術者は張ったことすら気づかせないものを造りあげる。

今夜必要なのは一般人を寄せ付けない人払いの結界。

なるほど彼は人払いの術式を巡らせるよりも、羽虫を操るほうが得意だ。消費される魔力も微細な量だろう。無理に立ち入る者があれば、その瞬間だけ術を立ち上げればいい。これならば他の魔術師にも気づかれにくい。

(私でさえ、知っていないくは見落とすほど……。いい腕ね)

千年続いた魔術の大家アインツベルン。その研究の粋を凝らして鑄造されたアイリスフィール・フォン・アインツベルンは満足げに笑う。あの雪に閉ざされた城から今までついてきてくれた従者たちによい土産を渡せそうだ。

そうするうちに、密集していた虫たちが一匹、また一匹と離れていく。数秒もせぬ内にアイリの目の前から虫が消え、公園への入り口が開かれた。

「こんばんは。お久しぶりです。アイリスフィールさん」

その男はきわめて普通に挨拶をした。

公園の奥から進み出たのは、一般的なパーカーとズボンにスニーカーを着用した三十代半ばの男性。すれ違っただけでは記憶に残ら

ないであろう様相。ただ唯一左目に当てた医療用の眼帯だけが多少気になるくらいか。

そんな完全に一般人に溶け込んだ男が、今夜のアイリの目的である魔術師だった。

「こんばんは。思ったよりも随分真つ当に動くようになったわね。あの頃からすると見違えるようだね、カリヤ。ウェイバー君の下で良い研鑽を積んできたのね」

アイリの忌憚のない称賛に、男——現間桐家当主、間桐雁夜は、首を横に振りながら答えた。

「いえ、俺なんてまだまだです。表面上は小奇麗にしていますが、中身は修復に時間がかかっています。動きにもまだ少しぎこちない部分が残っていますよ」

そう雁夜は言うが、ホムンクルスを人体に模して鑄造してきたアイントベルンの目からすれば、よくぞあのボロボロの身体からここまで回復したと思う。

「髪も染めているのかしら？　なんだか若返って年相応に見えるわ」「ええ、やっぱり白い髪は目立ちますからね。——あのときは棺桶に片足突っ込んでいたので、まあ、二十代の若々しさとは無縁でしたよ」

と、照れ笑いする雁夜は、若白髪を隠そうとする一般男性と変わらない。

魔術師であれば魔術の代償で変化した外見など誇ることはあっても、世間の目を気にすることは無い。自分の研究を迫及することこそが至上の魔術師が、手間暇をかけてまで外見を取り繕うことなど無いのである。魔導に一度背を向けた雁夜は、魔術師の大学とも言われる時計塔へ留学し魔術世界に混じっても、どうも一般人の感覚が抜けきらなかつたようだ。

雁夜は左半身不随だったことも感じさせない動きで、アイリをベンチの方へ誘った。

立ち話で終わらない用件なのは薄々感じていたので、アイリは差し出された手を取って敷き布が用意されたベンチへと腰を下ろした。

アイリが雁夜と会うのは幾年ぶりだろうか。

十年前の聖杯戦争はほぼ不発に終わったとはいえ、死傷者は出た。

その主な原因は当時、間桐を取り仕切っていた間桐臓硯の異様な執着だった。

聖杯戦争の創始者の一人にしてサーヴァントシステムや英霊を律する令呪の考案者。第四次聖杯戦争が始まる前に終わらせる——そのことに大いに反発し、聖杯戦争に参戦するために集まった魔術師全てを敵に回し、抗った。当時の遠坂家の当主——遠坂時臣が間桐臓硯と相討ちとなり、五百年の執念も途絶えたが、残された間桐の者たちの傷は深かった。

間桐家はその後、アインツベルンの仲介で、間桐家の魔術研究の成果を全て差し出す代わりにエルメロイ家の庇護下に置かれた。また雁夜がある程度身動きが取れるようになるまで、魔術の心得のあるメイドが派遣され、アインツベルンに大きな貸しを作るようになったのである。

だがアイリスフィール自身はあまり間桐家に顔を出すことは無かった。

聖杯戦争の後始末が盛大に残っていたということも一因である。

アインツベルンの城から赤子だったイリヤスフィールを迎えに行き、民間に出してしまった被害の中で唯一生き残った男の子を引き取り、そして夢みた日本家屋での生活を始めるも、長くは続かず。

アイリと切嗣は聖杯戦争の要となる大聖杯の機能は停止させたものの、完全な解体には至らなかった。柳洞寺地下の空間に溜まった魔力を無理なくガス抜きさせるには数十年規模の時間がかかる。そのことを嗅ぎ付けた多くの魔術師が、『根源』へと辿り着けるであろうその大魔術の術式をかすめ取るべく、暗躍を開始したのだ。

切嗣は『魔術師殺し』時代に構築したネットワークを頼りに敵を特定し次々と駆除していった。時計塔に戻ったケイネス・エルメロイ・アーチボルトとウェイバー・ベルベットにも協力を仰ぎ、聖杯戦争に関する情報の消去を進めた。アインツベルン、間桐と並ぶ御三家である遠坂は、跡継ぎが幼いということで、昔から親交があったという監

督役の言峰教会に任せ、セカンドオーナーとして冬木の守護の任に就いてもらった。

だが、十年経った今でも聖杯戦争をめぐる裏の戦いは終結の気配を見せない。また第三次聖杯戦争の時代、第二次世界大戦前のごたごたで術式の一部が流出している可能性があることも、最近になって発覚したのだ。

聖杯の管理を司ったアインツベルン家に注目が集まることはまだいい。その本拠地は既に潰えているのだから。しかし鍵の一つである小聖杯として生まれたイリヤスフィールの存在が露見してしまえば、狙われるのは必定。それ故、切嗣やアイリが世界中を飛び回ることなり、イリヤや士郎のいる冬木の中に中々帰れない状況なのである。

「それで？ わざわざ桜ちゃんやシロウ、セラを経由してまで私たちに連絡をとって、知らせたかった要件は一体なんなのかしら？」

アイリは厳しい目で雁夜に問う。切嗣とアイリ直通の連絡先を知っているのはセラとリス、そして今はロード・エイルメロイ二世と名乗っているウェイバー・ベルベツトのみ。魔術との関わりを徹底的に排除しているため、魔術師が冬木の自宅に近づくことは禁止している。自衛と制御のために魔術を習ってはいるが一般人として学校に通っている間桐桜はギリギリのラインだ。

本来であれば直属の上司であるウェイバーを経由すべきだったが、この案件はウェイバーにさえ秘密にせざるを得ない事情があったのだ。

雁夜は唇を湿らせると、胸中で整理していた事柄を語り出した。

「俺は今——冬木で確認された霊脈の歪みの調査に来ています。大本の原因には留学中の遠坂家当主ともう一人、宝石翁の系譜の魔術師が当たっていて、俺はバックアップ兼報告の検証・裏付けのために派遣されました。なので現場の二人には俺のことは知らされていません」

雁夜の魔術師としての能力は低い方である。衰退へ向かっていた間桐家の最後の出瀬らしと言っていていいほどだ。だが仮にも五百年は

続いた魔術師の系譜。残された資料の上澄みだけでも精度の高い術式となっている。

間桐の魔術は蟲を媒介または使役して展開する魔術である。蟲は生命力・繁殖力が強いが抵抗力は弱く術式によっては魔力消費も極端に少なくて済み、雁夜の魔力量でも充分運用することが可能だ。

雁夜は魔術師にとって悲願である『根源』を目指すことも、間桐の家を存続させることにも興味は無いが、『間桐』という家名が魔術世界で一種のステータス(盾)となっていることを時計塔留学中に理解した。雁夜が『間桐』として成果をあげれば、それだけ実兄や甥、義理の姪を守る。

雁夜は本腰をいれて魔術を学んだ。魔術師に対抗するための魔術の習得だったから、雁夜も某魔術師殺しではないが、魔術師というよりは魔術使いといったほうがいいだろう。

「俺の得意とする魔術は、蟲を使った偵察と監視です。群れとして蟲を扱うので広範囲にわたる索敵と長期間にわたる記録(ログ)の集積もできます。冬木を離れる前にも、霊脈の要所には監視用で設置していったんですけど……」

情報収集は作戦行動の要。正しい状況判断をするためには、多くの記録を統合し多角的な視点で解析する必要がある。これはルポライターとして世界中を渡り歩いてきた経験と、衛宮切嗣の教授から学んだことだ。

冬木の地を、ひいては残された間桐の家族を守るため、雁夜が設置していった魔術は霊脈から漏れる僅かな魔力によつて半永久的に作動する術式だったのだが――

「俺は上層部のごたごたで、現場の二人より五日ほど遅れて冬木に到着しました。一昨日のことです。すぐに設置していた蟲たちの記録の解析を始めたのですが、霊脈の歪みのせいでノイズのひどいものと成り果てていました」

「――それがどうして私を呼ぶことに繋がるの？ 大聖杯は機能を停止しているし入り口だって嚴重に封印してある。土地については遠坂の管轄でしょう？」

アイリスフィールの困惑に、雁夜は力なく首を振った。

「わずかに解析できた記録に映りこんでいたんですよ。——遠坂凜と共に、宝石翁秘蔵の魔術礼装を手にしたイリヤスフィール・フォン・アインツベルンの姿が」

「まさか、遠坂がイリヤを聖杯として利用を——?」

焦燥の念を浮かべるアイリ。聖杯の器であるイリヤには大容量の魔力を行使するスペックがある。それに目を付けたのか。

実の娘イリヤスフィールが聖杯であることは、始まりの御三家だけの秘密であり、第四次戦争後世話になつているウェイバーには、イリヤはただの人間と同じように成長するだけのホームクルスと伝えられている。だからこそ雁夜はウェイバーを通すことなく、何も知らない桜に頼んでまでアイリに連絡を取つたのだ。

しかしここにはおかしな点がある。これも遠坂のうっかりの一つかもしれないのだが。

「いえ、実は凜ちゃんはイリヤちゃんが聖杯だということを知らないようなんです。昨日今日と蟲を使つて様子を伺つていたんですけど、どうやら普通の小学生を巻き込んでしまったと思つているようです」

遠坂家の情報の継承はどうなつているのか。

そのことに気付いたときは、思わず優雅にかっこよく散つていった男の背を遠くに見ながら天を仰いでしまった。よもやここにも遠坂のうっかかりが存在したとは。よく今までボロがでなかつたな！

ちなみに雁夜は遠坂凜とは顔なじみであり、彼女の性情はある程度把握している。

遠坂凜の性格からして、一般人の中で生活する小学生を無下に利用しようとはしないだろう。そこまで魔術師として冷徹にはなりきれていないはずであり、そこが彼女の人の好きでもある。

もつとも、雁夜に対しては仲良く接してくれたのは幼少期のみ。成長してからは碌に目も合わせてもらえず同じ時計塔で学んでも露骨に避けられていた。

（俺が一度、間桐から出奔したからかな……。まあ俺の今のスタンスも生粋の魔術師からすれば、眉を顰められるようなものだし）

実を言うと凜のそうした態度は過去遠坂家と間桐家の結んだ不可侵条約に基づいているのだが、これも遠坂家伝来のうっかりのせいだ。それが有名無実化している事実を彼女が見逃しているだけである。うっかり仕事し過ぎ。

「……どうして魔術師の任務に普通の小学生が巻き込まれるのかしら？」

アイリは不審というか、心の底から理解できないというように疑問を零した。

通常、魔術師の活動というのは神秘の漏洩防止のため、一般人の関わりを厳しく制限している。表社会で普通に暮らしているイリヤとの接点はあり得るはずが無い。

「それに関しては……まあ、その、不幸な事故があつたんだと思います。」

——遠坂凜と、同じく本件を任されたエーデルフェルト嬢の確執は時計塔内でもその名を轟かせていました……、さらに今回、任務の依頼主である宝石翁から特別貸与された魔術礼装の性質を加味して考えると、ホント、天文学的な確率で今回のような事態が発生したんじゃないかと……」

雁夜は歯切れ悪く己の推測を述べていく。まったくもって外聞の悪い話なのだが、こう、実際の様子が生々しく想像できるくらいに過去の実績が脳内再生されるのだ。あの二人の険悪な空気に愛想尽かす某ステッキが目には浮かぶようである。

「よく分からないけど、イリヤをただの小学生として扱っているのならいいわ。ただ、任務つてことは、報告を協会にするわよね。……余計な注目が集まらなければいいのだけど」

「あ、それに関しては大丈夫です」

アイリの懸念を雁夜はあっさり一蹴する。

「俺は現場担当の二人の提出する報告書の検証と、裏付けの調査を任された人間です。当然、中間報告書にも目を通しています。やはり一般人を巻き込んだのが後ろめたいのか、今のところ書類にはイリヤちゃんのことは何一つ書かれていませんでした。最悪、書かれていた

としても、俺が添削しておきますよ」

力強く断言する雁夜。魔術協会からすれば監査として送り込んだ意味がまるでないのだが、上層部は腐敗が蔓延している御時世であり、多少の私情が入っても大した問題にはならないだろう。

「それはとても頼もしいことだけど……その魔術協会からの任務でイリヤは危険なことをさせられているのかしら？」

親としてはそこが気になる場所である。さらにイリヤに掛けられていた封印が二度も解けた痕跡を見た後である。イリヤが対処できないほどの事態であれば、魔術師としてのアイリの存在を晒しても止めに入らなければいけないが――

「それはたぶん大丈夫……だと思えます。」

実際の様子は鏡面界という別次元の空間に移転して行っているの、俺には何をしているのか分からないんですが、執行者一名でも充分達成できる任務ですし、時計塔主席候補の魔術師二名、そして魔法使い謹製の最高位の魔術礼装が揃っているので、よほどのことが無い限り、身の危険は無いかと」

雁夜の認識では、魔術工房に攻め入っても殲滅してお釣りが出ることの戦力という認識である。特に二人の火力が生半可なものではないことは常日頃から分かっていることだ。

――雁夜は知らない。世の中には想像を上回る怪物が、現実とすぐ隣り合わせに存在していることを。

「それに今回、特別に貸し出された魔術礼装には個人的に面識があった――」

「魔術礼装に面識？」

たかが道具である魔術礼装に面識があるとは妙な言い回しである。首を傾げたアイリに、雁夜は何故か目を泳がせながら返答した。

「……えっと、その魔術礼装にはなかなか愉快な性格の人工精霊が組み込まれていて、なんというか、そう、絶対シリアスにならないというか、……精神的に玩ばれるだけで、大して身体的害はないというか、とにかく、アレがイリヤちゃんを気に入っているのなら、身の安全は確実です。アレの礼装としての能力は最高位ですから」

アイリを安心させるような言葉を選びながらも、遠い昔の友（犠牲者）に背を向け必死に当時の悪夢を忘却の彼方へ追いやろうとする雁夜であった。

「まあ、そんな感じでイリヤちゃんが魔術師の世界に足を突っ込んじやっているんですが、これからどうしますか？　俺が手を回して凛ちゃんたちに勧告することもできますけど」

これが雁夜の今日の本題である。

下手にイリヤを引き離そうとすれば下種の勘繰りも釣れてしまう可能性もあるため、一度保護者であるアイリと切嗣に判断を仰いだのだ。

アイリは雁夜の情報と、セラトリズからのイリヤの近況、そして家を出る直前のイリヤの決意（こたえ）、その全てが繋がったことを自覚した。その上で、アイリは裁決を下さなくてはいけない。

「そうね。——キリツグだったら、問答無用であの子を表世界に引き戻したでしようね」

「……アイリさん？」

誰ともに聞かせるつもりのないアイリの独白に、雁夜は眉を顰める。その言い方ではまるで——

「私もキリツグも、イリヤと士郎を守るために今まで世界中で頑張ってきたわ。あの子たちに私たちの負の遺産なんて残したくないから、一緒にいる時間を削ってまで闘ってきた。

けれど、それにも限界があるようなのよね」

アイリはその白皙の美貌に憂いを浮かべた。

冬木の聖杯戦争は、当時学生であったウェイバーが時計塔で容易に調べられるほど有名になってしまった儀式である。万能の願望器という表向きの題目は儀式に必要な魔術師を釣る餌であり、優秀な魔術師を集めるためにもある程度の情報の拡散は必要であった。

ところが冬木の聖杯は第三次聖杯戦争時に人間の悪性の象徴ともいべきサーヴァントが原因で聖杯は汚染されてしまった。聖杯戦争に勝利したとしても願いは悪意によって歪められた形で成就してしまう。

それを知ったが故に、アイリと切嗣は冬木の聖杯を解体することを決めたのだ。衛宮切嗣の願いであった全人類の救済も諦め、二人は互いの幸せを、家族の幸せを選んだ。

しかし拡散された情報を全て消去することは困難を極める。聖杯を巡るこの儀式は『根源』へ至るための道に限りなく近く、聖杯が破棄されると告知しようが、多くの魔術師がその断片だけでも手に入れようとするのだ。

「どれだけ情報を潰しても、聖杯を狙う魔術師の計画を阻止しようと、キリがないの。さらに第三次のときにナチスと帝国軍のいざこざの中で術式が一部流出したとかで、補完のためにアインツベルンを狙う勢力もあるみたいで。キリツグがアメリカから動けないのもそのせい」

愚痴っぽくなってしまいが、今の状況が厳しいせいで休みも碌に取れないのである。今回の急な雁夜の呼び出しにアイリだけでも帰国できたのが奇跡的なくらいだ。

「キリツグは昔ずっと一人で活動してきたせいかな、なんでも一人でこなそうとするのよ。部下の人はいるんだけどね、肝心な部分は一人で抱え込む癖があって……」

今はまだいいわ。私もいるし、身体も支障なく動いてる。でも子供たち二人を守りながら、終わりの見えない闘いをいつまで続けていくのかしら？」

「それは……」

雁夜は言葉が出なかった。それは雁夜も抱える問題だからだ。

『間桐』を存続させるつもりは無い。桜にも甥の慎二にも継がせるつもりは無い。だが雁夜の死後どうやって彼らを守ればいいのか。

洩面になる雁夜に、アイリは言う。

「私ね。今回のイリヤの件は、いい機会だと思いうことにしたの」「はっ？」

雁夜はアイリの発言に目を丸くする。普通、危険なところには近寄らせないのが一番ではないだろうか。

「将来、いつになるか分からないけれど、私とキリツグ、セラとリズで

守り切れなくなる時がやって来るわ。その時のために、やっぱりある程度自衛できた方がいいでしょう？

イリヤの様子を見る限り、魔術の世界に触れても忌避したり臆した様子では無かったわ。寧ろちゃんと自分の意志で、友達と一緒にやり遂げるって決めていた。逃げずに前に進んでいたの。——もう守られるだけの子供ではないのね」

「アイリさん、イリヤちゃんのこと知ってたんですか!？」

「なんとなくね。何か大きな壁を乗り越えようとしていることは本人からそれとなく聞いていたから。まさか魔術の任務についてだとは思わなかったけれど」

開いた口が塞がらないとはこのことか。

雁夜は乗り出していた上半身を戻すと、かくつと首を落とした。

「大丈夫よ、カリヤ。子供たちは私たちが思っているよりもずつと逞しいわ。桜ちゃんだって魔術の勉強、頑張っているんでしょう？ 私たちも子供たちを信じて、負の遺産を減らすだけじゃなく、後に残す遺産も考えていった方がいいかもしれないわ」

前向きなアイリの言葉に励まされるよう、雁夜もゆるゆると顔を上げる。

「そうですね……。俺たちだけで全部背負おうとして潰れてしまったら、それこそ本末転倒ですから、できる限りのことはしていかないと。……情報の継承っていうのも大事ですよね」

遠坂の二の舞を演じる訳にはいかない。

雁夜は力強く立ち上がるとアイリに向かって言った。

「それじゃあ、イリヤちゃんのこととは現状維持ってことでいいですか？ もしイリヤちゃんが小聖杯ってことがバレそうだったら、俺がフオローに回る感じで」

「ええ、それでお願ひするわ。よろしくね、カリヤ」

アイリは雁夜に右手を差し出す。その手を取り、雁夜はアインツベルンからの借りはここで返すと誓ったのだった。

凍てついた静謐な世界。

空から舞い降りる淡い雪片が、周囲の景観を覆い尽くしている。厳つい樹肌をさらす木々がポツリポツリと立ち並び、風が枯れ枝を揺らす以外に動くものは無い。雪空越しの光は灰白く、陽光の方向さえ定まらない。

しかしこんなにも寒々しい空間なのに、イリヤは不思議と冷たいとは感じなかった。

いつの間に迷い込んだかは覚えていない。気がついたら散歩でも行くように、いつもの格好でこの寂しい雪原を歩いていた。

(……、どこだろう……)

そんな疑問もかすめるが、ぼんやりとした頭ではそれ以上の思考は進まない。ただ何かに呼ばれるように、足跡を残しながら歩を進める。

時折、雪交じりの風が強く吹いた。

イリヤはその冷風を受け入れた。清々しいとも感じた。ふと振り返ると、巻き上げられた雪がイリヤの痕跡を掻き消していた。どこから歩いてきたか、もはや指し示すものはない。

だが不安に思うことは無かった。もう戻る必要はないのだから。

(……本当に?)

胸の奥で一瞬、火花が上がった。まるで警告か悲鳴のように。

しかし雪は降り積もる。何事も無かったかのように、それを覆い潰してしまう。

(……いかなきや)

イリヤは歩いた。冬枯れた木立の中、見覚えのない、けれど身に馴染む世界を進んだ。

そして、それは現れた。

石で組まれた古塔の群。いや、全容を見ればそれはまさしく城。この雪の世界の中心に座すに相応しい、古めかしい厳格でこちらを圧倒する石の塊。凝縮された不動の威容。

イリヤは足を止めて見入った。気圧されたと言っている。その城が積み重ねた歴史——それがどのようなものであるかは分からなかったが——に恐れをなしたのだ。

(私なんかが踏み入れてもいいのかな)

場違いにもほどがある。イリヤの人生の中でこれほど堅く厳しい場と相對したことがあつただろうか。

だがイリヤはそこで気付いた。その城の扉の前。白い人影が手招きをしているのを。

(あの子だ)

イリヤは足を踏み出した。あそこにいる人物こそが、イリヤを呼んでいた相手。イリヤが会わなければならない存在。

鼓動が速くなる。足早に駆け寄る。息が切れて思いの外疲労していたことを知る。

最後に足がもつれて転がり込んだ。雪が盛大に舞った。

その子は目を丸くしてそれを見ていた。白いドレスに散らした柔らかな銀髪、雪のような白い肌、人間離れた真つ赤な瞳も相まって、まるで雪の妖精だった。

「やっ与会えたね、お姉ちゃん？」

その子はイリヤと同じ顔で、にっこりと笑った。

城の中は重厚と荘嚴を体現したかのような様相だった。

華美ではなく繊細ではなく、ただ一つの目的に合わせて整えられたかのような内装。玄関ホールは西洋の物語に出てくるような広々とした空間で、入り口から延びた赤い絨毯の先には奥へ続く廊下が口を開けている。磨き上げられた石の壁面には等間隔に取り付けられた燭台の灯火が映り込み、ホール全体を照らしていた。

「ほら惚けてないで。こっちにも、もつとすごい所があるんだからー」

細く白い手がイリヤの手を引っ張る。それにつられるようにホールの中を通り過ぎる。

この圧倒されるほどの壮麗な空間の中、白の少女だけは軽やかに身を翻す。華奢な体軀に淡い色彩。それでいてこの空間に不和が無い。少女は自由だった。全てを従える主人のように。

廊下に入ると独りで燭台に火が灯った。少女が視線をやるだけで、光りが満ちた。

「ここが記録閲覧室、こっちが起動実験室、そこは調整中で……」
次々に部屋を通り抜けていく。そのたびに扉が閉まっていく。

イリヤにはもう、自分が城のどのあたりにいるのか分からなくなっていた。ただ紹介される部屋の物珍しさも相まって、通ってきた道もほとんど覚えていられなかった。

妖精のような少女が案内する部屋で展開される光景は、イリヤにとつて見たこともないものばかりだった。未知なる玩具箱とでもいおうか、分厚い本が壁一面に並べられているのも、理科の実験道具のようなものが机に乱立しているのも、いかにも魔法使いの怪しい大鍋が火にかけてられているのも、純粹にイリヤの好奇心を刺激した。少女が楽しげに説明し、気安くそれらを扱うのを見たせいかもしれない。もしイリヤ一人だけであったなら、知らない学校に迷い込んだかのように気後れしてしまって、早くここから出たいと願っただろう。

「すごい、すごいね！ このお城！」

「でしょう！ ここは私にとつての家よ。気に入ってもらえたら嬉しいわ」

少女は喜色を乗せた笑みで、更にイリヤを奥へ誘う。

やがてある一つの扉の前で少女は立ち止まった。それは変哲のない普通の木の扉だった。今まで見てきた扉には頑丈な鉄の板がはめられていたり、複雑な文様が銀の線で埋め込まれていたりもしたのだが、この扉だけはイリヤでも見たことのあるごくごく普通の扉だった。

「ここは何の部屋なの？」

黙ってしまった少女にイリヤは尋ねる。少女はわずかに間をおいた後、先ほどとは違った笑みで言った。

「ここは『イリヤ』の部屋よ」

扉の中は今まで見てきた部屋と少し様子が違っていた。普通の赤い炎が燃える暖炉に、手触りのよい柔らかな絨毯。天蓋のついたベッドに、少女にぴったりの高さのテーブルと椅子。窓際には大量のぬい

ぐるみが、その下の背の低い本棚には分厚い本ではなく薄いカラフルな絵本が並び、絨毯にまではみ出していた。壁際にはブラシの置かれた鏡台とドレスの端が覗いているクローゼットがあった。

そこは人が人として生活するための部屋だった。

「ここ、あなたの部屋だよね？」

イリヤは目に付いた絵本を広げながら言う。足下にあった所々すり切れた絵本だ。

だが次の瞬間、身をこわばらせた。

イリヤに向かって絵本が語りかけてきたのだ。正確には絵本から音声が流れたと形容すべきなのだが、イリヤが驚いたのはそれだけではない。

発せられたのはしつとりした大人の女性の声。慈愛に満ちた、イリヤにとって聞き覚えのありすぎる声。そう、イリヤの母親アイリスフィールの声である。

「え、なんで、ママの声が聞こえてくるの？ それにこの話って……」
拙い絵で描かれていたのは、幼い頃にアイリが読み聞かせてくれた話だ。いい加減なノリで大雑把に話を展開させてしまうアイリが勝手に続きを創作した、イリヤと兄の士郎しか知らないはずの内容がそこに記されていた。

あまりの不可解さに、知らず足が後退を始める。だが、床にはみ出していたぬいぐるみの一つに足を取られ尻餅をついてしまう。

そして思わず手をついたぬいぐるみから染み込んできたモノにシヨックを受けた。

（おとーさん、ママ……外国になんか行っちゃやだ……ずっとずっと傍にいて。おにいちゃんもセラも、イリヤをおいていけないで）

それは初めて両親がそろって家を空けたとき、イリヤの胸の内を渦巻いた心の声。むしろそれ以上に伝わってくるのは、家族の不在という喪失感と不安、そして寂しいという感覚。小学校へ上がる前であったから、昼間は兄も学校へ行ってしまう、セラもどこかへ出掛けることが多かった。リズだけが傍にいてくれたのだが、他の家族がそろっていた時よりもずっと心細い思いを抱いたものだ。

「どうしてあのとときの気持ちが流れてくるの？ ……ここは、この部屋はいつたい何なの!？」

動揺を露わにするイリヤ。

それに少女は冷静な声をかぶせる。

「だから言ったでしょ。ここは『イリヤ』の部屋だって。イリヤが聞いたこと、知ったこと、『私』にまで届くような感情を保存しておく場所。私の唯一の外との接点」

少女は微笑んでいる。変わらぬ笑顔で。

イリヤは不意に恐ろしくなった。さつきまで気安く接していたこの少女が、当たり前前に受け入れていたこの状況が。そしてあの日常の家へと帰る方法が分からないことが。

「そんなことより、このドレスどう？ イリヤに似合うと思うんだけど」

少女はイリヤの様子を気にせず、クローゼットから一着のドレスを取り出す。少女が身につけているものに似た、白のドレス。ただ、少女のものよりもフリルやレースがふんだんに使われており、世の中の少女たちが一度は夢見るお姫様になれるような、そんなドレスだった。

だがイリヤは首を横に振った。そんなことに気をとられている場合では無い。とにかく今は少しでも少女から距離を取らなければ。

イリヤは扉へ駆け寄った。僅か数歩の距離。特に何の妨害もなくたどり着くが、扉のノブは回らず、ドンドンと叩いても開く気配はない。焦燥ばかりが増していく。

そして

「ほらやっぱり。似合うと思ったわ。だって『イリヤ』だものね」

少女が目の前にいた。イリヤは扉に背を向けていて、いつの間にか服も替わっている。

少女はイリヤの服を着ていた。イリヤにとっての普段着を、あちらの世界の象徴を。肌が色白であることを除けば、いつものイリヤとなんら変わらない格好だ。

一方でイリヤが着ているのは、少女が手に取っていたドレスだっ

た。だが着慣れぬ形式の服装は違和感でしかない。イリヤの脳裏に、ただ飾られるだけの着せ替え人形のイメージがよぎった。

「……何のつもり。私を閉じこめて、そんな格好をして」

イリヤは精一杯の虚勢を張り、少女に問いただす。嫌な予感が加速していく。

「始まったんでしよう、戦争が。アイリスファイル前任者は私の中に還ってきていないし、十年しか経っていないけれど、私の封印を解いたってことは、そういうことでしょうか？ 衛宮切嗣がアイリスファイルを教育して勝率を上げようとしたように、表装人格の教育は上手くいったわ。私はあなたを通して十分に人間性を学んだ。そして私は『機イリヤスファイル能』を把握した。——私は勝ち残る。役目を果たすために」

同じ目線の小女の瞳には、堅い意志があった。

イリヤには少女の言葉を全て理解する事はできなかった。ただ、少女が求めていた力と関係があることはなんとなく分かった。封印を解いたことでイリヤに成り代わろうとしていることも。

「あなたの役目はこれで終わりよ。本当は私の方が先に産み出されたんだけど、人間性の取得はあなたの方が先だったから、こう呼んであげる。——お疲れさまでした、お姉ちゃん」

少女の唇がイリヤの頬に触れる。それは少女が学んだ愛情表現。アイリがイリヤや兄にする親愛の表れ。

少女が扉を開ける。イリヤは動かない。否、動けない。

彼女は行くだろう。この石の古城を出て、雪原を抜け、夢の通り路を通り、イリヤの日常へ。

（だめ、……それは絶対にだめ！ 誰か、誰かこの子を止めて——）

イリヤの無音の悲鳴がむなしく霧散する中、それは届いた。
ドゴゴoooooooooooooo。

振動を伴う轟音。扉を出ようとした白の少女も怪訝に眉を寄せる。

轟音は一発では治まらず、断続的に続く。そして音と振動の様子からして徐々に近づいてきているようだ。

「侵入者？ あの不ぎけた礼装とのパスは遮断してあるはずだし、

「いったい誰が……」

少女のつぶやきは中断される。今まさに一際激しい破碎音とともに、扉のすぐ隣の壁が破壊されたからだ。

細かい塵が舞う中、奥から顔を出したのは――

「やつほー、イリヤ大丈夫？ こっちの『イリヤ』もこんにちは」

アインツベルン家のハウスメイドであるリズだった。

「リズ！ どうしてここに!? っていうかすごいギリギリだったんだけど！ あともうちよつとで破片の下敷きだったんだけど！」

「結果的に大丈夫そう。だから問題なし」

「おおありだよ！」

普段との変わらないリズとの会話。さっきまでの緊迫した空気が嘘のようである。

ちなみにリズの服装はこの空間に全く似合わない、いつものだらけた格好であった。ショートパンツに伸縮性のあるタンクトップ。見ているだけでこちらが寒くなってきそうな格好である。もつとも手に持っていたのは、張りぼてだとしても振り回すの大変そうなゴツイ戦斧^{ハルバート}だったが。

「階層構造はいじってあったはずだけど、よくこんな短時間でここまで来れたわね。リーゼリット。」

――付属品の分際で私の邪魔をするつもり？」

「イリヤが呼んだから来れた。――イリヤを消させはしない。例え『イリヤ』の望みだとしても」

その言葉に空間がピシリと凍った。少女――『イリヤ』から発せられる怒気が空間を侵し、空気が軋んでゆく。その中でリズは静かに戦斧を構えた。

そして背に庇っているイリヤに小声で告げる。

「私がこの子を押さえる。イリヤは探して。『イリヤスフィール』の核となる杯を」

「え？ サカズキってなんで？ 見つけてどうすればいいの？」

「願えばいい。イリヤが望むように。――さあ行って」

リズは戸惑うイリヤの背を押す。既に気配は臨戦態勢だ。

「う、うん。その子、死なせないでねっ」

イリヤはそんな言葉を残し、穴の空いた壁に飛び込んだ。

リズの心配をしなかったわけではない。だがイリヤの服を着た無手の女の子と物騒な斧を持ったメイドでは、後者の方に勝負の軍配が上がっただけ。前者がイリヤにとつて危険なことはいいとい。

穴の先はどこに繋がるかも分からない廊下だった。燭台には小さな種火が瞬いているだけで足下もよく見通すことができない。

直後、轟音が背後から飛ぶ。慌てて振り返るがそこにはただ廊下の一部があるのみ。

ぽつんと独りになったイリヤだったが、頭を振りかぶると、意を決して薄闇の中を駆けだした。

粉碎の意を込められた魔力塊が、冷涼な大気を焦がす。

触ればただでは済まされない破壊の光。それが常人では視認が困難な速度を伴い、金属線で編まれた鳥から次々と発射される。

広々とした空間に響くは破碎音の狂騒曲。それを伴奏として舞うは戦斧ハルバートを自在に操る白銀の女。戦斧の重量を感じさせない身のこなしは余裕に満ち、淡々と舞踊を継続させる。その終わりの見えない演目から透けて見える意図に、楽曲の指揮者たる少女はいらだちを募らせた。

「……舐めた真似をしてくれるわね、リーゼリット。何が『死なせないで』よ。私はあの子の全てを奪うつもりなの？ 随分とおめでたいオツムをしているようね！」

「それは平和な世界で生きてきた証拠。人の命を尊重する、イリヤの優しさ！」

「ただの弱体化よ！ そんなので聖杯戦争は生き残れないわ！」

少女は魔術で形成された鳥を操作し魔力砲を放つ。数は三。左右と上方向から強襲させる。軌道を捻じ曲げた同時攻撃。だが、戦闘能力を特化させたホームンクルスは測ったかのようにそれらを避け、あるいは戦斧を盾として弾き飛ばす。

そして少女が砲撃の術式に魔力を供給する間に、リーゼリットは戦斧を振りかぶる。狙いは魔術を行使する少女——『イリヤ』。十分に溜めをとり、一言『イリヤ』に声をかける。

「右斜め下」

「……ッ」

『イリヤ』は左後ろへ跳んだ。目の前の空間を質量ある鉄の塊が切り裂いていく。

床に敷き詰められた石板が粉々となりその威力を示す。鋭く欠けた破片が向かってくるが、『イリヤ』の展開する防壁はその程度なら十分防ぐことができる。

それさえリーゼリットの思惑の内と思うと、自然、苦いものを囁ん

だ表情にもなった。

「……本当に舐められたものだわ」

場所は玄関ホールへと移動していた。

戦いが始まって早々、私室を荒らされるのを忌避した『イリヤ』が階層を操作したのだ。そうして錬金術の大家アインツベルンらしく金属線から戦闘術式を乗せた魔鳥を生み出し、いいところで邪魔をしてくれたリーゼリットに制裁を下そうとしたのである。

だが相手は来る聖杯戦争のため、サーヴァントとも戦えるほど戦闘能力を備えたホームンクルス。膂力だけで言えば下手に召喚された英霊にも優る。

『イリヤ』にとって聖杯戦争の初戦ともいえる戦いの相手が護衛役のアインツベルンのメイドなのは皮肉すぎる状況なのだが、これから共に聖杯戦争を駆け抜ける侍従と想っていたリーゼリットの裏切りともとれる行為は、『イリヤ』をいたく刺激するものだった。

本来ならば、直接手出しできないよう階層を操作し、リーゼリットを無限回廊にでも閉じこめるべきだった。その間に『聖杯』を隠し、イリヤをこの城に幽閉してしまえば、晴れて聖杯戦争へと臨むことができたのだ。

だが『イリヤ』の胸の内に沸いた感情が、リーゼリットと直接相対することを選んだ。理屈では無く、人間的な感情が『イリヤ』を動かしたのだ。

はじめは魔術で創り出した鳥一羽で十分リーゼリットを相手取ることができると思っていた。そのかたわらで階層操作もできると高をくくっていた。

しかし状況は戦斧を持つホームンクルスが優勢だった。

魔鳥による砲撃はことごとく躲かれ、戦斧で弾かれ、爪や嘴による牽制でさえ人外の膂力によって振り回される戦斧に阻まれ機能せず。また重量に加え対魔術の施された戦斧の一撃は、魔鳥の防壁を軽々突破した。盾となり得るものが無いのであれば——あとは『イリヤ』自身が避けるしかない。

あのようなモノで身を斬られ、潰されるのは、『痛いこと』だと知っ

ているが故に。

(これが実戦……)

『イリヤ』は思う。いくら内部で習熟を重ねようと、所詮は空想の域を出ないのだと。

この空間は現実と同じ物理法則を敷いている。実際の戦闘の場は現実なのだ。同じ環境で動くことができなければ話にならない。だからこそ『イリヤ』の魔術回路も身体能力も現実に即して構成されている。

だが『イリヤスファイナル聖杯』に詰め込まれた知識と記録から仮想の敵を構築し、対戦の訓練を積もうと、実際の敵は予測の上を行く。砲撃のタイミングをランダムにしようと、魔鳥の突撃のパターンを変更しようと、リーゼリットは持ち前の瞬発力と膂力で全て対処してしまう。頭を振り絞った『イリヤ』の攻撃を淡々と弾き、いなし、その意図的に手を抜いた攻勢をゆるめることは無い。

『イリヤ』が戦い続けていられるのは偏に、相手に自分を殺す気はなく、ただイリヤの妨害をさせないためだけに戦斧を振るっているからだ。

「甘いわねリーゼリット。イリヤの味方のくせに、イリヤの敵を殺さないなんて」

「私に『イリヤ』は殺せない。それにイリヤだけの味方でも無い」
「ウソ。イリヤが『イリヤスファイナル聖杯』にたどり着いたならこう願うわ。私を消して力だけ欲しいってね。当たり前よ。自分に成り代わろうとした相手をどうして排除しないでいられるかしら？ 私はいんツベルンの悲願達成の為にここで消える訳にはいかないの！」

そう啖呵をきった『イリヤ』は、リーゼリット主導の膠着した戦況を打破するために、もう一体の鳥を編み上げる。負荷は今までの倍になるが、意志を集中させ耐えた。

このままズルズルと戦闘を長引かせてしまえば、イリヤが目的の部屋に到達してしまうのかもしれない。ならば全身の魔力回路が軋もうとも、多少の無茶は受容すべきだ。

そしてアインツベルンの悲願のためにと、加減していた砲撃出力の

リミッターを解く。リーゼリットは『イリヤスフィール聖杯』を完成に導くための付属礼装。聖杯戦争の最後になくってはならない存在。だから今ここで殺すわけには行かないのだが――

「多少、手足がちぎれたところで問題は無いでしょ。ここは精神世界なんだから。機能の方に問題が出たら、あとで調整してあげるわ」

二羽目の魔鳥をサポートとし、さつきまでの二倍の手数でリーゼリットを押しとどめる。そしてその間に更にもう一羽、追加で魔鳥を造り上げる。編み込んだ術式は魔力砲の発射のみ。飛行能力が無い代わりに魔力蓄積量が多く、先の二羽とは比べものにならない砲撃を撃つことができる。あの戦斧に込められた対魔術でさえ受容できない出力だ。

リーゼリットさえ行動不能にしまえば、あとは思考一つでどうとでもなる。

『イリヤ』の口元に自然と笑みが浮かんだ。

悲鳴を上げる魔術回路と三羽同時操作という怒濤の並行思考量に沸騰する頭。

それでも勝利の道は確定している。これで決着がつく。

リーゼリットの足も魔鳥二羽の猛攻によって止まっていた。

（目標、照準固定。魔力チャージ完了まであと数秒。私の勝ちよ――
――リーゼリット！）

最後の一撃が発射されようとした、その瞬間――
「ストローパープ！」

場違いな声が響きわたった。それと同時に展開していた全ての術式が強制的に解除され、蓄積された魔力も無害な光となって霧散する。

戦闘の高揚が冷めやらぬ中、『イリヤ』とリズはそろってその声の方向を向いた。響いた声は『イリヤ』そっくりの少女の声。そもそこの世界に存在する人間はあと一人しかない。

「……イリヤ」

気が抜けた吐息と共に零したのは誰だったか。

眩い黄金の杯を掲げたイリヤは酷い有り様だった。白のドレスは

どこで引つ掛け転んだか千切れかけた箇所がところどころあり全体的に薄汚れていた。華奢でヒールもあつた靴は脱ぎ捨てたようで、裸足の足には石畳による細かい傷が走っている。

疲労困憊、足も痛むだろう。しかし息も切れ切れになれながらもイリヤは顔を上げ、ふにやりと笑った。

「と、とりあえず、戦うのはやめようね。なんか色々危ないし」

「イリヤ、ナイスタイミング」

あくまで表情を変えず親指をたてるリーゼリット。それと対照的に『イリヤ』はその場にふっと座り込んだ。

「……幸運値が高いのかしらね。あともう少しだったのに」

身体は無茶が祟ってすぐには動けない。そしてこの世界の権限を行使する器はイリヤの手にある。

少女は全てを受け入れる罪人のように頭を垂れた。

今更どう足掻こうと、聖杯はイリヤの意志に従う。だから『イリヤ』はもうお終いなのだ。

「さつさと願いなさいよ。私を消して、自分が『イリヤスフィール』として生きていくんだって。……その代わり全部背負ってよね」

「え？……背負うって何を？」

リーゼリットに身繕いされ、戸惑いを浮かべる様子は何も分かっていない子供のそれだ。『イリヤ』の存在理由も、消失の意味さえ理解していない、ただの子供。

「ソレを持っていることは、イリヤも見たのでしよう？ ソレを置いていたのは廃棄所。成果に値しなかった『ホムンクルス』^{わたしたち}が打ち捨てられ、サンプルとしてただ沈んでいる墓場よ」

千年続くアインツベルンの研究成果、全ての犠牲の上に成り立つ『^{イリヤスフィール}聖杯』。墓標としてこれほど相応しいものは無い。

「確か、プールみたいなどころになんか沈んでいたけど……。あれって人形とかじゃなくて……。まさか」

イリヤの表情が堅く強ばる。

そこは光源が自ら輝く杯しか無い部屋だった。薄暗い水に満たされた部屋の中央、祭壇のような場所に黄金の杯は静かに佇んでいた。

入り口から延びた一筋の通路を進み行く際、左右の水面下で微かに見えた輪郭まさしく――

『イリヤスフィール』はアインツベルンの悲願を全て背負わなければならぬ。その為に支払った時間と犠牲、その対価を手にしなければならぬ。それが『イリヤスフィール』の存在理由。『イリヤ』が行うべき生まれ持った役割」

「なに、それ……。私はそんなの知らない。私はただ、普通に生きて――」

「あなたはそれでよかったのよ。それがあなたの役割だったから。ただの人間として生き、人の営みを、感情を、『痛み』を私に伝える表装人格。だから、知る必要も背負う必要も無かった。けれど――」
表装人格は反抗してきた。

リーゼリットを味方につけ、『イリヤスフィール聖杯』を手に入れ、今まさに『イリヤ』の前に立ちはだかっている。聖杯戦争の前哨戦の相手がイリヤとリーゼリット味方、さらにそれにさえ負けるとは運命の皮肉としか言いようがない。

「……無駄にしないでよね。私が積んだ研鑽と努力。たぶんあなたが願えば全部継承できるはずよ。せいぜい頑張って勝ち残りなさい」

少女は微笑む。精一杯の強がり。それでもこれが最期だと思おうと、つい奥底の本音がこぼれた。

「――私にはそれしか無かったから。それをまた無かったことになんて、しないで」

静かに目を閉じる少女。それにイリヤは――
バツチーン！

思いつきり、頬をひっぱたいた。

「おっもー……い!!!」

イリヤの渾身の叫びがホールいっぱい木霊した。

「えっ？ あ？ えっ？」

ジンジン痛む頬を押さえながら、少女は目を白黒させる。

「いきなりそんなこと言われてもよくわかんないし！ 表装人格とかホムンクルスとかアインツベルンの悲願とか、なんか色々突っ込んだ

らキリがないけど、とりあえず！ 私は！ あなたの力を借りたいだけなの！ 仲良くなりたいの！」

「……は？」

言った勢いのままにイリヤは自分そっくりの少女の手を握る。

少女は意味が飲み込めないというように、リーゼリットに助け船を求めた。

常時無表情なリーゼリットは彼女にしては珍しく、淡い笑みを浮かべて言った。

「イリヤは『イリヤ』の消失を望まない。そんな発想もない。他人を殺してまで力を奪おうとは考えない」

「……私は『イリヤ』よ？ 他人じゃないわ」

「それでもちゃんと独立した意識がある。歩んできた道のりがある。ならイリヤにとっては尊重すべき他人」

「……」

アインツベルンの歴史の中で、命は、魂は、余りに軽いものだった。少しでも欠陥があれば廃棄された。利用できる部分があれば容赦なく摘出され、次の素体に移植された。力とは奪うものだった。与えられるものだった。

だから『イリヤ』は思ったのだ。今度は自分が奪われる番だと。しかし。

「……リズはああ言ってるけど、別にそんな大したこと言ってる訳じゃないからね。普通だよ、普通。初対面の子に対して、そんな殺すとか消してやるとか普通思わないよ」

イリヤは気負い無く語りかける。それが本心からの言葉故に。

「あなたを閉じこめて、あなたに成り代わろうとしたの？」

「それに関しては、説明もなしにいきなりだったし、理不尽ですごく嫌だと思っただけけど……こんなしおらしい姿を見ると、もう怒りも沸いてこないというか。ちゃんと話してくれば平和的に解決するような気もするよ」

のほほんと告げるイリヤ。あまりの価値観の温度差に、『イリヤ』は頭が痛くなつて来た。

イリヤから流れてくる知識で、一般人の平和的思考というものは分かっていたつもりだったが、これは酷い。あまりに楽観的すぎる。

「……馬鹿ね」

「むー、馬鹿じゃないもん。私なりに考えた結果だよ」

そうやってむくれる様子が、既に緊張感を無くしていることに気付いているのかいないのか。今後自分が消えた後で、このお気楽で詰めの甘いお子様が、苛烈極まりない聖杯戦争に勝つことができるか『イリヤ』は不安になった。

(……やっぱり私がしつかりしていないとダメかも)

『イリヤ』にとつて表装^{イリヤ}人格は、己がアイリスフィールによって封じられ、表から隠された後に生まれた妹のようなもの。先刻は茶目つ気を出してお姉ちゃんと呼んでみたものの、やはりこの頼りない感じでは自分の庇護の下へおくのが正解なようだ。

『イリヤ』は背後の護衛役のメイドに視線を合わせた。リーゼリットはこの結果を予想していたのだろう。イリヤだけの味方だけでも無い、というのは嘘ではなかったようだ。

「リーゼリット、現段階で顕現を確認されているサーヴァントは何騎かしら？ 選ばれたマスターたちの動向は？」

聖杯戦争で生き残るためには、己が表へ出ることが必要だ。その交渉の材料として現状を把握しなければならぬ。なにせ『^{イリヤ}聖杯』を持っているのはイリヤであり、イリヤの了承が無ければ、『イリヤ』が身体を操作することは不可能だからだ。

だが、リーゼリットは僅かに目を見張った後、首を横に振った。

「……戦争は始まらない。前回から十年が経過したばかり。アイリスフィールが封印を解いたのは……あれ？ なんてだろう？」

首をかしげるリーゼリット。それに続いたのは慌てた様子の子のイリヤだった。

「えーっと、あの、封印を解いてもらったのは、私からお願ひしたからなの。ちよつと失敗しちゃったことがあって、それで次は失敗しないように力を借りたいっていうか……」

しどろもどろに説明するイリヤはちらちらとリーゼリットを窺っ

ている。

(……あのことはリーゼリットには秘密にしているのね)

最近になって、魔術世界の厄介ごとに巻き込まれたのは知っている。だが、『イリヤ』が分かるのは知識としてインプットされたことと、特に激しい感情の動きのみ。イリヤがきちんと理解していないことは把握できない。

もつとも。

「……私のこと、二回も使ったくせに」

「え？ いま何か言った？」

怪訝になるイリヤを、何でもないと誤魔化す。

過去二回あった封印の解放。どうしようもない状況での祈りは『イリヤスフィール聖杯』への扉をこじ開け、その望みを叶えるために『イリヤ』は機能として使われた。そこに『イリヤ』の意志は無い。ただ、自動的に最適な結果を実行しただけだった。

だからこそ今回は願う暇を与えず、暗示をかけて城に引き入れたのだ。リーゼリットの邪魔さえなければ、完全に『イリヤスフィール聖杯』へのアクセスを制限できたはずである。

無論、イリヤがそれを手に入れた今では詮無きことだが。

こうして正面からこちらの意志を確かめるあたり、問答無用で使われることは無いということか。

「私の出番では無いけれど、力を貸して欲しいってことね。アイリスフィールも思い切ったことをするわ。最初の封印だって、隠蔽のための物じゃなかったのかしら……。まあ、いいわ。協力してあげる」

聖杯戦争が始まったわけではないのなら、そんなに緊迫した状況でもないのだろう。だがイリヤが厄介事に足を突っ込んでいることは違いない。ならば、この周りに流されやすい可愛い妹分をフォローしてあげるのもまた一興だ。

『イリヤ』からの色良い返事に、イリヤは抱き付いた。

「ほんとー。ありがとうー」

その子供特有の高い体温に、『イリヤ』は戸惑う。そういえばこうして誰かと触れ合うことなど、この世界が構築されてからは今日が初め

てだった。

「あなたも『イリヤ』なんだよね。私の中にいた、もう一人の『イリヤ^私』
「ええ、そうよ。ある目的のために、ずっとあなたの中にいた『イリヤ』
よ。今はその時ではないから、手を貸してあげるわ」

「うん。よろしく『イリヤ』。……なんか自分の名前を呼ぶのって、む
ずむずするね。ちよつと頭も混乱しそう。———そうだな、『シ
ロ』って呼んでいい?」

耳元で囁かれた名に『イリヤ』の機嫌は一気に下降曲線を描いた。
なんだその拾った野良の動物に付けるような安直な名は。

「私は猫? ちなみに理由は?」

「全体的に私より白くて、雪の妖精さんみたいだから!」

「後半はいいけど、主な理由はただ白いだけ……」

せめてもつとマシな名前で呼ばれたいのだけだ。

だが抱きつかれたままげんりする少女に、賛成、と手を挙げたの
は遠巻きに二人の様子を見守っていたリーゼリットだ。

「いいんじゃない? わかりやすいし。シロウと響きが似てる」

「……あ、そういえば似てるかも」

今更気がついたというイリヤの反応。少女の機嫌曲線はちよつと
した意地悪を変数として上昇し始める。

「シロウ……シロ……。シロ、ね。ああ、いいかもしれないわ。イリヤ
の大好きなお兄ちゃんと同じ響きだもの。私の名を呼ぶたびにイリ
ヤはお兄ちゃんのことを思い浮かべるのかしら? それはそれで毎
日が楽しくなるわね」

「んなー……!?!」

イリヤのよくわからない奇声と一気に上昇する体温。耳元での
絶叫^{シャウト}は耳に優しくなかったが、初めて心の底から『楽しい』と思えた
気がする。

少女は満足げに笑って宣言した。

「私のことはこれから『シロ』って呼ぶように。これからよろしく、イ
リヤ」

ペチペチと何か頬を叩いている。

柔らかい。何の素材かよくわからないが、まどろむ意識を刺激してくる。

ついで、ジリリリリと毎朝の目覚ましの音が鳴った。

「イリヤさーん。もう朝になっちゃいましたよー。私とのパスをシャツトアウトしてひと晩放置なんて鬼畜の所業ですよー。アレですか、昨晚のあのプレイの腹いせですか。けれどあのくらい対価をもらわないとこの先の契約に支障がでるといっつか……」

耳元で何やら声が聞こえるが、気に留める必要がなさそうなので無視を決め込む。さつきまで色々大変な目に遭った気がするから、もう少しゆっくり寝ていたいのだ。

そう夢とうつつの狭間に意識を揺蕩わせていると、鳴り続けていた目覚ましの音が唐突に途切れた。布団から飛び出た肌に涼しい外気が当たる。

「おお、やっと起きましたね、イリヤさん！ さつきとパスを繋げてくださいよ。イリヤさんを感じられなくて、私、ホントに寂しかったんですから！」

何か言い回しに考えてはいけない含みがあるように思えるが、目の前で展開されるルビーの挙動には嬉々とした様子が感じられる。飄々としたルビーには珍しく、わりと本気で寂しかったのかもしれない。

「おはよう、カレイドステッキ・ルビー。そして初めまして」

「……ありや？ イリヤさん？ どうしたんですか、そんなかしこまって。まるで初対面な反応……もしや？」

自分の声が挨拶しているのが聞こえる。フワフワした視界にはしっかりルビーが映りこんでいる。

……見えているけど、ちゃんと認識していない感じ。まだ夢の中にいるような。

やがて視界はルビーを外れ、部屋全体を見渡すように移動する。身

を起こしたのか、薄い掛け布団がずり落ちる感触がした。

そのままベッドを下り、カーテンと窓を開け放つ。

天気は快晴。朝の光が差し込み、爽やかな風が全身を包む。

眼下の道路では朝の早い車が通りすぎ、周囲の住宅の内外で朝の支度を始める気配がしてくる。イリヤにとってはいつも通りの朝の光景。

「青い空、暖かい陽の光に、人間の動く音と街の匂い。これがイリヤの住む世界……」

しばし外の風景を眺めていたが、くるりと踵を返すと部屋のクロ―ゼットの戸をスライドさせる。

そして自分で言うのもなんだが、うきうきした気分で学校の制服に着替え始めた。

「あのー、イリヤさん？ 顔も洗っていませんし、制服に着替えるのはちよつと早過ぎやしませんか？」

「いいのー。だって今は着てみたい気分だもの」

いそいそと制服に袖を通す様子は、初めて制服で登校した入学式の日のようだ。

「これでいいわよね」

鏡台の姿見に映るは、穂群原学園初等部の制服を着た銀髪に赤い瞳を輝かせた少女。紛れもなくイリヤ自身の姿である。

イリヤはそれを他人事のように眺めていた。

（今日の夢はやけにリアルだなー）

精神的疲労からくる眠気はまだまだイリヤの意識を朦朧とさせる。

鏡の中のイリヤが様々なポーズをしていると、

「ただいまー」

階下で玄関ドアの開く音がした。

控えめにかけられた声は兄のものに違いない。昨晩は結局、前の家に泊まることにして朝方に帰宅すると、母親であるアイリから聞いていた。

「おかえりー！ お兄ちゃんー！」

イリヤはものすごい勢いで階段を駆け下りると、居間に入ってきた

兄に抱き付いた。正面の腰にしがみつく形だが、ここまで密着したのは久しぶりな気がする。学年が上がるにつれて気恥ずかしさが優り、気軽にくつつくことは出来なくなっていたのだ。

(でも今は夢だからいいよねー。……久しぶりのお兄ちゃんの感触だー)

腕にぎゅつと力を込めて、顔を擦りよせる。かすかに石鹸の香りもするから、シャワーを浴びてきたばかりか。

「お、おう。……今日は朝から元気だな、イリヤは。何かいいことがあったか?」

「うん! お兄ちゃんを見て触って実感してみたかったの! これがお兄ちゃんの匂いなよね」

「……一応、シャワー浴びてきたんだけど、そんなに匂うか?」

若干ずれたことを言うテンションの高いイリヤに兄は苦笑いを浮かべるが、無理矢理引き剥がさないあたりその優しさが感じられる。

そのまま至福の時に浸っていたかったのだが、ここは台所に直結したりビングである。

朝の支度が完了したメイドのセラが、朝食の用意に顔を出すのも当たり前のことだ。

「朝から何をやっているのですか、二人とも!?!」

生真面目なセラがこの状況に雷を落とすことも、まあ至極当然のことであった。

「いや、これは、その、イリヤがな」

慌てて両手をあげて弁解する土郎。朝一番のセラの怒号は心臓を直撃するものがあつたようだ。ドキドキと激しく鳴る心臓をなだめようとする土郎に対し、イリヤというと――

「み、みぎやあああああー!」

そろそろ語彙録に収集できそうなくらい豊富なパターンを形成し始めた奇声を上げたのだった。

(え、えっ!?! これ夢じゃないの!?! ホントにお兄ちゃんに抱き付いて、あんなことまで言っつて?! えっ、どうしよう? いや、どうする?!)

セラの雷によつてはつきりと目が覚めたイリヤは混乱の真つただ中。思いつきり後ずさりをして離れたのはいいものの、所在のない手は無意味に上げ下げして下手なパントマイムを演じている。

「朝から乙女のスクリーンが聞こえたと思えば。おはようイリヤ、シロ。おかえり、シロウ」

そこにひよこつと現れたのは、まだパジャマ姿のリズだ。

「おはようリズ。っていうかなんで俺の名前二回も呼んだんだ？」

首をひねる士郎を置き去りに、リズはあたふたしているイリヤの手を引いて二階へと戻ろうとする。

「リーゼリット、イリヤさんを連れてどこへ？」

「朝のスクリーンはご近所迷惑。そこらへんをちよつと説教しに」

「あら、あなたにしては珍しい……では私はシロウの方を」

セラの目はがっちりとしと士郎をロックオンしている。これは日頃の細かいことについてまで言及する構えだ。

「勘弁してくれ！」

その後少しの間タバタと小規模な鬼ごっこあつたとか無かつたとか。

「少しは落ち着いた？」

リズはイリヤの部屋に入りドアを閉めると、そう声をかけた。

「う、うん。何とか。……もう恥ずかしすぎて死にそうだけど」

ベッドの縁に縋りついて顔を伏せるイリヤ。だが次の瞬間には何でもないように顔を上げる。

「でもイリヤだつてすごく嬉しそうにしていたじゃない。あのくらいのスキンシップは家族ならして当然じゃない？」

「違うもん！ 他意なく抱き付ける年齢はもう過ぎ去つちやつたの！

世間的にもう周りの目が厳しいの！ 乙女心は複雑なの！」

「……好きなら好きって言つちやえばいいのに」

「だつてお兄ちゃんは家族だもん。兄妹で恋愛はタブーなの！ ……タブーだけど」

「社会の中で生きていくための世間体ね。理解し難いわ」

以上が一人の少女から出た台詞である。まるで落語のような一人芝居に見えるが、実質二人いるのだからしょうがない。

リズはイリヤの正面に胡坐をかいて座ると単刀直入に尋ねた。

「シロがイリヤの身体を使う権限はどれくらいあるの？」

「えーっと、えっと、あれ……？」

答えに詰まるイリヤの代わりに、返答したのはもう一人の『イリヤ』だ。

「五感は共有、身体操作の主導権の割合はだいたい四対六で、イリヤの方が強いわ。イリヤが死ぬ気で頑張れば、私は引つ込むしかないわね。……できれば私も色々体験してみたいのだけど」

「だからって、お兄ちゃんにいきなり抱き付くとかは却下！ べたべたくっついてお兄ちゃんに鬱陶しい子だと思われたくないし……」

一人百面相は傍から見ている分には面白い。だが、事情の知らない者から奇異の目で見られることは必至だろう。昨夜の時点で薄々察していたことだけに、イリヤが可哀相な事態に陥らぬよう、リズはメイドとして忠言を献呈する。

「今のうちにシロと約束事を決めておくといい。境界の扉を直結したところに置いたのはイリヤの責任。シロの行動の責任はイリヤにある」

なにせシロが私室と設定した部屋の中に、イリヤの領域への象徴たる自室の扉を設置してしまったのだ。城と森と雪原を大幅にショートカットした荒業に、城主であったシロは呆れかえっていたことだろう。つまり表の身体へアクセスする際の障壁を悉く失くしてしまったのである。結果としてイリヤの意識が休んでいる時や、ボーっとしている状態では、シロの意識が容易に表へ出易くなってしまうているのだ。

「シロもこちらの世界に関してはイリヤの方がお姉さんなのだから、よくイリヤの言うことを聞くこと。あまり変な事を起こすと良からぬ輩に目を付けられる」

「はい、ようは魔術を使わなければいいんでしょ。分かってるわよ、そのくらい」

きわめて軽く返すシロに、リズは、あつ、これよく分かってないヤツだと思い、イリヤに向かつて親指を立てた。

「……イリヤ、頑張れ。ファイト」

「うん。……ガンバリマス」

おそらくは好奇心赴くままに行動を起こすであろうシロを、制止できるのはイリヤしかいない。ある意味自業自得な訳だが、ここは先達としての振る舞いを身に付けてもらわねば、シロの再封印ということもあり得る。

若干ひきつった笑みを浮かべるイリヤを尻目に、リズは立ち上がって言った。

「じゃ、私は朝の支度をするから。朝食の時間になったら降りて来て」
あとはイリヤとシロ次第。そう領き部屋を後にしたリズは、はたと立ち止まる。

(あ、……セラにはどう伝えよう)

頭の固い同僚への説明はとてつもなく面倒に思えてしまうリズであつた。

ちなみに、アイリスフィールへの説明はたったの数分で終わったとか。

「お兄ちゃん、朝ごはんできたってー」

いきなりノックもなしに開かれた扉に、士郎はビクリと肩を震わせた。

反射的に目の前の机に置いていたものを鞆の中へ突っ込む。

「おい、人の部屋に入るときはノックを忘れるなよ。いつもはちゃんとできていただろう?」

「ごめん。今度から気をつけるー」

扉から顔をのぞかせたのは、いつもに増して生き生きとしている妹だ。今も注意の言葉を飛ばしたはずなのに、それにさえニコニコと笑みを浮かべている。まあ、昨日の朝の状態を思えば、明るく元気なことはいいことだが。

「でも、セラが声かけてたのに気づかないお兄ちゃんも悪いよ。早く

しないとごはんが冷めちゃうし」

「ああ、それは確かに俺が悪いな。学校に持っていくものを用意するのに手間取っていたんだ」

士郎はそう言いながら通学鞆を掲げて見せる。本当は今日の授業で使う教科書やノートなどは既に昨日のうちに放りこんでいた。階下からの呼び声を聞き逃したのは別の理由によってである。

ふーんと鞆に視線をやったイリヤだが、何か気になるものがあつたのか、部屋の中に入り込んで来た。

「お兄ちゃん、これ、何？」

イリヤが机から摘み上げたのは、ちらちらと銀の細線が光る透明な石だ。親指くらいの大ききで、六角柱のかたちをしている。

「つと、それはな。……知人からの預かりものなんだ。なんでも……、交通安全……の御守りらしい。鞆に入れ忘れていたんだな。ありがとう、イリヤ」

士郎は何でもないように手を差し出し、イリヤからその石を受け取ると、ハンカチに包んで鞆に入れた。イリヤは石が気になったか、その一連の流れをじっと見ていた。

「なんか気になることでもあつたか？ イリヤ」

「えつと……。その御守りって、いわく憑きな物件だったりする？」

「さあ、どうだろうな。一応、水晶の一種みたいだし、天然石パワーでも宿っているんじゃないか？」

軽い調子で一般的な見解を述べる士郎。

イリヤはそれに何故か数秒唸った後、

「たぶん、それ、結構ご利益がある御守りのような気がする。いつそのこと失くしたことにしてもらっちゃえば？」

と人間関係に罅が入りそうなことを言ってきた。

「駄目に決まってるだろう。あくまで預かっているだけなんだし。お前はいつからそんな悪い子になったんだ——とりやつ」

銀の頭にお仕置きチョップを落とす。アイリスフィール直伝のチョップであり、ある程度は効き目があるように調整はしているが——
——なんと、間一髪でイリヤはそれをバックステップで避けてし

まった。

はて、いつもと同じようにやったつもりなんだが、とまたもや首をひねる羽目になった士郎に対し、イリヤは「下で待ってるよー」と捨て台詞を残し階下へと逃げていったのであった。

士郎はそれを見送り、そして。

「……危なかったー」

ふーっと大きく息を吐いた。ギシつと音を立てて椅子にもたれかかる。今頃になって冷や汗が出てきた。

（魔術関連の物を晒すなど大マヌケもいい所だ。……まったく、今の誤魔化しを続ける気なら最後まで貫き通せ。辻褄が合わなければそこから怪しまれるぞ）

（わかつてるさ。でも、この調子をずっと続けていかなきゃいけないのは——キツイな）

姿が見えない隣人は、これくらいで疲れてどうする、と呆れた表情でいるに違いない。

だがこれは、家族に対して嘘を演じることだけに対する精神的疲労ではないのだ。

考えても見て欲しい。下手な言い訳で勘付かれるようなものなら、精神的にポロポロにしてやると言わんばかりの殺気がチクチクと針の筵の如く纏わりついてくるのを。そんなプレッシャーの中でほぼいつも通りに振る舞えというのだから、疲弊してもしようがないと思うのだが。

ちなみにアーチャーは今、霊体状態の己の行動範囲がどれほどかを調査しに士郎から離れた所で監視、もとい待機している。だがカードのせいでラインが結ばれているため士郎の状況は筒抜けであり、窓からの突き刺さる視線が痛い。士郎の視力で視線の主が捉えられないのも悔しい限りだ。

気になるのであれば家の中に来ればいいものと思うのだが、ホームクルスの性能次第では霊体を感じするかもしれないという理由からアーチャーは家に立ち入ろうとはしなかった。

なんとなくだが、士郎の養母であるアイリスフィールを避けている

ような節もある。

(そら、グズグズしていないで、さつきと入れ直して下へ向かわんか。今度はメイドの雷が飛んでくるぞ)

「それはもう勘弁だ」

士郎は深呼吸を一つすると、鞆の中からさつきの石を取り出し、改めて直前に放り込んだ赤い包みを広げた。中には“Archer”と書かれたカードと魔力の詰まった鉱石がいくつか。そこに件の御守り石を加える。

魔術関係の物はとりあえず、アーチャーが投影した赤い布に包んでおけばいいらしい。

(遠坂もマメっていうか、生真面目だよな。こんなにもらっちゃっていいのかな?)

(受け取らねば彼女の気が済まなかったようだからな。なに、これらで相応の働きをすればいいだけの話だ。上手く活用すればこの借りはすぐに返すことはできる)

士郎の困惑にアーチャーは鼻で笑って答える。

返す当てがあることは結構なのだが——その言い分に士郎はやっぱり、と唇を噛んだ。

(こいつ、昨日遠坂の命を一回救ったことは勘定に入れていないんだな)

口では貸しと言いつつ、アーチャーは人を助けることに見返りを望んでいるわけでは無いと分かっていたが、礼として贈られたものを、礼として捉えていないところに、モヤモヤとしたすつきりとしめない感情が湧き上がる。

遠坂には感謝すべきかもしれない。なにせ遠坂くらいに押しが強くなければ、頑としてアーチャーはこれを受け取りもしなかっただろうから。

まあ受け取らせ方は少々ダイナミックだったが。

「お兄ちゃん、はーやーくー」

階下から催促の声がかかる。そろそろタイムアウトの時間のようだ。

「やばいやばい」

士郎は包み直した赤い包みを鞆の奥に仕舞うと、すぐにも持って出られるようにきつちり蓋をする。

「これでいいんだろう？」

そうして外にいる見えない誰かさんを一瞥すると、家族の待つ朝の食卓へと向かったのだった。

「あー、最悪」

凜の気分は最底辺を漂っていた。

起床して朝の支度に身体を動かしていても、なんら気晴らしにもならない。朝の清らかな光が眩しいくらいだ。

思い返すは昨夜の出来事。フェイカーに助け出されてからの一連の流れである。

(うっかり遠隔起爆可能な爆弾を渡そうとした相手には、あーするしかなかったのよ。それが遠坂の流儀よ。しかもバーサーカーから間一髪のところまで助けてもらっちゃっていたし)

昨日の日中は学校にも行かず、Aランクの魔術の仕込みと、とある礼装の制作のため自分の魔術工房に引き籠もっていた。頭にあっただのは対バーサーカー戦と、フェイカーへの詫びをどうするかということだった。

(簡易の物理保護障壁と一度限りのBランク防御結界の展開。あと多少の魔術補助もあるけど、アイツの属性なんか分かるわけないし。……ほとんど使い捨ての手抜き礼装だわ)

凜たち一流の魔術師を自認する者ならば、そんな下位の礼装など必要ない。礼装に頼らずとも自前の術式を展開した方が元は安いし精度も高いのである。

しかしあのやけに腕つぶしの強い三流魔術師は。

(そう、碌な防御を持っているようには見えなかったから——)

つい詫びも兼ねて戦力増強になれば、と思ったのだ。決してアイツ自身に心配したわけでは無い。これから共に強敵であるバーサーカーを打倒するため、少しでも損害を抑えるための布石として渡した

に過ぎない。

と自分に言い訳をしつつ、ならばなんと中途半端なものを作ってしまったのだらうと後悔もよぎる。あんな一日で加工して仕込めるような簡単な礼装なんかでよかったのか。ちゃんと等価交換の法則に則って借り貸しの釣り合いが取れているのか。

時間と材料を惜しまなければ、もっと上等な礼装も制作できたはずだ。

(でも、バーサーカー戦に向けての準備も力を入れなきゃいけないかつたし……アレが色々な制約の中でできる最大の譲歩だったのよね)

素材はルチルクォーツ。日本語で針水晶とも訳される鉱石で、水晶の結晶過程でルチルという鉱物が針状に形成され水晶内に取り込まれた石だ。

遠坂の宝石魔術では石の中で魔力を流転させ保存する。そのため年季が長いものや曰く憑きであるものである他に、純度と透明度の高い鉱石もよく使う。だが、罅や不純物が混入した石はそうした用途に向かず、選別後、屑石として工房の隅に放っておいてあったのだ。

(一応、状態はいいやつを選んだつもりだし、内包物が銀つていうか金属質に見えるのがアイツのイメージに合っていた……けど)

蘇るのはアイツの言葉。

腹をくくって前日の失礼な振る舞いを謝り、詫びとして用意した礼装を見せた際、フェイカーは言ったのだ。

『ああ、やっぱりアレはそうだったか。素直に謝るとは思わなかったよ。』

なに、君の家系の呪いのようなものはある筋では有名でね。私も君のような前途有望な魔術師の信頼を、こんなつまらないミスで無くしたくないと思っていたから、見て見ぬ振りという大人の対応をしたわけだが……まさか自分から恥を申告するとはな。まだまだこういう機微には疎いんだな』

思わず命の恩人相手にドロップキックを繰り出したことは間違っていない。

「……そんなの分かるか」

つまりフェイカーは凜のうつかりを許容するだけでなく、美遊やルヴィアたちの手前、凜の顔まで立ててくれていたのだ。高価な貴石だけを投げ返した時には、もう色々ばれていたわけだ。

「でもおかしいじゃない。なんでそんな、私に悪意が無かったって確信していたのよ」

フェイカーと初めて邂逅したのはたった三日前だ。それに最初からアイツを不審人物と疑ってかかっていた。第一印象は良いものであるはずが無い。

（昔、私が覚えていないだけでどこかで会っていた……？ でもアイツは一言もそんなこと言ってないし、あんな外見に特徴のある奴なんか忘れそうにないんだけど）

かき上げられた真っ白な短髪に褐色の肌。でも顔立ちはアジア系——むしろ日本人寄りの造形だ。背はだいぶ高い方だが、男子の成長期は人によって様々で数年で見違えるほど伸びていたりもするので、あまり手掛かりにしない方がいいかもしれない。

歳は二十代半ばか——戦闘での貫禄が板についているから、それ以上にも見える。

しかし、いくら記憶をひっくり返しても該当する人物は出て来ない。もしかしたらの可能性の一つとして、物心つく前に父親の縁で会ったことがあるかもだが。

「ということ、お母様は心当たりありますか？ 白髪褐色肌の三流魔術師に」

凜は昨夜の流れを大まかに説明すると、真剣に耳を傾けてくれた葵に尋ねた。

場所はリビングの朝食の席。食後の紅茶を頂いていた時である。

「残念ながら思い当たる人物はいないわ。時臣さんの繋がりでもそんな人いたかどうか」

口元に手をあて眉を寄せる葵。その様子ではこの推測は無意味なようだ。

「はあー。いったいどこの誰なのよ、アイツは」

大仰に溜息をつく。この点に関しては謎が謎を呼び、いつまでたつてもフェイカーは怪しい人物のままだ。

「あらあら凜ったら、赤毛の男の子を追っていると思つたら、今度はそのフェイカーさんに夢中なのね。いいわよ。若いうちは色んな経験をしておけばいいわ。どんな経験もいずれは宝石みたいな思い出になるんだから」

「——は？」

突然あさつての方向に舵をきつた葵。そのニュアンスにはつまり、凜がフェイカーに——

「んなわけあるか！ いや、絶対ない！ そう有り得ない！」

「でもあれだけ言われたのに、結局、用意しておいた礼装は渡したのでしよう？ 彼を心配して」

「あれは、心配したわけじゃなくて、ただ単に借りを一つ返したただけです！」

即座の切り返しにも、葵はぽかぽかと笑っているだけである。

（だから、ホントにアイツに関しては……なんていうか違うのよ）

赤毛の男子生徒に向ける気持ちは、憧憬に似た綺麗なもの。断じてフェイカーみたいに、いちいち苛ついてこんなにも感情が引つ掻き回されるようなものではない。

「フェイカーはただの協力者！ それ以上でも以下でもないわ！」

そう、だから葵の思い描いているようなものではないのだ。

フェイカーを気にするのは任務達成で損害を出さないため。イリヤはおそらく参加しないと思うが、美遊という子供も巻き込んでしまっているから、安全性の確保は重要なのだ。

（フェイカーは協力者。前回の詫びはアイツが茶化して流したからチャラ。バーサーカーから助けてもらった借りは、礼装を押し付けたからイーブン。

アイツの正体は分からずじまいだけど、とりあえず向こうからの信頼はあると）

整理は付いた。モヤモヤした気持ちを引き摺ってもしようがない。準備は万端にしなければいけないのだから。

凛は葵に声をかけて居間を出ると、まっすぐに地下の工房へ向かった。

「じゃあ行ってらっしゃい、シロウ」

「行ってきます、アイ……母さんも気をつけて」

笑顔というのはどうしてこう単純かつ、こんなにも色々な意味を内包できるのだろうか。

動物が笑う行為は、実は威嚇行動の表れとも言うが、人の微笑みにもただ喜びを表していると思えば寂しさを滲ませたり、妙な圧迫感を与えたりと中々に奥が深い。

学校へと登校する士郎に、しばしの別れの言葉をかけたアイリの表情はまさにそれだった。

（母さんって呼ぶのはなんか、照れくさいんだけど）

とても今年十七になる息子がいるように見えない母親なのである。整った容姿に下手すれば十代でも通りそうな若々しさを備える女性を、人前で母さんと呼ぶのも中々勇気のいることだと思う。

（あれには逆らえないんだよな）

小さい頃からアイリが怒鳴ったり声を荒げたりする姿を見たことはない。いつも笑っているのが常であり、その笑顔に込められた機微を察することが、ある意味アイリとのコミュニケーションでもあった。

「……母さんもすぐに戻らなきゃいけないんだよな。そんなに仕事、大変なのか？」

「ええ、ちよつとね。切嗣も向こうで頑張っているし、次は切嗣と二人で帰って来れるよう私も頑張らないと」

口ではそう言いつつも、それがいつになるか予想ができないほど状況は大変らしい。一緒にいられる時間が少なくなってしまうことへの申し訳なさが、笑顔の裏に透けて見えた。

しかし、今日はいつものそれと、あと少し違った要素も見える。

「昨日今日でなんかいいことでもあったのか？」

士郎が尋ねると、アイリは少し目を見張り、そして小さくポツリと零した。

「……子供たちの成長って、親にとっては何にも代え難いものなのよ
ね。シロウもイリヤも少し見ない内に立派になつて——ちよつ
と安心したの。もう私たちが手を引かなくても、自分の足で進んでい
けるんだって」

最近では親らしいことは何もできていないけど、と続けたアイリは両
腕を士郎の肩に回す。その柔らかな抱擁は子の自立を喜びながらも、
その温もりを惜しんでいるように思えた。

士郎は顔を赤くしながらも、振り払いはしなかった。危険な戦いに
身を投じているアイリにとってこの時間が何よりも大切なものだと、
分かったから。

だからこそ士郎は言う。これはある意味自分に向けての宣言だ。
両親と共に家族を守るといふ決意を確固とするための。

「母さん。俺も頑張るよ。いつか絶対、母さんや切嗣……親父に追い
ついてみせる」

アイリが顔を上げる。見開いた眼はイリヤと同じ鮮やかな赤。

今も昔も変わらぬ、大切な色。

「……家族だからさ。降り懸かる困難にはみんな立ち向かわない
と」

今はまだ未熟だけど、少しでも両親の負担を減らせるのなら。

そのための艱難辛苦はどんなものでも乗り越えてみせる。

「あらあら嬉しいことを言ってくれるわね、シロウ。ほんと男の子の
成長ってあつと言う間ね。えつとこういうのは男子刮目して見よつ
て言うのかしら？」

士郎の宣言に破顔したアイリは、嬉しさのあまりギュウギュウと身
体を締め付けてきた。

(うああああああ)

現時点で士郎とアイリの身長差は約十センチ。頬に当たる銀髪か
ら香る匂いと自身の胸板に押し付けられる柔らかな感触、それに加え
て昨日の魔術修行で負った傷からの痛みで内心は悲鳴の嵐だ。

「アイリさん、ちよ、そろそろ時間だから、その、離してもらえませ
んか」

しどろもどろに声をかける士郎に構わず、アイリはこころゆくまでその抱擁を緩めない。

今朝のイリヤの突撃にも耐えた士郎だったが、流石に普段の態度を取り繕うにも限界が迫っていた。

しかも地味に背後からの追撃が痛い。視線の主は言うまでもないだろう。

そんな生暖かい目でじろじろ見るな、と背中でサインを出していると、ふいにアイリが士郎の背後に目をやり、軽く手を振った。まるで誰かに挨拶をするように。

(―――っ)

ぱたりと視線が途切れた。

士郎はまさかと思いつつ、一応、アイリの脈絡の無い行動の意図を訊いてみる。

アイリはまったく邪気のない笑顔で答えてくれた。

「ふふ、誰かが優しく見守ってくれているように感じたの。だから挨拶を、と思ったのだけど……気のせいだったかしら？」

士郎はその返答に額からだらだらと汗が落ちるように感じた。

(アイリさんの直感レベル……やばい)

慌ててアイリの腕から身をひくと、たいして乱れてもない衣服を整え門扉に手をかける。

「じゃあ、俺、行くから。アイリさんもじいさんも気をつけて。ホント、無理はしないように」

「ええ。シロウも。あとイリヤのこともよろしくね」

士郎はそれに力強く頷くと、自転車で一気に駆けだしたのだった。

午前の授業終了の鐘が鳴った。

教室は昼休みの喧噪に移行するが、ある一角はやけに静かなままだ。

「おい、衛宮はいるか」

一人の男子生徒が教室の入り口で声を上げた。他クラスの生徒だろう。教室を見回し、目的の赤い頭を見つけて眉をひそめる。

「昼休みは始まったばかりだっていうのに、もう昼寝かよ」

元々不機嫌な様子がさらに下降する。それを見た近くに座るクラスメイトはやれやれと話しかけた。

「前の葛木先生の授業が自習だったんですよお。生徒の半分くらいは外に遊びに出ちまいました。衛宮のやつは真面目でねえ。ほら、英語の単語帳を握ったまま寝ちまつてるでしょう。ちゃんと勉強する意欲は合ったみてえだけど、とにかく疲れてたみたいで」

またどこぞの時代劇の番組に影響を受けたであろうフォローに、しかし男子生徒はどうでもいいとしかめっ面のまま目的の人物へ向かった。

「そんなの僕が知るかよ。……おい起きろよ、衛宮」

バンツと大きな音が響く。発生源は机の天板。音は当然うつ伏せで寝ていた者の直下で弾け、その局地的な人災に被害者は即飛び起きた。

「うわっ、な、なんだ!？」

「おはよう、衛宮。学校で悠々昼寝とはいいご身分だな。そのアホ面、いつまで晒してるんだよ」

確かにその起き抜けの顔はなんとも形容しづらいものであった。

熟睡のところを叩き起された生徒——衛宮士郎は、顔に手をやりなんとか体裁を整えると、その加害者を見てもう一度瞼をこすった。

「……教室で会うのは初めてかもな。桜のことでまたなんか用か？」

慎二

士郎を乱暴に起こした男子生徒の名は間桐慎二。部活の後輩である間桐桜の兄である。

同じ学年ではあるもののクラスが違うせいであまり顔を合わせることは無い人物だ。たまに会うとすれば大抵は部活の前後、桜と一緒にいるときくらいだろう。

「今日は、桜は関係ない。——頼まれごとだよ、これを衛宮に渡せってな」

慎二が雑に放ってきたのは手に収まるくらいの小さな紙袋だった。

士郎が中身を確認すると、装飾的な十字架が彫られたガラス製の小瓶が出てきた。中に透明な液体が入っているのが透けて見える。

「なんだこれ？」

見覚えのない品に疑問符が浮かぶ。目で問いかけるが、慎二は大きさに肩をあげただけだ。

「それ、保健室の折手死亜先生からだよ。僕は渡せって言われただけ」
実に嫌そうな声色で慎二は告げる。

「どうやら慎二も折手死亜先生を苦手としているようだ。」

(……いや違うな。苦手というか、寧ろ毛嫌いしているような)

慎二が特定の一人を嫌うなど珍しい。いつもは万人に対し当たり障り無い人付き合いをして広い交友関係を持つっていると、桜から聞いていた。

ちなみに士郎は慎二に嫌われている珍しい部類の一人であったりする。嫌われているのに何故か絡んでくるのだから、慎二の性格にはまだまだ首を捻ることが多い。

(嫌いななら断ればよかったものを)

しかしあの折手死亜先生の性格から鑑みて、何か弱みでも握られているのかもしれない。あの可憐で物騒な先生は、何をしでかすか予想もつかないところが怖いのだ。

慎二経由で渡されたこの小瓶の中身も、どんなものか想像できないから、つい敬遠してしまう。

士郎の様子を見た慎二は、大袈裟にため息を一つ吐くとずいっと身を寄せてきた。

(……いや、ちよつと顔が近くないか。そしてなんか怖いぞ)

「なあ衛宮。いいか、よく聞けよ。この僕がつ、わざわざつ、このためだけにお前のところに来てやったんだ。他に有意義に時間を使うところを、わざわざな。なんであれ僕の時間と労力を削って届けたんだから、捨てたり無駄になんかしたら許さないからな」

「お、おう。わかった、無駄にはしない」

慎二の勢いに負けて、士郎は頷く。

それを確認した慎二は何故か舌打ちを一つ鳴らすと、

「今日の保健室は閉店らしいからな、変なところでぶっ倒れるなよ。周りにいい迷惑だ」

と言いつつ、教室から出て行った。

突発的な強風に見舞われた後のような余韻の中、士郎は呆然と胸中で呟く。

(……最後のアレ、心配してくれたってことかな)

(さあな。深読みすればそういう解釈もできなくもないが……)

返ってきたアーチャー見解には珍しく、皮肉の色が無い。少々困惑しているような気さえある。

(あの男子生徒とは仲がいいのか?)

(慎二と? どうだろう、一方的に嫌われてる感じだし……まあ、腐れ縁ってやつかな。何かとアイツの妹の桜といると絡んでくるんだ。桜は部活の後輩だから、一緒にいる時間が多いのはしょうがないと思うんだけど)

(——あの保健医との関係は)

(折手死亜先生とはただの生徒と先生ってだけじゃないか? まあ嫌々ながら頼みごとを断れなかったことは、何かしらの弱点を握られているかもな)

(そうか)

アーチャーはそれつきり押し黙ってしまった。

士郎はアーチャーの態度に引つ掛かりを覚えつつ、今日の昼休みも昨日の続きで生徒会室にて備品の修理があったことを思い出す。

(危ない危ない。……起こしてくれた慎二に感謝だな、こりや)

慎二が来なかつたら、昼休みを寝過ぎすことになっていたかもしれない。

士郎は教室を飛び出し生徒会室へと急ぐ。

その道中で士郎はアーチャーにあの紙袋の中身を聞いてみた。

保健室の先生からの贈り物なのだから、薬には違いないのだろうが、士郎には飲み薬なのか塗り薬なのかも、効能も何もかもさっぱり見当がつかなかったのだ。

(アーチャー、お前はアレが何か知っているか?)

昨日保健室に運ばれた際に、アーチャーは折手死亜先生と対面していたかもしれない。そこでこの小瓶の中身に関することを本人から聞いていたのかもしれないのだ。

もつとも、そうであつたら何故今まで話してくれなかつたのか、という疑問も浮かぶのだが。

しばらくの沈黙の後、アーチャーは言った。

(アレは今晚、寝る前に飲むのが適切だろう。いわゆる疲労回復薬だ。なに、効果のほどは保証しよう。昨日も世話になつたからな)

脳裏にはアーチャーの清々しい笑顔が見える。

なぜか薄ら寒く感じられるほどのイイ顔であつたが、昨日の夕方から調子が良かったはこの薬のおかげかと得心のいつた士郎は、同じく清々しい笑みを浮かべるとアーチャーに向かつてこう返した。

(……学校を休んでいても、こうして薬をくれるなんて、意外と面倒見のいい先生なんだな、折手死亜先生って)

(……………ああ、そうかもな)

もつとも彼女の面倒を見る方法は悪趣味でえげつないが。

アーチャーはその後によく言葉を飲み込んだ。

あの保健医を好意的に見る士郎に対し、わざわざ非情な現実を今突きつけることもしなくとも良いだろう、という配慮である。いずれあの保健医の性癖は知るところとなる。ならば直に対面したほうが受け止めやすからう。

それゆえアーチャーは口を噤んだのである。

まあ士郎の曇りない純真な笑みが、色々と屈折した身には少々眩しかったというのもあるが。

(世の中には知らない方が幸せなことも、多々ある)

つい昨日のアレを思い出してしまい、眉間の皺がしばし取れなくなったアーチャーはそう、強く思ったのだった。

(……しかし、間桐慎二とカレン・オルテンシアか。この学園以外に何か繋がりがあるのか?)

閑散とした階段の踊り場。

人の喧騒から遠い、がらんとした縦長の空間で、少年は苛立たしげに腕を壁に打ち付ける。

「くそっ、なんで衛宮なんだよ。あのお人好しめ」

その呟きは誰にも拾われずに、ただ宙に拡散して消えていった。

緑の蔭が次々と流れて行く。木々の間から差し込む陽光が、尾を引いて遠ざかる。

それは人の駆ける速度より速く、むしろ獣の速度と言っても遜色は無い。

苔むす岩と生い茂る雑木。枯れ葉の堆積した黒の土。山奥の空気は初夏の陽気を感じさせない。

風を切る。巖の段差を飛び越える。だがそれに反して振動はほとんど感じることはない。

身を案じて極力揺らさないよう気を遣ってくれているのか、まるで早回しの映像を見ているようですね、と暢気な感想を抱けるほど、その移動はスムーズだった。時折浮遊感があったり、大岩が間近に迫ったりと、下手な遊具よりはよほどスリルが味わえるが、カレン・オルテンシアにとっては快適な乗り心地であった。

「ミスタ・葛木。私は荷物と同じなのですから、もう少し粗雑に扱ってくださいませんかよ」

背中越しに声をかける。音は後方へと流れてしまいが、感覚の鋭い彼には届くだろう。もつとも寡黙な性質だから返事はあまり期待していないが。

「……雇い主だ。あと十分ほどで車道に出る。迎えを呼んでおくとい」

スピードを緩めることもなく男は駆け続ける。息も大して乱れていない。

地味な配色の背広は山陰に溶け込み、背景と一体化しながら最短の道を進む。

(おじいさまは本当によい拾い物をしましたね)

腰に巻き付くベルトを調整しながら、カレンは思った。

鬱蒼とした木々が茂る山の中をゆくスーツ姿の男。背には背負子。それに座るは銀髪のシスター。

端から見れば何とも珍妙な姿だが、二人にとっては慣れた行軍であ

る。

元々カレンは冬木で行われた魔術的大儀式の後始末兼監視として聖堂教会から派遣された身である。その大儀式の中樞は円蔵山の懐、この山の奥深くの地下にあり、定期的に様子を見に来る必要があった。

だがカレンの身体は過去の任務による傷害で、このような山奥での活動に適しているとは言い難い。それを見かねたカレンの祖父である言峰璃正が、葛木を紹介したのだ。

カレンは葛木の過去は知らない。ただ、教会の埋葬機関の戦闘者とも互角に渡り合えるだけの身体能力と技能を備えているとだけ聞いていた。そして普段は穂群原学園の教師をしている、とも。

冬木に構える言峰教会の神父である璃正と、どこでどのような経緯で知り合ったかは分からないが、璃正からしばしば教会の『仕事』も任せられるくらいには一定の信頼を得ているようだ。

カレンは懐から携帯電話を取り出し、教会へと連絡を入れた。

これはほとんど揺れない葛木の背だからできる芸当であり、彼以外の教会所属のスタッフたちの背であれば振動のあまり舌を嚙んでいるだろう。この快適さもかねてカレンはよく葛木を指名するのである。

(彼らには彼らにしかできない仕事もありますし)

魔術行為の隠蔽に住民への記憶操作や誘眠措置。そういった術を持つ教会スタッフたちは、今日も万が一のため新都で待機している。今回の観測結果を鑑みるに、あと数日と待たずに彼らの出番がくるかもしれない。

じくじくと熱を持ち始めている己の足先を見ながら、カレンは考える。

右足の小指及び薬指の付け根にて、血管破裂による内出血を確認。腫れは酷く、通常よりも一回り皮膚が膨れ上がっている。赤紫に染まった足先は針を刺したら破裂しそうな風船のようだ。

(内部では既に浸透している……。外には薄皮一枚でまだ流出せずに済んでいる、と)

心臓から遠い末端に顕れたこの症状は、やはり新都の事象に沿っているのだろう。それこそが被虐霊媒体質をもつカレン・オルテンシアの観測方法なのだから。

対象の状態を我が身に写し盗り、その身体の損傷の具合から考証し情報を得る。

それは観測対象を見誤ると即、命を落とす可能性もあるのだが、カレンは恐怖などは抱いていなかった。

痛みは既に身の一部。死するとしてもそれは自身の運命。これも神の祝福と受け入れ聖女は笑う。

「……ああ、間桐の彼にも連絡を入れなくては。せつかくです。またよい練習台になってあげましょう」

人界と隔絶した山から人通りのある車道まで、あと少し。

カツカツと不機嫌そうな足音が戻ってくる。

屋敷に備え付けられた電話が鳴ってから僅かしか経っていない。よほど短い通話だったようだ。

ボタンと乱暴に開けられた扉から予想通りの顔が現れる。眉宇を上げ眉間の皺を深くした甥だ。そこそこ秀丽なはずの面をゆがめたまま、高校生の甥は石造りの地下室に常備されたとある器具一式を揃え始めた。

「その様子だと、また教会へ行くのかい？ 慎二」

「ああ、またあの馬鹿シスターがやらかしたらしい。直々の御指名だよ」

黒い大きめの鞆に詰め込まれるのは、タオルやら脱脂綿、金属製の器具のほか、間桐が管理する治療向けの蟲を詰めた瓶だ。見た目グロテスクだが、昨今でも民間療法にも蟲を使った治療はある地域では存在している。間桐の蟲はその何十倍も強力に改造したものだ。

「……彼女もモノ好きだよ。女の子って普通こういうの苦手じゃないのかな」

「アレが普通に見えてたら、僕は雁夜叔父さんの目を疑うしかなくなるよ。進んで自傷行為を繰り返すとか、まともな奴じゃないことは明

白だろ？」

慎二は当たり前のように言うが、あまりそのシスターとは顔を合わせない雁夜にとって、遠目に見た言峰教会の唯一のシスターは清楚で可憐、華奢で病的に白いという印象しか無い。慎二の話の聞くと内側はとんでもない毒花らしいが、実際に相對したことの無い雁夜にはあまり想像がつかない。

「まあ、お大事にっていうほかないんだけど」

雁夜は作業を中断して財布を開き、その中で一番高価な一枚を慎二へ差し出す。

「タクシーを使って、できるだけ早く行って帰って来てくれると助かる。正直、今慎二に抜けられるととても困るんだ。冬木の地脈に発生している歪みの影響で、解析が全然終わらないからさ。学校も昼から早退してもらったしホントに申し訳ないんだけど」

お釣りは好きに使っていいからと、雁夜は頭を下げる。

時計塔への報告書を作成するには、まず事実確認をしなくては裏付けもとれない。

監視で置いていった蟲の記録にはノイズが多く、詳細を出すにはマシな部分を抽出するしかない。その記録を一つ一つ確認する作業を、慎二にも手伝ってもらっていた。

要領がよく頭の回転も早い慎二には雁夜が冬木に不在の間、蟲たちの管理の一部を任せていた。今回の地脈の異常な歪みが魔術協会に感知されたのも、実は慎二からの一報が一因であったりする。

魔術回路は雁夜よりも少ないが、十年前の戦争の際、慎二は魔術回路を獲得していた。いや、獲得させられた、という方が正しいか。

多少ひねたところがあるが、ここまで慎二が健全に育ててくれたのは、実は言峰教会のおかげである。

だからこそ雁夜は教会に対し頭が上がらない。教会からの呼び出しを断れないのもそのためだ。

十年前、あの間桐の執念は最後には慎二をも狙った。アインツベルンの行動が思いの外早かったせいで、慎二を冬木の外へ避難し損ねていたのもあり、また魔術回路が備わっていない慎二が標的になるとは

誰も思っていないかったせいで、アレの浸蝕を許してしまった。

無理矢理に魔術回路の痕跡をこじ開けられ、中身もめちやくちやに弄ばれた慎二を救ったのは、聖堂教会所属でありながら魔術師・遠坂時臣に師事していた言峰綺礼神父だった。治癒魔術と霊媒医療に長けていた彼の尽力によつて慎二は一命を取り留めた。

当時、慎二は蟲に蹂躪されたことにトラウマを抱えたようで、回復してからもたびたび間桐の屋敷を飛び出しては隣町の言峰教会に世話になっていたようだ。

……ようだ、と伝聞のかたちになってしまうのは、そのころ雁夜は雁夜で数年間療養ベッドの住人になっていたからである。元々が健全であった慎二とは異なり、一年に渡り酷な修行を課せられていた雁夜の身体はボロボロで、回復にはアインツベルンによる人体細胞の甦生から始めなければならなかったのだ。

その後、魔術回路が蟲なしでまともに動くようになってからは、雁夜の兄である鶴野に社会的な体裁を任せ、雁夜は時計塔に留学した。家事に関しては養子である桜がその頃からくるくと働いてくれたおかげで、アインツベルンのメイドが引き上げるようになっても問題はなかった。

つまり同じ間桐の屋敷に住んでいながらも、雁夜は慎二とはろくに接点を持たなかったのだ。

だから実のところ、雁夜は慎二との間に微妙な距離感を感じていた。共に暮らす分には問題はないが、ふとした拍子に慎二が何を考えしているのか分からなくなってしまう。

やはり幼年期に慎二とちゃんと触れ合うことなく冬木を離れ、イギリスの時計塔へ行ってしまったためなのか。

数年後、基礎を修めてやつと冬木に帰省できたときはとても驚いたものだ。

いつの間にかトラウマであった蟲を克服し、独学で間桐の魔術を学んでいた甥。

桜によると、教会に綺礼神父の娘が就任してから慎二は劇的に変わっていったそうだ。それはもう、鬱屈としたウジ虫から喧しく飛び

回るハエに変わるくらいには。(慎二をこう表現した桜は別の意味で遅しくなったと思う)

魔術の基礎は綺礼神父から教わったらしい。遠坂仕込みの魔術を勝手に他家の魔術師に広めるなど、現遠坂家当主が聞いたら激怒しそうなものだが、間桐へのリアクションが無いところをみると、認知していないようである。一当主としてそれで大丈夫かという杞憂を抱いてしまうが、バレたら不可侵条約の域を越えて制裁が下るのが目に見えているので、黙っていることにしている。

雁夜はそれからロンドンと往復しつつ間桐の魔術書を紐解いていった。しかしそれに関しては慎二の方に一日の長があり、逆に年下である慎二に解説を願うこともあった。慎二は数年前から学校に通いながらも、部活動には入らず書庫や工房に入り浸っていたようで、雁夜よりも一歩二歩先を進んでいたのだ。

いつしか間桐の魔術に関しては雁夜と慎二の二人で研究・編纂をするようになっていた。エルメロイ家に差し出す研究成果も雁夜名義であったが、実質半分は慎二の解析結果である。

ちなみに桜は間桐の魔術にあまり興味を持たなかったが、雁夜や慎二を軽く上回る魔術回路と潤沢な魔力量に、希少な「虚数」という属性を持つため、自衛目的で魔術の研鑽は重ねていた。基礎はアインツベルンのメイドから教わり、属性の扱い方やそれに派生する術式の構築などは時計塔に籍を置いた雁夜から学んでいる。——間桐という同じ家にいながらも、三人の魔術師のスタイルはそれぞれ少しずつ違うのだ。

それでもお互いに反目無く間桐としていられるのは、魔術にそれほどの執着が無いからだろう。

主軸に置いているのは人としての幸せであって、魔術はあくまでそれを守るための手段である。それは普通の魔術師にとつては唾棄すべき思想であり、時計塔などで吹聴しようものなら袋叩きにされること間違い無い。共感してくれるのが某魔術師殺しの家庭くらいではないだろうか。

「……夕飯には間に合うように帰ってくる。桜には、今日は赤と黄色

の料理は作るなって言っておいて」

慎二は雁夜からのタクシー代をぶつきらぼうに受け取ると、そのまま黒い鞆を引つ提げて部屋の出口へと向かう。

その粗野な仕草が慎二なりの照れ隠しだと桜に教えられるまで、雁夜は自分に何か落ち度があったかと肩を落としたこともあった。今はそれなりに微笑ましいと思えるまでに桜に鍛えられたが。

出て行く慎二を見送っていると、一度だけ慎二は振り向いた。

「そうそう、僕がさつきまで解析を担当していた群体には触らないですよ。違う術者に干渉されたら後々厄介だからさ」

「あー、了解。俺は別エリアの群体を見るよ。それでいいだろ？」

蟲の解析には殊更気を使う。解析が中途半端な状態で放置されているのは気になってしまいが、同じ術者が再開させた方がスムーズに進むだろう。慎二が担当していた蟲の群体は、歪み近くに潜ませていた特にノイズが酷いものばかりだ。確実に処理するには慎二の帰りを待った方がいい。

一人と蟲ばかりになった部屋の中で雁夜は、さあ頑張るぞと気合を入れる。

甥ばかりに負担を押しつけてはいられない。それにアイリスファイルとの約束もある。

雁夜は勇んで記録をため込んだ蟲をつまみ、解析用の針を構えるのだった。

「――終わりだ」

赤い斜陽が染め上げる部屋の中。夕焼けよりも更に赤いモノを丁寧に拭い、慎二は告げた。

教会の居住区にあたる一室。ベッドの上、敷布の上に投げ出された白い足に橙のコントラストが映える。腫れ上がり異形と化していた輪郭は元の形のよい小振りな足形に還元されていた。

「まだ感覚が戻りませんが」

足の持ち主であるカレンは何の感慨もなく言う。右足を揺らすのが足首より先はぴくりとも動かなかった。

「いったい痛み止めに何匹使ったと思う？　ほんと厄介な体質だよな。麻酔が効きにくいなんて」

「痛みは主から賜った祝福なので。……痛みを消すなど、御心に背くことは心苦しいですが、これも若く青臭い魔術師の研鑽のため。私は喜んで身を捧げましょう」

「……そう思っているんだったら、もつと神妙な顔して言えよ。相変わらず気持ち悪いな」

慎二は眉間に深い皺を刻んで、後片付けを始める。使い潰した蟲の死骸を一つの瓶にまとめ、残りのまだカサカサと動く余裕のある個体は元の瓶へと放り込む。

「麻酔に使ったのが十匹、血を抜くのに六匹、中を繋ぐのに三匹、表層を塞ぐのに二匹。……いくら宝石よりは安くつくと言っても、育成にはそれなりに時間と手間はかかっているんだけどな」

魔導で調整を施した蟲の繁殖は、質を揃えるのに苦労する。治療に使えるほど基準値に収まる個数がどれだけ一度の産卵で産まれるか。これが投薬量を気にしなくてもよい攻撃種であつたら、そこまで厳しく選別する必要はないのだが。

労働に見合う対価を請求したいところを、銀髪のススターはどこ吹く風と受け流す。

「凡庸なあなたが未熟な技術を押し上げるには、数をこなすしかないと思うのだけれど。無償で練習台を提供しているのに、金を無心するような男はもてませんよ？　それに——」

カレンは含みを持たせ言う。これが慎二の着火点だと分かっているように。

「このような傷、あの男にかかれば数分で処置を終えるでしょうに」

「……分かってるさ。そんなの」

片付けの手は止まらないものの、慎二の背は強ばり、内心でジリジリと焦燥と劣等感が渦巻く。

いくら表面を綺麗に仕上げて、こう時間がかかっては、いつか全てに手が回らないほどの大怪我に直面したとき、むぎむぎとその命を取りこぼすかもしれない。一人は救っても別の誰かはその間に死ん

でしまうかもしれない。それが例えば——であつたなら。
(ちつ。だからそうならないために、研究と研鑽を継続しているんじゃないか)

あれほど恐怖の対象と認識していた蟲を、弄ばれる側に貶め、体のよい道具として利用する。

それが非凡な才を持たない慎二の僅かに残つたプライドが選んだ。選んだ。

慎二は頭に過ぎつた不吉なイメージを散らした。陽は既に大半が山際に沈んでいる。用事は早く済ませないと、夕飯に間に合わないかもしれない。

治療道具は既にあらかた靴へ仕舞い終え、間桐の蟲も余人の目に届かぬよう奥の方へ突つ込む。後は目の前のシスターに問い質すだけだ。

「で、昼間のアレは何なんだ。なんで聖堂教会御用達の薬を渡す必要があつたんだよ。衛宮——衛宮士郎はこつちには全く関係ない一般人のはずだよな」

彼の少年の両親はどつぷりこちら側に浸かっているが、あの一家の息子娘は一般人として育てる方針だと聞いていた。下手にちよっかいを出そうものなら、魔術師殺しの矛先はこちらに向くだろう。

遠坂凜が巻き込んだ娘の方は雁夜がアイリスフィールから了解を得てきたからいいものの、息子の方はまだ保護すべき一般人の枠の内のはずだ。わざわざ聖堂教会が干渉する理由はない。

それに個人的な理由により、衛宮士郎はこちら側に来て欲しくない人物なのだが——

「あら、私が何者で何をする者か、その矮小な脳みそからはすつかり抜け落ちてしまったようですね。残念なことに」

窓からの赤い残照に銀髪を染めて、教会の修道女は薄く微笑む。

纏う衣装は黒と白のコントラストが映える修道服。神に仕え、神の教えを説き、それに反する存在、異端を排す者。

そう、カレン・オルテンシアは聖堂教会所属のシスターであり代行者。つまり彼女の本職は。

「悪魔祓い（エクソシスト）。……なんだよそれ。じゃあ衛宮は、悪魔にでも憑かれてたつてことか？　とてもそんな風には見えなかったけどな」

昼間校内接した衛宮士郎は何ら変わりがなかったように思える。しかしその様が悪魔の擬態だとしたら、それは――
顔色を変える慎二に、カレンは涼やかに告げた。その憶測は杞憂だというように。

「正しくは『悪魔のようなもの』と言ったところでしょう。今まで相手にしてきた悪魔と毛色が違いましたから。それに彼は稀にみるお人好しなようです。なにせ進んでこの冬木で起こっている異変を解決しようと動いていますし」

論すような本職の修道女の言葉も、しかし慎二には信じられなかった。

「お人好しの悪魔がこの異変を解決する？　はっ、冗談はやめてくれよ。こんな厄介事に首突っ込んで、いったい悪魔に何のメリットがあるっていうんだ。そもそもお人好しの悪魔つてもものが信じられないね。」

悪魔は憑りついた奴の内面を崩壊させて、自分を現界させるんだろ。そのためには何だつてやる。宿主を唆して願いを叶えてやったりとかな！」

悪魔は霊障の一種だ。人の苦悩を理解し、取り除こうとする架空要素。

その理由と基準は不明だが、人間の願いによって呼びだされる受動的な存在と言われている。

「……それともあれか？　憑りつかれた衛宮の願いが、この事態の解決だつていうのか？　狂った地脈を戻して一都市を救う？　平和ボケした一般人がそんな大層な願いを抱くなんて考えられないけどな！」

慎二は手近にあったテーブルに拳を振り下ろした。空になっていた金属質のコップがカタカタと揺れる。

悪魔が憑りついた時期はさっぱり分からないが、衛宮士郎がこの異

変を把握しているはずが無い。魔術に関係ない者には感知できない地脈の歪みだ。多少、勘の良い者なら違和感を覚えるだろうが、それでも表世界の一般人、ましてや平凡な高校生が根本的な問題に行き着くことはない。

慎二にとって衛宮士郎は妹の桜を通したただの知り合いでしかないのだが、こちらの世界に関わってもらっては困るのだ。

「当たらずとも遠からず、かしら」

カレンは慎二の激昂を冷静に見据えていた。なぜ慎二が衛宮士郎に過剰に反応するか、その理由をカレンは十分承知していたからだ。「衛宮少年は自らの意志で、この異変に関わっている。衛宮少年に憑りついている『彼』もそれはやぶさかではない——。それは彼らのこれまでの行動が物語っているわ」

『彼』の目は頑なで錠の下ろされた鉄の扉であったが、そこに悪趣味な色は無かった。あんなモノを口にしてまで宿主に気を遣っていた『彼』が、悪意を持ってこの異変に臨むことはないだろう。ましてや宿主の精神を殺しその身体を乗っ取ることは、本意ではないはずだ。過去に何体もの悪魔と対峙してきたカレンはそう判断を下していた。

一方、慎二はカレンの発言に引っかけかりを覚えていた。

「……教会側は事実関係は押さえているのか」

「優秀なスタッフのおかげで。……それを魔術協会側の人間にわざわざ教えて差し上げる義理はありませんけど」

ちっ、と慎二は舌打ちする。間桐の屋敷に籠もって穴だらけの記録を拾い上げるのに、慎二と雁夜がどれだけ苦労していることか。カレンは魔術師である慎二を呼びつけるくせに、聖堂教会と魔術協会の対立を盾にそういう情報は寄越さないのだ。

「それで？ 僕らの知らない情報を元に、お前はどうするんだ？ 教会はどう動く？」

「どうもこうもありませんよ。この度の騒動はそちらの領分でしょう。教会は監視と方が一の場合の隠蔽を担うだけです。あなた方が手ひどい失敗をして情けなくもこちらに助けを乞うまで、私たちが手を差し伸べることはありません」

「……衛宮の件はどうなるんだよ。あいつはあの魔術師殺しの息子だ。どう見たって魔術側に教会が肩入れしたかたちになるぞ」

カレンの言うことが本当ならば、衛宮士郎は時計塔から派遣された遠坂凛とルヴィアゼリツタ・エーデルフェルトと鉢合わせしているはずだ。だが、今日までに衛宮士郎のことは報告に上がってきてはいない。雁夜の仕事を手伝っている慎二も、二人からの報告に目を通しているから、それは確実だ。

「衛宮少年は『悪魔のようなもの』に憑かれていた——それはこちらの領分です。私は己の職務の本分に乗っ取り正しく対処をしただけです。その後、彼がどう動こうと私の知ったことではありません。そしてこの事実を知るそちら側の人間は慎二、あなただけしかいませんね」

「僕に黙秘しているの？」

「衛宮少年が一般人でいられるかは、あなたの匙加減一つということですよ」

まるで悪魔の囁きのようなカレンの甘言に、慎二は再度舌打ちを鳴らすしかなかった。

だから自身の行動原理を知る人間は嫌なのだ。結局、相手の手の上で道化の如く振る舞うしかないのだから。

「従順な犬は面白味が無いけれど、単純一途な指針に傾倒する姿は愚かで、同時に尊くもある。

——おかしな相似ね。衛宮士郎はただ兄として妹のイリヤスフィール・フォン・アインツベルンを守りたい。彼の目的と動機はおそらくそれだけのことなのでしょう。それは、あなたには十分共感できる理由ではないかしら？ 間桐慎二」

赤の残照が夜の帳に覆われる。灯りを点す前の部屋は青の薄闇の中。カレンの金の瞳だけが猫のように細められる。

肯定も否定も慎二はしなかった。ただ盛大に顔をしかめたただけだ。

どうせ胸の内も何もかも見透かされているのだから、不快感を示すだけで十分だろう。ここ数年のつき合いで慎二はそう学習していた。ここで怒りを爆発させても、ただ相手を喜ばすだけだ。

冷静に、と慎二は自分に言い聞かせる。馬鹿なことを喚き散らしても暖簾に腕押し、無駄にエネルギーを持って行かれるだけだ。

「……衛宮に憑いている悪魔はもう大丈夫なんだろうな？ 僕の渡しただアレが、お前のいう悪魔祓いとして『正しい対処』なんだろう」

爆発を押さえ、そう問いかけた慎二だが、カレンの優勢は崩れることはなかった。

「ええ。アレは服用者の心身を健全とするもの。昨日もあの神父の好物と合わせて摂取してもらいました。——アレの味が酷いのは知れ渡っていましたから、ちよつとした親切心ですよ？」

慎二は一瞬、カレンが何を言っているのか分からなかった。昨日も？ 摂取？ なにより——

「……神父の好物ってあの泰山の麻婆だよな？ それに酷い味と評判の教会謹製の薬を混ぜた？ うわ。えげつないぞ、それ。衛宮もよく食ったなそんなもの」

カレンに付き合わされてあの麻婆を口にしたことは実は数え切れないくらいあつたりするが、それに得体の知れない薬品が混ぜるなど、狂気の沙汰ではない。

「完食してくれたのは例の悪魔の方ですよ？ 心身弱り切った宿主の為に頑張ってくれましたね。だからこそお人好しの悪魔と呼んでいるのですが」

「悪魔の方が食ったのかよ！ まあ、それは確かにお人好しと言わざるを得ないな……同情するよ」

そいつもカレンの愉悦の餌食にされたかと思うと、妙な親近感さえ沸いてくるような気がした。

「って待てよ。悪魔が自分から口にしたのか？ 悪魔祓い用の薬を？」

「そういうことになりますね。悪魔は憑依した対象の心を病ませ浸蝕してゆくものだから、対象者を健全な状態にして免疫を上げてやれば、それは弱まる。そういう意図の薬ですから」

悪魔祓いといっても、カレンはその特性から悪魔探知機として運用される兵装として扱われてきた。悪魔と戦い祓うのは他の誰かの役

目であり、立場的には助手のようなものだったりする。

故に、カレンができるのはその場限りの対症療法だけだ。今回の場合はそれが『正しい対処』だったが。

「浸蝕を弱める、だけか。根本的な解決には至らないってことだよな？ それ」

「時間稼ぎのようなものですね。悪魔の『彼』が宿主を押しつぶしてしまわぬよう、本職の悪魔祓いの方が到着するまでの。……もつとも『彼』もこの異変の解決に手を貸してくださっているようなので、ある程度は放置しますけど」

勝手にこの冬木の危機を救ってもらう分には一向に構わない。どうぞ上手く立ち回って、教会の手を煩わせないように頑張ってもらいたい、ということだ。

「……冬木の黒幕だよな。お前は、ほんとに」

「私はしがない一修道女にすぎませんよ。ただ平穏な日々を願っているだけです」

いけしやあしやあと言うカレンに、慎二は両腕をあげるしかなかった。

（昔はもうちよつと可愛気もあったような気がするんだけどな。……どうしてこうなった）

すっかり暗くなった部屋で、慎二のため息だけが響いた。

間桐の屋敷の前でタクシーを降り、料金を支払う。往復合わせても三分の一は手元に残るようだ。

（雁夜叔父さんは悪い人じゃないっていうのは分かっているんだけど……）

残った札と小銭を慎二はポケットにねじり込む。

どうにも十年前の瀕死の重病人の印象が強すぎて、問題を共有するには少々頼りなく感じられてしまう。変人奇人の巣窟である時計塔へ留学しても一般人の気質が抜けない雁夜に、権謀術数の波の上で上手く舵をとれるか、不安に思ってしまうのだ。

故に、雁夜へ余計な負担をかけないように、慎二の手の届く範囲の厄介ことは自分で処理してきた。

(カレンも面倒くさいことを押しつけてきやがって)

門から屋敷までは思いの外距離がある。様々な種類の蟲の繁殖を円滑に行うため庭の植物に手を入れ、独自の生態系を作り上げるのに庭園の面積を増やしたからだ。

植生の管理は主に桜が担っている。蟲の世話は遠慮するくせに、植物のほうは存外好きでやっているようで、毎日の水やりや草むしり、木々の剪定は進んで行っている。

……だからこそ慎二も庭の拡大に尽力したわけだが。

屋敷の半分は十年前に焼け落ちていたので、その分の敷地をそっくり庭に当てている。

玄関はかろうじて焼け残り、重厚な扉は創建当時のそのままだ。所々黒ずんでいるのはご愛敬だ。

「……ただいま。帰ったぞ」

中へ入ると、とある海産物の独特の匂いが漂っていた。

台所の主である義妹はちゃんと慎二の要望を叶えてくれたらしい。(衛宮とお人好しの悪魔ができることなんて、どうせそんなに大したことはないと思うけど——)

自分から異変に関わっている以上、何があろうと自己責任の範疇であり、慎二の知ったことではない。

だが彼らの関係のないところで教会や魔術側の人間に目を付けられるのは、後々面倒なことになりかねないだろうから——

(せいぜい後腐れ無いようにはしてやるか)

ダイニングから顔を出した義妹の顔を見ながら、慎二はそう妥協する事にしたのだった。

「んー！ おいしいー！ 流石ね、セラ。もうアインツベルンの誇りだわ」

「……いえ、その、いつもの夕飯ですからね。イリヤさん。そんなに大げさに言わなくても」

「えー、だってこんなに美味しいもの、初めて食べたのよ。こういうときの感想は素直に伝えた方がいいんでしょ？」

「は、はい？ まあ、その通りなのですが……」

「あ、でもこの野菜は苦いからきらい。今度から出さなくていい……っ、ごごご、ごめん！ ちよつと苦手だけどちゃんと食べるから！ 栄養バランスは大事だよね！ うん！」

「……イリヤ、なんか変なものでも食べたのか？ なんかさつきから言動が支離滅裂になっているような……」

「年頃の乙女にはよくあること。あまり気にしない方がいい。とか気にしたら負け」

「……そ、そうか」

以上が本日のアインツベルン家夕食の会話である。

イリヤは部屋に戻ると、ベッドへ一直線に倒れ込んだ。

時計の短針は真下を少し回ったばかり。今日という日はまだ終わらない。

「うう。まさかこんなに二重人格生活が疲れるとは思わなかった……。絶対、周りに変だと思われてるー」

朝からまだ約十二時間しか経っていないが、既に疲労困憊のイリヤであった。

学校でもシロの行動に振り回されて、フォローが追いつかない場面も少し……いや、かなりあった気がする。

「なによ、だらしないわね。何もかもが初めてなんだから大目に見なさいよ。大丈夫、次は上手くやるわ」

その自信がどこから湧いてくるのか分からないが、もう一人の住人イリヤであるシロはけろりとしている。

たぶん周りから奇異の目で見られる辛さをまだ知らないからこう言えるのだ。今はだいたいぶ落ち着いたが、銀髪赤目という珍しい容姿でそれなりの苦勞をしているだけに、イリヤはつい恨めしく思ってしまう。

（仲良くなるまでが大変だったんだからね……。まあ、今ではちよつとやそつとのことで壊れる友情でもないけど）

いつも行動を共にする友人たちは、なんかおかしいとは思いつつ、いつも通りに接してくれている。こんなにありがたいことはない。

「いやあでも、端から見ている分にはとつても楽しめましたよ！ シロさんもこの調子でどんどん初体験に挑戦していきましょう！」

「そんなにシロを焚きつけないで！ ルビー！」

人の気も知らぬままフヨフヨと頭上を漂うルビーに、イリヤ必死の声を飛ばす。

ルビーには朝の内に事情をある程度話していた。昨日の夜にイリヤに秘められた『力』があつたということはバレているのだ。その『力』の象徴であるシロを隠す意味はあんまり無いなど思つたのだ。

ちなみにそのときのルビーの反応は

「やはり二重人格でしたか!? これはギャップ萌えを狙えますね！
なんとという美味しい設定でしょう！」

と空中で色々変なポーズを繰り出していた。

このことに関して更なる口止め料は請求されることは無く、イリヤは胸をなで下ろしていたのだが――

（こういうことだったのね……。結局は黒歴史が追加されることになりかわらないからっ）

これから今日と似たような騒動が毎日あるかと思うと、またげんなりしてしまうイリヤであつた。

「しかし流石に美遊さんはあからさまに不審がつていましたね。イリヤさんの戦線復帰宣言にもなんだか微妙な顔をしていましたし。凜さんのほうは逆に、よく戻ってきたわねと感心していましたけど」

イリヤの目の前に移動したルビーはその材質のよくわからない翼を器用に折り曲げ、対照的な二人のニュアンスを表現する。

イリヤは今日の放課後、凜と美遊に、昨日の一日で散々悩み考え抜いて出した答えを伝えていた。

校門の前で待ちかまえていた二人に、まず最初にしたことは頭を下げることだった。

『この前はごめんなさい。私の間違った判断で皆を危険な目にあわせたこと、本当に反省しています。そしてそのまま逃げ出しちゃったことも』

本当はあのときあの場にいたルヴィア、そしてフェイカーにも謝りたかった。迷惑をかけて申し訳なかったと。……でもそれはまた次の機会で。

昨日一日、凜とルヴィアが放っておいてくれたおかげで決意は固まった。

イリヤは顔を上げ、凜と美遊をしっかりと見つめて宣言した。

『……だから、次は失敗しない。逃げ出さない。私は——ミュと一緒に戦う。一緒に最後までやり遂げます！』

未だに前回のミスを思い出すと、フェイカーの叱責と共にお腹の底が冷えることがある。

振り返った次の瞬間、命を落とす可能性に、鳥肌が立ったりする。けれど。

(大丈夫。私がいるもの。正しい答えを私が指し示してあげる)

ふわりと背を暖めてくれる存在がいる。

『間違いなんかじゃない』。イリヤの人を助けたい、友達を助けたいという思いを否定される筋合いは、どこにだって有りはしないわ)

イリヤの心強い味方はたくさんいる。

それがイリヤの支えとなつて、戦いに挑む勇気をくれる。

『ミュは友達だから。友達を見捨てて普通の生活に戻るなんて、私にはできないよ』

ふわりと笑ったイリヤに、凜はあつけにとられたようだった。

しかしイリヤの決意が本物だと認識すると、何故かほっと胸をなで

下ろし言っただのだ。

『なんだ。意外と根性あるじゃない。あんな目にあつて、フェイカーにきつく言われて……。てつきり今日は辞表でも受け取るかと思つたわ』

その可能性は無かつたとは言ひ切れない。兄や母親との語らいがなかつたら、イリヤはそのまま身を引いていたかも知れない。

『何があつたかは知らないけれど、やる気があるなら助かるわ。バーサーカーのカード回収は明日の夜。万全の状態で挑みましょう。イリヤ』

すつと差し出された凜の手を、イリヤは『よろしくお願いします』と握った。

そして今夜。来るバーサーカー戦のため、再びエーデルフェルト邸へ作戦会議に赴くのだが。

「ミュ、もっと嬉しそうな顔を見せてくれると思つただけだなー」

イリヤはベッドに転がって天井を仰ぎ見る。

離脱すると思つていた仲間が戻ってきたのだ。それはとても心強いだらうし、戦力だつて多くなつて強敵に立ち向かう危険だつて減ることになる。

イリヤが美遊の立場であれば、こんなに嬉しいことはないと思う。

しかし、美遊はそうではなかつたようなのだ。

イリヤは見た。イリヤの決意と共に美遊の顔が曇つていったのを。

「あんな顔させたかつた訳じゃないのに……」

一人物憂げになるイリヤだが、次の瞬間には全く別の言葉が飛び出た。

「なに弱気になつてんのよ、イリヤ」

(シロ)

いつのまにか入れ替わる。今日一日でだいぶ慣れた感覚だ。

「確かに、ミュはあなたの戦線復帰に乗り気じゃないようだったわ。表情は硬くつて一言もしゃべらなくつて、目を合わせもしない。もしかしたらあなたのことは邪魔に思つていて、本当は手柄を独り占めしたいのかも」

「ミュはそんな子じゃないよ！」

反射的にイリヤはシロの言葉を否定した。

美遊がそんなこと考えるはずがない。出会ってまだ数日だがそれだけは断定できる。

イリヤが表に出てくるほど強い否定に、シロはじゃあこれは？と別の可能性を示唆した。

「ミュは手柄も結果もリスクでさえ全部一人で抱え込んで、イリヤを巻き込みたくないのかも」

(あ……)

思い当たる節はある。

美遊は生真面目で責任感が強くて、なにより不器用だけど優しい子だから、イリヤが戦いから離脱する事でこれ以上友人が傷つかないと安堵していたかもしれない。

再び戦場に舞い戻るイリヤは、美遊の心労を増やしただけかもしれない。

戦いに臨む以上、そこに百パーセント安心安全なセーフゾーンなどないのだから。

「でもそこで怯んでたら駄目でしょ？ それで引き下がるような思いではないんですよ？」

……なら堂々とそばにいてあげなさいよ。美遊がどう思おうと、イリヤが決めたことなんだから」

そう、イリヤは決めたのだ。

美遊を一人にしない。——美遊の寂しそうな背中は見たくないから。

一緒に困難に立ち向かう。——共にいる人の温もりが、勇気に変わることを知ったから。

友達として、美遊が背負っているものをわかち合いたいのだ。

だからこそイリヤは気合いを入れる。美遊の無言の拒絶に怯んでしまったけれど、それで引き下がっては一日悩んだことが無駄になる。

美遊が嫌がっても、そばにいる。一緒に戦う。その先に美遊の心か

らの笑顔が見れると信じて。

「よし、私、頑張る！ ミュに戻ってこない方がよかったなんて言わせないように！」

「その意気よ、イリヤ。まったく、弱気になっている暇なんか無いんだから」

「うん。ありがと、シロ。そして当日はよろしくね。けっこうあてにしてるので」

「はいはい、任せなさいな」

これが最後だとアイツは言った。

目の前に突き立つは六振りの剣。いずれも現代ではお目にかかることもできない、いにしえの神秘を有した剣だ。

英雄に振るわれた剣。伝承に謡われた剣。

それらの剣を構成する要素の全てを、今は士郎にも読み取ることができた。なにせこれらは目の前で丁寧丁寧に嫌みかと思うほど、一から十までの工程をゆっくりなぞって投影されたものだからだ。

確かに今夜が最後の機会だろう。

明日の夜は最後のクラスカード、バーサーカー・ギリシャの大英雄ヘラクレスの黒化英霊との戦闘だ。これら六振りの剣はヘラクレスが持つという十二の命を削りきる切り札になる。生半可な魔術や武器ではあの巖のような肉体だけで弾かれてしまう。故にそれを貫通するに足る神秘を内包したこの六振りを、あの丘から引っ張り出す必要が合った。だが戦場で活躍できるほどの強度で投影するには、士郎の魔術の技量では土台無理な話である。

だからこそ士郎が魔術の師と仰ぐ男は、最初で最後のお手本とばかりに、その生涯をかけて磨き上げた唯一の魔術を詳らかに披露したのだ。

焦ることなくどこまでも丁寧な、一滴の魔力も無駄に消費することなく、ただ読み取った情報のままに剣を創りあげる。基本骨子から材質・工程・蓄積経験までの全てを網羅し、一部の隙もなく現実世界へと出力する。

淡々と工程を完了させてゆくが、その揺るぎない技術と、余すこと無く魔力を扱う技量へと至る過程には、膨大な時間と経験の蓄積が必要となるのだろう。創ることへ最適化された回路とそこを滑らかに流れる魔力に、士郎は吸い込まれたように目が離せなかった。

そうして本物と見紛うほど——創られる過程を見つめていた士郎でさえ、本物の隣に置かれたら正解がどちらかわからなくなるほどの——複製品が現実の質量を帯びて成立した。

これが投影魔術。

失われた幻想の一端を現実へと顕現させる、この男と士郎だけが再現できる異端の神秘。

あらためて世界の深淵を見るような奇蹟への感動に、声もでない士郎であった、が。

次の瞬間、士郎は信じられないものを見た。

これらの奇蹟の創り手たる男——アーチャー。

その褐色のたくましい腕が、完璧に仕上げられた剣の柄と切っ先を手にとると。

「I am the bone of my sword」

にゆつとそれを引き伸ばした。

(……………はあ!?)

あまりの暴挙に別の意味で声がでない。

それは完成された美術品に金槌を当てるような所行である。

本物を限りなく模倣したが故の、本物に迫る輝きに、泥を投げつける行為である。

呆然と成り行きを眺める士郎の目の前で、男は次々と本物を台無しにしてゆく。

「こんなものでいいだろう。ヘラクレス相手に近接戦は厳しいからな」

そうして六振りの剣は——剣でありながら、剣ではなくなっていた。

その刀身は細く、より鋭く引き伸ばされていた。剣として斬るのではなく、飛翔し突き立つことへ特化したカタチへと変化していた。

士郎は視た。同じ投影魔術の使い手として、看過できない所行の結果を見定めるために。

驚くべきことに、これだけカタチを弄ばれていても剣としての骨子は残っていた。その身に内包する神秘と特性も大きくは変わっていない。外形に射られるモノとしての要素を付加されたはずなのに、奇跡的なバランスを保ってその剣としての輝きを損ねてはいなかった。

士郎は胸をなで下ろす。

この誇るべき神秘の奇蹟が色あせずここに在ること、現代に甦った古代の幻想が無茶苦茶な改造によつて壊れ、消える事態にならなかったことに安堵したのだ。

（よかった……。元々完成しているモノに手を加えるなんて、下手したらせつかく投影した剣が耐えきれなくて自壊したかもしれない……。俺にはできっこないぞ、こんなこと）

感心しながら剣だったもの見やる士郎だったが、もっとよく見ようと腕を伸ばした時点でふと気がついた。——元々の剣がどのよくなモノだったか、ということ。

（いや、……いやいやいやちよつと待て。ちよつと待てよ。）

この剣つてすごい英雄の持ち物だよな。後世に語り継がれるような英雄の、命を懸けた戦いと冒険を共にした無二の相棒だよな。投影品とはいえ、ここまで自由にいじつて魔改造してよかったのか!? 冒流的というか、元の持ち主に怒られないか?（これ）

非常に微妙な顔で、偉大な英雄の持ち物を弄んだ張本人を見上げれば、当のアーチャーはしれつと自分のなした仕事の検分している。どうやら、粗もなくいい仕事をしたと本人は満足気だ。

「……アーチャー。お前の投影魔術がすごいことは分かった。とてもよくわかった。それを自分が使いやすいように改造できるつてことも、驚いた。……だけどなあ。ほんとコレ、大丈夫か? 元の持ち主とかに喧嘩売っているようにしか見えないんだけど」

使い手にとっては唯一無二の、ただ己だけの剣だったモノ。それを他人が勝手に模倣し、いいように弄ぶなど、持ち主にとって気分の良

いものではないだろう。

罰当たりな行為の応報が今にも返ってくるのではと、おそろおそろ問いかける士郎だったが、アーチャーはそれはないと、ぼつきり切り捨てた。

「これはあくまで投影品だ。よくできた複製に過ぎない。よってそれをどう扱おうと問題はない。」

それに持ち主たちが活躍した時代は遙か過去の世界であって、神秘の減衰した現代で彼らの遺品をどうしようしようと、彼らにその事実を知るすべはない。仮に知ったとしてもどうすることもできんよ」

「そ、そうなのか？……それならいいんだけど」

考えてみれば当の本人たちはとつくの昔に亡くなっているわけで、現代に生きているはずもない。それこそ幽霊となつて化けて出てきやしない限り、文句のつけようもないだろう。

……目の前にその幽霊っぽいのが存在していることを、あえて全力で無視すればの話だが。

アーチャー自身も英霊と自称していた以上、英雄の一人であり、今現在に存在してしまっている過去の英雄である。自分の武器がコピーされて他人に好き勝手に使われたり弄ばれても、コイツはどうも思わないのだろうか？

そんな考えが思い浮かんだが、今までの戦闘でのアーチャーの武器の扱い方を見るに、割とどうでもよいのかもしれないと思ひ直した。いや、投影した剣とか普通に爆弾にしてたし。

容赦なく投影品を使い捨てていた姿を思い出しながら、六振りの“剣だったもの”を前に士郎は素直な感想を漏らした。

「うーん。でもやっぱり、もったいないよなー。あんな本物そっくりの再現度の高い綺麗な剣だったのに……。手元にとっておきたくなるような、それこそ生涯を共に戦い抜けることができるような、本物そのものといえる完璧な投影に手を加えるなんて、俺には怖くてでき

……」

その言葉を言い終える前に、白刃の光が瞬いた。

いつか見た双剣の片割れ。

一呼吸もなく投影してみせたアーチャーは、それを士郎の首元へ突きつける。

「もったいない、だと?」

呆れと共に、切っ先には静かな怒りがのせられていた。

「馬鹿なことをいうものだな。投影魔術は一時しのぎの代用品を用意するものだ。その場を切り抜けることができればいい。一合の剣戟を受け止めることができればいい。ただ目的を達成することができればいい。投影品は使い捨ての消耗品だ。それを惜しむなど、ただの愚か者がすることだ」

士郎に向けられた白の剣。一目見ただけで分かる。中身がスカスカの粗末な代物だと。

だが士郎はその切っ先から目を離せないでいた。

「投影することが目的ではない。投影は目的を達成するための手段や道具でしかない。この一度振るえば霧散するような脆い剣でも、貴様を黙らせるには十分だ」

薄氷の上で成り立っているような剣。それでも士郎の柔らかい喉笛を裂くだけの鋭さはあった。

「理解したか? 投影に精度を求めるのは、その必要があるからだ。魔力は無尽蔵にあるわけではない。今回はヘラクレスという神代の英雄を倒すために、遠坂の宝石を消費してまでここまでの再現度を求めたがな。

ただの魔術師を相手にするのならばランクを落としたものでも十分だ。むしろ雑な造りでも複数同時に展開した方が効果的な場合もある。

——本来の目的を見失うな。我々は魔術師ではなく魔術使いだ。魔術の為に研鑽を積むのではなく、己の目的を達成するための道具として魔術を使え」

アーチャーは本気だった。この魔術の使用に対する前提をはき違えたままであれば、今ここで始末してしまった方がいいだろうと、その目は語っていた。

「……わかった。肝に銘じておく。魔術は手段で道具。剣は消耗品。

目的以外は使わない。……これでいいか」

「わかればいい」

アーチャーは静かに士郎に突きつけていた剣を手放した。

音もなく落下してゆく剣は地面に接触するや否や、ガラス細工よりも簡単に碎け、僅かな粒子も残さず消え去った。それこそ存在自体が夢^{ゆめまぼろし}幻であつたようなあつけなさであつた。

それでも目的は果たされた。最低限の魔力で、士郎へ投影魔術の教訓を刻むという目的が。

アーチャーは棒のように立ちすくむ士郎を一瞥すると、剣を収めるモノを探してくると告げて土蔵から出ていった。

張りつめた空気と共に、元凶がいなくなつたところで、士郎はぺたりと地面に座り込んだ。今になってぶわりと汗が滝のように出てくる。

(あー、怖かつた……)

アーチャーの殺気とも呼ぶべき気配と、瞬時に顕れた刃。

圧倒的強者が敵対者となることと、いつでも人を殺しうるモノが用意できるという投影魔術の脅威。

そういうものへの認識と教訓もまとめて、心身に刻み込まれた濃密な時間だつた。

(……そうだよな。綺麗つていつでも結局は剣なんだ。人を傷つけることができるものなんだよな)

だからむやみに剣を投影してはいけないし、よくできたからといって剣を現実に常駐させておくのもよくない。アーチャーの言うとおり、この投影魔術は誰かを守るといふ目的以外には必要ないものだ。

(ま、今の俺じゃあ、包丁一本でも命がけだけど)

誰かの賞賛がほしくて魔術を使うのではない。誰かに剣のできを褒めてもらう為でもない。

自分が守りたいものの為に、この力を使うのだ。

(だから、^{オリジナル}原典の剣の改造とかも戸惑ったり遠慮しちゃいけないんだよな。使い勝手をよくすることは、目的達成の成功率を引き上げるから)

己のできる能力の範囲での最適解があつた魔改造であるのなら、士郎が口を出すのも差し出がましいことなのだ。

英霊たちの生涯をかけて鍛え上げた原典を尊重するのはいい。ただ、それを惜しんではいけない。どうせ原典は色あせることなく永遠に胸の内に突き立っているのだ。投影の模造品くらいは、使い捨て前提の運用をしても、まあ問題はないということなのだろう。

（たぶんこいつ、自分の努力の成果を自慢したりだとか見せびらかしたりだとか……、いや、誰かに見せて褒めてもらうとか、考えたこともなかったんだろうな）

特に魔術に関しては、絶対そうだろうな、と確信できる。

投影魔術の使い手は今までアーチャーただ一人だという。手探りで独自に構築された術式に、外から甲乙を決める基準など無い。投影のときは、常にあの丘にある原典オリジナルと比較すればすぐに分かる。

つまりは完全に自己完結してしまっている。

それにアーチャーにとって、もはや投影できることは当たり前。投影魔術を成立させ、なおかつ、それらを活用し消費するまでが一連の流れだ。そこに他者の評価が差し込まれる余地はないし、そう割り切っているから、魔術に対してなにか言われても、動じることもないのだろう。

だからこそ、投影品の剣をもつたと言った士郎の発言は、見当違いの考えとして一蹴されたのだろう。

士郎はただこう言いたかっただけなのだ。同じ投影魔術を修得するにあたり、普通に、当たり前前に抱いた思いを伝えたかっただけなのだ。

ただ単純にすごいと。構築速度、精緻な再現性、存在強度。どれをとっても、神業と言うべきすごい技量なんだぞ、と。

「さて、追いつくのには何年かかるやら……」

アーチャーから魔術を教わって今日で二日目。素人に毛の生えたようなへっぴょこ魔術使いは、すごい技を間近で披露してくれた魔術の師への、畏敬の念を強める。

嫌みつたらしい小言が多く、ついムキになってつつけんどんな態度

をとつてしまおうが、ああ見えて尊敬に値するすごい男なのだ。アーチャーは。

だが今日が最後なのだ。明日の戦いで英霊ヘラクレスを下せば、冬木の地に生じた異変は解決され、アーチャーは去るといふ。

まだアイツには聞きたいことがある。アイツから学びたいことがある。足りない時間の中で、一番よくアイツを知るには——コレしかない。

「よし、行くか」

士郎は立ち上がり土埃を払うと、土蔵の外へと足を向ける。

入り口で軽く振り返ると、薄暗い土蔵の中、高い位置にある小窓から差し込んだ月明かりが、現代に甦った幻想を静かに照らしていた。

その輝きを目に焼き付けて、士郎は進む。

目指すはあれらの創造主。無限の剣を内包した錬鉄の英雄アーチャー。

その男に、士郎は挑む。

馬鹿なことだと自覚している。自殺行為だとも。

けれど、アイツは多分つき合ってくれぬ。阿呆が、と呆れながら、真剣に刃を合わせてくれるはずだ。

アーチャーはあれでいて誠実な奴だから、誠実さを持って頼めば、応えてくれる。

「投影、開始」
トレース・オン

カタチだけの投影。先ほど見たばかりの夫婦剣の片割れ。白の中
華剣・莫耶。

神秘も何もない、かろうじて外形だけを顕現させたシロモノだ。

本当は双剣として投影したかった。だがこれが今の士郎の精一杯だ。おそらくただ刃を触れ合っただけで、幻想は塵に還るだろうが、それでいい。何度でも投影しよう。

「アーチャー。手合わせ、お願いしてもいいか？」

さあ、最後の授業の始まりだ。